針葉樹

第九號

東京商科大學一橋山岳部

札幌市中央

芳賀の

スキーと附属品

スキー登山靴

然斷

他ノ追隨ヲ許サズ

競技用
山岳用
スキー

（御申込次第カタログ進呈）

芳賀スキー製作所

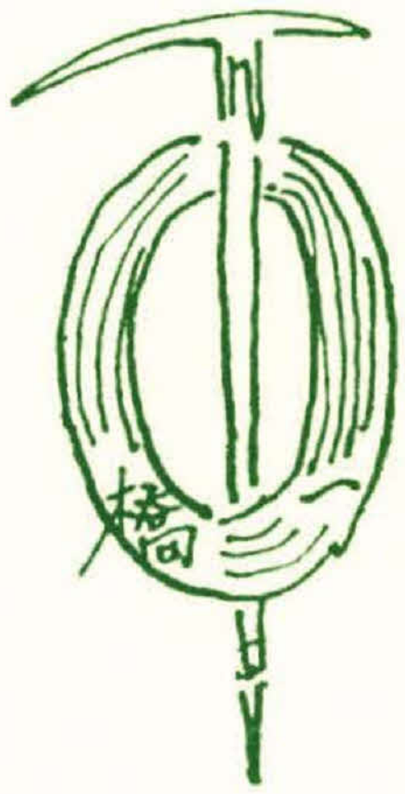
店主 芳賀恒太郎

札幌市外圓山五丁目電車停留所前

電話三八五・振替小樽六八六〇

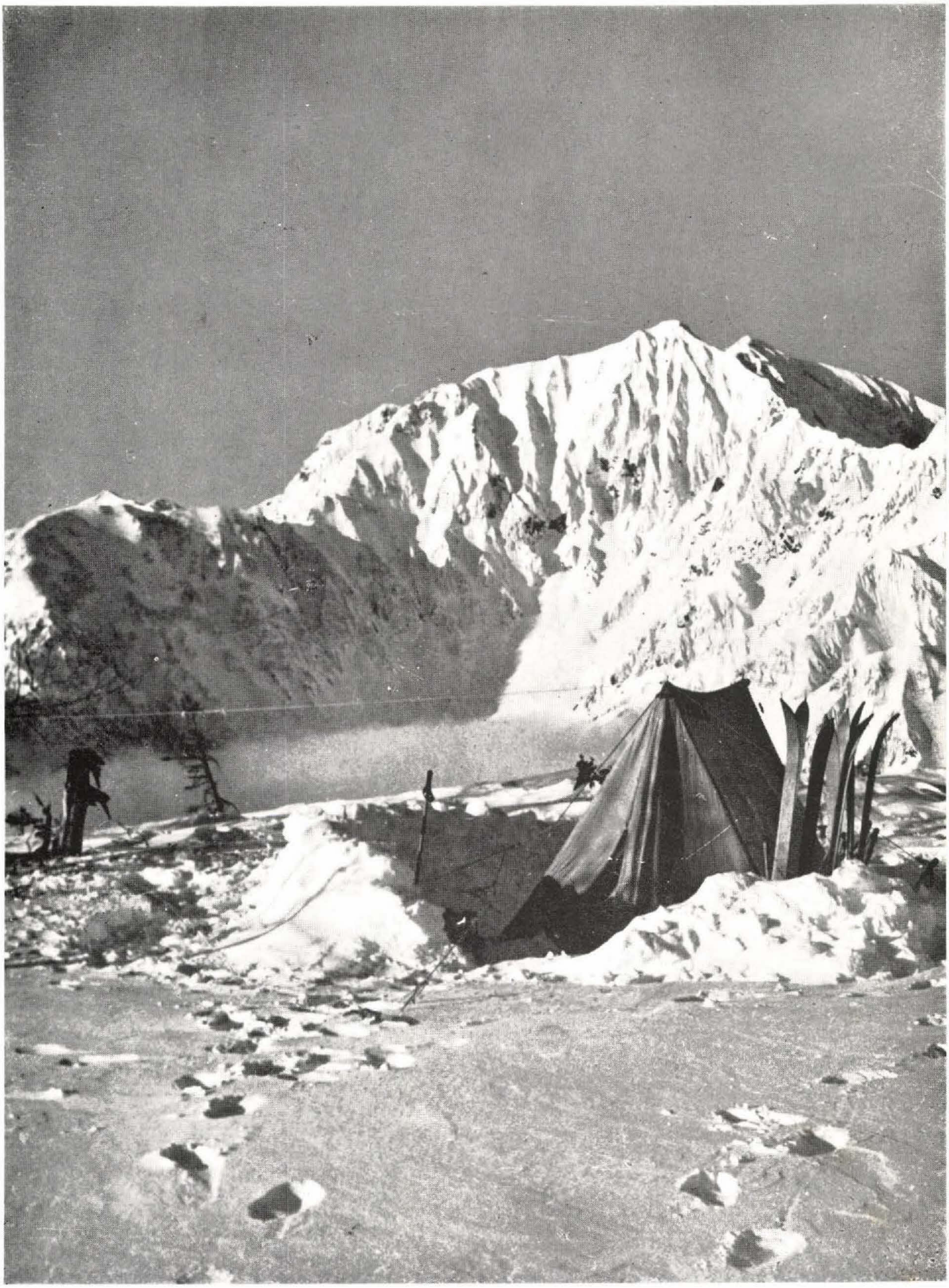
（今冬シーズンには東京に出張所を設くる豫定）

樹　葉　針



第　九　號

1935——1937



雪山の根據地
——遠見尾根CⅡ——

森脇芳之

針葉樹　第九號　目次

嚴冬の北岳バットレス……小谷部全助…一
三月の鹿島槍荒澤奥壁……小谷部全助…三六
シツキム・ヒマラヤ主要登攀踏査年表……望月達夫…五九
夏の涸澤合宿から……柿原謙一…六七

追悼

亡き湯田坂のこと……佐々木誠…七五
關根修君と私……松浦靜雄…七六

記錄

昭和十年度……一
昭和十一年度……二四

部誌（昭和十年九月——十二年三月）……六七

寫眞說明……七八

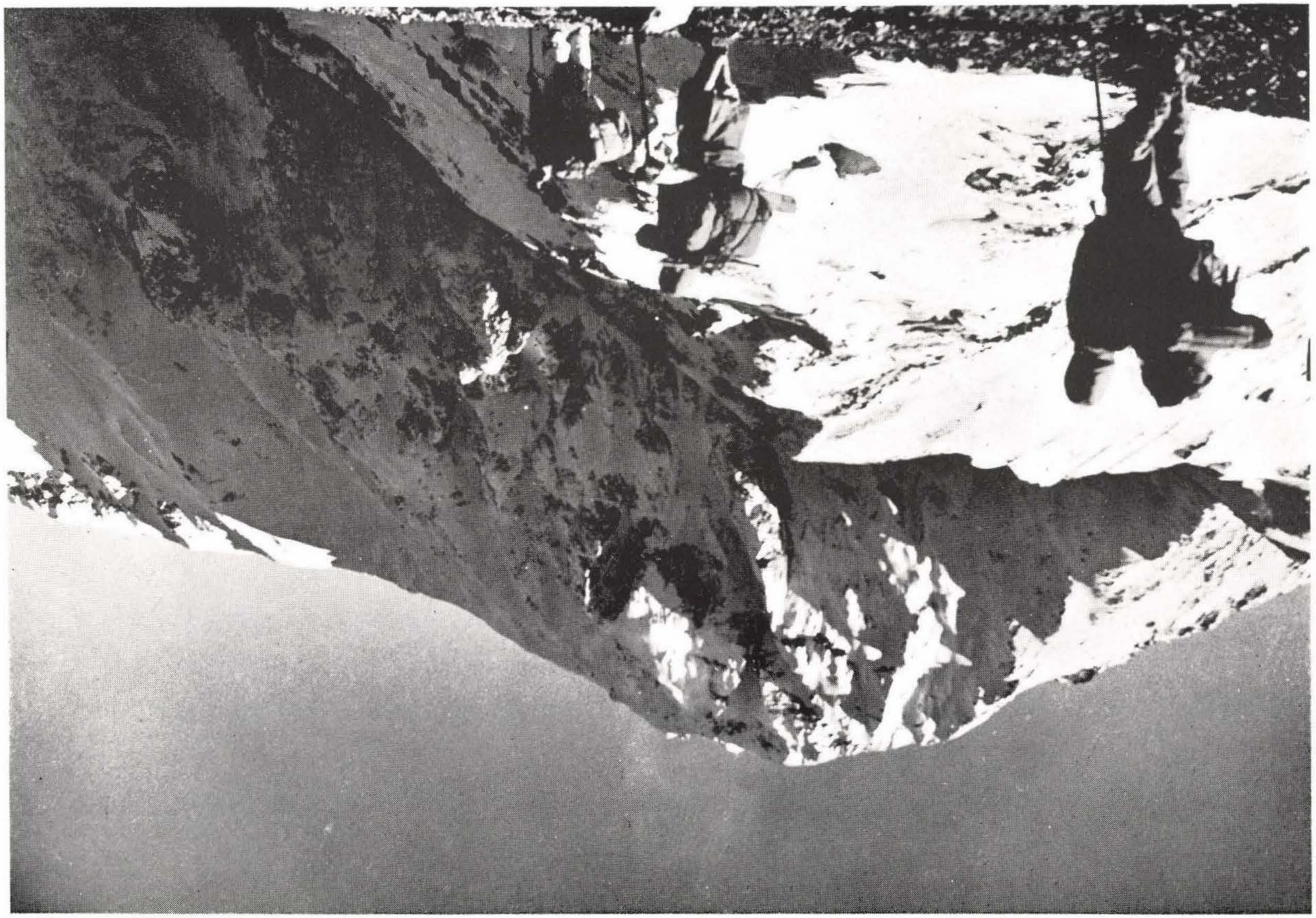
寫眞

雪山の根據地……卷頭
北岳バットレスを目指して……「バットレス」記事の前
Cガリーより第三尾根、中央稜を仰ぐ……〃
Cガリーよりの雪崩……〃
北岳バットレス中央部を望む……〃
第一尾根……〃
「マッチ箱」第二コルより上部を仰ぐ……〃
「マッチ箱」より第三コルへのアプザイレン……〃
「マッチ箱」の雪稜を攀ず
dガリーより第四尾根のトラバース……〃
第三尾根へ取付かんとす……〃
第三尾根上部にて……〃
CⅡよりの間ノ岳……〃
釣尾根CⅡと北岳バットレス……〃
鹿島槍荒澤奥壁……對　三六
遠見尾根C……對　四四

カクネ里よりCⅢへの前進……對　四八
天狗尾根CⅢ……對　五〇
荒澤奥壁北稜の登攀……對　五四
乘鞍岳位ケ原……對「記錄」
穗高涸澤の合宿……對　六八
湯田坂哲君、關根修君肖像……對　七六

圖版

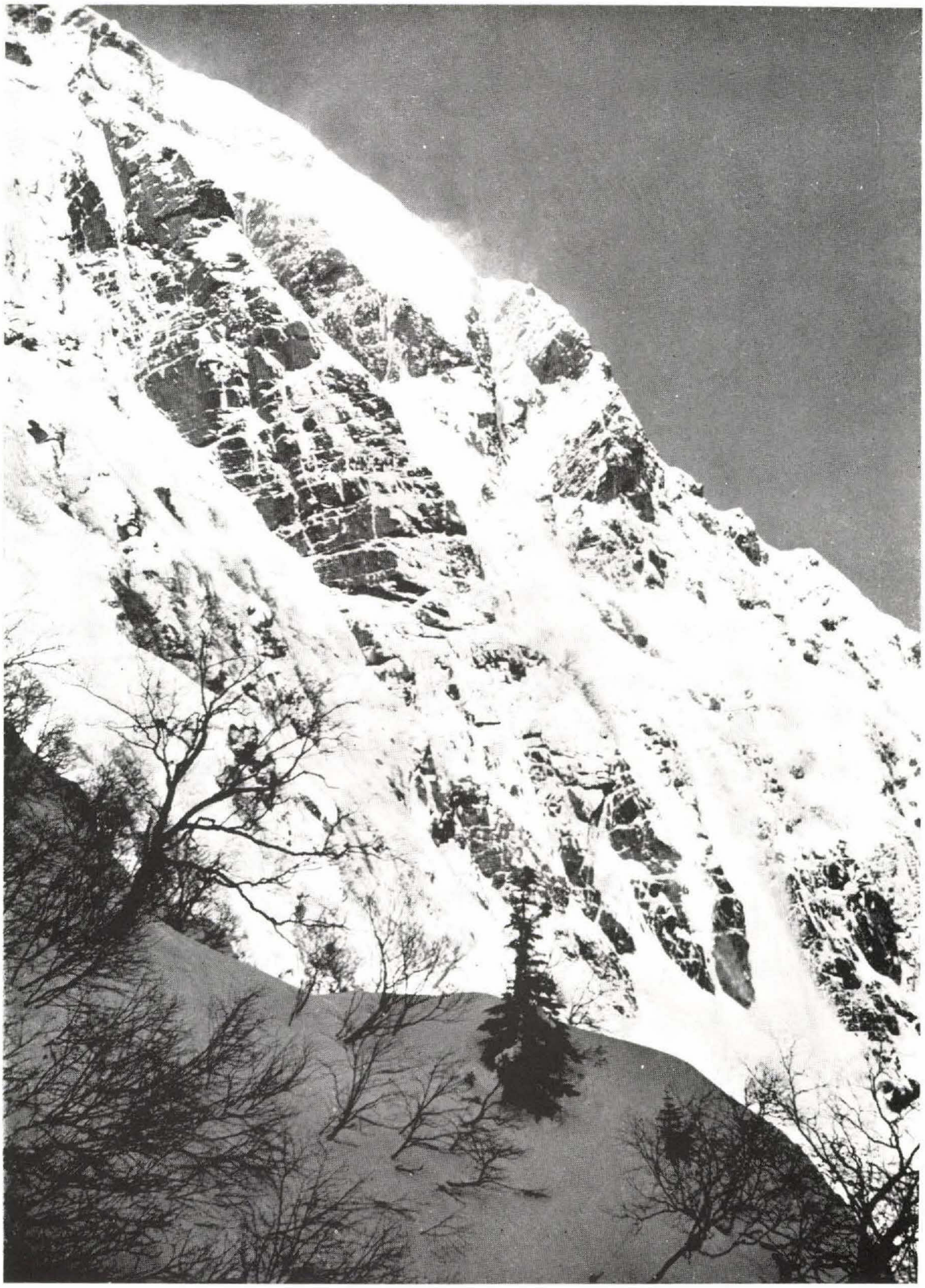
北岳バットレス概念圖……對　三四
北岳バットレス說明圖……八
第一尾根說明圖……二八
第四尾根說明圖……三二
鹿島槍荒澤奥壁說明圖……五三
シツキム・ヒマラヤ概念圖……對　六六



北岳バットレスを目指して　　小谷部全助

Cガリーより第三尾根、中央稜を仰ぐ　　小谷部全助

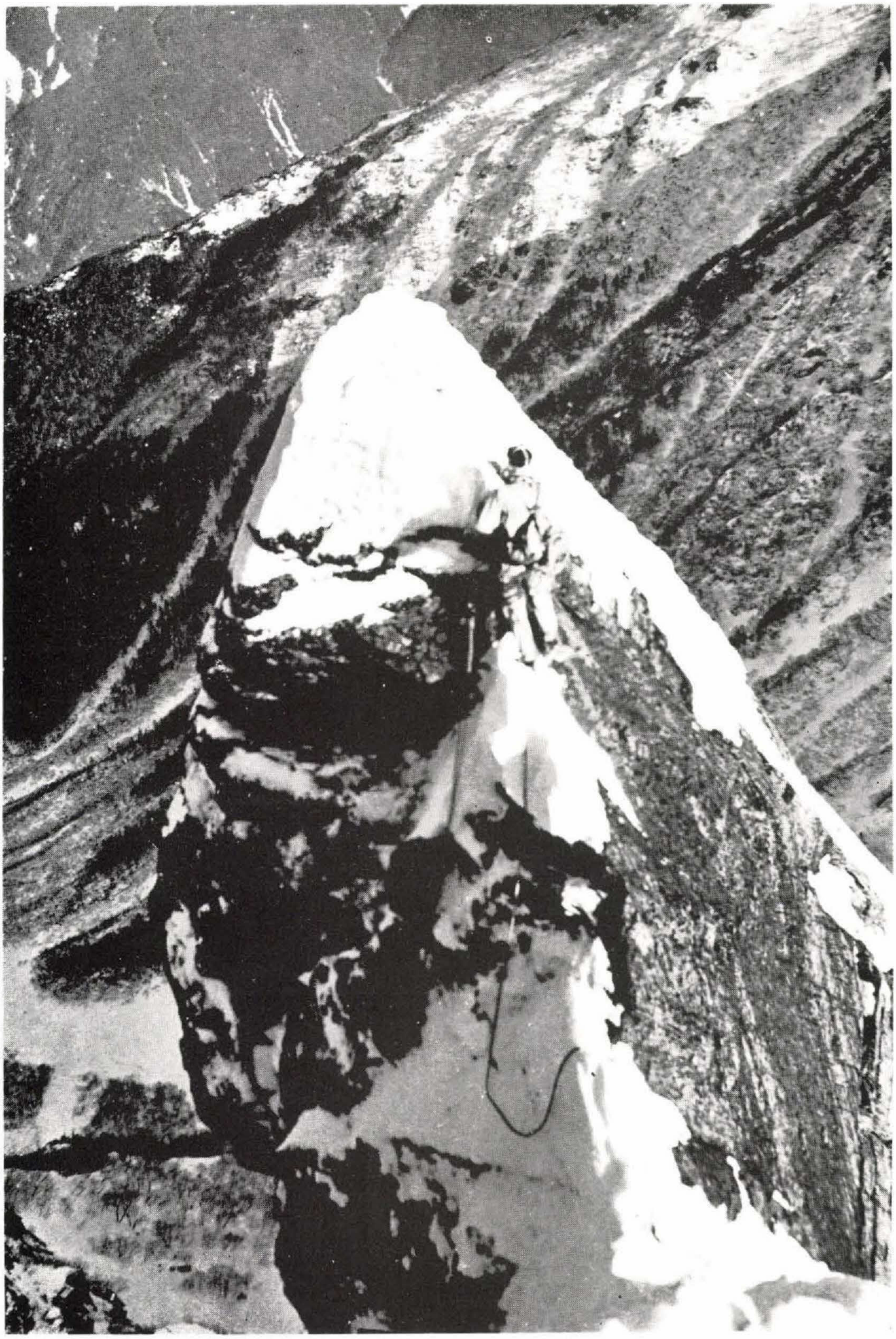
Cガリーよりの雪崩　　小谷部全助



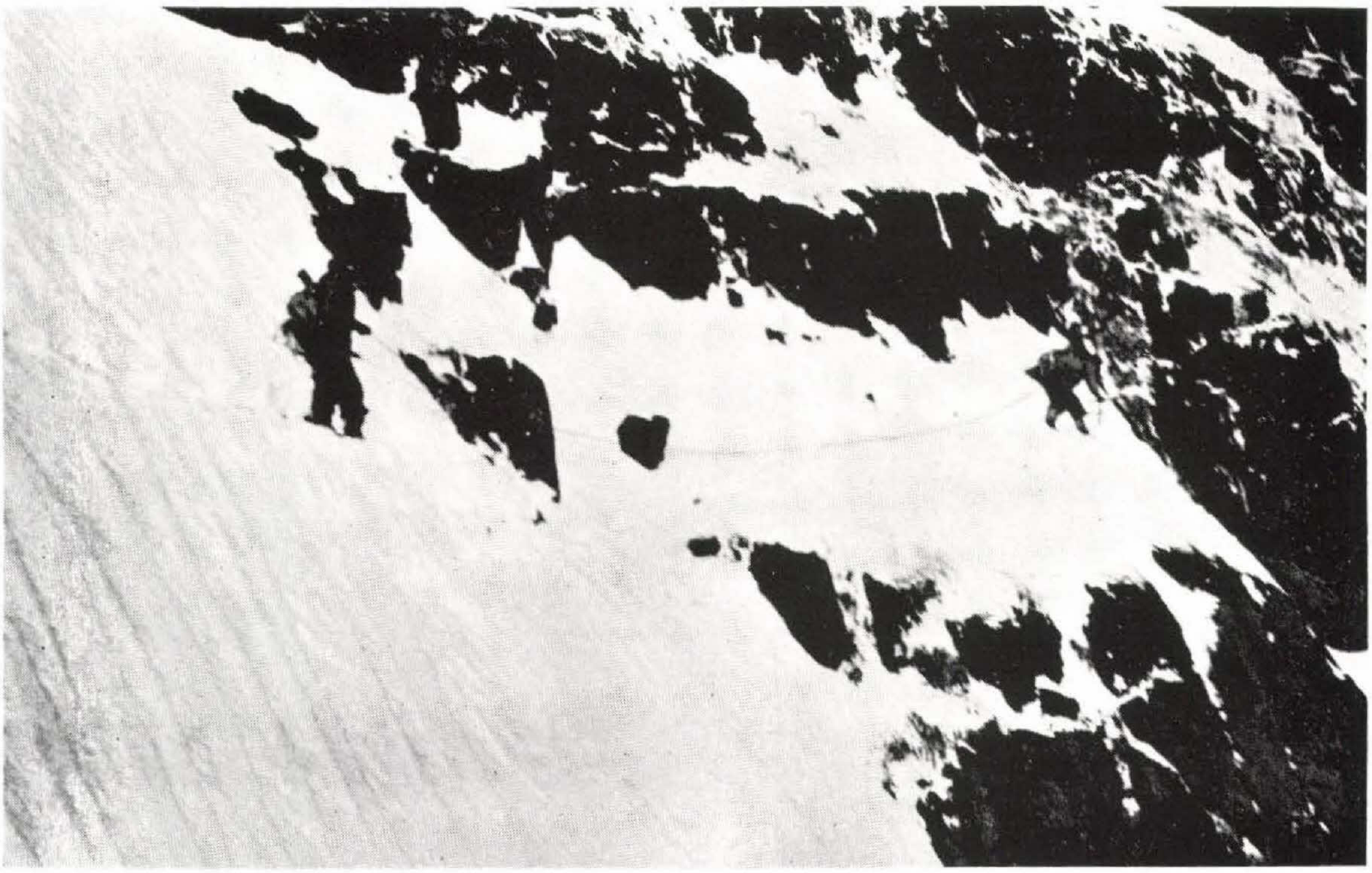
北岳バットレス中央部を望む　　小谷部全助

第　一　尾　根　　小谷部全助

「マツチ箱」第二コルより上部を仰ぐ　　小谷部全助



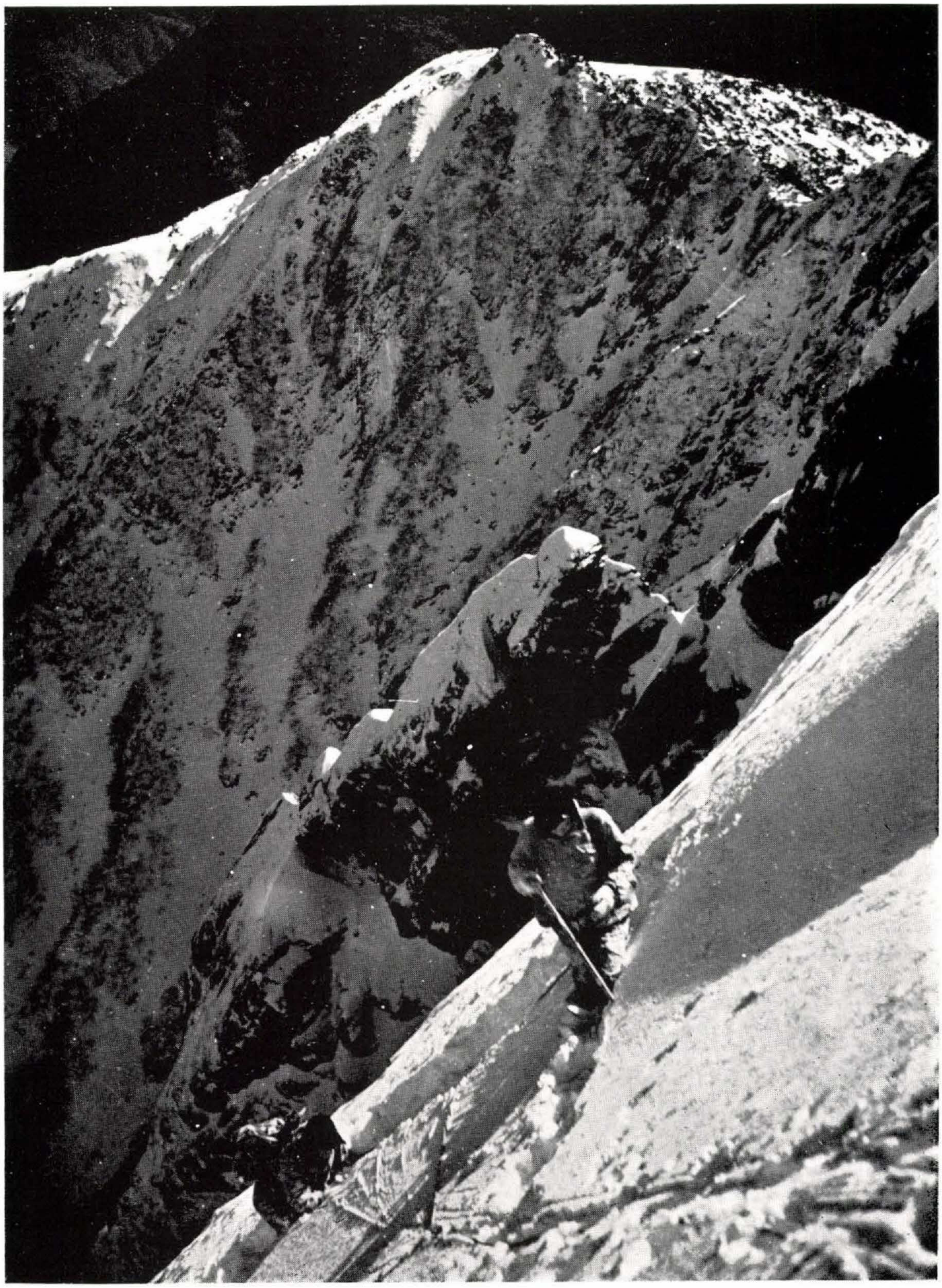
「マツチ箱」より第三コルへのアプザイレン　　小谷部全助



「マツチ箱」の雪稜を攀ず　　小谷部全助

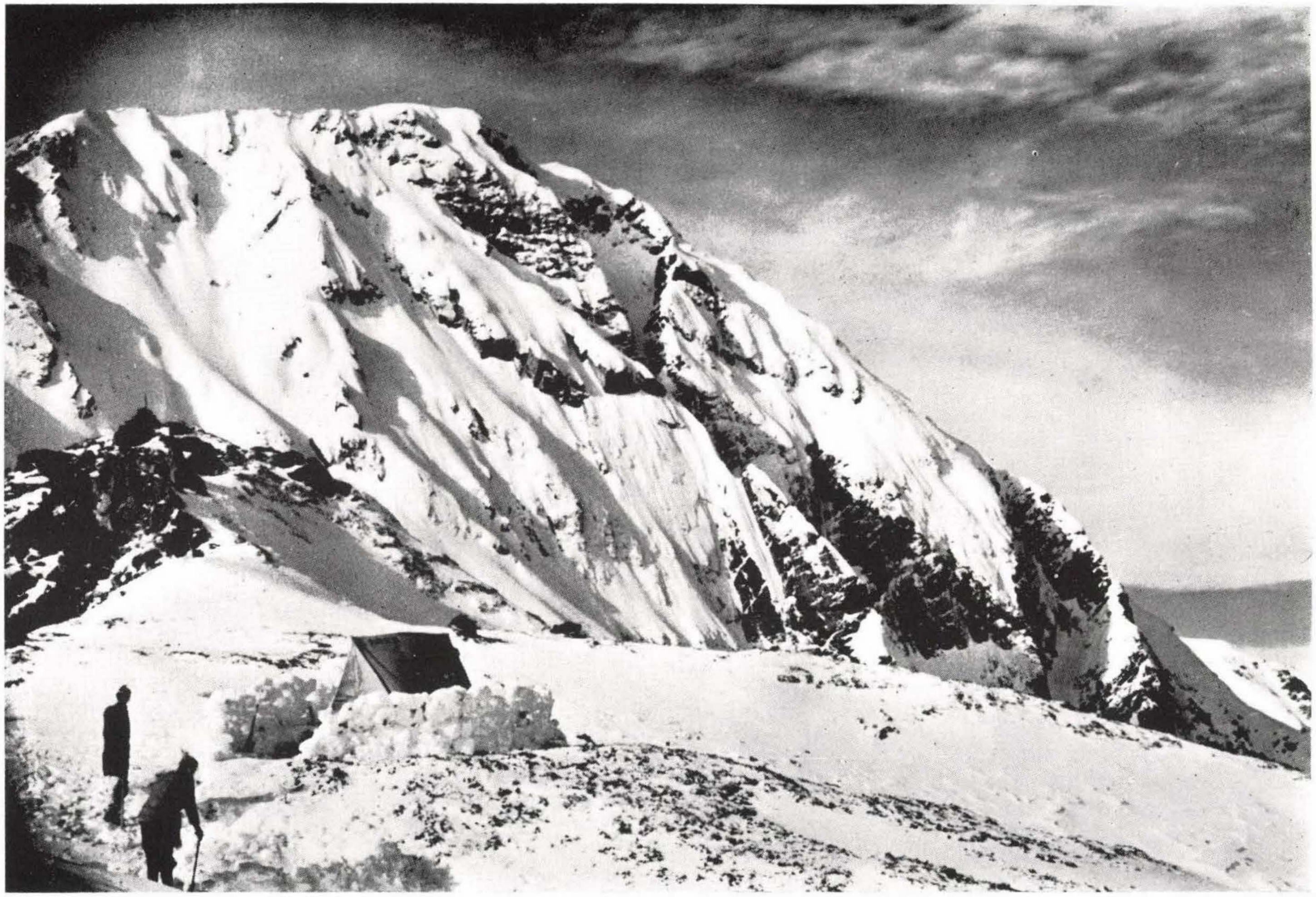
d ガリーより第四尾根のトラバース　　鷹野雄一

第三尾根へ取付かんとす　　小谷部全助



第三尾根上部にて　　小谷部全助

C Ⅱ よ り の 間 ノ 岳　　小谷部全助



釣尾根CⅡと北岳バットレス　　小谷部全助

厳冬の北岳バットレス

小谷部全助

一、前書
二、説明
根據並に通路
岩壁及び登攀ルート
三、登攀報告
第一次登攀
第二次登攀
参照地圖
1、北岳バットレス概念圖（對三四頁）
2、北岳バットレス説明圖（八頁）
3、第一尾根説明圖（二八頁）
4、第四尾根説明圖（三二頁）

一、前書

南アルプスの巨魁、北岳の東面には知る人も稀な素晴しい大岩壁が天空を劃して居る。多くの困難なるヴアリエーションルートが次々と開拓され盡した昨今、嚴冬の裝ひいかめしい此の壁のみは、喧騒の登山界から恰も取殘されたかの如く、太古の靜寂の裡に久遠の雪煙をなびかせて居たのであつた。

或るものはかゝる立派な岩壁の幾つかが、尙未登の儘殘されて居たのを知つてか知らずか、早くもヴアリエーションルートに見切りをつけて本邦登山界の行詰りを論じ、遠征熱にうかされて居る。確かに本邦山岳に於けるヴアリエーションルートは行詰りに近く、主要な箇所に於て最早容易に初登攀の望めなくなつた事は認めざるを得ない。そして今期に於る吾々の登攀が所謂行詰りへの道を、更に一歩進めた事も肯く事が出來る。然し乍ら行詰りと言ふ事は、山岳界と言ふ樣な大きな觀點から眺めた場合に初めて通用するもので、之を個別的に解し、若い吾々が激しい登攀への精進を怠り、遠征の名に陰れて安逸を貪る如き卑怯な態度をとらぬ樣注意すべきである。即ち先輩乃至は他の團體が既に登つたからと言つて、その爲に直ちに爾餘の者の登攀能力がそれ以上に進むと言ふ樣な事は考へられない。

然し乍ら眞に本邦登山界の先峰に立つものにとつては、極め盡された本邦山岳に於て、如何にアルピニズムを發展せしむべきかと言ふ事は、眞險に考慮さるべき問題に違ひない。勿論ヒマラヤ遠征が簡單に實行出來れば問題はないのだが。

右の打開策として、吾々が今期の北岳バットレスに於て實際試みた方法は非常に將來性あり、且遠征に對する練習としても價値大なるものと信ずるのである。即ち從來は概ね、あるヴアリエーションルートを登る場合、既設の山小舍を利用して最も容易にアタツクし得る方法を執つて來たが、初登攀の意義を失ふべきこれからは進歩的な態度をとる以上、同じ箇所に對し同じ方法で登る事は意義の薄い事であるから、こゝに何等か進歩した形式をとり入れる事が必要になつて來る。進歩した器具、技術等を採用す

べき事は云ふ迄もないが吾々は昨今の遠征熱と共に盛になつた極地法を用ひて、同じ個所をアタックするにしても故意に迂回せるルートを選び、登攀そのものを擴大しやうと言ふのが眼目なのである。

一九三五年十二月に於る第一次登攀に於て、吾々は從來のやり方に依り大樺小舍を根據としてバットレス第三、第五のリッヂを攀じたが、一九三七年一月に於ては、右に述べた趣旨から通路を池山釣尾根にとり、蝮平から天幕を進め二九五〇米のピークにCⅡを設置して登攀する方法に從つたのである。即ち後者に於ては山小舍を依頼せず、全然遠征的な方法であらゆる行動を律した上故意に高燥なピーク突端に天幕を設けて嚴冬の暴威に直面しつゝ悪場をアタックすると言ふやり方は、海外のより高峻なる山々への遠征に對し此上なき練習になるものと思ふ。

この前後二回に於けるバットレス攻撃は共に積雪期に於ける初登攀であると共に、右に述べた如き過渡期の一模様を表はして居る點に於て特に意義大なるものと信ずるのである。

次に北岳バットレスの登攀年譜を掲げる。

年	月日	登攀個所	摘要	パーティ	所要時間	參考文獻
一九二七（昭和二年）	七・一八	第五尾根	dガリーへ中途から這り左寄りのフェースより再び尾根へ出る。	京大山岳部	酒戸彌二郎 高橋健治 奥貞雄 細野重雄 竹澤長衛	時間 三・四五分	關西學聯報告第一號（一——六頁）
	七・一九	東北尾根		全右	高橋を除く右四名	三・〇〇	全右
一九三二（昭和七年）	八・六	中央部	bガリー下段右岸の稜より第三尾根を登り第四尾根上部に出て登頂せりと。	立教山岳部	酒井吉國 澤本辰雄 山田正夫	四・三〇	立大山岳部々報、五（記一一——一二頁）

年	月日	登攀個所	摘要	パーティ	所要時間	参考文献
一九三三（昭和八年）	一二・二八	第六尾根	第七、六尾根間のガリーより取付き登頂	立大山岳部 同志社大山岳部	八・〇〇時分	立大山岳部々報、六（三五—四〇頁、記一九—二一頁）ケルン10
一九三四（昭和九年）	八・二〇	東北尾根		立大山岳部 榎本忠亮 立鈴木正彦 川正康	二・一〇	立大山岳部々報、七（記、七—八頁）
	一〇・三一	第四尾根	ダイレクトに取付き、マッチ箱の第二コル迄はdガリー側を巻き其處よりcガリー側をトラヴァースして第三コルへ出る	立大山岳部 湯浅忠厳 榎本亮	六・二〇	立大山岳部々報、七（五〇—五一頁）（記、一三—一四頁）
	一〇・三一	第三尾根（試登）	bガリーより取付き中途より引返す	立大山岳部 清水龍三 濱野正男 山本正成		立大山岳部々報、七（記、一三—一四頁）
	一二・二七	東北尾根		立大山岳部 濱野正男 榎本忠亮	四・〇〇	立大山岳部々報、七（五二—五四頁、記、一七—一八頁）
一九三五（昭和十年）	六・二三	第三尾根	第四尾根をダイレクトに登り右にcガリーへ這り完登す。	東大山岳部 小谷部全助 鷹野雄一 森川眞三郎	六・二〇	針葉樹、八號（一〇三—一〇八頁、記、二二一）
	一〇・三〇	第四尾根	ダイレクトに取付き「マッチ箱」もリッジ通り登る。第三コル以上はcガリー寄りのクラックを攀ず。	東大山岳部 村尾金二（O・B） 小林重吉 望月達夫	八・三〇	針葉樹、九號（記、四頁）
	一〇・三〇	第六尾根		東大山岳部 和田榮達 佐木々誠	二・〇〇	針葉樹、九號（記、四頁）
	一〇・三〇	第七ルート（學聯報告一號の名稱による）		東大山岳部 岩崎利一 西野博 森田三雄（奥原守）	二・三〇	針葉樹、九號（記、四頁）
	一一・一	第五尾根	dガリーより直ちに尾根に取付く。	東大山岳部 小谷部全助 望月達夫	三・三〇	針葉樹、九號（記、四頁）
	一二・一一	第五尾根	dガリーの氷壁を攀ぢ尾根に出る。	東大山岳部 小谷部全助 小林重吉	九・四〇	針葉樹、九號（一二三—一五頁、記九頁）ケルン三三

年	月日	登攀個所	摘要	パーティ	所要時間	參考文獻
一九三五（昭和十年）	一二・一三	第三尾根	dガリー氷壁を經、第四尾根をトラヴァースしてcガリーに這り直接取付く。	東京商大山岳部 小谷部全助 鷹野雄一 小林重吉	七時・四五分	針葉樹、九號（一五—一九頁）記、ケルン三三一〇）
一九三六（昭和十一年）	九・六	第四尾根	bガリー下段右岸の稜よりcガリーをトラバースして取付く	東京商大山岳部 小谷部全助 森川眞三郎	四・二〇	針葉樹、九號（記、四四頁）
	九・六	第五尾根	昨年十一月の時のルートと同じ。	東京商大山岳部 望月達夫 大塚 日江井正武	三・四〇	針葉樹、九號（記、四四頁）
	九・八	第一尾根	aガリーより左へトラバースし全尾根と北支稜との間のリッスより取付く。	東京商大山岳部 小谷部全助 森川眞三郎	三・一〇	針葉樹、九號（記、四四頁）
一九三七（昭和十二年）	一・二	第一尾根	bガリーより取付き、矢張りリッスから攀じる。	東京商大山岳部 小谷部全助 森川眞三郎	一二・〇〇	針葉樹、九號（二七—三〇頁）記、五四頁）
	一・五	第四尾根	bガリーを登りcガリーへトラヴァースして取付く、すべてリッジ通し攀ず。	東京商大山岳部 小谷部全助 森川眞三郎	九・〇〇	針葉樹、九號（三一—三四頁）記、五五頁）

（註）右表中所要時間とは岩壁取付より北岳頂上迄に要した時間を指す。

即ち北岳バットレスは一九二五年京大パーティに依つて見出され、一九二七年夏京大パーティによつて第五及び東北尾根が初めて登られ、中央部の困難さが報告されたが、爾後立教パーティにより中央部がアタックされ、その後の吾々の登攀と共に漸く非積雪期に於けるバットレスの全貌が明瞭になつて來た。

積雪期に於いて初めてアタックされたのは一九三三年の十二月で、立教の山縣並に同志社の入江の兩氏及び人夫竹澤藤太郎の混合パーティにより第六尾根が登られた。その後一九三四年十二月、第四尾根を目指して立教の濱野、榎本兩氏が這入られたが單なる偵察行に終り、その時東北尾根が登られたに過ぎなかつた。かくして中央部の氷雪に被はれた岩稜は、何人の手に觸れられ

る事もなく過ぎ、一九三五、三七年の兩回に於ける吾々のアタツクに依つて第三、第五、第一、第四の各尾根が完登され、こゝに中央部の冬期登攀も一段落ついた形となつた。

一一、說明

根據並に通路　北岳バットレスをアタツクする場合の根據地として吾々は初めは大樺小舍を、次回には釣尾根二九五〇米のピーク絕頂に於ける幕營を選んだが、前書に述べた如き趣意からのみならず、地域的に見ても後者が非常に便利だつた事を認めざるを得ない。大樺小舍から長衛の岩小舍迄の雪に被はれた嫌な卷道や、岩壁に取付く迄の登り一方の深いラッセルに較べて、後者の釣尾根からは殆んど下りのみで取付けるし、歸途も北岳頂上から尾根通し天幕迄最も簡單に歸着し得るのである。たゞし天幕から「落込」のコルへの降りへザイルを固定して置く事と、風雪に對して抵抗力强き天幕を設置すべき事を必要とする。

大樺小舍を根據とする場合、積雪期の通路として（一）鮎差より野呂川を溯行して至るものと（二）五葉尾根途を野呂川へ出て達するもの（三）信州戸臺より北澤經由野呂川を下つて廣河原より這入るものゝ三つが擧げられる。

（一）は屢々徒涉を餘儀なくされる上、冬期に於ける一―二尺程度の積雪は河原の岩塊を被ひ切れず、相當のアルバイトを要する。一層積雪の極度に少い時は（二）に依つた方が遙かによいが、三月頃の如き多雪期には徒涉こそ免れぬが、スノーブリッジに依り可成り省略し得る上、スキーが有効に使えて案外容易に這入れる。二尺以上も積雪ある場合（二）は森林帶で迷ふ恐れのある厄介な卷道で不適當。（三）も中途半端な積雪の場合は可成惡いが、三月には左岸二ケ所の高卷で少し手古ずる位で、容易にスキーを滑らす事が出來、かゝる場合（一）によるよりも遙かに樂である。十二月、この方面に有り勝な積雪の極く少い時は、夏途も判るし一層容易であらう。然しかゝる時は（二）が最も容易なのではないかと思ふ。次に廣河原から大樺小舍迄は十二月一月頃の積雪比較的少き時は夏途によるが良く、三月頃は大樺澤を長衛岩小舍までスキーで登り、其處から夏の卷道の少し上部の山腹を戻り、大

樺小舍に達するのが最も樂であらう。

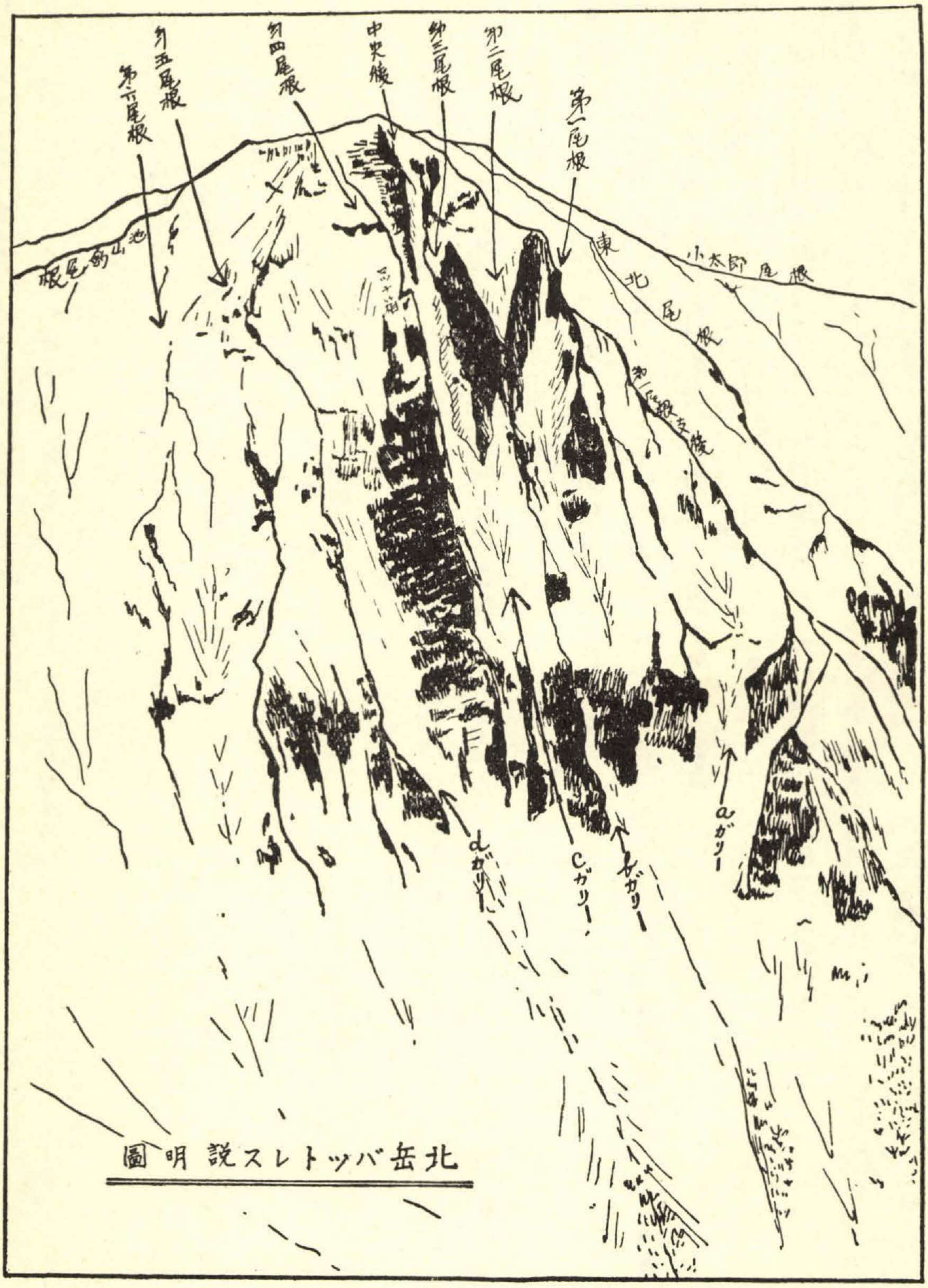
次に釣尾根二九五〇米のピークへ幕營する場合は、言ふ迄もなく極地法を採用して前書の如き趣旨から登攀そのものゝ迂回、擴大化を計らんとする場合であらうから、通路としては種々自由に選擇出來やう。吾々の行つた樣に荒川蝮平から尾根通り辿るものは云はゞ、比較的すなおなやり方で、二〇〇〇米の池のある平にC・Iを、而して此處から直ちに該ピークへC・IIを設置したのだが、天幕間の距離が離れ過ぎた嫌ひあり、荷上等には意外に苦勞して了つた。大體蝮平から標高差六〇〇米位の間隔で、三ケ所位天幕を設けるのが普通であらう。この他更に登攀を擴大せんとする場合、小太郎尾根に天幕を進めたり、兩俣から間の岳方面を經由したり等々色々考へられやう。

岩壁及び登攀ルート

バットレスの地形に關しては『關西學聯報告一號』に細野重雄氏が書かれて居るが、中央部に關しては十分とは言はれぬ故、吾々が登攀中偵察し得た範圍で說明を加え樣と思ふ。ルートの如きも同報告の（1）—（7）は今日では既に不徹底と思はれるから大體之に基いては居るが少し變更した。

即ち北岳バットレスとは、東北尾根と池山釣尾根にはさまれた部分を指すもので、主要なリッジとしては北から第一、第二、第三第四、第五、第六と大體六個出て居り、約二五〇〇米から三一九二米の北岳頂上迄の間に壯大な岩壁を懸けて居る。次に登攀の對象として最も興味ある第一尾根から、中央部にかけての地形並にルートを簡單に述べて見る。

第一尾根は大樺澤左俣上流から仰ぐ時は東北のスカイラインを爲し、又草ヅリから見る時はバットレス南端のスカイラインを爲して居る顯著な尾根で、全體が赤黑い岩から成り草付のテラスに落込むあたりは、垂直乃至オーヴアーハングを爲して、一見登攀不可能を思はせるものである。冬期に於てもこの尾根は雪をつけず、黑々と岩肌を現はして居る。登攀ルートとしては、向つて右側（下より）に喰込む小さなリッスを攀じて、そのつめた所にある細いバンドを左に卷いて、恐しい斷崖の上の小テラスに出、そ


第六尾根
第五尾根
第四尾根
中央稜
第三尾根
第二尾根
第一尾根
根尾剣山池
東北尾根
小太郎尾根
第一尾根支稜
aガリー
bガリー
cガリー
dガリー

北岳バットレス説明圖

れから上はリッジ通り辿るもので、一ケ所オーヴアーハングを越す所の附近三ピッチ程が最悪で、冬期に於ける困難さは第四尾根以上であつた。

第二尾根はbガリー（學聯報告一號には(2)とあるもの）をへだてゝ第一尾根の左（下から仰いで）にあるリッジで、最短ではあるが六つの尾根の内最悪に見え、殆んど垂直の壁狀を爲して居る。全然未登攀のものでルートとしては、忠實にリッヂを攀じるか或ひは左の側壁に切れ込んで居る、幾つかのチムニーの内何れかをとるべきであらう。リッヂの終つた上部も尙急峻な草付を交へたスラブで、登攀は難かしい。

第三尾根はCガリーを眞中で二分する尾根で、リッヂとしては短い。右側が急峻な壁で落込んで居るに反し、左は比較的緩く這松が多い。中程に五米程のチムニーを有する岩峯あり、上部でリッヂが消えて大きなテラスに續く邊りと、テラスの直ぐ上の岩壁との二ケ所がこの尾根の悪場である。リッヂそのものゝ登攀は中央部としては容易である。

第四尾根は之等のリッヂ中最も大なるもので、左側は顯著な逆層のフエースを爲し、右側は比較的穩やかな草付のスラブを交えて居る。リッヂの中程、通稱「マッチ箱」は鋭い岩稜だが傾斜は大して急でなく、感じは穗高瀧谷第四尾根のカンテに一寸似て居る。冬期このリッヂは薄く氷雪に被はれて、微妙なバランスとステップカッティングを要する所である。マッチ箱には二つの凹部、第一コル、第二コルあり難所を爲して居る。ルートは殆んどリッヂ通しで時々やゝ右寄りを卷く樣に攀ぢ左方dガリー側は全然通らない。

中央稜と吾々が稱するものは、北岳直下からCガリーにぐんと落込む素晴しく險峻な逆層の岩稜で、登攀不可能に見えるものである。

第五尾根は第四の左にある這松の多いリッヂで、第四との間dガリーの上部は打ち開いて逆層のフエースを爲し、このフエースの傾斜は上部程急で、dガリーの直登は先づ困難であらう。冬期このフエースも氷雪に被れるが雪崩の危險多分にあり、ルートに

は向かない。然し、非積雪期にはホールド悪く登攀困難なdガリー取付邊は、冬期素晴しい氷壁と化して、本邦では珍らしいアイステクニツクを味ふ事が出來る。第五尾根自體は下部を除いては殆んど這松があり、冬期は單純な雪稜の箇所が大部分である。もう此の邊から左へ行くとレリーフも少く、地形が比較的平凡化して登攀の對象としては、興味の薄いものになつて了ふ。殊に冬期は一面のつぺりした雪の斜面と化して、クライマーを魅するに足らぬ。

尙第一から第四迄の各尾根をアタツクする場合、最下部の壁が問題になるが、aガリーから這入れば最も簡單にこの岩壁を省く事が出來やう。積雪十分なる時は、bガリーも便利且可成に手强く面白い。第四尾根をダイレクトに攀じるのは、堅氷の爲冬は不可能に近いものである。吾々が第一次登攀でとつた樣に、dガリーの氷壁を攀じて第四尾根をトラヴァースするルートは、困難且變化に富んで最も登り應えのあつた所だが、ピトンが思ふ樣に利かぬ故、可能性を保證出來ない。尙冬期の各尾根の詳細は後述の報告中に述べる事とする。

三、登攀報告

(A) 第一次登攀報告（第五、第三尾根）

(パーテイ) 小谷部全助 鷹野雄一 小林重吉

(行動略記)

一九三五年 十二月七日 晴 甲府——五葉尾根小舍
八日 小雨後晴 小舍——シレイ澤岩小舍
九日 快晴 岩小舍——大樺小舍
十日 小吹雪 dガリー氷壁登攀

十一日　霧雪疾風　第五尾根登攀並に第四のトラヴアース工作
十二日　晴烈風　滯在
十三日　晴　第三尾根完登
十四日　曇後雪　ピッケルを拾ひにdガリー登攀
十五日　晴後吹雪　大樺小舍——鳳凰北御室小舍
十六日　快晴　小舍——韮崎

（I）大樺小舍まで

十二月も未だ初めで山麓に於ける積雪は殆んど無く、爲に通路は五葉尾根を選んだ。大樺小舍には此の秋に合宿した時、米、味噌等を上げて置いたので、吾々の荷は大した事はなかつたがポーター無しでは可成り重く、體力をセーヴする爲、五葉尾根小舍迄ポーター一名大曾利から雇ふ。山麓は晩秋の狀態だが、杖立峠あたりから眺める白峯三山は流石に白銀に粧はれ、一九〇〇米邊の雪線が非常に明瞭で印象的だつた。廣河原から落葉で不明瞭な夏途を辿る。急阪が横卷になる邊から、積雪が急に深くなり一尺五寸から二尺位で漸く冬らしくなつた。格好のよい針葉樹の彼方に、輝く氷と雪のバットレスは驚く程豪壯で日本ばなれのした景觀である。積雪に被はれた森林中の途は、兎角失ひ勝ちだがナタ目に導かれて大過なく、屋根に重さうな雪を載せた懐しい御池の小舍に這入る事が出來た。小舍内は全然吹込なく、秋切つて置いた敷布代りの枯草も、焚木もその儘になつて居る。附近の積雪二—三尺で、水は御池に張つた厚い氷を割つて得られた。ポタ〳〵と單調な音をたてゝ居た雪融けの水も、何時しか凍り恐しい樣な雪山の靜寂が邊りを包む。太陽がバットレスの彼方に沈むと、氣溫は更に降つて防寒具を總動員せねばならぬ。すき間だらけの此の小舍は、外部と大差ない狀態なのである。愈々明日からは待望の雪・岩・氷だ。リュックサックをとゝのへ、靴の塗油などを十分に爲し、吾々ははやる興奮をぢつと押えて、冷いシュラフザックに身を埋めるのであつた。

(Ⅱ) バットレス登攀

一二、一〇　小吹雲　min—11°C　dガリー氷壁上まで。

愈々岩壁への第一歩、偵察の日。再び厚く張り閉したお池の氷を碎いて、炊事もそこ〳〵に出發する三人の心は、闘志に滿ち〳〵て居る。嫌なブレーカブルクラストのラッセルに惱みつつ、秋につけたナタ目や赤い布片に導かれて、長衞の岩小舍へ達する。崩れかゝつた天候はもう雪をちらつかせ始めた。今迄は急な山腹の卷道だつたのでアイゼンのみで來たが、もう廣い大樺澤を登れるので三人共その上に輪樏をはく。大樺澤も矢張り嫌なクラストで一歩々々は極度に苦しい。各ガリーからはすべてデブリを押出し大樺澤も岩壁下附近になると、すつかりデブリで埋められて居る。やがて、嚴冬の武裝いかめしいバットレスの偉容に初めて面とぶつかつた吾々の感激は、とても拙い筆に表す事は出來ない。唯啞然と見上げ見下す許り。殊にdガリーは、何と一面に氷壁と化し遙か逆層の岩壁迄のし上つて居るのだ。そして、第四尾根は見事な逆層の岩盤に、太いつらゝを打ならべて、上へ々々と押し重なつて居る。取付の岩は總て堅氷にはり廻らされて、攻擊のしやうも無い。吾々はdガリー直下の雪面を踏みならして、一服する事にした。吹雪もその後一向勢を强めず危險もないので今日は何とかして秋の偵察通りdガリーから第四尾根をトラヴァースして見やうと思つた。無雪期には非常に困難なdガリー下部も氷壁化して居るので、ステップさへ完全に刻めば何とか攀じられ相だ。自分小林、鷹野の順にアンザイレンしてこの珍らしい氷壁にぶつかる。ガッチリとアイスハーケンを利かせつゝ、テラ〳〵の氷に愼重なバランスを保つて一つ〻〻丹念に刻む。氷塊がバラ〳〵と、下に確保する友の頭を亂打して苦情が出る。不圖、岩の積りで一寸體をもたせたりすると、ヌルリと滑つて慌てゝ上に作つたステップへしがみつく事が屢々あつた。隨分時間を費して漸く十五米だけ刻んだので、一先づ先に打つたアイスハーケンの所迄小林に上つて貰ひ、更に上へ登りつゞける。カラビナはピンと張切り、氷壁を傳ふザイルの感觸は、憧れの登攀を想はせる。下から二時間餘もかゝつて漸く三十米程登り、氷壁中段の少さな堅雪のテラス着。上方は更に急峻な氷壁が續き、二十米程で雪渓になつて居る模樣だ。この上の氷は可成り薄く、岩がすけて見える程なのでアイスハ

ーケンも利かず危險なので、向つて左側に岐れたリッスを攀じる事にした。この堅雪のテラスへ鷹野のピッケルをハンマーで打ち込んで、確保のピンと爲し直ちに登攀にかゝる。もう氷ではないが非常に急で、辛ふじて傍らに顏を出して居るブッシュにつかまり、キックステップを作りつゝ體をのし上げるのである。一ケ所少しひらきは廣過ぎるが、チムニー的に頑張れたので兩手の自由を得、確保の爲片岩の間の凍土にアイスハーケンをがつちり打込み、更に同樣にして四、五米登つた所へもう一本、今度は長目のロック用を一本打つて、愈々最後の一頑張りの所へかゝる。丁度今登つて來たリッスが眞上でつまつて了ふので、右手へ氷壁の最上部の緩くなつた所へトラヴァースする所なのである。恐怖感でなか〳〵トラヴァース出來ぬ。「賴んだぞ」とどなり乍ら、體重を一時に氷へつき立てたピッケルとアイゼンへ掛ける。案ずるより生むが安しで、岩上に薄く張つた氷上を手早く攀ぢて、安全感のする氷壁上部の雪溪へ、ボックリ足を埋めた時は嬉しかつた。下からどなる聲が第四尾根の逆層と、この氷壁に反響し合つて無氣味に響く。こゝの雪面をならして、肩で確保し嫌になる位時間を經過して、漸く三人顏を合す事が出來た。今日はもう之で十分として戻る。先づ小林、鷹野の二人に確保して貰つて今度は直接に氷壁を下る事にした。途中の露岩にピトン二本を無理して此處迄三人下り、一人々々アプザイレンで先刻の堅雪のテラス迄下降。更にこのテラスへピッケルを打込んで、三十米のザイルを固定した儘にして戻る。

一二、一一　霧雪疾風　min—14°C　**第五尾根完登**並に第四尾根トラヴァース工作。（小谷部、小林併記）

昨日のアルバイトで既にdガリー五十米餘の氷壁には立派な階段が出來上つたし又ザイルを固定して置いたから今日こそ天氣次第で第四をトラヴァースして待望の第三尾根をアタックしやうと思つて居た。所が午前一時起床の積りが三時になつて了ひこれでは少し時間的に無理かも知れぬと思つた。然し大急ぎでパンで朝食を濟し、鷹野はコンディションが香しくないと言ふので小林、小谷部の二人のみで出發。時間は既に四時四十五分だつた。前日にラッセルしてあるので長衞岩小舍を經て岩壁の直下迄は案外樂でdガリー直下に着いた時は七時五分で將にモルゲンロートがバットレスの上半部に輝き始め、上の雪溪はキラ〳〵と

暖かさうなピンク色に光り出した頃だつた。然し吾々の居る日陰は猛烈に寒く、靴の中に張る氷がヌル〳〵と不氣味な感觸を傳える。一休みして三十五分、直ちにdガリー氷壁に取付いた。固定したザイルは塗油完全で全然固まらず之を頼りに昨日のステップにつまつた粉雪を排しつゝピツケルを突さした中段のテラス着。こゝから足下をのぞくとテラス〳〵の氷壁が大樺澤へコンヴエクスに落込んで居るので餘り氣持がよくない。こゝで固定ザイルをはずしてアンザイレンし、八時廿分から卅五分迄休む。オーダーは小谷部、小林。次のピツチも昨日既にステップを刻んで置いたが場所柄だけに同じ位緊張して了つた。氷壁上部の雪溪は相當廣く日當りもよいので氣持の好い所だ。こゝへ九時半到着。此處から第四尾根をトラヴアースしやうと言ふのだが、これが問題である。秋の偵察から、どうしても喰違つた二段のバンドに依らねばならぬ事を覺悟して居たが雪や氷に被はれた逆層の岩盤は果してどれが安全なバンドだつたのか全然わからなつて居たので大體それらしい所の雪面へカツテイングを始めた。傾斜は六、七十度もあり足下は直ちに例のテラ〳〵な氷壁へガツチリとピトンを打つて小林に完全な確保を頼んだ。カツテイングして見ると案外雪は薄く、直ちに薄氷で被れた岩盤へガツチリとぶつかる。だが薄く被つた雪と氷に辛くもアイゼンのツアツケを利かせてどうやら第一段のバンドらしき雪面の終點迄行く。前のピトンから二十米位。其處は他の逆層の岩盤が殆んど垂直に行手に頑張つて居る所で、五、六米下の喰違つたバンドへ移るにはこの突當りの岩盤へピトンを打込んで、之を頼りにアプザイレンせねばならないのだ。そこで危つかしいステップ上に辛くも體を支え乍らハンマーを振つたがなか〳〵思ふ樣に利いては呉れない。一度はうまく這入つたので試みに力を入れると、一尺四方位の岩諸共崩れて了つた。實にこゝ一本のピトンにトラヴアースの成否がかゝつて居ると言つても過言ではないのだ。泣き出し度い樣な氣持に襲はれたがもう一頑張りと努力し漸く無理な溝だつたが、やけにハンマーを振ふとまるで飴の樣に曲り乍らピツ〳〵とかん高い音をたてゝがつちりと這入つて行つた。もう之に補助綱さへ垂らせば良いのである。これで第四尾根をトラヴアースし得る自信はついたが、この時既に天候は惡化の徴を見せ、輕い雪片が風と共に舞い始め雪雲はどん〳〵廣がるのでこの日第三尾根を登るのは無

理と諦め比較的容易な第五尾根へ向ふ事とした。それから遮二無二dガリーの急な雪渓をつめ、一寸した岩壁にぶつかる。もうこの邊は雪渓も最上部と言つてよくガリー自體の傾斜も急で薄い積雪の下から體も保てぬ樣な不氣味な逆層のフェースが崩れ出勝ちであつた。この突當りも下から仰ぐとバットレス特有の逆層の岩壁であるが何とか左側の樂なリッヂへ出られ相に見えたのでアタックして見たが實に悪い。クラックの中、普通ならホールドの有無でルートの見透しをつけるのだが此處ではピトンの利き相な溝を目當てにして强引な登攀を敢行せねばならなかつた。岩壁を六米程、殆んど垂直にずり上つてガツチリとピトンで自己確保した時は全くホツとして了つた。下の確保場からではザイルが不足なので途中迄小林に上つて貰つたが、その時小林一寸スリツプしザイルに作つた瘤の爲、直接ショツクを受けないで小氣味よくピトンで體重を受止める事が出來た。結局最後の一息と言ふ所でどうしても乘切れずピトン一ケを捨石にしてアブザイレンで下の雪渓迄擊退されて了つたが、此の時は危い所でリュツクをザイルで下したり補助綱を使つたり全く眞劍だつた。

此の少し下の雪渓から左へトラヴアースしていとも容易に第五尾根へ出た時は實際馬鹿々々しくなつて了ふ。午後二時。それからは腰を沒するラツセルに惱まされ夏期ならば何でもない樣な岩場で手古ずつて豫想外に時間を喰ひ、又疲れた。交互にラツセルをかはつて頑張り國境の尾根へ出たのが五時頃。途端に猛烈な西北風になぐりつけられ殆んど息もつまる樣だつた。嚴しい寒氣はウインドヤツケをも素通しに傳はり、よろめきつゝ北岳頂上に辿り着いた時は實際壯烈そのものだつた。五時十五分。それから本當にうつかりすると體を宙に飛ばされ相な猛風に、殆んど地を這ふ樣にして釣尾根の風陰へ逃れた時は全くやれ〳〵と胸をなで下した。落込コルからの下りも雪は締り樂だ。空模樣も回復し月明を利して大樺澤をアイゼンのみで下り鷹野の一人留守せる小舍へ戻つたのはもう八時に間もない頃だつた。

一二、一二　晴烈風　min—16°C　滯在休養

一二、一三　晴　min—18°C　**第三尾根完登**（鷹野記）

小舍の前から眺めると、北岳の側面を限る稜線の手前に、そして頂上に近くぐんともり上つて見るからに見事なスカイラインを描いてゐるバットレスの氷稜。あのリッデに、そしてあのガリーに、力一杯とつゝいて男一匹生命をかけての登高を試み樣と謂ふ其の日は、明日になるか明後日になるか。私は其の日が一日も早く來て欲しいと思ふ期待の氣持と、何時までも〳〵來ない方がいゝと願ふ樣な弱い不安な心との、入り交つた云ひ知れぬ複雜な心地になつて行く自分をどうする事も出來ないのであつた。

なごやかな冬の日ざしの午後、つらゝをしたゝる雫の音に耳を傾げながら此の御池の小舍へ入つて以來、氷壁の登攀に、第五尾根の登高に、もう三日と言ふ日が流れ四日目の今日も高い空をさう〳〵と吹く風の音と共に暮れて行かうとする。

「愈々明日だね」

私達はお互にそんな氣持になつた。そしてキスリングにザイルやハーケン、食糧などをぼうり込んで、十六夜の月の昇る頃シュラフザックにもぐり込んだ。梢にうなる風の音は聞くだに寒む〳〵しい思ひがする。山の彼方の遠い都の街々では、今頃師走の人出に賑はつて居る事であらう。此の同じ地球の上にもそんな世界もあるのだらうか、といぶかしい心地にさへなつて來る。愈々明日は登高なのだ。でも十三日の金曜ぢやなかつたかしら。そんな事を思つて居る中何時かぐつすりと寢込んで了つたのであつた。

寢坊の私が、二人の友に起されたのは二時を少し許り廻つてゐる頃だつたらう。仕度は大體出來てゐるので、ゆつくりと火を起して、ゆら〳〵と動く裸蠟燭の燈で食事をとる。成功すれば今夜は此處で乾杯しやう。でも若しかしたら、もう此の小舍で飯を食ふのも之が最後になるのぢやないかしら。心配性の私は拂つても〳〵斯んな不安が心にまつはりついて來る。午前四時、アイゼンを穿いてリュックを肩に、きしむ雪を踏みしめて外に立つ。バットレスは黑々と聳え、無言のまゝ私達を見下して居る。幸ひ風も落ち、澄んだ月の光に一昨日までのラッセルの跡がおぼろに續いて、やがて池の向ふの葉の落ちた岳樺の木立を縫つて黑い林の中に入つて居る。靜な夜である。ピッケルを抱えて歩き出す時、もう今迄の小心な氣持は影をひそめて、私達は唯、あの氷

に岩にと張り切つた登高欲に燃えて來る。林の中を電燈を頼りに歩いて行く時、踏み固めた雪路は雪の無い時より樂な位で、案外早く岩小舍へ來て了ふ。此邊で休憩して輪樏をつけた。見上げる北岳の頂上からは、うすいもやの樣な霧が湧いては消え、湧いては消えて居る。

「月に輪がかゝつてゐるぢやないか」と、仰向く小林の手にしたピツケルが月光に鈍く光つて居る。夢の樣な光だ。私達は又無言で歩き出した。雪は嫌なブレーカブルクラストだが、數回のラツセルの後なので左程に苦痛は感じない。交互に先頭になつてゆつくり〳〵と登つて行く。

十二月も半ばになれば日の出は目立つて遲くなる。もう出掛けてから大分時間もたつたと思ふ頃にも、東の空には曉の氣配さへ見えない。然し氷壁の下迄行つて待つた方がいゝだらうと、私達はやがて大樺澤と別れてバットレスへの急な雪面にラツセルを續けて行つた。間もなく明の明星が輝いて藥師の向ふの空が心持ち白くなる。そして私達が第四尾根の直下でビスケットをほうばる頃、ピンクに染まる峰々と共に、歡喜に滿ちたさわやかな朝の光があたりの雪面に踊つて、夜の神祕から解放された私達の胸にもすが〳〵しい空氣が飛び込んで來る。早速アンザイレンして氷壁だ。先づ小谷部が空身になつて先日來のステップを堀り出し乍ら登る。アイスハーケンが朝の空氣に小氣味よい響をたてゝ氷に喰ひ込んで行く。續いて私が登り、荷を上げ、小林が登る。之を二回繰り返して六十米の氷壁が終つた。テラスに立つとdガリーにつまつた雪が朝日にまぶしく輝いてゐる。然し雪崩は大丈夫らしい。これからが問題のトラヴアースなのだ。先日の工作で見込がついて居るので直ちに小谷部、小林、鷹野の順でアンザイレンしてトラヴアースにかゝる。先日手前の露岩に設けられたピトンへザイルを通し小谷部が第一段のバンドへ突當り此處に打つて置いたピトンと最初のピトンとの間に長い補助綱をつけ更にカラビナへザイルを通して下のバンドへする〳〵とアプザイレンして無事豫定の行動に成功。下のバンドを渡つて向ふ側の樺迄行き其處でジツヘルし、次に小林が渡る。最後に私が行くのだが下のバンドへのアプザイレンが終つた時だつた。ふと右手が輕くなつたと思つたとたん、大事なピツケルが何の豫告も無しにスウ

ツと下へ落ちて行く。「仕舞つた」と、思はず聲を出したが後の祭り。見れば何と言ふ事だ、ピッケルバンドが切れて手首に殘つて居る。斯な所でピッケルを落すなんて全く致命的である。私は思はず自分の準備の不注意を罵りたい氣になつた。然し最早どう仕様もない。私は手に殘つたハンマーをたよりに登る他に仕方は無いのである。

バンドのトラヴアースが終つて、岳樺の生えた急斜面を登りきるとぱつと前面が開けて、朝日の直射を受けた第三、第四のリッヂが氷雪に輝いて競ふ樣に突立つて見える。其處はCガリーの末端である。トラヴアスに成功したのでかなりゆつくりした氣持になりパンをかぢつたり、お茶を飲んだりした。幸ひ此の邊の雪もよく落付いて居て下層とのなじみもいゝので、前に考へて居た此のガリーの雪崩も先づ心配なさゝうである。九時五十分此處を出發して登高を續ける。相當深いラッセルを終つて尾根は右側から取付いた。此の邊は傾斜は相當あるが拳で雪をたゝき割ると下方の這松が摑めるので至極ジッヘルに登る事が出來る。六月に直登した岩峰は時間を思つて左に搦んで簡單にリッヂへ出る。天氣は非常によく風さへ無い。雪の狀態から考へても私達は又とないチャンスを摑んで了つたものだ。左を見ると「マッチ箱」の岩稜が立派に見える。右には遙か下の方に大樺の池が手鏡か何かの樣に見え、その傍にほんとに豆の樣に小舍がある。あそこから見て馬鹿に急に見える所に、今自分等がくつゝいてゐるのだと思ふとおかしな氣がした。

更に登つて行くとやがてリッヂが廣くなる所がある。此處が一寸悪かつた。之を過ぎると又少しラッセル。そして其の上が細いクラックになつて居て、この中段から右手の壁に卷いて出るのだが此處が悪い。六月にはさ程に思はなかつたが今度は相當だつた。手袋の手で下向のホールドをつまみ、アイゼンの一本のッアッケに全體重をかけてトラヴアース氣味に登るので、相當緊張して了ふ。之を越すと岩に小さな這松の混つた非常な急傾斜になるが、然し此處はホールドがあるからいゝ。下を見るとあの大きな大樺澤が足の間に小さく見える。それよりも此のバットレスの大觀が素晴しい。第三、第四を中心に幾つもの砲壘の樣な岩稜が氷に輝く逆層の壁を有つて大波の樣にもり上つて居る。全く典型的なバットレスだとつくゞ感心して了つた。仰げばもう頂上

も近い。尙もジツヘルしつゝ登高を續けると、間もなく東北尾根を望む大尾根となり此處から先はもう傾斜もゆるく、又ラツセルになる。國境主稜も直きだ。私達は胸をわく〳〵させ乍らザイルを引きづつて登つて行つた。間もなく夏途へ出る。其處からは走る樣に歩いて二時三十分北岳頂上へ着いたのだつた。

嬉しかつた。嬉しかつたのだと思ふ。それから一ケ月も經つた今日、私には、あの時の氣持をうまく表現する事は非常に難しい。あの時は私達はケルンを圍んで唯茫然として居た。想像して居た感激とか、歡喜とか言ふものとは凡そ似てもつかない樣な氣持だつたから。唯「やるべき事をやつた」「やれて了つた」と言ふ風にしか思はれなかつた。私達は三人、風陰の雪の上に腰を下して間の岳へ續く大まかな雪の尾根を眺め乍ら、默つて殘つたパンをかぢつてゐたのだつた。（一九三六、一、二一記）

一二、一四　曇雪　min—16°C　滯在

小林は痔が惡く休養。鷹部が昨日落したピツケルを拾ひに二人でdガリー氷壁を往復す。

（Ⅲ）鳳凰越え下山

大樺小舍から眺めると鳳凰の西面には雪も少い模樣なので、序いでに鳳凰越えを決意したのであつた。白鳳峠のガラ石の下から漸く積雪が現れ始め、天候も吹雪となつて來た。縱走路へ出ると雪は俄然深くラツセルに苦しむ。見掛けは這松等が雪面に出て居るが、這松そのものが相當丈が高いので雪の下に曲りくねつた幹に、足をとられて厄介千萬である。地藏賽の河原から砂走りにかけては、砂で黃色く着色された汚い雪が堅くクラストして居たが、甲州側の森林帶に入ると一段と積雪は多かつたが降りなのでラツセルも大して苦とならず乘鞍冷泉附近を思はす鳳凰小舍を過ぎ設備の惡い北御室に寒い〻〻一夜を明して翌十六日下山した。五色瀧邊から積雪はとたんに少くなり、又晩秋の世界に舞戻る。然し白糸、精進等の諸瀑は何れも見事に氷結して冬ならでは見られぬ美觀を呈して居た。青木湯迄來て本當にほつと安心し、日當りの緣臺で始めてサントリーの底をあけて祝杯を擧げたのであつた。（以上記錄欄八—一一頁參照）

（B） 第二次登攀報告（第一、第四尾根）

（パーティ）登攀隊……小谷部全助　森川眞三郎
サポート隊……望月達夫　日江井正巳　大塚武

（行動略記）

一九三六年十二月二十四日　晴　サポート隊三名、ポーター四名と共に大曾利より夜叉神峠迄ラッセル、荷上げ。
二十五日　晴　サポート隊、ポーター四名と共に、大曾利――蝮平
二十六日　晴　右のメムバーにて蝮平――釣尾根二〇〇〇米幕營（C・I）、同日人夫を解雇す。
二十七日　晴　登攀隊二名、ポーター一名と共に、甲府――蝮平、サポート隊、C・I へ荷物運搬並に上部ラッセル。
二十八日　晴　登攀隊　蝮平――C・I ポーターを解雇す。
サポート隊　C・I より北岳往復。
二十九日　晴　登攀隊　砂拂下迄一部荷上げ。
サポート隊　休養。大塚下山し二名となる。
三十日　晴　全員四名、C・I――二九五〇米ピーク（幕營C・II）
三十一日　吹雪　C・II滯在

一九三七年一月一日　曇疾風　滯在。
二日　曇　登攀隊　バットレス第一尾根完登。
サポート隊　間ノ岳往復。
三日　曇後晴　登攀隊　C・II滯在。

サポート隊　C・Ⅱ――蝮平。
四日　晴烈風　登攀隊　第四尾根偵察行。
　　サポート隊　蝮平――大曾利、歸京。
五日　晴後烈風　第四尾根完登。
六日　吹雪　C・Ⅱ――C・Ⅰ
七日　晴　C・Ⅰ滯在。
八日　晴　小谷部　C・Ⅰ――C・Ⅱ――C・Ⅰ
　　森川　C・Ⅰ――蝮平――C・Ⅰ　C・Ⅰ撤收――ビバーク。
九日　曇後雪　ビバーク地――蝮平――大曾利。
十日　晴　大曾利――甲府――歸京。

（Ⅰ）計畫準備

この計畫は第一次登攀以來の懸案で、夏山天幕を冬期用に改裝したり、純冬期用の天幕を設計注文したり等々、前々から準備に努めて居たが、十二月初旬奥又白で私が足首を骨折した爲出發出來るかどうか判らず、隨分パーティの者に迷惑をかけて了つた。それでもレントゲンをかけた結果、どうやら、接着して居るのでまだ痛みは可成殘つて居たが、在學中の最後的な冬山でもあるし、それにもましてあの輝かしいバットレスの氷雪の魅惑に堪りかねて、出發を決意したのであつた。本來は全員一緒に出發する事になつて居たが、大塚が年内に歸鄕せねばならぬと言ふので望月、日江井、大塚の三人からなるサポート隊は、十二月廿三日に先發してC・Ⅰを設置荷上げしておいて貰ふ樣にした。私の足は一日でも安靜にした方が良いので、登攀を目指す森川と私は三日遲れて廿六日に出發する事となつた。右の次第で行動が幾分變則的になつたのは止むを得なかつたが、一同の張切つた協力に依り無事所

期の目的を貫徹出來たのは吾々の此上ない歡びである。

この計畫は前に屢々述べた如き特殊な趣旨を含むもので、從つて準備等も出來るだけ遠征を假想して爲す樣に努めた。次に吾々が携行した食糧、器具並に之等の運搬等に就て簡單に述べておく。

食糧――大體の規準として部落や山麓に於ては三食共米食とし、天幕生活に這入つてからは調理上の單純化を計り、朝食はオートミール（一人一食1/6 罐量）にソーセージ若干及び乾ブドウ類位とし、晝は外で攝るものとしてコッペー（一人一食2/3本位）紅茶乃至コヽアに止め、夜だけは一日の不足を補ひ翌日の激しい登攀の爲、成可豪勢な米飯を攝る事にした。勿論米はといで乾したものを持參するのである。米食の副食物としては極めて單純化し味噌汁の外佃煮となめ味噌、ソーセージ位にしたが長期にわたる場合今少し變化を與へる必要を認めた。

以上の品々は總て食料品店に依賴して箱詰めにし、運搬の途中に於て小出し使用し得る樣、蝶番ひを以て開閉自由なる蓋を作らしめた。それから根據地に到着してから荷物の組換えを行ふ際使用する袋、罐等の持參も忘れてはならぬ事である。

厨爐並に燃料――スエーデン製ラディウス及び同形式の和製のもの各一個を持參したが、和製の方はC・Iで故障し爾後ラディウス一ケのみに賴つたが、パーティの分離を避けた爲結構間に合つた。これはガソリンも使用し得るが、取扱上の危險を慮つて燃料は全然石油とし、五ガロン罐を運び上げた爲毎日豐富に暖を取る事が出來、尙且三分の一以上餘らせて遺棄して來た程である。ラディウスと共に掃除具、修理具の携行も缺く可からざるものであつた。

諸器具――細い雜品は略して登攀具及び幕營具に就て一言する。登攀具は、塗油を完全にした三十米ザイル一本と二十米のもの一本、並に二十米の補助綱一本。ロックピトン約十本。アイスハーケン三本。カラビナール四ケ。ハムマー二ケであつた。蛇足の樣だが、北岳バットレスに於てピトンは缺く可からざる要具であり、又ピッケル・アイゼンの類は出發前鋭くといで行かねばならぬ。

次に天幕だが、C・Iは森林中なので夏用の屋根型六人用に底をつけ、入口を二重にして三ケ所にウイムパー式の支柱を入れると言ふ程度に改めただけだつたが十分用に足りた。たゞし二重張りにしなかつたので内側の結霜にはいさゝか閉口した。

C・IIは純冬期中に設計したもので保溫、防雪の點で大體申し分なかつたが、風に對して少し弱い樣であつた。即ち横斷面は三邊七尺の正三角形で横も七尺にし、兩側に三尺の出張りを設け入口では、一應この張出し内に這入つてよく雪など拂つてから、二重張りの絞り式入口を開けて内部に這入る樣に設計した。この爲降雪時の出入には非常に工合がよかつた。支柱は三ケ所にウイムパー式のものを入れ更に梁を通した。通風窓も外部に突出した圓筒狀のものを作り、内部から自由に絞れる樣に作つたが、之も工合は非常によかつた。この天幕は釣尾根のピークの如き風强く雪の少い高燥地にはあまり適當しなかつたが、中級程度の多雪地には非常に好適であつた事を附記する。

運搬――極く個人的な用具を除いた以上の諸器具、食料等は總て在京中適當に荷造りし甲府迄は鐵道のチツキを利用して送り、甲府からは隊員と共に自動車で大曾利青木久治郎方へ、更に其處からは芦安の人夫四名を使用して釣尾根C・I迄運ばしめ、それ以上は全然吾々のみで荷上げする事としたが大體うまく行つた。唯芦安の若い人夫は概して冬山に對する理解少く、北アルプスの島々や四谷あたりの積りでかゝると、とんだ支障を來す恐れがある。名ガイドを以て自認する名取治太郎さへも近代的な雪中幕營は全然知らぬ有樣故、彼等を奥地の天幕へ連れて行く事は種々困難を伴ふ。

（II）登　　行

一二、二四　晴　先發せる望月、大塚、日江井の三名は甲府より荷物と共に大曾利青木方へ到る。直ちに人夫と共に蝮平へ向ふ豫定なりしも人夫四名（清水義雄、同福長、同英長、名取治一）の冬山準備不完全なる爲その用意を青木久治郎に頼み、人夫同道夜叉神峠迄荷上げをなす。

一二、二五　快晴　青木方――蝮平小舍

先發の三名、人夫四名と共に出發。峠から白峯三山鮮かに眺めらる。ラツセルは下りのせいもあつて樂である。鮎差から暫く進みて氷の箇所ありたる爲、それより小舍迄アイゼンを着用す。小舍附近積雪約二尺。望月、治一を伴ひ釣尾根の道を偵察に赴くも夕闇迫りたる爲一時間にして戻る。溫度 min—8°C

一二、二六　曇後晴　蝮平——釣尾根二〇〇〇米 C・I

小屋より直ちにアイゼンを着け、人夫達も三本齒をはく。釣尾根の取付は急峻な上雪も相當あるのでやつかいな所だ。今日は池の附近迄行つて天幕を張り、人夫達はすぐ蝮平に下る豫定なので出來るだけがん張つた。が人夫達が行けないと云ふので仕方なく彼等が蝮平に下り得る時間をみて、可及的上方まで荷を運ばせ先は吾々で運搬する事にして二時近く人夫達をかへした。今迄も屢々人夫のだらしなさに内心穩かでなかつた吾々は、彼等と別れてすつかり落着いた。すぐ荷物の組替へを始め、どうしても今日中に C・I を張つて了はねばと準備して二時四十分出發。雪深くアイゼンを輪樏にかへ一時間で池の傍に出、それより一時間後に天幕を西南隅に張り終へた。min—20°C　この日小谷部、森川新宿夜行發。

一二、二七　晴　昨夜は大分冷えこんだ。起きて見るとマイナス二〇度。昨日の荷物の殘りを取りにラツセルのあとを辿る。三人で二度往復して全部運び了へた。大塚と日江井は上方のラツセルを一時間四十分ばかり爲し五時半天幕に戻る。明日もまだ天氣がもつらしいし、大塚は年内に歸鄕せねばならぬので、どうしても明日中に北岳に登り度いと言ふ。調子のよかつた石油厨爐（和製舊）がどうしたのか火力が弱くなつて、何時間も掃除したり等したが原因をさぐれず、望月徹夜をしてテルモス用の紅茶を作つたりした。（以上、一二、二四より二七日迄望月記）

登攀隊行動　甲府——蝮平

この日大曾利で名取治太郎を雇ひ、森川の荷少しと足の悪い私のもの全部を脊負はせる。夜叉神の登りで先發隊が歸したポータ四名が、雪を蹴たてゝおりて來るのに出逢ふ。蝮平では小舍下の岩小舍に泊る。外には冴えた月光が荒川岸の積雪を青白く照し、

昨冬シレイ澤岩小舎の月夜を想出させる。あの時とメンバーこそ變つて居るが野呂川の流れは悠久に、そして明月は幾百年も變らぬ美しい光を注いで轉變の人の世を慈しむ。さう言へばあの時も治太郎と泊り合せ同じ様な話――野村氏の遭難事件などを聞いたものだつた。

一二、二八　快晴　蝮平――C・I

治太郎は今日中に大曾利へ歸らねばならぬと云ふので、六貫匁程の荷を脊負はせてC・Iへ先發せしめ、私と森川は午前八時、アイゼンをつけて岩小舎を後にする。足は相變らず痛むが大した故障も起らず何とかバットレスも登れさうである。天氣も素晴しくよく荒川の彼方に純白の間の岳、農鳥がまぶしく照り映えて居る。先發隊のつけたラッセル途の爲、樂々とはかどり午後一時十分新雪の綿帽子を深々とかぶつたタンネを縫つて池のある平へ着く。今は一面雪に埋れたこの平の西南隅に吾等の第一天幕を見出した時は計畫成就の見透しがついた事と安心とで非常に嬉しかつた。望月、日江井、大塚の三名は今曉こゝから北岳へ向つて留守だ。吾々は早速荷を整理し、天幕の支柱を强めたり、傍に焚火を起したりして彼等を待つ。夕闇迫る頃三人歸幕。天候に惠まれて今日の北岳行は實によかつたとの事。五人天幕内で語る話は遲く迄盡きない。（今日の北岳行に關しては記錄欄五四頁參照の事）

一二、二九　快晴　C・I――砂拂下――C・I（荷上げ）

森川と私の二人で荷上げ。北岳へ行つた三人は休養。第二天幕用具、登攀具、食料の一部等十三貫許りを二人で分けて脊負子につけ九時半C・Iをあとにする。昨日既に十分ラッセルしてあるのでアイゼンのみで登る。屢々倒木をくゞつたり等せねばならず、大きな荷をかついでは仲々面倒臭い登りだ。三時二十分砂拂迄今一息と言ふ所の突起についたが、既に陽も間の岳近く傾き體も疲勞したので無理を避けて同四十分荷を置いて戻る。大塚は午後C・Iより下山の途につきパーティは四人となる。

一二、三〇　快晴　C・I――C・II

今日はC・Ⅱを設置して一擧に移動する日だ。午前三時起床。直ちに雪を融かしてオートミールを作り手早く食事を濟せて、銘々荷作りに忙殺される。平均して七貫匁はあつたらう。C・Ⅰに暫くの別れを告げて蝸牛の樣に遲々たる行進を始めたのは七時半。昨日荷を置いた所で一服し調子よく頑張る。砂拂の頭へ着いたのは一時四〇分。とたんに彼方に現れた北岳バットレスの銀姿は實に期待以上の壯大さですつかり感激して了ふ。突風はバラ〳〵と氷粒をたゝきつけて屢々目も開けられぬ位。寒さに悠々鑑賞も出來ず追はれる樣に先を急ぐ。もうこゝから釣尾根は大した登りもなく二、三の突起の彼方にキャンプ・サイトとすべき標高二九五〇米のピークが間近にもり上がつて居る。ピーク着三時十分。このサイトはピークの突端で風當り猛烈の爲雪は飛ばされて地肌を裸出し、薄い積雪は固くクラストして居た。暮れ易い冬の日に安閑とも出來ず早速天幕建設にかゝる。先づ堅くクラストした雪面を平にならし、天幕の内外呼應して支柱が通され、間もなく吾々の設計にかゝるC・Ⅱが張られたが、思つたよりも丈が高くこんな吹さらしの高燥地ではいさゝかどうかとも思つた。入口は南方間の岳に向ひ、北と西に雪塊で防風壁を假に設ける。一先づ大體の格好がついた所で望月、森川、日江井は先刻砂拂下に殘した殘餘の荷をとりに出發、四時五十分。私は一人天幕に殘つて二重張を取付けたりマットを敷いたり等天幕内の整理を爲す。照明をともしラディウスに點火すると天幕内はムツと暖くなり、氷雪の眞唯中に樂しい別天地を現出する。とつぷりと闇に包まれた七時近く荷物運搬の三人戻り、折から眞赤な月の出を山火事と間違へて大騒ぎしたりなど、愉快なエピソードをこしらへて賑かに入幕。明日は休養と云ふ事にして遲く迄C・Ⅱ初めての夜を樂しむ。

一二、三一　吹雪　C・Ⅱ滯在

夜の中に可成りの强風を伴つた吹雪となり、天幕のはためきが耳について安眠を妨げられた。あまり風が烈しく天雪のはためきがひどいので些か心配になり外へ出てテントの張綱を補强する。終日吹雪の咆哮は續き天幕の騒音で話もじつくり出來ず C・Ⅰの靜寂が懷しまれる。標高の高い爲か天幕内外の氣溫の差の激しい爲か、咽喉を害し咳がしきりに出る。

一、一　曇強風　C・Ⅱ滯在

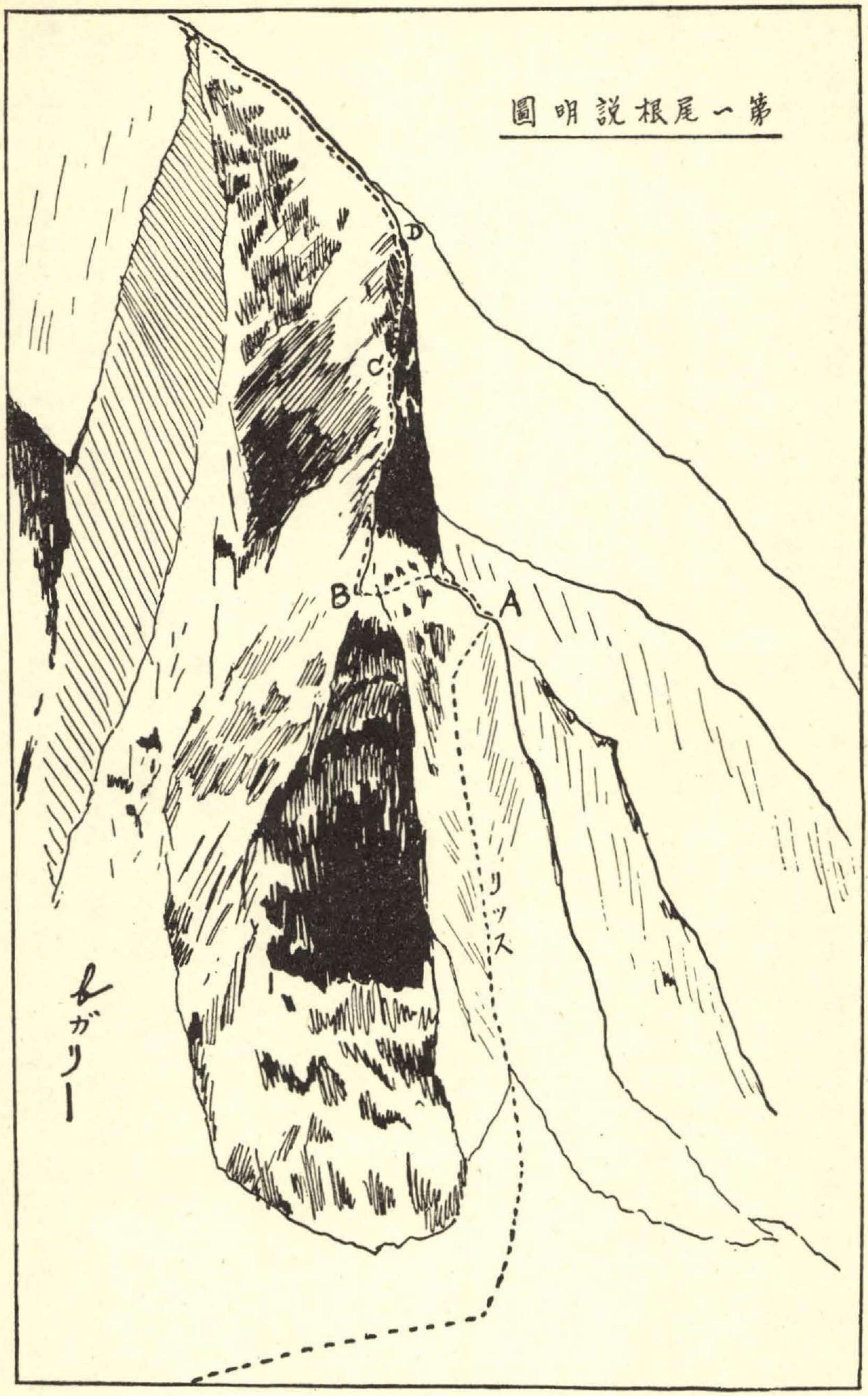
相變らず風烈しくサラ〳〵雪のあたる音もするので、又吹雪だらうと首を出して見ると吹雪はもう止んで唯積雪が飛ばされて居るだけだ。テントの張綱や入口の傍に突きさしたピッケル等には、恰も眞白な羽毛が一面にはえた樣にシュカブラが附着し、奇しくも麗はしい高山の裝ひを凝して居る。今日は目出度い正月だからと言ふので豪勢な食事をとり、ラディウスを圍んでソーセージの串燒などやり乍ら勝手な熱をふき放歌する。かうして居ると全く嚴冬の高峻地に居る樣な氣がしない。過ぎにし冬、鷹野や小林とあの寒い大樺小舍で震へた事などと較べると格段の違ひである。一應正月の宴も終へた頃天幕補强の爲外に出る。外は矢張り極地を想はす氷と雪の別世界で身を切る樣な寒風が吹き荒んで居る。防風壁を强化擴大したり便所の雪洞を堀つたりした。

一、二　曇　**バットレス第一尾根完登**（小谷部　森川）

間の岳　往復（望月　日江井）

三時起床。天候如何と首を出すと好い鹽梅に曇つては居るが、穩やかで雲の上には月が出て居るらしく、間の岳の雪稜がぼんやりと浮出して見える。夏場の經驗から第四尾根よりも第一尾根の方が容易だと思つたので、先づ今日は第一尾根をアタツクしやうと言ふ事に決めて居た。望月と日江井も間の岳へ向ふので一緒に仕度する。例の如き冬山のもの〳〵しい裝備を爲して六時C・Ⅱ發。直ちに落込コルへの惡い降りで最惡の所に固定綱を設けた。天幕から十五分位で最低コルへ達し間の岳行の二人と別れ森川と私はこゝでアイゼンの上から輪樏をつけて大樺澤を下降し始める、六時廿五分。雪は相當深くもぐつたが下りなので樂だ。心配した私の足も調子が好い。

岩壁直下着、八時。今度は雪多くbガリー下段の岩場もかなり上迄雪に埋つて居たので、こゝから取付く事にし輪樏をはずしてアンザイレンする。こゝでは森川がトップとなり愈々攻擊の第一歩にかゝる。こゝは下から仰ぐと易し相に見え、ザイルの伸びないのが齒がゆく感ぜられたが實際ぶつかつて見ると思つたより傾斜强く、氷の箇所もあつて手間どるのも無理はなかつた。取



第一 尾根說明圖

付から六十米位で草付上の雪面に達する。こゝから私がトップとなり、のしかゝる様な雪の堆積を切り崩し乍ら進む。第一尾根直下、四、五十度角度位の深雪斜面のトラヴアースに息をはずませ、漸く第一尾根の左に喰込むリツス下迄頑張つて其處の急な雪面をならして一服する。十時五分——廿分。このリツスの上部は氷化した堅雪の上に五寸程の新雪をかぶつて居ると云ふ狀態で、油斷するとスリツプしさうで馬鹿にならない。その上氷で掩はれた一米位の壁が露出して居たりなどして案外時間が掛り、リツス上端の支稜上に達したのは十二時十分だつた。(圖、A點)。この支稜は細く鋭い雪稜を爲して急激に第一尾根の右壁へ續いて居る。十二時卅分出發。A點から十米程ピツケルを突さし乍らこの雪稜を攀じると、雪面はそのまゝ二米程の壁を薄く被ふ樣になる。この壁のホールドは非常に惡いので薄い雪層を崩さぬ樣、極度に注意してピツケルとアイゼンのツアツケを利かせて突破。この壁の上は夏は一寸したテラスで直ぐ垂直の第一尾根右壁になつて居る。今はこのテラスも堅雪に埋れて急斜面を爲して居るが、ピツケルを突さしてパーテイの確保は出來る。念の爲に私はすぐ上の岩壁にピトンを試みたが、この邊の岩は非常に脆くて全然駄目だ。森川によく〳〵確保を賴んで第一尾根主稜へのトラヴアースにかゝる。このトラヴアースは脆岩でホールドも下向きで甚だ不安定な上、下部が落込んで恐しいので嫌な所なのである。今は積雪の爲この小さな名ばかりのバンドは全然無いと言つても好い狀態になつて了ひ露岩を散ばめた雪壁と化して居る。まるで垂直に見えて一寸怖氣づいたが丹念にピツケルを振つて大きくステツプを刻み、遲々とトラヴアースを續ける。僅々三十米位のトラヴアースに二時間の餘も費して了つた。B點着三時半。時間が遲い上に曇天なので夕方の樣で氣が急く。こゝから眺めた第四尾根は巨艦を横ざまにたてかけた如く實に立派だ。パンを嚙り直ちに出發。雪稜を僅か攀じると直ぐ岩場になる。このリツデは傾斜が急なのでホールドが氷雪で閉されて了ふ冬の登攀は、夏場では想像出來ぬ程惡くなつて居る。二ピツチと少しで吾々が最も心配して居た例のオーヴアーハングの岩稜(C點)へ達する。こゝは岩稜が双の樣に薄く且二米程全くオーヴアーハングして登高を阻んで居るのである。九月來た時も再三試みた末漸く突破した所で第一尾根の最難所である。夕闇がジリ〳〵と吾々を包み初めて來る。こんな所で日でも暮れやうものなら上へも下へも

戻れず、又ビバークさへも出來ない。私は決死の覺悟でこの壁にぶつかつて行つた。もう足の痛みなど全然感じない。先づ手を伸してオーバーハングの上端に近くがつちりとピトンを打込んでザイルを通すと共に之に捆まり、アイゼンのツアツケを岩に嚙ませて體を吊上げ、片手でピツケルを振つて更に上部の氷を碎いてホールドを作り、之を捆む片手に全體重をかけて頑張り、今打つたピトンへ膝をかける事が出來た。今一方の足でフツトホールドを求めたが、徒らにアイゼンが岩にきしるのみで見當らない。もう半ばこのオーヴアーハングを越した譯だが、この上の急なフエース狀の岩稜は前にもまして惡い。夏利用したクラツクは堅氷に閉されてホールドは皆無だ。然し幸ひピトンに適した岩なので、次々とピトンをたゝき込んで之に捆り、更にフツトホールドに利用して、着々と攀ぢ漸く岩場も終りD點の雪稜へピツケルをがつちりと突込んでホツト一息つく。ふり返るとフエースに總動員されたピトンを縫ふザイルが、電光形に張り切つて非常に印象的である。小さな雪のテラスを見付けて森川を確保して上げる。これから上の雪稜にはえらく急峻な箇所が屢々あつたが、這松を堀り出して捆まれた。もう可成腕が疲れて一々雪面を堀るのが實に辛い。やがて雪稜の傾斜も安全となる。日も完全に暮れたので懐中電燈をぶらさげて登る。乏しい光線に照し出される雪のナイフリツジを辿る氣持は惡場を終へた疲勞の爲か悲壯且暗膽たるものだつた。死の恐怖からやつと解放された歡喜も底にうずいて、暗い氣持を引立てる樣に私と森川は C・Ⅱ へ向つて大聲を張上げ度くなつたが、救助信號と間違はれてはと默した儘、試みに電燈をかざして見たりした。それからもアンザイレンした儘愼重にラツセルを續け北岳頂上へ着いたのは午後八時。二人で歡呼のヤツホーを闇に叫ぶと C・Ⅱ からもポツンと燈が現れて吾々に應える。もう釣尾根を下つて行けばよいのだが夜途と疲勞の爲矢張り愼重を重ね、C・Ⅱ へ戻つたのは十時も過ぎんとする頃であつた。早速熱い紅茶に暖い晩飯だ。望月、日江井の接待に感謝しつゝ十六時間の激しいアルバイトを想起し語り合つた。

尙この日の間の岳行は記錄欄五五頁參照され度し。

一、三　曇後晴　C・Ⅱ滯在休養

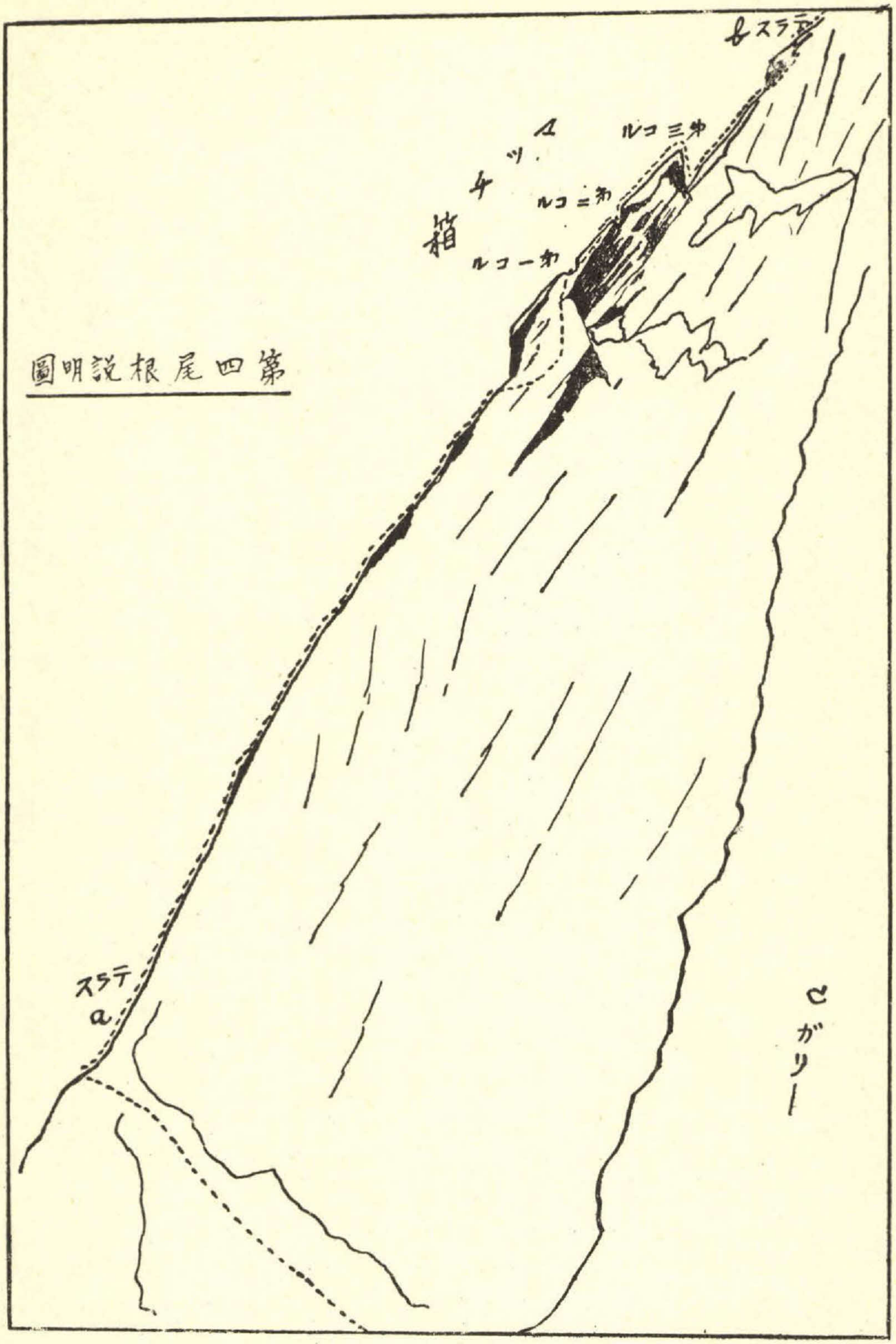
望月、日江井は下山の途につき今日からC・Ⅱは森川と私の二人きりとなる。午後から天候好轉して霧間に太陽さへ現れて來たので徒然なる儘に天幕の廻りを散歩し寫眞などをうつす。

一、四　晴烈風　第四尾根偵察行

すつかり晴れたが寒風が吹きまくり、バットレスも凄じい雪煙に霞み勝ちである。大樺澤も風で吹溜つてよくもぐる。吾々が岩壁下に近づいた頃、cガリーからは風のショックで物凄い乾燥雪崩が爆煙の樣に落下したが、下の大岩壁から蒙々と空中に散らされて了ふので、あまり恐しくなく氣安く見物出來た。cガリー下の岩壁根元から出るラビーネンツークには、絶えず粉雪がシャーシャーと流れ、吾々は奇異な思ひでこの雪流を徒渉して一昨日の如くbガリーより取付く。今度は左にトラバースしてcガリーに面する所迄ラッセルして戻る。これで第四尾根登攀の見通しもついたので、bガリーの難所にザイルや補助綱を固定して置いた。再び風で吹溜つた大樺澤のラッセルにうんざりしつゝ、釣尾根に歸りついた頃はもう夕方で尾根には猛烈な風がうなつて居た。ビークへ着いて見ると心配してた事が事實となつて現れ、吾々のC・Ⅱは慘めにも半ば倒壞して居る。第四尾根を登る迄は何としても此處に頑張らなければならぬので、吾々は氣を取なほして修理にいそしむ。折れた支柱をうまく利用して間もなく丈の低い天幕が打立てられ、どうやら平常通り納まつた。烈風はひう〳〵と物凄い音をたてゝ、天幕は今にも吹飛され相に狂飜する。

一、五　晴烈風　**第四尾根完登**

三時起床。風は殆ど止んで外は皎々たる月明である。暗い夜の空に青白く幻の樣に浮ぶ農鳥、間の岳。かくも素晴しい好晴に惠まれた事に感謝して張切つて天幕を出發したのは五時半。富士山のあたりが、かすかに白み始めた頃である。bガリー取付着七時。昨日固定したザイルのお陰で難なくこの第一の關門突破、cガリーに面した昨日の引返點へあつさり到着、七時半。陽光はバットレス全體をまぶしく照し始めた。cガリーの雪もよく落付いて些の不安もなくトラバース出來、愈々第四尾根の登りだ。今日のオーダーも小谷部、森川の順。第四尾根主稜のテラスa迄は所々ブッシュを交へた雪の斜面で、ステップを大きく刻んで



第四尾根説明圖

着實に進む。a點で八時廿分から五十分迄休み、ハンマー、ハーケンを腰につけ手袋を代えて之からの困難部に對する仕度をした。こゝから右にそゝり立つ第一尾根のプロフィルは實に凄い。

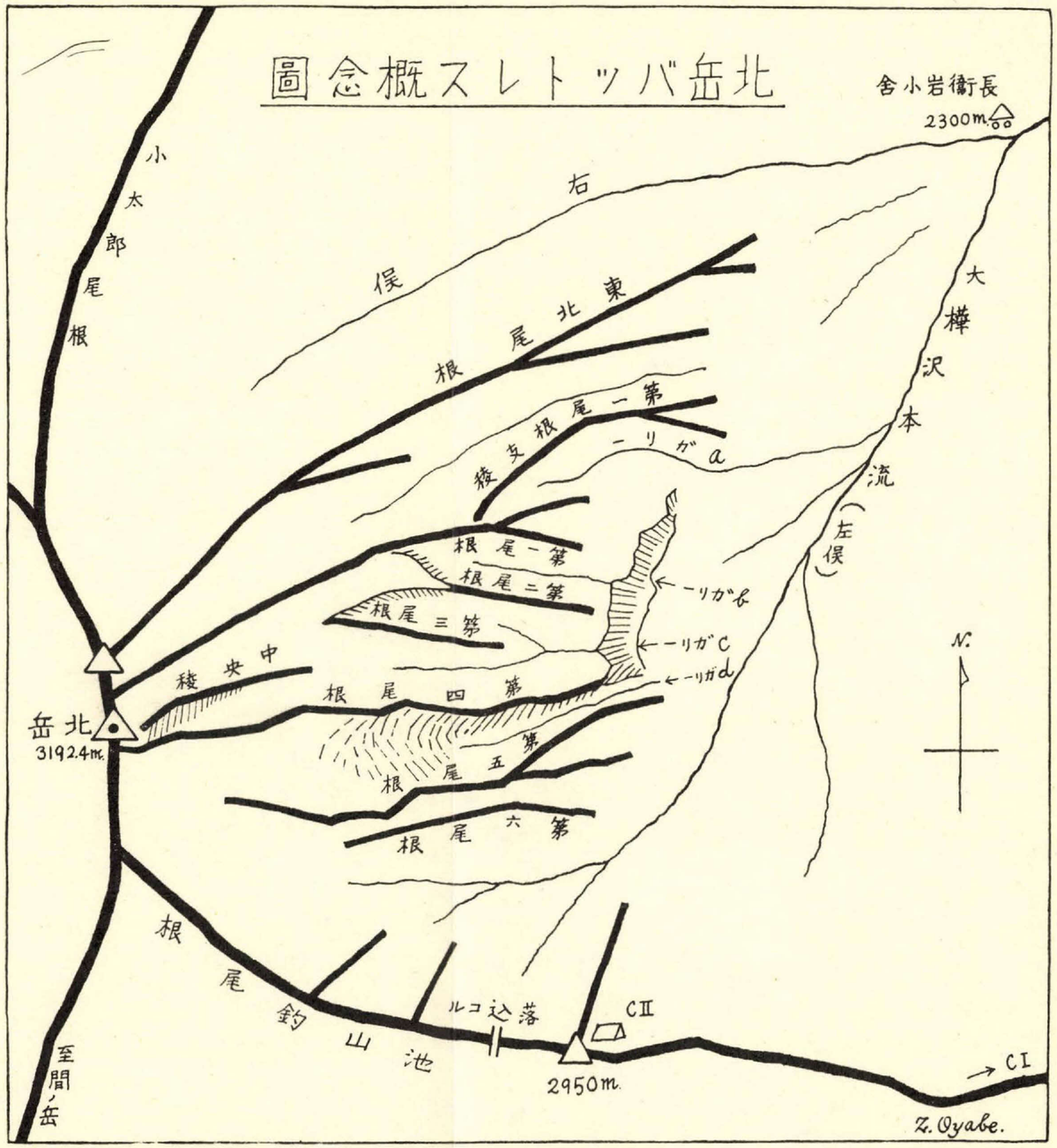
a點から上は一寸幅のある急な雪稜で一歩々々ステップを切つて攀じる。上部は極めて短少な這松を交へたスラブのフェース狀の所が多く、こんな所では二、三寸の雪殼を申譯的に被つて居るに過ぎず愼重な行動を必要とした。途中二回程露岩にピトンを打つて確保し、「マッチ箱」下端の壁にぶつかる、十時廿分。この壁の根元にピトンを打ち向つて右側へ卷く。この邊は七十度位の急傾斜で、すぐ下からぐつとコンヴエックスして目がくらみさうである。然し上部は比較的ゆるく雪も適當について居たので愼重丹念にステップを刻んで寸又寸と體をもち上げる。途中でザイルが伸び切つて丁ひ、私は體をぴたりと急な雪面にくつゝけうつ伏した儘肩で確保して森川に暫く上つて貰つたが、今から考へると冷汗ものであつた。森川も愼重を極めてやつて來たので、無事にこの難場を切拔け漸く待望のマッチ箱上に立つ事が出來た。第一コル着十一時半。この上は小さい乍ら困難な壁なので再び右斜面にステップを刻み上の稜へ出る。マッチ箱のナイフリッヂは雪を被つて綺麗な雪稜となり踏みにぢるのが惜しい樣な氣がする。間もなく問題の第二コルへ來た、十二時。この上壁は全然スラブで秋には極どいフリクションで辛ふじて攀じ登つた所なのである。冬にこんな事は出來ぬから隨分心配して來たものであつたが、有難い事にコルの積雪が薄く壁の右側に這ひ上つてリッヂの雪稜に續いて居る。而して雪も手頃に緊つて居るのだ。こゝは第一尾根のオーバーハングと同樣、第四尾根の最難關なので登攀可能の見通しのついた吾々の喜びは、この上もないものであつた。第二コル發十二時廿分。昨秋打つておいたピトンが出て居たので之にザイルを通すと、早速この雪面にステップを刻み、無事突破して再び美しい雪のリッヂへ出る。この邊からバットレス一帶は實に見事で、殊に黑々と逆層の岩壁を露出した中央稜などの惡絕無双ぶりには驚歎して了ふ。暫くして吾々は愈々第三コルへ臨む突端へ來た、一時。コル迄はアプザイレンせねばならぬので、突端の雪をピッケルで堀つてピンを出さなくてはならない。こんな鋭い突端で自分の乘つて居る雪を切り崩すのは危險極りない話だ。ボツクリ割れて落ちる雪に引ずり込まれ相だ。それで

もどうやらピンを堀出し捨繩をつけ、念の爲更にピトンで之を確保してする〳〵と第三コルへ降り立つ事が出來た、一時廿五分。もう上部はずつと雪ばかりで大した事はない。殆んど連續に登り巨岩を越したテラスbを過ぎてやれ〳〵と息を抜く、二時半—四十分。もう惡場は全然なく傾斜の比較的緩い斜面を、斜め左にトラバース氣味に登れば北岳への主稜である。雪深く腰位迄もぐるので輪樏をつける。自重して尙ザイルは結んだ儘行く。太陽は主稜に張出した雪庇の彼方に沈み、雪庇から絕えず舞上る雪煙を金色に照り輝かせて、コバルトブルーの大空と神祕的なコントラストをなして居る。國境主稜に出ると俄然輝かしい西日と猛烈な寒風に見舞はれ、とたんに天地が違つた樣な感じだつた。三時五十分。頂上着四時。頂上の社は全く埋り、傍の劍が僅かに切尖を雪上に出して居る。仙丈、木曾駒方面の眺望が素的だつたが極寒の吹さらしに落付いても居られず一路C・Ⅱへ向ふ。烈風は益々勢を强めて落込のコル邊りでは吹飛され相で、突風の合間にしか動けぬ有樣に又しても天幕が心配になつて來た。五時ピークへよろめき出ると果して今度こそ天幕は徹底的にやられて、雪上に殘骸を横たへて居るのだ。人間さへ倒されるこの風では無理もない。防風壁もめちや〳〵に吹き崩されて見るかげもない有樣。再び修理しやうと試みたが、あまりにも風が强く支柱も完膚なき迄に破損して何とも手のつけ樣もなく、まゝよと許り吾々は靴の儘潰れた天幕に分け入り、シュラフザックにもぐり込んでパンを嚙り〳〵泣き寢入を決めこんで了つた。所期の目的も完全に果したし、C・Ⅱもこれでおさらばだ。

風の怒號は物凄く山鳴りを伴つて居るが、天幕は之以上つぶれる心配はなく、疲勞で何時しか眠に落ちて了つた。

一、六　吹雪　C・Ⅱ(撤收)——C・Ⅰ

相變らず風は執念深く咆哮を續け惡い事には吹雪の音さへ聞える。天幕の廻りにはもう可成吹溜つて、內張の布地も濕氣を含んで來た。今日は萬難を排してもC・Ⅰへ戻らなければならぬ。幸ひ段々靜まりさうなので天幕をかぶつた儘、各自荷物を整へ外へ飛出す。外は一面に霧のヴェールに包まれて居り、冷い雪片がサラ〳〵と頰を亂打する。後始末に何かと時間を喰ひ、懷しい此のピークを出たのは正午。あまりに荷が勝ちすぎて無理なのでピークのすぐ下へ一部の荷を殘す。下の森林帶にも可成り雪が積


北岳バットレス概念圖
舍小岩衛長
2300m
小太郎尾根
右俣
東北尾根
第一尾根支稜
ーリガa
大樺沢本流
(左俣)
第一尾根
第二尾根
第三尾根
ーリガb
ーリガc
ーリガd
中央稜
第四尾根
第五尾根
第六尾根
北岳
3192.4m
N.
釣山池尾根
ルコ込落
2950m
CII
CI
至間ノ岳
Z. Oyabe.

んで前のラツセルは殆んど判らぬ。登る時つけた赤い布片やナタ目で大して迷ふ事もなく、靜謐そのものと云つたC・Iに着いたのは夕闇迫る五時であつた。昨夜來の降雪で天幕は眞白に化粧され、あたりの木々にも美しい木花を咲かせて居る。烈風に吹雪に喧騒を極めたC・IIから美しい神祕の森に圍まれたこの靜寂境の天幕へ歸ると、吾々の氣分も漸く冥想的になり今は過ぎにし登攀を詩的に美化して、味ひ樂しむのであつた。

一、七　晴　C・I滯在休養

一、八　晴　C・I——C・IIサイト（小谷部）（森川）——C・I撤收——ビバーク

C・I——蝮平

明方猛烈に寒く、零下廿度を降つたらしい（寒暖計はC・IIで破損して正確には判らないが）。私は一昨日上へ殘した荷をとりに、森川は蝮平へ荷下しに二手に分れ、再び此處で落合つてC・Iを撤收し蝮平へ下る豫定だつたが、案外時間が掛つて天幕撤收して下ると間もなく日が暮れ、釣尾根の夜道は危險だし、もつと惡い事に唯一の電燈を落して了つたので止むなくビバーク。防寒具類を先に蝮平へ下して了つたので、二人天幕をかぶり中でラデイウスをたいて半眠半醒で一夜を過す。

一、九　曇後雪　ビバーク地——蝮平——大曾利

尾根を下り切ると矢庭に荒川の河原にうつぶして、冷い天然の清水を心ゆく許り飲んだ。蝮平の岩小舍に天幕、登攀具等約十三貫餘の荷物を殘し輕身になつて大曾利へ向ふ。夜叉神の途中から降雪盛んになりどん〳〵積る。大曾利近くで闇に追付かれ降りしきるボタン雪の中を、まるで恐しい所から逃げて來たかの樣な氣持と、凱旋將軍の樣な氣持を取まぜた樣な妙な氣持で、青木方の戸をたゝいた。青木方では吾々の歸りが豫定よりも遲いので非常に心配し、もう一日待つて戻らなかつたら東京へ打電して遭難手續をとる所だつたさうだ。

一、一〇　晴時々曇　大曾利——甲府　歸京。

——了——

三月の鹿島槍荒澤奥壁

小谷部全助

一、計　畫
二、荒澤奥壁に關して
三、登行報告
　Ⅰ裝　備
　Ⅱ會　計
　Ⅲ紀　行

一、計　畫

吾々一橋山岳部は穂高涸澤に於る全員合宿に、或ひは新しい形式による冬の北岳行等に於て、個人的並に團體的に貴重な經驗を積んだ。而して世を擧げてヒマラヤ謳歌の潮流にも拘らず、默々として登攀能力、團體精神の涵養に努め、內容薄弱なるジャーナリズムを排して、人と人との和親の裡に、超然たる大自然を讃美し、かつ詠歎のみによる退歩を警戒しつゝ鋭意アルピニズムの末流を奉じて來た次第であつた。

これ等の經驗を出來得る限り生かして、學生として長期の休暇を得べき三月には全員を以て意義のある登行を試み度いと言ふ希望は、兼てからあつたのである。即ちエキスパートに對する意義とビギナー養成並に全員合宿的な氣分とを混然折衷せしめた

鹿島槍荒澤奥壁　　小谷部全助

如き登山を心に畫いて居たのである。

其處で最初は丁度穂高小舍が未建設だつたので、先づ德澤を根據にして此處よりビギナーを一次サポートとして奥又白の池にCⅠを設け、更に二次サポート隊によつてCⅡを前穂高頂上に、三次サポートによつてCⅢを奥穂頂上に、CⅢ宿泊のメンバーをサポートせしめて登攀隊のみ涸澤コルのCⅣに前進して、最後に瀧谷の最困難部をアタツクしやうと言ふ大計畫をたてたのであつた。即ち本邦登山界は從來の如き意味の登山に於て殆んど行詰りを來し、最早積雪期すら初登攀の望み難くなつた今日、客體たる山岳そのものとは幾分離れて登山の内容、方法或ひは登攀のを強く表面に浮び出させる以外、限られたる本邦山岳に於て實踐アルピニズムの發展を望めなくなつて來たとも言ふ事が出來やう。

かくの如き意味から從來の考へ方に依ればアブノーマルとも見られる樣な大計畫を打建て、登攀そのものゝ大いさ困難さを故意に增大せしめて、より高峻なる海外遠征のまゝならぬ憂さをかすかに晴すと共に、熟練の程度に應じて各天幕より各自手頃の登攀にいそしまんとした次第であつた。

從つて穂高と言ふ山岳そのものが唯一最强の動因ではなく、唯以上のファクターがよく揃つて居た爲に決められたに過ぎず、この目的にさへ適ふならば敢て場所は劒でも後立山でも或ひは富士でも差支えはなかつたのである。かう言ふ譯で新しい試みたる穂高計畫が決められ、之をプリントに刷つたり器具の準備を初めて居る間に、家事の都合とか體の調子が悪いとか色々な理由で不參加を申出る者が續出し、遂にはたつた七名に激減して了つた爲涙を呑んで中止し、この位の人數並にメンバーの素質に適合する程度に登山の大さを縮小して、扨何處が好いかと物色した所、吾々が以前から關心を有つて居た鹿島槍がこゝに取擧げられた譯なのであつた。即ち積雪期未登攀の荒澤奥壁をねらふ事になつたのである。

從つて北岳バツトレス行と同樣、本邦登山史に於る殆んど終末的な積雪期初登攀を目指すと同時に轉換期に於ける色彩を多分に含み、更にスキー合宿の効果も期待すると言ふ色々な條件を具備せしめんとする意圖もあつて、結局遠見尾根から極地法に依

つてアタツクする事に決定したのである。勿論登行の擴大化の爲に遠見小舍は全く無きものと假定して終始吾々の天幕のみに頼り、遠見小舍邊に設置する第一天幕でスキー合宿を行ひ、爾後漸次根據を進めて最後に天狗尾根二三四〇米の第三天幕から奥壁をねらひ、サポート隊は大遠見上の第二天幕を根據として五龍岳等に登ると言ふ風に計畫をたてたのであつた。

二、荒澤奥壁に關して

鹿島槍東面に喰込む荒澤北俣（「針葉樹八號」には右俣と記せるもの）の奥壁が如何に峻險豪壯であるかと云ふ事は、少く共大學山岳部として知らぬものはあるまいと思ふ。

後立山一帶の積雪期登攀が近年の如く殷賑を極め、文明の波が雲海を突破して雪の山頂に漂ふて居る今日、そして猫も杓子もヒマラヤ〳〵と恰も本邦山岳をマスターし切つたオーソリティーの如くにうそぶく今日この頃、今は殘り少き處女岩壁の牙城を高く安曇平の彼方に聳立せしめて虚飾と安逸の世相をせゝら笑ふて居るのであつた。

荒澤の地形に關してはこの方面に近年活躍を續けられた浪高山岳部の方達による詳細なる報告が「關西學聯報告、第七號」に掲載されてある外、「針葉樹、第八號」に私が十一月の偵察を記し、又本書記錄欄二八頁には五月北稜を完登した際の報告もある故、徒らに屋上屋を構へるの勞を省略する。積雪期に關する説明としても隨時登攀報告の内に於て述べておくから、寫眞並に附圖參照の上宜しく御賢察を乞ふ次第である。

次に荒澤に關する登攀史の如きものに就ても、同じく「學聯報告、七號」に殆んど餘す所なく報告されてある故、こゝでは比較的直接に奥壁登攀に關するものゝみを簡單にピツクアツプして見る。

先づ、登攀とは直接關係はなかつたかも知れないが、兎も角この奥壁を初めて見付けられたのは矢張り關西の方々であつた。

然し眞劍に北俣奥壁の登攀を志して這入つたのは一九三四年十一月、當部の森脇と私を以て嚆矢とするのではないかと思ふ。その後一九三五年七月、遂に浪高山岳部の今西、木村兩氏により南稜が、そして同じく小林勘次郎、松井兩氏によつて北稜が初登攀されたのである。この時の所要時間は取付から荒澤の頭迄、南稜が八時間十五分、北稜が九時間四十五分であつた。その後、未だ全然右の報告に接しなかつた私と森川は積雪期の準備を兼ねて一九三六年五月、北稜の登攀に成功。この時の所要時間は八時間五十五分であつた。

次に積雪期の登攀を目指したものとして、一九三六年一月浪高先輩の方達が荒澤から天狗尾根の下方へ天幕を張つて偵察に入られたが、（「學聯報告、七號」參照）直接登攀を目的としたものとしては立教大學山岳部の方達が始めてゞ、矢張り同じ頃、極地法による天狗尾根登行を爲した際に同大學のパーティによつて荒澤奥壁が試みられたが失敗に終つたとの由。（「日本山岳會々報、五四號」參照）同じ年の春再び浪高の方々は今度は東尾根一ノ澤頭下に天幕を設けて奥壁を目指したが、この時も亦偵察行に終つたとの事である。そして一九三六年から七年へかけての冬期にも奥壁は人を寄せつけず、かくして一九三七年の三月になり、北岳バットレスで腕をみがいた吾々の周到なる計畫の下に悪天候に拘らず一擧にして北稜を完登して了つたのである。尙同じ頃矢張り奥壁を目指して浪高山岳部の方達が鹿島から這入り天狗尾根の下方へ天幕を張つて居られたが、無慘なアクシデントを惹起して計畫の挫折された事は誠にお氣の毒な次第であつた。

三、登　行　報　告

前述した如くこの行は故意に登攀内容を擴大し、且雪上幕營に於るスキー合宿をも兼ねて居るものであつて、部が或程度迄隆盛を保ち得るならば、最後の登攀の程度は兎も角として、かくの如く經驗者、初心者を網羅した幕營合宿の形式を採る事は登山の進歩の上からも、又吾々として重大關心事たる財政の上から言つても甚だ策を得たるものゝ一つたる事を確信するが故に、參

考の爲、紀行的な報告の前に裝備、會計に就て些か報告して置く積りである

I 裝　備

純個人用具を除いた一切を次に羅列、說明する。

a 器　具

（天幕）天幕、內張り、張綱、支柱、杭各三組

北岳釣尾根第二天幕に使用した純冬期用（二三頁參照）一ケ。及び冬期用に改裝せる三人用、六人用各一ケ。

改裝法は先づ、入口を絞り式にして底をつけ、通風筒を二ケ乃至三ケ宛作り內側へ二重張りを設ける。而して支柱は頑丈なウイムパー式のを兩端二ケ所に入れ、天幕の外側には風及び積雪による壓迫を輕減する爲隨所に引張りの綱を設けた。

（シート類）ゴム引完全防水グランドシーツ三枚、普通防水グランドシーツ若干、カポック及びコルクマット七ケ

長期の雪上幕營、殊に春期に於てゴム引シートの効果は絕大であつた。ゴム引のみで水分は上らぬが熱を傳える爲底が凹む事は免れぬ。之を防ぐには出來得ればブッシュの如きを最下部に敷く事が有効である。それから普通の防水シートは包裝に用ひたり、下へ敷いたり、或ひは食事の時など之を敷くと不用意に水をこぼしたりした場合に慌てないで濟む。

（幕營附隨具）スコップ三ケ、針金、細引類若干、ナタ二ケ、鋸一ケ、象足三足

（炊事暖房具）石油コンロ、スエーデン製ラディウス一ケ、和製一ケ、石油小出用一ガロン鑵二ケ、一升五合焚大鍋一ケ、一升焚鍋二ケ、コッヘル（鍋のみ）四ケ、ヤカン二ケ、その他食器

（照　明　具）石油ランプ一ケ、太ローソク三十本

（燃　料）石油大鑵（約五ガロン）一ケ

（雜　品）藥品類、レザーオイル、ワセリン等

（登攀具）二十米ザイル二本、ハンマー二ケ、ピトン十ケ、カラビナー四ケ、捨縄一ケ

b 食糧

この大綱は前章北岳バットレス第二次登攀の際に同じ（二二頁參照）即ち大體の内容次の如し。

一、朝……オートミール（ミルク、砂糖）ソーセージ、コヽア、みかん、乾果物

二、晝……パン（コッペー）、バター、ジャム、ソーセージ、紅茶

三、夜……米飯、味噌汁（ネギ、ワカメ、フ等）、コンビーフ、ハヤシ、カレー、漬物、佃煮、ナメ味噌等

右のものを大體個人の必要量、豫定回數等から全體を算出したものを次に示すが結果は甚だ良好で何等不足は感じなかつた。勿論萬一を慮つて豫定よりも若干宛増量して計算した事は言ふ迄もない。この表は記帳不充分であつた爲、甚だ杜撰ではあるが參考にはなると思ふ。

種別	伸定豫回數	品目	値段又は數量
朝及夜食（米）	約108回	とぎ米	(2斗8升)
		味噌	¥1.50（二貫欠）
		佃煮ナメ味噌	.00
		コンビーフ	1.50（三ケ）
		カレーハヤシの素	1.00
		野菜汁の實	2.40
		カツオブシ	（2本）
晝食（パン）	約96回	コッペー	6.00（60本）
		バター	3.25
		ジャム	2.20
朝食（オーツ）	約75回	オートミル	6.00（12罐）
		粉ミルク	3.00（2罐）
		粉砂糖	1.16
		ソーセージ	7.20（72本）
		食鹽	20
嗜好品		コヽア紅茶	1.95
		角砂糖	（6箱）
		菓子	（若干量）
		みかん	（一箱）

以上の裝備は何れも出發前嚴重に荷造りを爲し、食糧品の中途にての小出し使用を便ならしめる爲、箱には矢張り開閉自在の蓋を附す。而て切符通用期間の許す範圍内で早くから全員切符を買つて、以上の諸荷物を神城村下川宅へチツキ配達で發送する事は從來の如し。神城から遠見小舍迄は「物貨」（貫當り二〇錢）で上げる如く手續を取り、それ以上は全然吾々のパーティのみで荷上げする事とした。右の結果は非常に順調にゆき豫定通り行動出來た。

Ⅱ 會計

個人的な汽車賃等を除いた全體としての收支を簡單に示す。

（收）		（支）	
メンバー七名より徵集	¥ 60.00	食料購入	42.13
部費より補助	10.00	燃料	5.50
		臨時器具代	1.50
		チツキ代	.70
		荷物運賃上下費	.20
		〃	9.24
		雜費	4.57
			6. 6
	70.00		70.00

註、右支出中には天幕の改善費等は含まない

今、個人負擔を考へて見ると、一般費とした上記の徵集金約十圓の他に必要なものは神城迄の往復汽車賃及び途中の極く僅少な雜費位のもので、結局一人十八日間も北アルプスに滯在して一切で廿圓にも足らぬと言ふ驚く程の安い費用で濟んだ譯である。但し米とかその他各家庭から持寄れるものは若干犧牲をまつたが、勿論問題になる程の額ではない。

總て東京仕込の優秀な食糧とカンフアタブルな天幕とで雪山の明け暮れはいとも樂しく、而も普通人の想像も及ばぬ程低廉に過し得たのである。

Ⅲ 紀行

（パーテイ）第一次サポート隊……小林重吉　鷲崎雄四郎　宮城恭一
第二次サポート隊……森脇芳之　大塚武
登攀隊……小谷部全助　森川眞三郎

（行動略記）

一九三七年三月　十五日　半晴　神城――遠見尾根一六二〇米CⅠ
十六日　薄曇霧　CⅠ滯在　スキー練習
十七日　吹雪烈風　CⅠ滯在
十八日　吹雪　小遠見下迄一部荷上げ　スキー練習
十九日　小雪後晴　CⅠ滯在　スキー練習
二十日　晴後小雪　CⅠ――大遠見上二二〇〇米CⅡ　一次サポート隊CⅠへ戻る
二十一日　快晴後稍曇　荷物運搬、一次サポート隊CⅠより下山
二十二日　快晴　CⅡ――天狗尾根二三四〇米ピークCⅢ、二次サポート隊CⅡへ戻る、浪高生遭難あり救援に兩隊共手傳ふ
二十三日　晴　CⅢ　滯在
CⅡ遭難事件の爲シラタケ出合往復
二十四日　吹雪後晴　CⅢ、CⅡ共に滯在
二十五日　二十六日　吹雪　兩天幕滯在
二十七日　晴烈風　CⅡ、CⅢ滯在
二十八日　快晴　CⅢ――アラ澤奥壁登攀ビバーク　CⅡ五龍岳往復
二十九日　吹雪　登攀隊CⅢへ歸幕　CⅡ滯在
三十日　小雪後半晴　CⅢ、CⅡ共に滯在
三十一日　半晴　CⅢ――CⅡ
四月一日　晴後雪　CⅡ――CⅠ――神城

三、一五　半晴　神城下川宅――遠見小舍上第一天幕

諸荷物、食糧の準備、發送等々。出發前の慌だしい焦々した氣分も汽車に乘込んで了ふとサラリと晴れて、早くも樂しき雪山の生活を夢見る。だが近頃登る山が尖鋭になつて來たせいかこの儘懷しい東京も再び見られぬのではなからうか、何とか無事目的を果して歸り度いものだなどと胸奥深く心配を意識する樣になつた。吾々が行ふ山登りをスポーツと言ふなら、かゝるスポーツ程直接生命の安否に關するものは又とないであらう。

前もつて發送した荷物の他に吾々持參のものが可成に多く、松本驛の乘換え等には全員まるで罹災民の避難よろしくと云つた態。神城では一先づ下川宅へ落付いて汽車の疲れを休める。前もつて送つた荷物は既に悉く遠見小舍へ運搬したと言ふ。更に人夫を一名雇ひ十一時半出發。

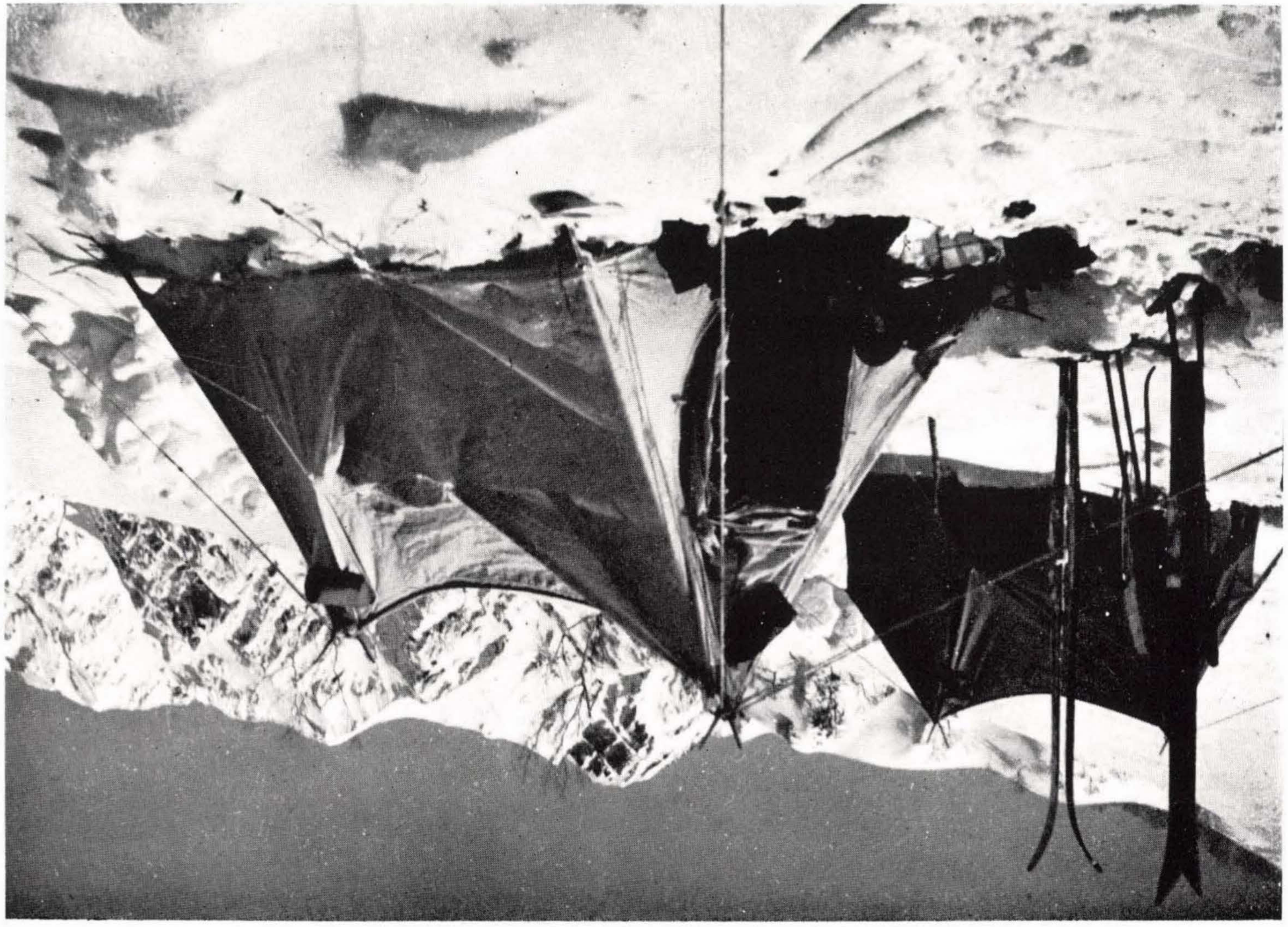
線路から半町程で一面の雪となる。遠見小舍迄は人夫の往復が繁く固い踏跡あり、スキーはトラーゲンして登る。小舍着四時。附近の積雪約二米。スキーには好適の所だ。早速小舍へ屆いた荷をほどき、小舍の上部へ吾々の根據地たる第一天幕を設ける。一應仕事を濟せて皆が落付く頃、雪山の第一夜は靜かに吾等の天幕に訪れ、ラムプを圍んで歌ひ語る種は盡きない。

三、一六　半晴霧深し　C I 滯在

荷上の準備をしたが、あまり霧が深いので中止し、一同天幕の近所でスキー練習をして暮す。今日も氣温高くザラメ雪で滑降にはもつてこいの狀態。午後關西學院の方々小舍へ來る。今日は森脇がやつて來るので三人用天幕を一ケ增設。六時近く腹を減らして森脇到着。同勢七人車座になつて、今晩は美味いハヤシライスにソーセージの丸燒等々、更に紅茶に煙草が續き、まるで溫泉あたりの合宿と大差ない氣持である。やがて「天氣が惡くなり相な話」さへ盛に飛出す。

三、一七　吹雪强風　C I 滯在

まさか昨夜騷ぎ過ぎた爲でもあるまいが、夜の中に山はすつかり怒つて外は白蒙々の吹雪だ。氣溫もぐんと降つて昨日迄の駘



遠 見 尾 根 C 1　　大 塚 武

蕩たる春山は忽ち嚴冬の峻烈さに早變りして、サノ〳〵と天幕を打つ粉雪のリズムも何となく身を引緊める樣。隣りの天幕に寢た三人は、たつた一間位の距離を大騒ぎして飯を食べにやつて來る。それでも飯が濟むと「象足」などゝかけて吹雪をついて小舍へ遊びに行くのだ。森脇、森川、大塚はこの天氣にも拘らずスキーに餘念がない。やがて雪達磨よろしくの格好で練習組が小舍へ戻るとストーヴを圍んで一しきり馬鹿話に花を咲かせる。吹雪は益々募り、夕闇に包まれた頃天幕へ歸つたが、寒氣は激しいし吹雪は息もつまる程猛烈だし、おかしな話だがすぐ鼻先の天幕迄えらく辛い思ひをして了つた。それでも皆天幕におさまつてラディウスの青火を圍むと、まるで外とは異つたなごやかな雰圍氣がかもし出されて來る。張綱はヒユウ〳〵と物凄く唸り天幕のはためきが烈しい。このはためきにつれて煙草の煙が右左に戸惑ひするのも面白い。この猛吹雪に隣の天幕へ寢に歸る三人は又しても實際辛さうに戻つて行く。

三、一八　吹雪　CI滯在　一部荷上げ

朝の内やゝ好轉したので宮城をCIに留守させて皆で荷上げに出發したが、小遠見へも着かぬ内に再び雪が舞ひ始めて來たので尾根上の顯著な岳樺の下に置いて戻る。霧さへ卷いて視界を奪はれたので一同散らぬ樣ステムを强くかけてかたまつて滑降、感が當つて灰色の幕を破つて突然大きく遠見小舍が現れた時はオツと一安心した。吾々は雪まみれになつた序でに小舍の附近でスキー練習をする。素晴しいパウダーで愉快に滑れた。

三、一九　小雪後晴　CI滯在

朝一寸首を出して見ると相變らず雪がチラ〳〵降つて居るのでごろりと寢こんで了ふ。スキー練習過度で皆一樣にぐつたりとして惰眠を貪り、本當に起き出した頃はもう晝近くなつて居た。妙に明るいので天幕を開くと久し振りに新鮮な陽光が目を射たのにはがつかりして了ふ。關學の人達は皆荷上げに出發したさうだ。天氣の惡い日に荷上げして、こんな快晴に滯在なんて凡そ愚の骨頂だが、食糧も十分あるし一日位遊んでも大した事はあるまいと言ふので又スキーに熱中する。すつかり興が乘つて暗

くなつても天幕へ戻らうとしない。何だかこれからの前進さへ覺つかなく感ぜられる程吾々は落付いて遊んで了つたものだ。幸ひ明日も晴天らしいので一同氣を引緊めて一度にCⅡへ移轉して了はうと覺悟を決める。

三、二〇　晴後小雪　CⅠ——大遠見上CⅡ

早曉の內に飯を濟ませ、各人荷物の整理、分擔にいそしむ。三人用天幕はCⅢに使用する故たゝんで荷上げする事とし、こゝへは六人用一ケのみ殘す。シールをつけて一同CⅠを出發したのは七時五十分。十八日に荷を置いた所で一休みして、當座に必要なものゝみの組換えを行ひ一部を又殘す。大遠見の一つ上のピーク二、二〇〇米の頂き着十一時四十分。こゝにCⅡとして此の冬北岳の第二キャムプに使用した天幕を張る。前から霧がうるさかつたが雪さへチラ〳〵舞ひ始めて來たので、一次サポートの役目を果した小林　鷲崎　宮城の三人はこゝで腹ごしらへをするや急いでCⅠへ戻る。

此の天幕は悠々立てる程丈が高く、七人は十分泊れる大さなので四人では實に廣々して感じが好い。こゝも尾根の眞上で風當りが强いので防風壁を築く。薄い雲霧を通してCⅢを設置すべき天狗のピークもそれと指點出來るが馬鹿に遠く見える。

三、二一　快晴後曇　CⅡより小遠見下往復、荷上げ

後立山連峯のモルゲンロートは天幕を赤々と染め、清淨な雪はピンクとブルーを映して、えも言はれぬ美しい世界を展開する。居ながらにして、こんな大觀に自由に接し得られるのも實に天幕なるが故である。吾々は全く天幕の位置を決めるにも、よく〳〵の事情のない限りピーク突端の樣に眺望のすぐれた箇所を選び、陰氣なシエルターは努めて避けて居る。又眺望以外の一つの理由としてもピーク頂上の樣な所は落込んだ鞍部等より返つて風當りが弱い場合が多い。（卽ち下から吹上げて風の主流は上へそれて了ふ事が多いのに鞍部は風の主流が直接に乘越してぶつかる）。そして防風壁さへ頑强に作れば風も恐るゝに足らず、反つて風が積雪を吹飛して埋沒を防いで呉れる便がある。之に反してシエルターは多くは吹溜り勝ちで明朗な雪山の生活には向かず、安全さに於ては補强工作如何で兩者大して異ならないものと思ふ。

今日は昨日殘した荷を取りに行くだけ、四人揃つてダウンヒルオンリーの滑降を樂しむ。途中から雲海の中に沒入して展望が利かなくなつて了つた。CIへ遊びに行かうと思つたが霧が深いので止して戻る。防風壁の强化をした後、早くから天幕に這入つて明日の前進の爲色々荷物の整理に努める。外の寒氣加はり好晴を思はせる。今日はスキー滑降で濡れ物が出來たので石油コンロ二臺を使用して乾燥を初めたが、二臺の火力で天幕內の溫度は急騰し下部で 22°C 上部は立つて居られぬ位暑くなつて了ひ上に紐をわたしてぬれた物を吊すと忽ち乾いて了ふのであつた。これではヒユツテの乾燥室と變らないが飯時などは裸になり度い位暑い。

三、二二　快晴　CⅡ——天狗尾根CⅢ

CⅡ發七時廿分。天幕、登攀具及び二人約六日分の食糧を四人で分擔した結果、一人宛平均四貫位で濟んだ。天幕から直かに南下する支尾根を關學のラツセルに從つて降り三十分位で關學天幕着。尾根が平になつた森林帶でカクネ里、五龍東壁等の登攀には其儘絕好の根據地である。其處から尾根を右にはずれ白岳澤より二俣着。八時四十分。二俣の岩小舍（針葉樹八號三三頁參照）も完全に現れて居り使えさうである。九時出發、雪に埋れたカクネ里の圈谷には春の陽が谷いつぱいに躍り、進む程に肌はぢつとりと汗ばんで來る。キラ〳〵とまぶしく反射する山々の、ものうい樣な沈默を僅かに破るものは時折遠くに響く雪崩の音のみ、北壁も思ひなしか陽炎にゆらいで居る。重いラツセルをゆつくり〳〵と續け、カクネ里を可成り登つた所で天狗の鼻へ直接上つて居るくの字なりのルンゼに登路をとり一直線に上へ上へと頑張る。雪崩の心配は今の所全然ない。幾度かラツセルを交代した擧句漸く天狗の鼻のピーク約二三四〇米の突鼻に出る。十二時二十分。尾根には既にアイゼンの跡があつたが之は兼ねて聞いて居た浪高生のものではないかと想像する。天狗尾根を登つたトレールが見え小舍岩邊に人影さへ見える。此處は三年前の十一月、鷹野や森脇とジツヘルした儘二日目のビバークをした所で、寒いそして陰慘な初冬の夜風に吹かれ乍らコツヘエルを懷いて雪をとかしたりした事などがまざ〳〵と思出される。

早速このピーク頂上に吾々の最後の根據たるCⅢ建設にかゝる。三尺程雪面を堀り下げ防風壁も頑丈に作つて天幕がすつぽりと中へ藏れる樣にした。一應堀つた所で四人圍つて晝食を攝り乍ら休んで居ると天狗を途中迄登つて引返した浪高生四名が天幕へ戻るのに會ふ。まだ二人後から來る由。

二時、森脇と大塚は二次サポートの役目を果してCⅡへ向け出發。森川と私は尙も防壁强化に努め、乏しい乍ら下に敷くブッシュも集つたので愈々天幕を張らうとして居た頃——もう太陽は北槍の彼方に沈んで居たから四時頃だつたらうか、先刻荷上げに來て戻つて行かれた關學パーティの方が一人、息せき切つてやつて來て、浪高生二名がカクネ里にスリップして重傷した旨を話し、之を下の浪高キャムプに傳える樣依賴されたので私は天幕建設を森川に委ね、早速アイゼンをつけ、パンと電燈を持つて出發。浪高のトレールに從つてどし〳〵天狗尾根を下り、標高差五百米餘を下つた頃浪高キャムプに着いて遭難事情を報告。現場に赴く浪高生二名と共に再びCⅢに戻つた。ずつと前から日は暮れたが幸ひ月が非常に明るいので救援には絕好の夜である。遭難事情がはつきりして居らないし、關學の方達及び當部の森脇、大塚もおそらく助力しつゝある事と思ひ、吾々二人は若し必要ある時は傳令をよこせば直ちに出動する旨を現場に向ふ浪高生二人に申し傳えて自重する事にした。

（二次サポート隊報告——二時登攀隊と別れて三十分の後カクネ里へおり立つ。折から北槍の上に落ちた夕日がカクネ里奥に屏風の樣な陰影を作つて物凄い。この時奥の雪面に小さな黑い點を認めたるも人間とは氣付かず下る。二俣よりCⅡへ向つて登る途中關學急使來り浪高生二名の遭難を告ぐ。直ちに現場に引返す。遭難者一名雪穴にうずくまつて居る。三、四丁上のデブリの中に更に一人居る由。どす黑い血塊を吐き腹痛を訴ふ。墜落原因は天狗尾根の雪庇の崩壞との事、時々つぶやく。關學の方達と協力して上に居る今一人の遭難者引下しにかゝる。この方は既に意識なく時々うは言を發し、絕えず身體を痙攣しつゝ唸る。漸く下の遭難者の所へ引ずり下した頃は既に七時を過ぎ、東の空には月上り圈谷の中は明るい。關學パーティのスキーで橇を作り遭難者二人を引いて九時頃二俣に至る。出合より十間許り上の岩庇の下に寢かす。十時過ぎ急報により浪高天幕より二人天狗のCⅢを經て來る。十一時、既に用のなくなつた吾々二人CⅡに向ふ。二十三日午前一時天幕に歸着す。）

カクネ里よりCⅢへの前進　　大塚　武

三、二三　晴　CⅢ滞在

遭難救援の應援依頼に備へて晴天だが、一日天幕で待機しつゝ休養。晝近く漸くシュラフザックを脱け出し、のんびりと食事。三日の晴天續きで登攀には絶好のコンデイションだがこの際次のチャンスを握むより他ない。若し今日一日下から何の音沙汰もなく明日晴れたら斷然奥壁をアタックしやうと決心して靴の塗油・登攀具の整備などを濟ませておく。眺望非常によく、のんびり一日を過す。荒澤奥壁の北稜は凄く急な雪稜と化して居るが第一、第二（M）岩峰の難場は殆んど雪をつけず悪絶無双を誇つて居る。知らせがない所を見ると遭難の方も何とか始末がつくものらしい。隔絶した此處では唯無言の山々が吾々にこだまを虚ろに返すばかりで浮世の出來事は露程も屆かない。

夜CⅡへ向け燈火信號を發したが返事なし。恐らく遭難騒ぎで忙しいものと想像し別に心配せず。

（CⅡ——滞在。朝遭難救援に遠見小舎より三名天幕通過。吾々は午後四時二俣に下り、貸した物の一部返還さる。天幕へ戻る途中、CⅢより燈火信號あるも、こちらからは間に合はず。夜分も救援隊八、九名天幕を通過す）

三、二四　吹雪後快晴　CⅢ滞在

今日こそ奥壁アタックを敢行しやうと午前三時に起きたが、外は吹雪で殘念乍ら中止。これで次のチャンス迄は相當長く待機を餘儀なくされる事はこの頃の北アルプスの恒だが、全然怠けてチャンスを逸した譯ではないので幾らか慰めもつくと言ふもの。可成烈しい降雪だつたが午後から急にカラリと晴れて了つた。氣温は變則的に高く、素手で雪を掴んでも何ともない。風もなくうらゝかな春陽を浴びて吾々は天幕の防壁を強化したり、たはむれに雪人形を作つたりして徒然を慰めた。雲海は一九〇〇米邊から下を完全にその波濤下に埋めて、吾々はまるで絶海の孤島にでも居る様な感じである。夜、月光に照し出された四周の大觀は實に素晴しいものであつた。CⅡと燈火信號をかはして互に無事を祝す。

（CⅡ——滞在。五時半遭難者一名を脊負つた六、七名天幕を通過、食糧若干分與す。遭難者松井君は元氣であつた。七時半浪高先輩一名人

夫を連れて現場へ向ふべく通過。カクネ里の中は雲たれ込めたるも上は晴れて美し、燈火信號成功）

三、二五　吹雪　CⅢ滯在

可成烈しい吹雪である。長期籠城を覺悟し、食事を極度に減らす。オジヤ極少量を二回、ミルク二回、ソーセージ半分が一日分であるから努めて體を動かさぬ樣、一日シユラフザツクにじつと寢て暮す。吹雪は一向勢を弱めず遂に天幕は埋つて了ふ。しまひには段々吹き積つて今に雪崩で埋められた樣に身動きも出來なくなるのではないかしら等と心配になつたが、まゝよと許りシユラフザツクに頭を埋めて寢込んで了ふ。CⅡも滯在。

三、二六　吹雪　CⅢ滯在

今日も相變らず憂鬱な吹雪は續く。風の咆哮は凄じく響くが防風壁が完全な上、天幕が雪に埋つて居る爲、大して風は感じない。讀む本もなく、十分な食糧もない。狹い天幕に二人身を横へて、吹き荒ぶあらしの音に耳をすますばかり。ラディウスのシユー〳〵云ふ音とあらしの音とが吹雪の幕營に於ける音響の全部であり、妙に印象に殘つた。小便の爲、一大決心をして入口を開け、積雪を排して天幕の外に出ると、烈しい寒氣を伴つた暴風雪は忽ち身をさいなんで、この儘天幕の傍で凍死して了ひ相な氣がして來る。一昨日作つた雪人形は首まで埋沒してまるで凍死體の樣に無氣味である。やゝ天幕の内張が濕氣を帶びて來たが大した事はない。今日の食事は朝オートミール一杯、夜オジヤ極少量のみ。食糧豊富なCⅡの連中がうらやましい。

（CⅡ――滯在、朝起きると新雪が防風壁と等高になり、天幕の下緣が雪に壓せられて内部は暗くなる。吹雪は益々募る。二時、遭難者松林君を引いて人夫等約二十名來る。ラツセル胸を沒し目覺しき活躍であつた。やがて雪面は天幕と同高になり、立てたスキーが僅かに雪面に出て居るのみ。埋沒を恐れて掘るも効果なし。用便に困難す）

三、二七　晴强風　CⅢ滯在

天幕を埋めた雪を排除しサツパリとする。雪煙蒙々として、北槍などはまるで別の山の樣に物凄く見える。この近所の尾根筋

天狗尾根 C Ⅲ　　小谷部全助

も高々とナイフエッヂに吹溜つて見違える様だ。後、風靜まり好晴となる。寒氣强く—10°C を降つた。愈明日は攻擊出來さうだ。體力を充實すべく晩飯を堪能し明日のアルバイトに備える。

もう五日間もCⅢの退屈生活が續いたので幾分ノスタルヂアに催つたのか、早くやるべき事を濟ませて家へ、都へ歸り度くなつて了つた。それと共に登攀前の、審判を受ける樣な重苦しい空氣の壓迫から兎に角免れ度くて堪らなくなつて來る。殘されたヴアリエーションルートの險峻に立向ふ氣持は、卒直に言ふなら、それは決して美しいから憧れるのではなく、困難なるが故に男の——人間の意地を張り全能力を以て突貫して見たいと言ふ方に近いのであらう。矢張り人が何と言はうと、から言つた氣分は征服慾と言ふ言葉に最もよく表現されて居ると思つた。

奥壁北稜の登攀

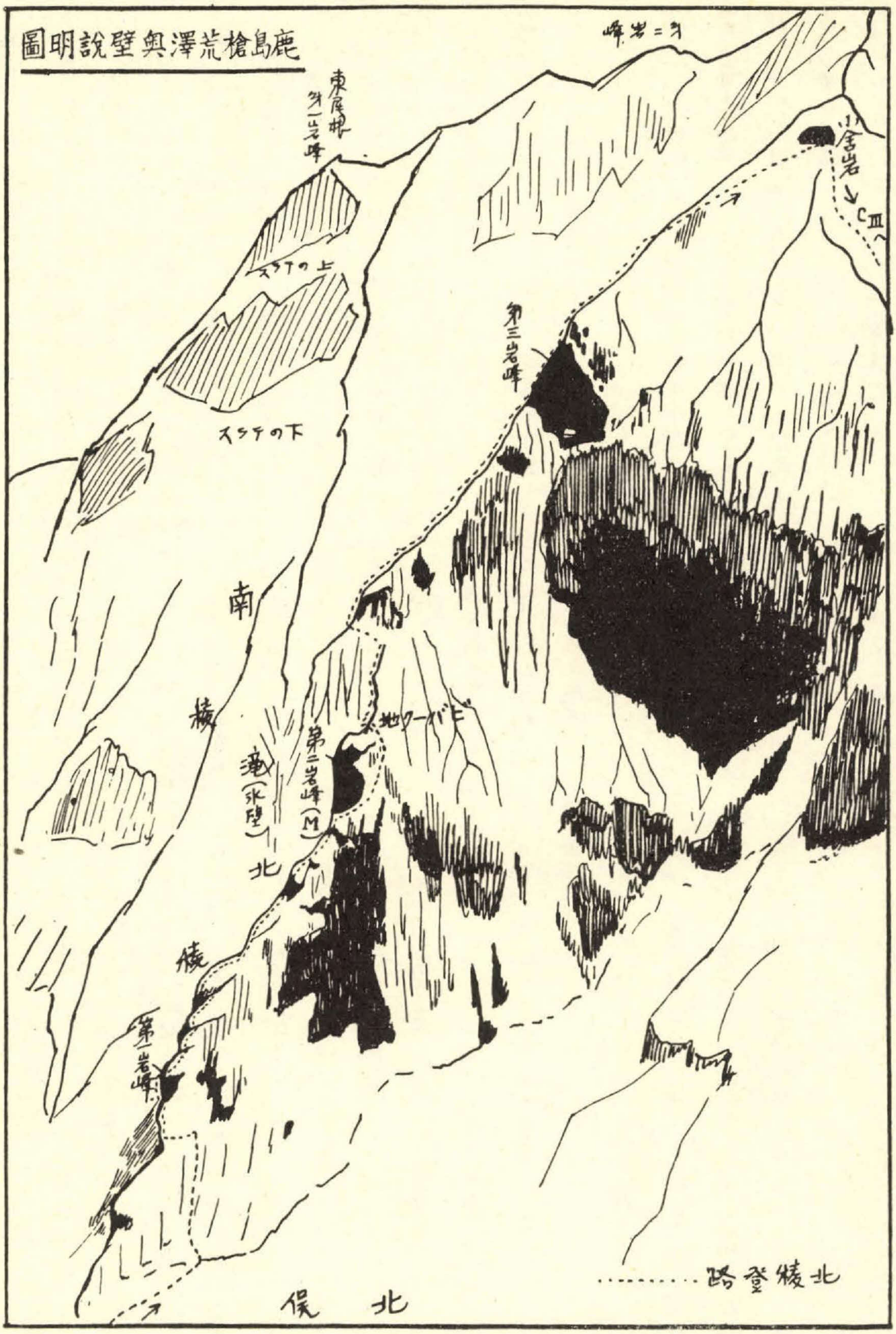
三、二八　快晴　CⅢ——北稜M峰上ビバーク

午前二時起床。天幕の外は凍りつく樣な月明に靑白く照し出されて居る。顧る中空に北槍が月光を肩越しに浴びて尾根筋をにぶく光らせ、ゆつくりと旋回するパイフエン迄この世のものとは思はれぬ神祕さを宿して居る。愈々機會到來だ。勇躍して天幕の外に飛出す。吹雪後で新雪が深いのでアイゼンの上に輪樏をつける。天幕の後始末をよく行ひ、張綱には、吾々が今曉北稜に向つて出發した旨を記した紙片をぶらさげて出發したのはまだ夜も明けぬ五時であつた。深いラツセルを續けて荒澤北俣へ下るルンゼの入口に出た。深雪のルンゼで雪崩の心配はない事もなかつたが既に昨日一日で出るべきものは出て了つた事と高をくゝつて、それでも一直線に靜かに〈歩み下つた。北俣との出合で漸く陽が出たらしいが妙に雲海が多く、美しいモルゲンロートを呈しないのが、惡場へ向ふ吾々には些か不安だつた。北俣は物凄いデブリだらけで蜿蜒と下流遙かに及んで居る。溢れる許りに積つた奥壁の雪と氷は登攀不可能にさへ見える。北稜下端着六時廿分。小憩後、やゝ右上（下から向つて）から取付く。雪溪からリツヂへ雪面が工合よく續いて居る所である。こゝは下から仰ぐと簡單に見えるのでアンザイレンもせず私がトツプに

なつてステップを刻んだが暫く行くと傾斜は意外に急になり、途中辛くもバランスを保ちつゝ二人アンザイレンする。上は岩壁で、どうしてもトラヴァース氣味にリッヂへ出なければならぬが、非常に急で肩がつかえぬ位にステップ、否、途を切り開くのは容易ではない。リッヂへ出るとしばらくして第一岩峰に突あたる。七時半——四十分。岩峰は七分通り雪に蔽はれて居るが後三分の二米許りの爲リッヂ通しは全然駄目なので夏場通り、左手へ卷かなければならぬ。このトラヴァースもバンドが積雪の爲はつきりせず嫌な思ひをする。漸く左側のやゝ可能的な岩壁下に出た。そしてこの岩場を攀じるのだが夏場ですら可成緊張した所だけに自信はなかつた。リュックサックは勿論森川の所に殘す。先づ基部にピトンを二ケ所打込んで登攀を始める。一々、ピッケルで屆く限りの雪を丹念に落してかゝらなければならないので、下で確保する森川の頭上には瀧の樣に雪がふりかゝる。

キリ〳〵とアイゼンは岩にきしり、全神經をもつて、ホールドを求めつゝぢり〳〵と攀じ進む。やつと最難所を突破して、更に確保のピトンを打ち、右へトラヴァース。かくして第一岩峰の上部に立つたが饅頭形に大きく吹溜つた雪のブロック上には容易に登れず、長い時間をカッティングに費して、やつとその上に立つて森川を確保する。ザイルを途中のカラビナから一應はずして之で荷物を先づ引上げ、次に森川がピトンを拔き乍ら上がる。

仰ぎ見ればM峯迄の急峻なリッヂには巨大な茸を幾つも重ね上げた樣に積雪のブロックが充滿し、之等は何れも垂直、乃至はオーバーハングして下に臨んで居る爲、徹底的な堀割工作をしなければ登れない。かくしてピッケルは間斷なく動かされ、一歩々々と溝が出來て行く。こんなに遲々たる、そして苦しい登攀は全く初めてゞある。森川も同じ場所で一時間も二時間も伸びないザイルを歎じ且つ心配して居る。ある箇所では巨大な茸狀雪塊に阻まれて突破出來ず、そのオーヴァーハングした基部に沿ふて横ざまに溝を堀り、ぴつたりと腹ばひになつて辛くも可能的な斜面迄トラヴァースした樣な事もあつた。かゝる雪塊の間にはいくら崩しても一向幅廣くならぬ樣な鋭いナイフエッヂの雪稜が恐ろしい落し穴を藏して控えて居る。森川晝食のパンを天幕に忘れたが、私が萬一の用意に持參したパンで助かる。かゝる時、僅かの不注意が生命に關する重大な結果を惹起する事をよく


鹿島槍荒澤奥壁說明圖
第一岩峰
東尾根
第二岩峰
スラテの上
スラテの下
第三岩峰
小舍岩
C III
南
稜
第二岩峰(M)
滝(氷壁)
北
稜
第一岩峰
北
北稜登路

〳〵注意すべきである。

やがてM峯から三十米程下部の岩場へ來た。ピトンは全然利かない。私は下の雪稜で森川に確保され乍ら何度も空身でこの小さい乍ら手應えのあるスラブの岩へ突進んだがどうしても突破出來ない。今こゝでつまつて了つたならば吾々は一體どうなる事だらう。勿論戻る事は死を意味する位危險だ。私は擊退されて考へた。いざとなつたら露岩の寡い側の斜面を北俣迄轉落して助からう等と無鐵砲な事までその時は眞劍に考へたものである。結局、幾度かの失敗の後、ルートを少し右寄りに採つて辛くも上へずり上れた時は思はず歡聲を發して了つた。だが又憎い茸雪がすぐ連續して行手を阻んで居るのには實際うんざりする。もう時間は驚く程經過して、北稜から太陽の最後の光が東へ飛去ると共に、とたんに雪は固く凍つて了つた。腕はだるくなるし雪は固い。この茸雪に深い溝を堀つて上へ立つ迄には隨分苦勞し、時間は遠慮なく過ぎ去つて了つた。温度はぐんと降つて、ぬれた手袋の裂け目からピツケルや岩がニチヤリと無氣味に吸付き始めた。この途中で夕陽に映えた第三天幕に人影を認め「ヤツホー」を叫ぶ。愈々問題のM峯（第二岩峰）である。この直下附近の傾斜は實に急で雪もスラブの岩壁を薄く蔽ふに過ぎず、滿足な確保はとても望めない。然し基部に近く、やゝ脆いがピトンの利く岩が露れて居り、ピトンと短いブツシュに掴まつて垂直三米半あまりの壁を攀じて漸くM峯のつけ根に附着する雪のバンドに出られた。時は既に四時半。

夏場は今少し下から向つて左側へ拔けたのだが、今はなめらかな氷が一面に閉して不可能である。右側は本當は險しい岩壁で到底登攀の對象にはなり得ない所だが今ではすつかり雪が附着して、どうやらバンドを爲して居る。

直ちにM峯の下部にピトンを打込み、兎に角森川をあげる。もうたとへ前途の望みはなくとも此處以外屯する所がない。夕闇迫る惡場で先の見通しもつかず、疲れを休める時の氣持は悲壯である。しいて平氣を裝ふて談笑する内にも、心に湧く生命の不安を互に深く意識し合つた。

左か右か？　夏場の經驗から餘程左へルートをとり度かつたがスラブの岩と氷は全然人間を受けつけない。下は目くるめく絶

荒澤奥壁北稜の登攀　　小谷部全助

壁である。結局どうしても右のバンド以外ない。M峯をぐるりと右へ廻ると途中バンドの雪が非常に薄くなつて切れ相になつたが、愼重に渡つてどうやら安全な雪のブロックに移る事が出來た。こゝからM峯の上迄雪が續いて居るから何とかなり相だ。傾斜は上へ行く程急で吹溜りが頭上にオーバーハングして居る。のしかゝる雪の堆積を頭で打ち壞したり、ピッケルを眞上にふりかざしたりして惡戰苦鬪の數時間の後この難場を克服し、M峰上の雪稜上に出た時は將に暗闇一歩手前で、森川がやつと上つて來た頃は既に夜の七時になつて居た。これで北稜の最難箇所はやつと終つたのである。然しこれから上も夜道は油斷がならないし可成疲勞もしたので、一先づ此處でビバークする事に決し雪稜をならして二人は其儘座り込んで了ふ。兩側は切り立つた樣な嶮崖なのでザイルの一端を岳樺に確保せしめる。雪との激しい格鬪で、吾々のウインドヤツケはぬれてバリ〳〵に凍り、不快な寒冷が身内に走る。殘んのパンを食し、コヽアで生氣を取戻した後、愈々ツエルトザツクを被つてローソク等つけやうと取出した所、又しても不注意からツエルトザツクをアツと言ふ間に荒澤の谷深く取落して了ふ。再度の失敗にくさつたが今更泣事でもないので吾々は着のみ着の儘向ひ合つて夜を明かす事にした。緊張の爲疲勞は自覺しなかつたが、この寒いのにも拘らず兎角私は堪らぬ睡魔に襲はれて度々森川に起された。凍える手足を暖める爲、森川がバタ〳〵と手足をたゝく音が思ひ出した樣に、遠く夢の世界に聞える。うつとり目を開くと大町の灯がチラ〳〵と瞬いて居る……。その内に綺麗な月が吾々を照し始めた。鋭い雪稜、雪壁は青く、岩壁は飽く迄黑い。

……不圖邊りが暗くなつたので空を仰ぐと妖しげな雲が北槍の上から東へ盛に飛んで居る。これはいけない。吾々は天候急變を直感して直ちに再び登攀を開始した。時に午後十一時半。凍つてしびれた手足を伸して立上ると體がふらついたが間もなく元通りの調子に戻る。霧越しの月光で芒と視界はわかるが傾斜が全然わからないので懐中電燈をつけた。ビバーク地から三十米餘の所で急な雪面をトラバースして大きなリッデへ出る。第三岩峰もリッデの左を行けば全然問題はない。天候は果して惡化の一途を辿りサラ〳〵と雪さへ頰を打ち始めた。その内に傾斜も緩く、ラッセルが深くなつて來たので私は輪樏をつける。かく

して漸く小舍岩へ着いたのは二十九日の午前四時半。小舍岩の東側のコンケーヴした所に大きな雪洞を見出して、二人其處に這入り込み倒れる樣に寢込んで了つた。

（CⅢ——二十八日、五龍岳登頂。五龍白岳間ザッテルにシーデポす。立山劔方面の眺望よし。天狗の鼻に登り行く關學パーティ見ゆ。今頃は當部の登攀隊も荒澤の壁に居る事であらう。）

三、二九　吹雪　小舍岩——CⅢ歸着

……森川にゆり起される。吾々は小舍岩の雪洞に居たのであつた。烈しいアルバイトの疲勞と雪洞の優秀な爲とで着のみ着の儘にも拘らず全く前後不覺に寢入つて了つた。外はもう可成の吹雪になつて居る。平和な雪洞に未練を殘して外へ飛出す。吹雪と霧で唯白い斜面が下に擴がつて居るのみ、一體どれが天狗尾根なのか見當がつかない。暫くぢつと下を凝視して居ると、かすかな幕の切れ目に尾根らしきものゝ見當をつける事が出來、アンザイレンした儘どし〳〵下り始めた。天狗尾根を下る場合右側（上から見て）は直ちに荒澤へ急崖をなして居るので左、カクネ里の方へさへ迷はなければ好いのである。天狗尾根自體の傾斜も決して緩くはなかつたが非常な惡場の直後なので吾々は至極氣樂に下る事が出來た。降雪は愈々募り見る〳〵ラツセルが深まる……。

隨分下降したが一向尾根が予定の如く平にならない。變だ〳〵と思つて居る內に吹雪の幕の切目を通して、すぐ左手に奇妙な山脈が同高に連つて居るのが見える。一體どこだらうと地圖迄出して調べたが判らない。吹雪の工合でカクネ里の方があんなに見えるのだらうと言ふ事にして尙も下降を續けるとやがて今度は荒澤側がすけて來て、北稜が眞近に見える。そこでやつと吾々は尾根を一つ右に間違えた事を悟り、うんざりして引返した。成程さうして見ると先刻の山脈こそ天幕のある天狗尾根主稜なのである。

かくして降りしきる雪を冒して無事CⅢに戻つた時は心から安心し切つて了つた。時に十一時半。天幕はもう半ば埋沒して居

る。吾々は昨朝以來、實に三十時間ぶりでザイルをはずし、色々始末をよくして天幕に這入つた。

どうせ大した食糧も殘つて居ない事は判つて居たので、吾々にとつては暖いシュラフザツクだけがせめてもの慰めだつた。所が天幕の内には意外にも關學パーティの御好意で吾々の最も欲して居た食糧が補給されてあつたのには恐縮して了つた。こゝに厚く感謝する次第である。

今迄の苦しい登攀を回顧する餘裕もなく、唯休養のみを欲して、吾々は再び今度こそ暖い天幕内で待望のシュラフザツクに身を埋めて快よい睡魔の手に、吾身をぐつたりとゆだねるのであつた……。

（CⅡ——朝、登攀隊の様子を聞きに關學天幕迄往復。昨日決行の由、壁の途中に聲あり、姿は見えざるも元氣との事安心する。食糧若干補給されたとの事に感謝する。）

三、三〇　雪後半晴　CⅢ滯在

午前九時目覺む。實に昨日午後三時から十八時間の餘も眠り通した譯である。今日CⅡへ戻り度かつたが、體の疲勞がまだ殘り、その上降雪直後なので自重して滯在とする。

（CⅡ——滯在。未だ登攀隊戻らず、歸られない程の惡天候でもないのにと再び心配する、燈火信號せず。）

三、三一　半晴　CⅢ撤收——CⅡ

愈々この離れ小島にもおさらばである。天幕をたゝみ、脊負子に荷造りを濟ませて懷しいキャムプ・サイトを後にしたのは十時十分。荷は案外輕かつたがラツセルは重い。交互に先頭を代つてカクネ里を一直線に下降、二俣着十二時廿分。同發一時廿分。こゝから白岳澤を經て關學天幕に至る、登りのラツセルには可成にへばつた。關學も撤退を始めたらしく天幕はたゝまれ、人影はない。其處から上はラツセルがされてあつたので樂にはかどる。CⅡ着四時半。今迄の小天幕に較べると此處は豪奢なものだ。森脇、大塚も隨分心配して居たゞけに非常に喜んで、先づ紅茶、次に美味いハヤシライスとたらふく御馳走して呉れたのには缺

食勝ちだつた吾々はすつかり嬉しくなつて了つた。明るいラムプの下に再び相會ふ事が出來た四人は遭難事件や奥壁の事等積る話に夜をふかした。外には皎々たる月光が明日の好晴を約するかの如く壯嚴な雪山を照し出して居る。明日は一氣に下山だ。

（CⅡ——朝早くシラタケ經由天狗尾根へ行かんとするも途中にて天狗尾根より下る人影を見て戻る。以上CⅡ報告大塚武記す）

四、一　晴後雪　CⅡ撤收——CⅠ撤收——神城

五時起床。昨夜決めた手順に從つてどん〳〵事を運び一切の荷造りを完了して出發したのは九時半。各自物凄く荷が多く、これではスキー滑降でもないと言ふので三人はトラーゲンして輪樏。私だけスキーをつけた。矢張りスキーの方が遙かに早く遠見小舍着十一時。一時間遲れて輪樏組の森川來り更に遲れて大塚、森脇と人夫然たる格好宜しくのそ〳〵とやつて來る。CⅠは全然異常なく無事撤收。すべての荷を整頓して小舍に殘し、人夫に搬出させる事とする。小舍發三時。こゝからはほんの手廻りの荷のみを脊負つてスキーを樂しみつゝ下山。途中から又暗雲低迷して雪模樣となる。神城下川宅着四時四十分。

大町行のバスに一同乘り込んだ時の嬉しさは、折柄益々烈しくなつて來た降雪の爲一層强く感ぜられた。無事所期の目的を果して全員揃つて歸京し得る喜びは登つた山が困難なれば困難なる程痛切に感ずるものである事は今更言ふ迄もないが、同じ箇所を志した浪高の方達の慘めな遭難があつたゞけに、吾々は實に感慨無量であつた。

最後に尊き犧牲となられた浪高山岳部員松林君に對し謹んで哀悼の意を捧げる。

——了——

シッキム・ヒマラヤ主要登攀踏査年表

望月達夫

（前書き）　爰に掲ぐる年表は主として次の文献によつて作成したものである。

H. W. Tobin : Exploration and climbing in the Sikkim Himalaya (H. J. vol. II)

M. Kurz : Liste chronologique des expéditions dans l'Himalaya (Les Alpes, octobre 1933 ; juin 1936)

F. S. Smythe : Kangchenjunga : its nature and history (Kangchenjunga Adventure, chap. II)

黑田孝雄氏作「ヒマラヤ主要登攀年譜」（「日本山岳會々報」五六號）

尙 Freshfield の "Round Kangchenjunga" は手近に得られず繙讀する事の出來なかつたのは殘念である。

此の年表は山岳部の研究會の資料にでもと昨春作つてみたのであるが、種々な都合で纒められずそのまゝにしてをいたのを、最近に到つて整理加筆したものであつて、決してシッキム・ヒマラヤに於る各種登攀踏査の網羅的年表の心算りで發表したのではない。乍併私としては出來るだけ正確をきし又載せるべきものは載せた。そして今後も大方の叱正をまつて增補し少しでも役に立つものにし度いと考へてゐる。

尙邦文のものでは金山淳二氏「カンチエンヂユンガ登攀史抄」（「登高行」第十號）があり簡單ではあるが要領よくまとめられてゐて便利である。

表中の數字は高度（米突）を示すのであるが、著名なる峯以外は呎より換算したものもある故多少の誤りはあると思ふ。主要參考文獻は眼にふれた範圍內で擧げてをいたものである故脫漏誤謬等がかなりあるであらう。（表の番號は參考文獻の番號と對應する。）地圖は Bauer の概念圖及び長谷川傳次郎氏「ヒマラヤの旅」の附錄圖を基とし Dyhrenfurth の書物に附いてゐる詳細なる地圖（M. Kurz 作成）及び Kellas の地圖（A. J. vol. XXVI）等を參照して作成したものである。

本表作成に當り黑田孝雄氏より御敎示を戴いたこと、並びに日本山岳會の藏書を閱覽させて戴いた事を感謝を以て附記する次第である。

	年代	月日	登攀，踏査者	行程大略	摘要
1	1848		J. Hooker	Tambur (Tamar) 谷—Walung峠，Yangma峠（共に Nango峰の北方に在りて Nepal より Tibet へ通ず）—Kangbachen—Yalung谷—Singalila 山脈—Darjeeling	
2	1849	I	J. Hooker	Rathong 谷—Dzongri（雪の爲前進不可能となる）	
3	1849	IV	J. Hooker	Tista 谷溯行—Lachen—Lamgebo 峯 (Takckam) (5867)へ數度登攀を試みて失敗す。 Poki chu (Thlonak chu) 溯行—Tumrachen 谷—Zemu氷河に至らんとして失敗す。 Lachen, Lachung 谷踏査：Kangchenjau (6915), Pauhunri (Dongkya Peak) (7065) を試みて失敗す。 Lachen 谷の源頭 Cholamo 湖—Bhomtso峰登山—Dongkya La (5530)—Lachung 谷	歸途Sikkim行政官Namgayの命により，全行者 Dr. Campbellと共に捕へられた
4	1861		Lt. Carter	Darjeeling—Tumlong 間の測量をなす。	
5	1878		H. J. Harman	Sikkimの測量をなす（Tulung僧院に至らんとし土民の猛擧によりて失敗）	
6	1879		*Babu Sarat Chandra Das	Sikkim—Kang La (4988)—Kangbachen—Jonsong La (Chatang La) (6159)—Chorten Nima La—Tashi Lhunpo (Tibet)	* S. C. D. 又は The Babu と記さる。
7	1881		H. J. Harman	Kangchenjunga(8580)の脚下に至らんとし病の爲失敗す。測量は次の者續行す。	
8	1881		H. C. B. Tanner Robert（助手）	測量を續ける。Tanner は三人の Pandit (S. C. D., U. G., R. N.)の訓練をなす。自ら三角測量をなし Pandit 達は微細なる地勢上の知識を與へた。	
9	1881		Babu Sarat Chandra Das	Kangbachen—Nango La—Lh sa	
10	1883		*Lama Ugyen Gyatso	Tista, Lachung 谷—Dongkya La—Lhasa（スケッチをなす）	* U. G. と記さる。Pamionchi 僧院の者なり。

	年代	月日	登攀，踏査者	行程大略	摘要
11	1883	Ⅳ上旬	W. W. Graham	Dzongri に至り Singalila 山脈の一峰 (5484) に登頂	最初の純粋なる登山ならん
12	1883	Ⅹ	W. W. Graham	Pandim group の一峰 Jubonu (5895) に登山。 Kang La 西方の一峰 (5788) に登山。尙 6/Ⅹ Forked Peak(6128)に登山（彼は之を Kabru 7316 なりと主張せり）	Emil Boss, Ulrich Kaufmann の二名のアルプス案内人を伴へり。
13	1883	Ⅹ—Ⅻ	Robert	Sikkim の可及的着到地方の測量完了せらる。 Robert は北方國境. Zemu 氷河の踏査をなす。 Rinzin Namgyal は Talung 谷溯行—Tulung 僧院にとゞまる。	Rinzin Namgyal 全行す。（又 R .N. と記され，Freshfield は Rins'ng と記せり。）
14	1884	Ⅹ—	Rinzin Namgyal	Kang La を越ゆ—Yalung 氷河踏査—Sarat Chandra Das の足跡に從ふ—Jonsong La—Lhonak 谷を下り—Lachen—1885. 31/Ⅰ Darjeeling へ。	
15	1885	末	Rinzin Namgyal	Sikkim 南東の踏査 Bhutan に至る。	
16	1888—96		A. L. Waddel	Singalila 山脈を越ゆ，Yalung 氷河に至つた外數多の旅行をなす。	Pandit の Kinthup なる者を同伴す。
17	1889—1902		Claude White	1890 : Guicha La (5008)—Talung, Tista (Pandim, Simvu 間の最初の研究) Rindiang chu—Yumtso La—Poki chu—Zemu 氷河 (5330m. まで踏査)—Tangchang La, The La—Lhonak—Lungnak La—Tangu. 1902・Lhonak の奥地をさぐる Lungnak La, Chorten Nima La 附近。	Hoffman なる獨人（寫眞技師）を伴へり。
18	1898		Bullock Workman	Kabru (7316) を試み，約 5000m. に達せりと傳へらる。	Rudolf Taugwalder を伴ふ。
19	1899	5/Ⅸ—	D. W. Freshfield E. Garwood S. Vittorio Sella	Darjeeling—Tista谷—Zemu氷河—Lhonak 谷源頭—Jonsong La—Kangbachen—Mirgin La—Kang La—Darjeeling	Rinzin Namgyal を伴ふ。此の行によつて名著"Round Kangchenjunga"生る。
20	1905	Ⅷ—Ⅸ	Jacot-Guillarmod M. Reymond M. Pache M. de Righi Crwoley	Singalila 山脈—Yalung 氷河に至る。1/Ⅸ 6245m. の地點に天幕を張る。Kangchenjunga 南西面の攻擊をなし 6300m.迄達せしも失敗す	Pache は雪崩にて死す。蓋し Kangche junga をねらひし登攀隊の嚆矢ならん。

	年代	月日	登攀，踏査者	行程大略	摘要
21	1907	IX	A. M. Kellas	Simvu (6816) 三度試みたれど新雪と惡天候の爲斷念す。	三名の歐人案内者を伴ふ。
22	1907		A. M. Kellas	Napal Gap (6398) Zemu 氷河より試む。一度は 5480m に至り霧の爲に二度目は 5790m に至りしもクレバスの爲めに失敗す。	
23	1907	X	C. W. Rubenson Monrad Aas	Kabru 氷河より Kabru (7316) を試む。6510m の地點に天幕を張り 7265m の地點に迄至りしも猛西風の爲退却を餘儀なくせらる。	6100m 以上に十二日間も居らるゝ事を實證せり。
24	1908	VIII	A. M. Kellas	Pauhunri (7065) を試み 6610m. に至りて雪と嵐の爲退却す。	
25	1909	IX	A. M. Kellas	Langpo Peak (6950) 13-14/IX 西方より登頂。Kangchenjunga 氷河を訪れる。Nepal Gap：第三回目の攻擊。6100m. にて烈しい猛風雪の爲退却す。Jonsong Peak (7459)：Lhonak 氷河より試み 6510mに至り深い霧と嵐の爲Chorten Nima La 附近の氷河へ下山す。	
26	1909	X	A. M. Kellas	Pauhunri を再度試みて 7000m. に達し雪と强風の爲退却す。	
27	1910	V	A. M. Kellas	Simvu Saddle (5393)；Zemu Gap (5880) Zemu 氷河より登攀す。 Nepal Gap：第四回の攻擊，6398m. の殆ど絶頂迄至る。 Tent Peak (7340) を試む：Lhonak La を越ゆ。 Jonsong Peak 山頂の尾根偵察の爲，6855m. 迄登る。 Sentinel Peak (6480) に登頂。	Kellas の 1910 年の登攀については參考文獻中の(註)を參照せられたし。
28	1910	15-17/VI	A. M. Kellas	Pauhunri (7065)：第三回目の攻擊をなし登頂す。	
29	1910	VII	A. M. Kellas	Chomiomo (6835)：種々の方向より試み遂に北西より登頂す。	
30	1912	VIII	A. M. Kellas	Kangchenjau (Kangchima) (6915) を試み 6100m. 以上に達す。 Sebo La (5362) を越ゆ。(Lachen—Mome Samdong)	
31	1919	末	N. A. Tombazi	Kangchenjau を試み 6100 の地點にて暴風雪の爲退却。	
32	1920	VII—VIII	Harold Raeburn H. W. Tobin	Dzongri—Jubonu の西方支脈横斷—Guicha La—Talung 氷河 (Kangchenjunga 南東面の偵察をなす)	

	年代	月日	登攀，踏査者	行程大略	摘要
33	1920	IX—X	Harold Raeburn C. G. Crawford	Singalila 山脈—Yalung 氷河—Talung Peak 西尾根上 5030m. の地點に天幕を張る—(Kangchenjunga の南西面の踏査)—6100m. に天幕を張る (Kangchenjunga を試み 6900m. に達す) —Tseram—Rathong 峠—大 Kabru 氷河—Rathong—Chunbab La—Pamionchi	
34	1920	秋	A. M. Kellas	Narsing (5770) ; Lama Anden (Lamgebo) (5865) に登頂す。	
35	1921	春	A. M. Kellas	Kabru の ice-fall にて新道をとり 6400m. 迄到る。	直後第一回 Everest 遠征隊に參加し病死す。Kampa Dzong に葬むらる。
36	1925		N. A. Tombazi	Kangchenjunga 群峰の南方氷河を寫眞に收める爲。 Alukthang 氷河—Dome Peak を試み 6100m. に迄達す，Talung, Tongshyong 氷河—Zemu Gap (5880)	
37	1926	V	C. Boustead	Tombazi と仝樣な道にて Zemu Gap に至る。 Pandim を北方より偵察し 6100m. に至つた。	
38	1929	V	E. F. Farmer	Yalung 氷河より Kangchenjunga を攻擊す。26/V Talung Saddle に向ひ唯一人登り行きたるまゝ再び歸へらず。	Lobsang (sirdar) を伴ふ
39	1929	VIII—X	Paul Bauer 隊	Zemu 氷河より Kangchenjunga 東北稜に取りつき極度の困難を克服して 7400m. の地點に迄達した。	
40	1930	IV—VI	Dyhrenfurth (國際遠征隊)	Kangchenjunga 氷河より Kangchenjunga を攻擊し 6400m. に達す。 後 Ramthang Peak (6700), Nepal Peak (7153), Jonsong Peak(7459) Dodang Nyima Peak (7150) 等の登頂に成功す。	
41	1930	X	G. B. Gourlay W. Eversden	東南面より Lhonak Peak (6480) に登頂す。	
42	1931	VI—IX	P. Bauer 隊	1929 年時と仝ルートをとり Kangchenjunga 東北稜上 7700m. 迄達せり。	

	年代	月日	登攀，踏査者	行程大略	摘要
43	1932	X	G. A. R. Spence J. Hale	北東より Chomiomo (6835) を試み 6400m. に迄到る。	
44	1932	X	G. H. Osmaston	東稜より Fluted Peak (6260) を試み 6200m. に迄到る。	
45	1933	VII—	E. E. Shipton L. R. Wager	Lhonak La (6075) に登り，又 Lhonak Peak (6480) の第二登頂に成功す。	
46	1933		G. B. Gourlay W. Eversden	Chomiomo (6835) を試み，約 6600m. に達す。	
47	1934	X—XI	G. B. Gourlay J. B. Auden	Pauhunri (7065) を試み，北東支稜上約 6400m. に到る。又 Sebo chu を踏査す。	
48	1935	18/XI	C. R. Cooke	Rathong 谷より入りて 6820m. に最高キャムプを設け Kabru (7316) の登頂に成功す。	
49	1936	IX—X	Paul Bauer Karl Wien 等	23/IX に Siniolchum (6891) 又其後 Simvu (6550) の登頂をなす。	

主要参考文献

(1)(2)(3) J. D. Hooker : Himalayan Journals ; or Notes of a Naturalist in Bengal, the Sikkim and Nepal Himalayas, the Khasia Mountains, etc. 2 vols. 1854.

(5)(6)(7)(8)(9)(10)(13)(14)(15)
General Reports of the Survey of India : 1881—82, 1882—83, 1883—84.
Explorations in Sikkim, Bhutan and Tibet. 1889. The Survey of India 刊行

General Report of the Survey of India, 1884—85.
以上は Records of the Survey of India. vol Ⅷ, part 2 として再刊せられた。

(9) Sarat Chandra Das : Narrative of Journey to Lhasa, 1885
do : Journey to Lhasa and Central Tibet, 1902.

(11) (12) W. W. Graham : Up the Himalayas. 1885.
do : Climbing the Himalayas. 1887.
Travel and Ascents in the Himalaya. (A. J. Ⅻ. pp. 25—52)

(16) Major A. L. Waddel : Among the Himalaya. 1900.

(17) J. Claude White : Sikkim and Bhutan, Twenty-one Years on the North-east Frontier, 1887—1908.

(18) 特に依る可きもの見當らざるも M. Kurz の表には Führerbuch によると記さる。

(19) Douglas W. Freshfeld : Round Kangchenjunga, a narrative of mountain travel and exploration. 1903.
The Jonsong La (A. J. XXI. p. 136)
The Chorten Nima La in Sikkim (A. J. XX. p. 413)
How to climb Kangchenjunga : a topographical note (A. J. XXⅡ. pp 122—124)
Round Kangchenjunga (A. J. XX. pp. 161—184)

(20) Dr J. Jacot-Guillarmod : Sixmois dans l'Himalaya, le Karakorum et l'Hindu-Kush. Voyages et explorations aus plus hautes montagnes du monde.
The Disaster on Kangchenjunga (A. J. XXⅢ. p. 51)

(21) (22) (25) (26) The late Dr. Kellas's Early Expeditions to the Himalaya (A. J. XXXⅣ. pp. 408—414)

(27) (28) (29) Mountaineering in Sikkim and Garhwal (A. J. XXⅥ. pp. 52—54)
The Mountains of Northern Sikkim and Garhwal (A. J. XXⅥ. pp. 113—142)

(〔註〕 前者には 1910 年と記され，後者には 1911 年と記さる。前掲 Tobin の文中では 1910 年となつてゐる故 1911 年を採用する者も相當あるがこの表では 1910 年としてをいた)

(30) A Fourth Visit to the Sikhim Himalaya, with Ascent of the Kangchenjhau (A. J. XXVII. pp. 125—153)

(34) (35) Alexander Mitchell Kellas—In Memoriam—by N. Collie (A. J. XXXIV. pp. 145—147)

(23) An Ascent of Kabru (A. J. XXIV. pp. 63—67)
Kabru in 1907 (A. J. XXIV. pp. 310—321)

(32) (33) The Southerly Walls of Kangchenjunga and the Rathong Pass (A. J. XXXIV. pp. 33—50)

(36) N. A. Tombazi : Account of a Photographic Expedition

to the Southern Glacier of Kangchenjunga in the Sikkim Himalaya. 1925.

上記の書の Book Review (A. J. XXXVIII. p. 150—by T. G. Longstaff) (G. J. LXVII. p. 74)

(37) An Adventure to Kangchenjunga (G. J. LXIX. pp. 344—350)

(38) The Accident on Kangchenjunga (1929) (A. J.XLII. pp. 363—367)

(39) Paul Bauer : Im Kampf um den Himalaya, der erste deutschen Angriff auf den Kangchendzönga, 1929. 1931 (伊藤愿譯：ヒマラヤに挑戰して)

The German Attack on Kangchenjunga (H.J. II. pp. 13—)

The Fight for Kangchenjunga, 1929 (A. J. XLII. pp. 185—202)

(40) Gunter Oskar Dyhrenfurth : Himalaya, Unsere Expedition 1930.

F. S. Smythe : Kangchenjunga Adventure. 1931.

The International Himalayan Expedition, 1930. (H. J. III. pp. 77—)

The Assault of Kangchenjunga. 1930 (A. J. XLII. pp. 202—226)

(41) Lhonak, 1930. (H. J. IV. pp. 123—134)

(42) Paul Bauer : Um den Kantsch, der zweite deutschen Angriff auf den Kangchendzönga, 1931. 1933. (慶應山岳部譯：ウム・デン・カンチ)

The Fight for Kangchenjunga, 1931 (H. J. IV. pp. 116—)

Kangchenjunga, 1931 : The second Bavarian Attempt. (A. J. XLIV. pp. 13—23)

(43) An Attempt on Chomiomo (H. J. V. pp. 94—97)

(44) Northern Sikkim, 1932. (H. J. V. pp. 108—109)

(45) The Lhonak La. (H. J. VI. pp. 51—53)

(46) (H. J. VI. p. 187)

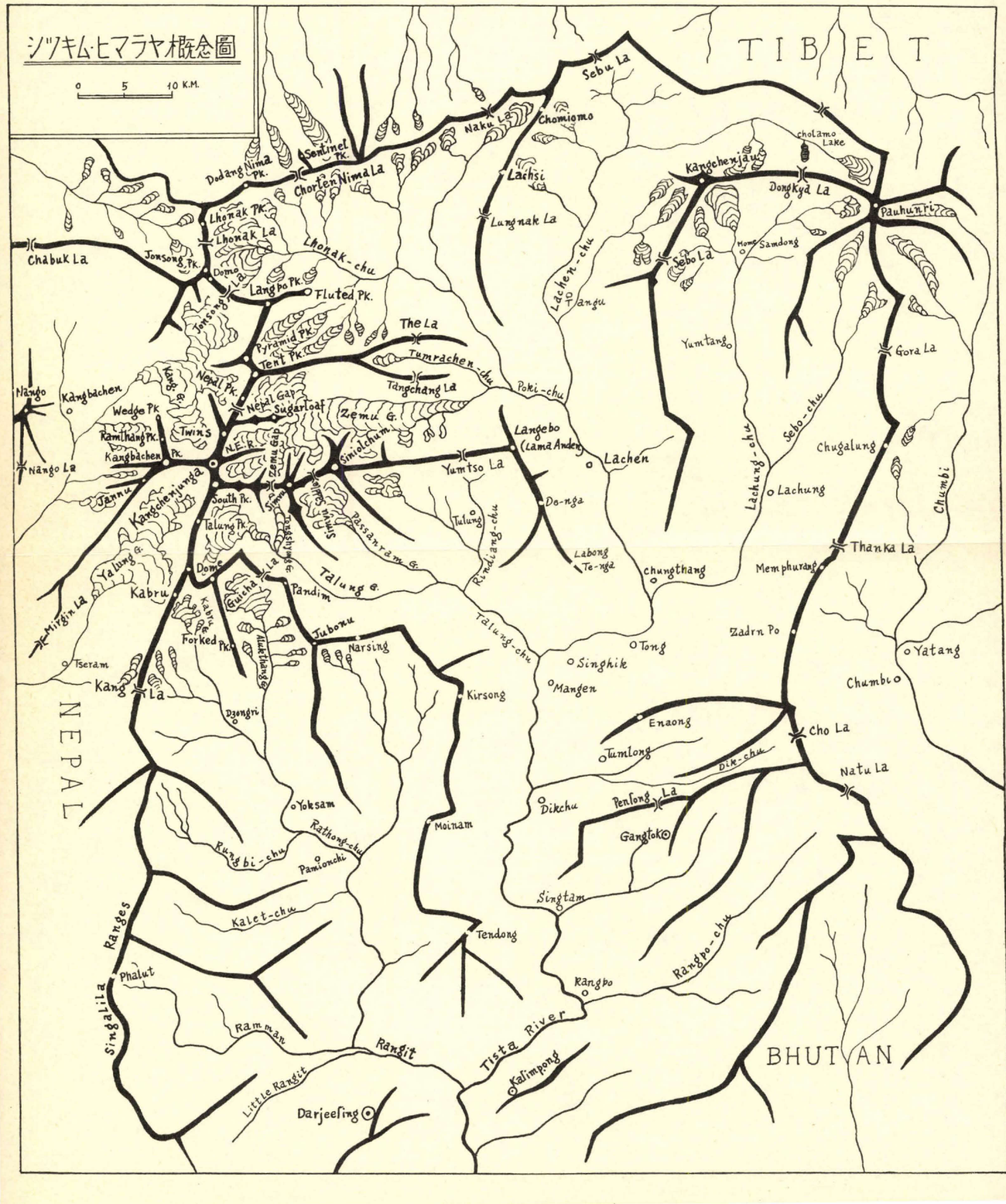
(47) North-East Sikkim (H. J. VII. pp. 139—142)

(48) (H. J. VIII)

(49) (A. J. XLVIII. pp. 359—60)

(A. J. = Alpine Journal. G. J. = Geographical Journal. H. J. = Himalayan Journal)

——昭和十二年五月稿——


シッキム・ヒマラヤ概念圖
0 5 10 K.M.
TIBET
NEPAL
BHUTAN
Sebu La
Chomiomo
Naku La
Sentinel Pk.
Dodang Nima Pk.
Chorten Nima La
Lachsi
Lungnak La
Kangchenjau
Dongkya La
Pauhunri
cholamo Lake
Chabuk La
Jonsong Pk.
Lhonak Pk.
Lhonak La
Lhonak-chu
Dome La
Langpo Pk.
Fluted Pk.
Lachen-chu
Sebo La
Mong Samdong
Yangu
Yumtang
Gora La
The La
Tumrachen-chu
Tangchang La
Pyramid Pk.
Tent Pk.
Nepal Pk.
Nepal Gap
Sugarloaf
Zemu G.
Poki-chu
Nango
Kangbachen
Wedge Pk
Ramthang Pk.
Kangbachen Pk.
Nango La
Twin's
N.E.R.
Zemu gap
Simolchum
Langebo (Lama Anden)
Lachen
Yumtso La
Lachung-chu
Sebo-chu
Chugalung
Lachung
Chumbi
Jannu
Kangchenjunga
South Pk.
Talung Pk.
Simvo
Passanram G.
Tulung
Rondang-chu
Do-nga
Labong
Te-nga
Thanka La
Mem phurang
Yabung G.
Dome
Kabru
Gurcha La
Talung G.
Pandim
Chungthang
Mirgin La
Kabru
Forked Pk.
Juboru
Narsing
Talung-chu
Zadrn Po
Tong
Yatang
Tseram
Singhik
Mangen
Chumbu
Kang La
Kirsong
Dzongri
Enaong
Cho La
Tumlong
Dik-chu
Natu La
Yoksam
Rathong-chu
Dikchu
Penlong La
Moinam
Gangtok
Rungbi-chu
Pamionchi
Singtam
Kalet-chu
Tendong
Singalila Ranges
Phalut
Rangpo-chu
Rangbo
Ramman
Rangit
Tista River
Kalimpong
Little Rangit
Darjeeling

夏の涸澤合宿から

柿原謙一

われらは山に入ることからして受け入れられる清々しい然も超俗した淋しみのある情熱を愛してゐる。如何に登攀が鋭くなつても、あのしめやかなる激情は失ひたくない。そうした氣持のわれ等の集團の中に、すこやかに味ひ乍ら歩くあの中部日本の山々の逍遙的な氣分を内に藏しつゝも、然も尙且つ高き山への峻烈な憧憬が如何にして共有し得られ、相共に滿し得られるであらうかと言ふ樣な疑問が起り來つたのは、昭和十年の上高地生活を終えた頃からだつたと記憶する。それは今日多かれ少なかれスポーツへの喜びから登攀される最も險阻なる山岳への憧れと、しめやかなる激情との調和を課題としてゐた。われわれはそれが單に選ばれた者のみの特權では無しに、部全體として可能であると云ふ信仰を打ち建てたかつた。そうすることが又大學山岳部として新しい次元を開く道でもあると思つた。そしてその信仰が生れた時、部は根强き確信の下に遠き地への靈峰に迄も喜んで近づくことも出來やうと思はれたのである。そのためには何よりも先ず、彼の險阻なる自然と人間とを容易に接觸することを得せしめる技術が高く修練され、同時に部全體が纒つて動き部員の協同社會的な結合を通して、ヴアリエーションルート登高の心構えが陶冶されねばならなかつた。その方法として團體主義的な登山樣式が一昨年の秋十月末の大樺小舍合宿を契機として擡頭し來り、乘鞍合宿を經て昭和十一年夏の涸澤合宿に迄發展し來つたのである。

涸澤に全部員を集合して、課された問題を解かうとすることは、實際上種々困難な事情に遭遇した。それにも拘らず涸澤入りの計劃は氣持よく運ばれ、德本の峠から崇くも仰いだ穂高の山懷に二十數名の部員が大天幕に擁され乍ら集團することを得たのである。今修道場として選んだ穂高の山砦に、一週間ばかりの團體生活が續けられて行く。天の果てから地の底迄、それはわれらの共有する生活の場となつた。

人間の爲す煩しい仕事から離れたこの涸澤谷の中に、吾等が憩ひ場として張られた天幕は池の平の所謂「島」と呼ばれてゐる小高い荒地に立てられてゐた。北穂高から涸澤岳、奥穂、前

穂、北尾根へと續く壯大な岩壁は、廿數名の平和を堅く守つて呉れた城砦にも譬へられやう。爰に一つの重苦しい試練に耐えようとして登り來つた吾々にとつては、この涸澤の岩底こそ企圖する團體主義的登山の樣式を學び取るのに相應しいスポーツの場所だつた。

規律は嚴正に遵奉されねばならなかつた。そして理想とする目標に近づかねばならなかつたのである。そこでわれ〳〵はこの天幕を根據地として兼ねて定めたプランに則り、全ての部員に各々犧牲を要求した。個々人好むまゝに、おのがじし山に生き山を去る態度を許さなかつたのである。正に吾々は何のためらふこともなく、部全體をわれ〳〵の課題に直面させて根强き信仰を贏ち獲やうとしたのである。

昭和十一年の七月、われ〳〵が涸澤入りを行つたのは、こんな心構えからだつたのだ。それは登山者の持つ世界の擴大を企てたものであり、二次元の在るイデーに生きむがためであつたとも云えやう。團體主義的登山と言ふ樣式は、その意味に於ては單に手段であり方法であるに過ぎなかつた。

七月の八日單身でOが新宿を發つたのを口火として、翌九日には先發隊の六名、十一日には後發隊十四名が都を去つた。先發した連中は一應小梨平に落着いたものゝ、横尾の橋が流されてゐた爲めに涸澤に入れず、止むなくOとMが前穂と奥穂の鞍部に出て池の平へ達し、小天幕を張つて翌日北尾根を越えて歸つて來ると言ふ始末だつた。後發隊が德本を越えて本隊に合した日、横尾の橋は新しく懸けられた。かくて準備全く整つた十四日の黎明全部員は德澤の牧舍に集り、愈々梓川を渡つて重荷を負ふた身を、晴れ切つた涸澤の中へと入り込ませたのである。

心が躍る樣な希望を胸にして入り來つた涸澤は、最初の三日間を天候の崩れた時の夏の北アルプスに特有な濕氣の多いガスに閉してゐた。時々大粒の雨が天幕を敲いたり、强い風がフライに襲ひかゝつたりして、山は終日見えなかつた。深い霧が目の先まで押し寄せて來て、雪渓を中斷し岩壁を黝く浮かせてゐるだけで、屏風岩の彼方に常念や蝶が見えてゐても、飛驒を限るあの壯嚴なカールは白霧の中に隱れてゐた。そんな時或者は新入部員を連れて穂高小舍から奥穂に出るし、グリセードの練習をさせたりし、天幕に殘つた者はシラフや食器食料からピッケルの整理などをしたりしてゐた。が雨が時折吾々を天幕の中に追ひ込むので、自然と大天幕の中は團欒の場となり、心快い樂しい食事の集ひとなるのだつた。遂に三日目には誰も彼も待ち切れなくなつた。相變らずOとKANが天幕の隅で料理してゐたが日の光が何處からともなく差し込んで來る樣な天候を幸とばかり、涸澤岳、北尾根チャンダルムに向つて六つのパーティーが出發した。全員の行動が開始されたのはこの十七日からであつた。實際その時の吾々

穂高涸澤の合宿　　岩崎利一

の氣持は向ひ行く岩峯を取卷いてゐるあの濛霧の裡から一筋の明るい輝く光が發生して來る樣に思はれて仕方なかつたのである。六つの班が各々目的通りに行動し得て歸幕した後から、フライを破つた程の物凄い夕立が襲つて來た。北穂の天邊から吹き來る一陣の風が、支柱諸共吹き倒さんばかりに天幕を敲きつける。丁度立寄つてゐた守（奥原）が、その夜になつて雨の上つた眞黑な天上に雷光が時折微かに渡るのを眺めて、

——明日はヘエ晴れるずら。

と嬉しい言葉を洩した。山に在れば敢て晴天と云はず、霧の日も雨の日も亦佳い事は知つてゐた。然し、誰も晴天を待つてゐた。自らの登高心の激揚するその時を待期してゐたのである。

守の言葉に違はず、その翌日の朝明けの山底には夏の光線が爽に照つてゐた。やがて姿を現すであらう青嶺は未だ白雲の裡に眠り籠つてゐたが、一時を經てその霧も幽に散り果てゝ、穂高の尾根筋にそゝる岩峯は燦々とした夏の朝日を浴びて紺碧の空の下にクツキリと浮んだ。北穂の側稜から涸澤槍のエギイユ青黝い奥穂の岩壁に續いて均勢のとれた北尾根の諸峰が、夏の蒼穹を限つてわれらの登高心に抗むでゐた。然も間斷なく飛驒の谷から起つて、是等の岩峰を掠め去り行くガスは、壯んな雄叫びに相應しい「山讃の賦」の如くに感じられてならなかつた。晴れだ！　と言ふ一樣な喜びが誰の胸にも湧いた。山に抗む直前の天眞な心、島の上に立つた一同は足下から穂高小舍のコルに迄達してゐる壯大な雪溪を眺めて、おほらな夏山の譜の感激にひたつた。

心佳い朝飯。ザイルの分擔。そしてプラン通りに組變えられた五つの班が、空開きになつた天幕を後にした。涸澤槍の直下へ、北尾根へ、穂高小舍のコルへと、各々一筋の列を組んで雪溪を登り行く同僚の姿が、頼しさと親しさとの交錯する玄妙な雰圍氣を漂はせて吳れる。大きな雪溪を擁してゐるこのカールの裡では、全てが手に取る樣に見えた。あゝ、あいつも動いてゐるぢやないか、そして俺も亦動いてゐる、と言ふ樣な言ひ知れぬ嬉しさが心の奥から湧いて來た。バツタと言ふ綽名をとつたMの長い臑が遠くに見え、特長のあるひの歩き方が目に映る皆んな相共に一筋に雪の上を登り行く同僚の班を見遣り、然も次第に目の下に小さく見え行くさゝやかな白い自分達の天幕を俯觀し乍ら、強い傾斜をザク〳〵と踏みつけて進んでゐた。各々の班が互に尾根筋に登り切つた頃、飛驒から起つた猛烈なガスは山を閉して來た。赤い岩かゞみの花が氷滴に濡れ乍ら、突風に搖れて岩蔭に優しく咲いてゐた。白出澤から吹き上げる霧は容易に止まず、間斷なく岩を敲いて去る後から、ジャンダルムが時々その魁偉な姿を現はすのだつた。燒跡に立つた新設の小舍の中には重さん始め他校の人達が數名居て、晴れを待つてゐる。それでも午後になつて穂高を取卷いたさしもの霧も晴れた。ジャンダルムの上から眺めれば、笠や拔戸が蒲田の谷を埋

め盡す雲海の上に屹立し、南岳の左手には槍がアルプスの王座を誇つて立つた。

昨日Mの一行が登つた飛騨尾根に、今日はKAN、BAN、ANのパーティがとり付く。昨年の秋北條で果てたSが奇妙な悲鳴を立てゝ怖え乍らジャンを降つたのも此の日の事だつた。奥穂迄歸つたとたんに元氣付いて、ジャム罐を嘗めきつた彼の無邪氣な格好は今も尙自分達の印象に新しい。そしてこの日、北尾根が雪渓の上に長くその影を落し、夕陽に映える常念や大瀧の山脈(やまなみ)が紫色に彩られて來る頃、惜しまれる此の佳き山行の一日は、われ等の靴鋲をして雪渓の上に一筋の線を描かせつゝ豪快なグリセードに終つた。暮色近い天幕に歸つた時、珍らしくもHが昨夜德澤泊りで來幕し、美味い果物や罐詰を持參して吳れてゐた。そうしてゐる間にもたそがれて、テントの前の池の水がほの明い光を投げ、山は次第に暮れた。一時の樂しい食事。鍋に一粒の飯も無くなり、互にその日の登行の話も終れば、澤のカールは暗き闇に沈んで冷い晴夜が訪れた。入つた時少なかつた他校の天幕も大部その數を增し、蠟燭の灯が遠くあちこちに散在してゐるのも見え、話聲も澄み切つた空氣を透して何となしに聞えて來る樣な氣がした。こんな氣持の快い夜の團欒の後から、渴いた咽喉に冷い水を流し込んで、皆んなシラフの中に寢り込んだ時、充實した此の四日目の山行に對して誰しもほゝえましい笑みが浮んで來るのを禁じ得なかつた。やがて山も眠り、人も眠る。微な寢息が天幕の中を靜めて行つた。

五日目を迎えた十九日。一同目を覺した時には、兼てから冬の瀧谷登攀の目的を持つてゐたOとMは既に偵察に出發した後だつた。天氣は朝から餘り面白くなく、常念の方の空相は思はしからぬ黃色な雲に亂れてゐるのが眺められた。空氣は冷く、何となしにしつとりとして凉しかつた。豫科の全員が先づ天幕を去つて本谷から大切戸、北穂へと向つたのに續いて、YやE達が北尾根に立つた。そして北穂の側稜と涸澤岳への班が出拂つた後は、又しても天幕は空開きになつてしまつた。薄日が時折霧の間から差して來て、一時は晴れるかと思はれたけれども天候は仲々意地惡く、小雨をパラ〳〵と送つた。北穂の側稜に居た自分達三人は、丁度格好の岩蔭に雨を避けて眞向ひに見える常念を眺め乍らパンを嚙つた。その時は

——まるで羅漢さんの御晝食ぢやないか。

と思はず言ひ出した程、自分達は寒さのためにチーンとして妙に蹲つてゐたのだつた。このリッヂは北穂の頂迄心持快い歩みを續けさせて吳れた。そして北穂の上では折好く三つの班が出遭つたのだつたが、霧は深く、ケルンも濡れて夏とは思えない寒さだつた。然し山頂で盟友と會ふ事は樂しい。鉢卷をした連中、未だ毬栗頭の豫科の連中が踏み敷かれた岩の上で和やかな喜びを別ち合ふ。この霧の中で他の班もこんな風に行動してゐるのだらう。全ての山友が朝あけと共に動きそめ、この穂高の

岩場の何處かで、同樣に岩と組む樂しい修練を爲し遂げてゐるのに違ない。言はず語らず、共に信じ合つてゐる仲間の脈動が何となしに傳はつて來る樣に感じられてならなかつた。歸途尾根道を踏間違えて瀧谷の上に出そうになり、周障てゝ引返し、岩小屋の横手をグリセードして天幕に歸る。その頃涸澤槍直下の雪渓が夕陽に映えて赫々と輝り返り初めて、明日の晴天を豫告してゐる樣に見えてゐた。

瀧谷班は既に早く歸幕してゐた。他の連中も偃松を越して歸つて來た。夕陽の餘燼は見上げる尾根筋の雪に映えて、天幕の附近は幽かな暮幕に包まれて來る。或者は池の側で米を研ぎ、或者はタオルを腰にし乍ら食器を洗つたりしてゐる。涙を垂し乍ら窮窟そうに玉葱を切つてゐる者もゐた。こうして何時も乍らの樂しい夕方の分業が一應片附くと、天幕の中に美味そうな飯がゴト〳〵と音を立てゝ煮られ出す。ハヤシライスに佃煮の夕食、食後の紅茶にお菓子と、例によつて愉快な樂しい夜が訪れて來た。瀧谷第五尾根の話から、更に夫々の班で起つた出來事が面白く話されて行く。蠟燭の灯が親しみのある明るさを齎して、支柱を中心に毛むくぢやらの膸を突き出し乍ら連座になつてゐる一同の顏を照らして呉れた。山に入つて早や十日、中には涸澤の親分とでも名付けた樣な人相に變つて來たOやBANにMの格好が、小柄な料理場の女房たるKANの姿と共に奇態に目立つ。そして「山に遊びに來たんぢやない」と誰しも感じ乍ら、こうして雲助然と車座に構えてしまふと、つい人相の惡口から始つて意味のなさそうな世上話に妙に屁理窟をつけて納め込まうとこじれ出すのだつた。

思えば此の十九日を以て合宿のプランは大體終つてゐた。殘されたのは瀧谷と北尾根三峰の壁だけだつたけれども、此等に全員を立向はせる譯には行かない。全員行動と言ふプランを立てられた合宿の目的は達せられてゐると言つてよかつた。そこで明日は合宿を解散、プランを持つ者と殘り度い希望のある者だけ殘留と定め、夜の名殘の懇談は盡きなかつた。

明けて廿日の快晴の日、愈々合宿は解散された。大天幕だけ殘して附近の補助天幕は取拂はれ、不要な物は荷造りされる。何となしに周圍が擴がつた思ひがすると同時に何となく物淋しい。殘留組十四名を殘して、八名の部員が下山。黝光りに輝き聳える奥穗高を脊にして、嘗て重荷を負つて喘ぎ登つた徑を、或者は槍へ、或者は常念へと懷しい天幕を後に横尾へ下つたのである。

天氣は馬鹿に佳かつた。北穗の側稜が見上げる夏の朝空に思ひ殘すところなく走つてゐる。その直下北穗高澤の谿がまさやかな雪渓に埋められて、キラ〳〵光つてゐるのが眞先に目を惹く。そして夏徑は偃松の間を細く縫ひ乍ら、或時は雪に消え又岩場を拔けつゝ、高く穗高小舍へと登つてゐるのも明瞭に眺められた。全くこんな近くに嶺々が見えたことは今迄になかつた

のだつた。あれ程に張りつめて準備した合宿がプラン通りに終つたと言ふ事、それにもまして皆んな全くよく動いたと言ふ事そんな感激からして岩の上にトカゲをしてゐる殘留組は、壯麗な此の大觀に見とれて根氣拔けのした空な氣持になつてしまつた。雪も段々と無くなり、天幕の直ぐ前の池は日一日と水量を增して、今日は空の色の澄み切つた青さを、心快くも映してゐた。その時自分達は無言にして滿足してゐた。誰も自分達の問題を改めて吟味して見やうとする餘裕は無かつた。たゞ何も言はずにボカ〳〵と溫まり乍ら、青き蒼穹に心を遣つて崇き自然に無心の身を委ねたまゝ岩の上に鎭座してゐたのである。

何となくひつそりしてしまつた天幕の中を皆で整理した後、M.とKは北尾根へ寫眞を撮りに行く。夏雲が豪快な孤を畫いて立つ眞下に鹿島槍針ノ木烏帽子野口五郎の山波が延々と伸び、槍は一段とそゝり立つてゐるのが、三峰の岩蔭から思ふまゝに眺められた。そこには樂しい夏の合宿、一生忘れることの出來ない涸澤生活の終りを彩る山の美麗しさ（シェーンハイト・デヤ・ベルゲ）のおほらかさがあつた。餘りの心佳さについ歸幕の遲れた二人に、Oが「又二人のことだから落ちたかと思つたよ」と微笑みかける。既に煙草も品切れになつたので、穗高小舍へ購入に行つた連中も歸つて來てゐて、テントの中は久方振りに古狸ばかりの巢になる。人間だか動物だか本體の判然しない種類の一族だけで、合宿最終日の夜を迎えた事になつた。晴れ渡つた夏の夕べを、この小人數になつた者だけで天幕の前の岩に腰かける頃になるとしのびやかな激情が皆の胸に浮んで來るのだつた。

幾年かを共に〳〵かうして山に暮して來た友達だけだつた。氣心も何も皆な知り切つて、互に信頼し合つて來た連中ばかりだつた。そして此の夏は自ら問題を提出して部員全部と共にその解決に心からの誠を以て率先して來た人達だけだつたので、茫然無心だつた書も暮れて夜を迎えた時に、言ひ盡せない感慨に襲はれて來るのをどうすることも出來なかつた。天幕の横の小狹い場所に集つた數人の友は靜かに空を仰いだ。明日は今殘留してゐる連中の中から又十名の者が去つて行く豫定になつてゐた。何とはなしに、夏山老ゆと言つた樣な寂しさが感じられた。萬難を排しても涸澤入りを決行すると、バス不通、横尾の橋も駄目だと言はれた頃に單獨先發したOや、荷物運搬に並々ならぬ苦心をしたKAN、G、Mその他の友の黑い影が見える。とても耐え切れまいと思つた程の荷を、元氣に脊負つて呉れた豫科の一年生の事も頭に浮んでならなかつた。

そして今一日の仕事を終つて見上ぐれば、『夜空に流星がひとつすつと尾をひく』此の涸澤の上空には、一杯の星屑が耀いて散り、天日に聳え立つてゐたあの岩峯を吸ひ込んでしまつた漆黑の闇底には、ほの赤い蠟燭の光を孕んだ他校の天幕が散在してゐるだけだつた。それは自然と人間とが何の混り氣もなしに對立し乍ら描き初めた謎深き然もほゝえましい陰翳を祕めた

畫像である樣に思はれた。一日のザイルさばきに疲れた身に、天幕の中の夜の集ひがこの上ない喜びであつたと共に、靜謐なこの暗い岩底に神祕に滿ちた自然がおゝひかぶさつてゐて吳れたことは、限りない幸福であるに違ない。冷い朝の靈氣と共に始つて、日中は青黝く耀く岩壁に惠まれ、然も亦斯うして心樂しいゾンマー・アーベントを持つことの出來た涸澤谷の生活は强き一種の宗教的な情熱をすら體驗させて吳れてゐるのだつた。この眞黑き涸澤の闇は、今喧しい廿世紀の文明から吾々を隔離してゐる。そして數多の星辰が恰も神々の王座でもあるかの樣に神性に滿ちて輝き渡り、美しく消えて歸らぬ流星の光りが永遠と言ふものを表徵する樣に墜ちて行くのを眺める時、自分達はまるで星占者のやうになつて冷い闇の中につゝまれ乍ら此の山に馴れ憩ふてゐたのだつた。

その時自分達は充實した今迄の合宿生活の事を考え出した。自分達の氣持がその一點に集中した事は、自分達の試みが滿足されてゐる證據である樣に思えた。各人が思ふ儘の行動を差し控え、各々限られた立場を守り來ればこそ、部全體がひとつの生けるものとして動くことが出來たのである。そこに創られたスポーツの場は部員全體に毎日峻烈な活動と修練の場所を提供し乍ら、決して山へのしめやかさを失はせはしなかつた。魂はうるほひながら高き山への憧憬に育まれて、より次の登高へと伸びやうとする。そうした登高心は明に部全體のものとなつた樣に思はれた。本統に部が動いてゐると云ふ事は、こんな事實を言ふのかも知れない、とわれ〳〵には感じられた。そこには漫然乍ら全體と言ふものゝ力强さが感得されてならなかつたのである。

そして今迄われ〳〵が考えてゐた、鋭き山への登高心とあのしめやかなる激情との調和を課題とした團體主義的登山の樣式と云ふものは、もう單に手段とか方法とか云ふ言葉では表現することの出來ない尊いものゝ樣に思はれて來た。それは自分達がその裡に在つて生きて行くことの出來る、生に最も根源的なるデイメンションである樣にみえてならなかつた。そして今部全體のものとして生きてゐるこの大きな迫力こそ、逆に個々のメンバー率き具して行く創造的な魂であるかの如くに感じられた。それは本統に新しい發見であり、われ〳〵が眞にその中に生きて甲斐ある新しい登高の場として相應しい樣に思えてならなかつた。自分達は全くそこに部の脈動と云ふものを信じ、一つのイデーに光被されて來た輝しい次元を頭に描いたのである。自分達は山がホツホベルグとして價値ある事を見出し得、そして高き山岳の中の自然の美を讃えることを得る人間として生れたことを、この時程嬉しく感じ得た時は無かつた。

そうした深い眞面目な問題に因はれた數刻が過ぎた。自分達はそれだけの考で滿足してゐた。部が新しい進路を見出した樣に信じられただけで、本統に苦心して涸澤に入つた甲斐があつ

たと思はれたからだつた。冷い夜の微風が岩の上にゐる吾々の肩を時々過ぎては去つて行つた。仰ぐ天界に散る星辰の數は彌々増加して、底ひなき星月夜の空にあやしくも照りひろがつてゐた。幾十世紀となく此の涸澤の上空に耀き續け、然も尙今輝きゐる永遠の光を友は靜かに仰いだ。何處かに夕立でもあるのか、常念の空の彼方に時折雷光がしてゐた。冷い夏の夜は更け行くまゝにしつとりとして心清しく、明日立たうと言ふ連中は何となく心惜まれて天幕に入らうとしなかつた。彼方に散在してゐた他校のテントの灯も消え、たゞ星屑のみ輝ききはまる涸澤の岩底に、友の影が三、四孤り空を仰いでゐるのだつた。

（一九三七・五）

追悼

湯田坂哲君

略歴

大正四年八月卅一日　北海道茅部郡森町に於て誕生。
昭和八年四月　東京商科大學豫科入學。
同　年五月　一橋山岳部へ入部。
同年十二月廿五日――同九年一月三日　五色溫泉スキー合宿
（青木小屋へ）
昭和九年三月八日――廿一日　野澤溫泉スキー合宿。
昭和九年十一月廿五日　岩殿山へ。
昭和十一年三月廿二日　本郷順天堂醫院にて永眠す。
遺骨は郷里なる信州八ケ岳山麓北山村の小丘に埋葬す。

亡き湯田坂のこと

佐々木　誠

三月も末の頃、空風が頻りと窓を鳴らしてゐた朝であつた。私は餘りにも突然な湯田坂の訃報を受けたのである。其頃ゆくりなくも病院生活をしてゐた私は早速にかけ付ける事もかなはずに、訃報を手にして、只言ひやうのない衝撃に打たれてしまつた。生來病弱には見受けられたものの、持前の氣强さから推して も到底死などは信じられぬ事だつたから。君は二三週間と言ふもの死を賭けて病との激しい闘を續けた後に、華々しくも悲壯な若武者の最後のやうに、横溢した覇氣と希望とを懷いたまゝ散つて行つたと聞く。あの時一度でも良いから君の病床を尋ね、一言でも良いから君を慰め勵ますことが出來たらと、返らぬ悔に本當に胸をかきむしられる思がするのだ。

あれから早くも一年餘りの月日が過ぎてしまつた。併し病床に見舞ふ事の出來なかつた私には、餘計に君の元氣な頃の面影のみが、今尚眞新しく浮んでくるのである。思出は四年前に遡る。其頃豫科のあつた石神井が丁度今のやうに青葉に包まれる頃であつた。入學の喜と新しい生活への希望とで、誰もが何かやつて見度い氣合に燃えてゐる時、君はひたむきな山への熱愛から山岳部に入つた。最初君とは同じクラスではありながら座席の離れてゐたせいもあつて、餘り話交はす事も無く半年は過ぎてしまつた。其の夏山から私も山岳部の末席をけがすやうになり豫科も移轉して、通學の途上時々君と出會つては話合ふやうになつた。やがて、澄んだ秋の日には車窓から富士の姿や近くの山々が眺められるやうになつた。こんな日には定まつて話題は山の話へ移つて行つた。けれどもかう言ふ話の端々にも君特有の熱情と、何處となくしつかりした深みのある風格が窺はれ

るのであつた。

其年の冬と翌春、君はスキー合宿に參加されて、北海道生れの君が心にくく滑り廻つて皆を口惜しがらせたと聞いてゐる。其後君は不幸にして健康を害つて思ふやうに山へ行く事は出來なかつた。從つて單に記錄から見た君の山は成程貧弱であつたかも知れない。しかし君が山に對し、又部に對して持つてゐた眞摯な熱情を知る者は少からず敬意を表し、又同情もしてゐたのであつた。君は又明朗で誰にも好かれた。部室で又クラスで君が獨特のユーモアを交へて談笑してゐる時は、よく病身の人にあり勝な淋しさなど微塵も見えなかつた。さうしたものは君の氣强さに押かくされてゐたのかも知れない。後になつて君の遺稿の中から、病中の作であらうか、

無理やりに食ふを知らざる吾父の
笑顏眺めて我も笑ひき

と言ふのを見出して本當に暗然としてしまつた。

君と共に山に入る日を樂みにしてゐたのに、遂に其の機會も到來せずに終つた。既に神に召された君の魂は美はしい八ヶ岳山麓の小丘に靜かに眠り、ひそかに部の事を祈つてくれてゐるであらう。（一九三七・五）

關根　修君

略　歷

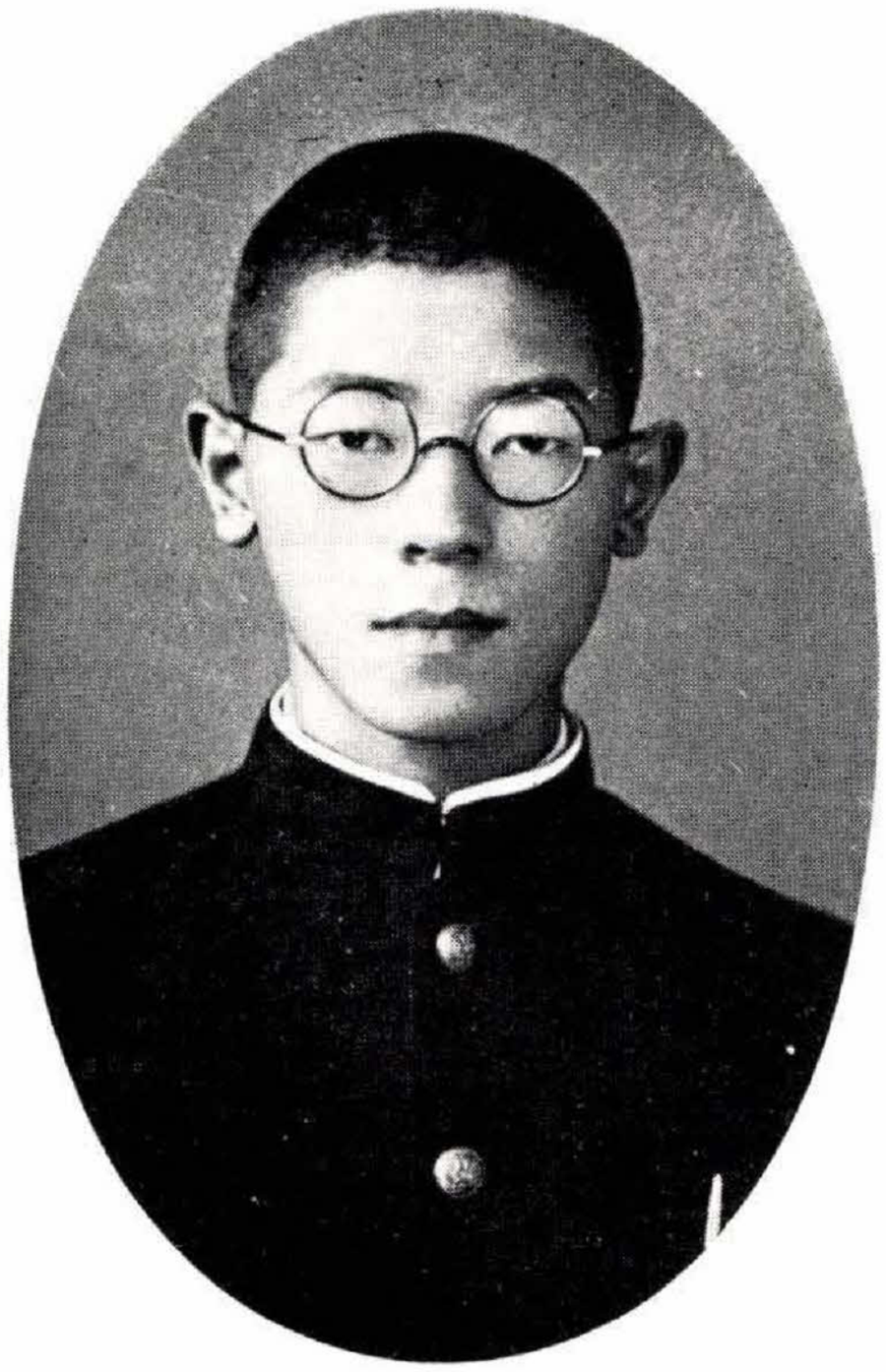
大正六年二月廿二日　誕生
昭和四年四月　東京府立第一商業學校へ入學
昭和十年四月　東京商科大學商學專門部へ入學
同　年六月　神津牧場行
昭和十一年一月　一橋山岳部へ入部
同年一月廿五、六日　富士山スキー行
同年三月十三日——十七日　野澤溫泉スキー合宿
同年三月十八日——廿日　木曾御嶽
同年五月十日——十七日　立山及劒岳
同年七月十二日——廿日　穗高涸澤合宿（奥穗高、涸澤槍側稜ヂヤンダルム、北尾根等に登攀）
同年十月廿一日　房州館山にて永眠す。

關根修君と私

松浦靜雄

修君、君は突然この世を去つて後に殘された私が御靈前に御悔を述べなければならぬ事となつてしまつた。無二の親友に先だたれた私の悲歎は想像にあり餘るものがある。忘れもせぬ拾月廿二日の朝、私は君の死に驚かされねばならなかつた 僅かそ

故　湯田坂哲君



故　關根　修君

の三日前平素の元氣な君に會つて居た私にはどうしても信ぜられない事であつた。幾度か打消しては見たものゝその確報なるを知るに及んで、あまりの意外さに啞然として涙にくれるのみであつた。

君は私にとつて、あらゆる方面で切つても切れない關係にあつた。其の交友の度はありきたりの交友のそれとは比較する事の出來ぬ程深く、君の面影は私の腦裏深く、一生涯去り得ないであらう。否、君は終生忘れる事の出來ぬ私に對する存在であつたと云はれるのである。今思出を辿りつゝ筆を走らせて居ると涙は新しく瞼より浮び出て紙面をぼやかし運筆の進度をとゞめしめる。

二人で行つた初めての山旅は、たしか昨年六月の事であつた——それ以前にも君は毎年冬になると眞黑になつて、スキー地から歸り、種々な事情で行く事の出來なかつた私を羨ませながらせたものであるが——日增しに暖かになつて行く六月のある日曜の早朝、私達は未だ明けやらぬ眞暗な輕井澤の町を、折からの濃霧をついて勇んで歩いて行つたのだつた。何處か靜かな所へ行つて思ひきり歩いてみ度いと云ふ君の提案で神津牧場を訪れる事になつたのである。快晴に惠まれた日で八風山からの眺望は素晴らしいものだつた。アルプスの容姿に感激した君が、「この次は如何しても南へ行くんだ」と息まいてゐたのに、その南へも行かぬ中に君は、歸らぬ旅に去つてしまつた。其時以來君は山に對して深い興味を持つ樣になつて行つた。然し嚴格な家庭に育つた君には友達と山へ行く事等許されぬ事であつたらうし、又、私もそれを考へ强ひて誘ふ事も出來なかつたのだ。其爲昨冬の乘鞍合宿には何故誘はなかつたのだと、隨分と後から君の怨を買つたものだつた。

今年の一月の事であつた。「いよ〳〵山岳部へ入ることが出來るぞ、親父のお許しが出たんだ」と君は小躍りして私のところへやつて來た。君の入部歡迎登山を兼ねた山行が同月の富士であつた。其時の大澤の雪質は絕好でゲレンデで育つた君が雪煙渦卷く大澤の廣大な斜面に肝をつぶして滅茶苦茶に轉がつて居た有樣や、歸途の登山道滑降では最後にとり殘され雪だるまになつて夢中で降つてきた君の姿等鮮やかに瞼の裏に殘つて居る。「アイゼル」「ピツケン」等と皆を笑はせたのもその頃の事であつた。それからも嚴しい家庭に育つた君は山へ行くには相當苦心して居た樣に思ふ。私が山へ行く度に「君は圖々しくて得だなあ、俺は氣が小さくて如何も云ひ出せないんだ。損な性分なんだな」と口惜しさうな顏をして見送つて呉れたものだつた。君が突然短かい一生を終へると知つてゐたならば、もつと君の愛してゐた山へどし〳〵行かせたかつた。もし行つて居たならば……等と盡きせぬ口惜しさが沸いてきて殘念でならない。

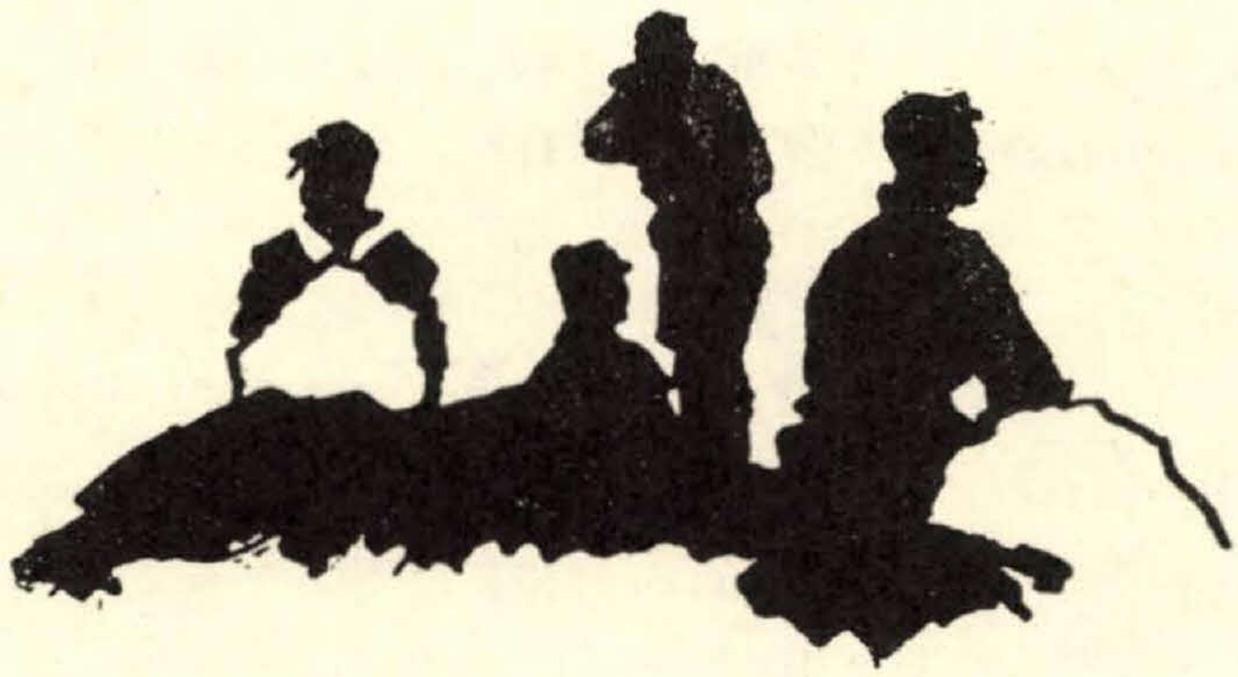
三月の野澤合宿、木曾御嶽登山、五月の立山劒、今夏の涸澤

合宿等皆行を共にした山行である。野澤小唄に聞き惚れて懸命に口吟んでゐた君、御嶽頂上で得意のライカのフイルムを切らして地獄谷の絶景を撮れなかつたと地團駄踏んだ君、スリップの練習をしそこなつて素頓狂な叫をあげた君等々思出せば限りがない。五月の立山劔は一緒に行つたもの〻中でも殊に印象の深いものである。重い荷で良く頑張つた君だつた。連日快晴に惠まれ愉快な一週間を送る事が出來たが、歸京後顏の黑いのには當分の間苦しめられたものだ。山毛欅坂の手前でスキーを着けた途端にスピツツエを折つて、くさりながらボコボコすさまじい格恰で歩かねばならなかつた君の姿や、裸で雄山へ登つた時の珍な眺め等瞼の底に鮮やかである。或る夜、それはたしか先發隊と後發隊とが鏡石小舍で合した日であつた。小舍の隅から誰やらが見付け出した、得たいの知れぬ濁酒に暖まりながら怪談に花を咲かせ君が怖がつて一人で便所に行く事が出來ず、蒲團をかぶつて寢てしまつた事を思出す。君は常に一行の人氣者で數々の面白い傑作をやらかしたものだつた。君と話して居ると自然に氣分が慰さまつて朗らかになる事が出來ると皆で大笑したものだ。

今夏の夏山合宿が、君と私との最後の共同生活となつてしまつた。「此次は何處に行かうか」と話し合つた君も最早如何する事も出來ぬあの世の人となつてしまつた。

あゝ君はもう此世には居らぬのだ。しかし私にはあの元氣な君が今尙其儘瞼について死んだ樣には思はれない。否生きて居て何處からかひよつこりと現はれて來るとより思はれないのだ。運命とか壽命とかに片附けるべくあまりにも悲しい事實である。今更ながら人生無常を感じ、後に殘されたる者の悲哀を感ぜざるを得ない次第である。

靜かに君が瞑福を念じつゝ思出の一端を記して新しく浮び出る哀悼の涙と共に君が靈前に捧げる。（一九三六・一一・一六）



記　　錄

1935.9——1937.3

登　山　記　録　索　引

記録中非常に簡單なもの、スキー行等ははぶいた。ゴヂツク字は登山の月を示し(　)内の數字は頁數を示す

北アルプス

白馬岳…… 11(7)
五龍岳…… 3(62, 65)
鹿島槍荒澤奥壁……5(28)3(62)
八方尾根……12(8)1(60)
立山劔岳…… 5(26, 27)
蔦谷藥師槍…… 8(41)
前穂高(奥又白ヨリ)……11(50)
前穂高(明神澤ヨリ)…… 7(35)
前穂高北尾根…… 7(32, 33, 34)10(1)
前穂高北尾根(奥又白ヨリ)…… 1(15)
北尾根三峰フエース…… 7(35)
西穂高岳……12(14)
天狗岩…… 7(36)
ヂャンダルム…… 7(33)
ヂャンダルム飛騨尾根……7(33)10(1)
涸澤槍側稜…… 7(33)
北穂高側稜…… 7(33)
北穂高(横尾本谷ヨリ)…… 7(33)
瀧谷第四尾根…… 7(35)
瀧谷第五尾根…… 7(33)
槍(東南面)ヨリ蒲田川…… 7(38)
槍烏帽子…… 7(38)
槍　燕…… 7(37)
大瀧蝶常念…… 7(36　39)
乘鞍岳スキー合宿……12(11, 56)
木曾御岳……1(17)3(23, 24)

南アルプス

北岳バットレス第一尾根…9(44)1(54)
同第三尾根…… 12(8)
同第四尾根…… 9(44)10(3)1(55)
同第五尾根…… 9(44)11(3)12(8)
鳳凰越え……9(43)10(3)12(10)
鳳凰地藏岩……9(44)10(5)
甲斐駒ケ岳…… 5(28)10(47)
仙丈岳…… 11(47)3(21)
鋸　岳……10(47)
白峰三山縱走…… 9(45)
北　岳……12(54)
間ノ岳…… 1(55)
赤石岳惡澤岳大井川西俣…… 8(40)
鹽見岳ヨリ白峰…… 9(43)
野呂川溯行…… 3(19)
大武川溯行……10(46)

八ケ岳附近

阿彌陀、赤、權現…… 4(25)
硫黃、横、赤、權現…… 6(30)
硫黃岳……11(48)
蓼科山…… 7(39)

秩父方面

將監峠雲取山……6(30)10(2)
甲武信岳…… 10(2)
琴川ヨリ國師岳……10(46)
栂峠二子山…… 8(42)

富士山・東京附近

富士山…… 5(26)11(49)
三ツ峠岩登……7(31)10(1)
愛鷹山…… 8(42)
小金澤黑岳雁ケ腹摺…… 4(25)
大藏澤ヨリ大藏高丸…… 9(45)
丹澤連峰…… 6(31)

上越・上信・東北

谷川岳マチガ澤…… 6(30)
尾　瀨…… 8(40)
袴ケ岳越え…… 3(21)
野澤スキー合宿…… 3(22)
鳥海山……1(59)3(61)

乘 鞍 岳 位 ケ 原　　小谷部全助

昭和十年度（一九三五・九——一九三六・三）

荒船山

榎本直司

一〇、三　晴　市野萱（五、〇〇）——小屋場（六、三〇）——船の尻（八、三〇——荒船山（一一、〇〇）——小屋場（〇、三〇）——牧場（三、〇〇）

日光の直射を受けて汗グッショリになつたが、眺望よく荒船でゆつくりとノビて氣持のよい一日を過した。

三ツ峠岩登練習

柿原謙一　小林重吉　森脇芳之　和田榮達　外一名

一〇、一六　曇　新宿（一一、五五）

穂高へ入る小谷部と同車、元氣に發つ。

一〇、一七　曇時々雨　小沼（三、三〇）——ダルマ石（四、二〇——六、〇〇）——山ノ湯（七、二〇——八、三〇）——岩登練習——頂上茶屋（一〇、〇〇——一、三〇）——山ノ湯（二、〇〇）——小沼（三、四五）＝歸京

九月以來の雨で路惡し。今度新しく出來た山ノ湯にて一休後、岩登練習にかゝる。折惡しく雨の襲來を受け、ホールド不安定なるため、オーディナリイ・ルートを登りし外、別に練習せず。霧と雨をかこち乍ら頂上茶屋に憩ひ小沼驛に下山す。紅葉盛りにして美し。（柿原）

前穂高北尾根　ジャンダルム飛驒尾根

小谷部全助

一〇、一七　曇後雨　松本——上高地（一一、〇〇——二、〇〇）——德澤小舍（四、〇〇）

西糸屋で晝食。奥原守や今田由勝達と炬燵を圍んで四方山の話が盡きない。

一〇、一八　曇後吹雪　德澤（七、〇〇）——下又白谷——德澤（九、〇〇）——奥又白谷瀧下——戻る——横尾岩小舍（一一、三〇）——涸澤池平ビバーク

豫定の如く奥又白の池へ野營しやうとしたが風雨烈しく中止。涸澤出合を過ぎると凄い吹雪に變り池平の岩蔭へ避難する。圈谷はゴーゝ鳴り雪は見る間に積つて行く。

一〇、一九　雪　池平野營地（七、二〇）——穂高小舍（一一、〇〇）

積雪一——二尺。所々腰迄もぐるラッセルに一人でもがいた。尾根へ出ると一面のシュカブラで小舍も岩も美しく裝飾されて居る。早稻田の方達その他で小舍は賑はふ。

一〇、二〇　快晴　穂高小舍（六、二〇）——圈谷——北尾根五、六のコル（八、二〇）——四、五コル（九、一五）——三、四コル（一〇、〇〇）——三峯上（一一、五五——一二、一〇）——前穂高頂上（一二、二五——一、三〇）——奥穂頂上（三、一五）——穂高小舍（三、四〇）

モルゲンロートの美觀に惠まる。朝零下七度。五、六コル迄ラッセ

ルでへばる。北尾根は新雪で意外に悪かつた。アイゼンは利かぬし、鋲靴の儘だと滑る。ホールドは融雪を載せた氷で樂ぢやない。四峰の一部と三峰はザイルで自己確保をし乍ら愼重に行く。單獨のクレッテライは仲々面倒だ。素的な眺望を喜び乍ら前穂で晝飯。雪が深いので全然尾根通し奥穂へ。

一〇、二一　快晴　穂高小舍（九、一〇）——奥穂（一〇、〇〇——一〇、四〇）——ジャンダルム（一一、三〇——一二、〇〇）——飛騨尾根下降——第三テラス下より西方ルンゼへ捲く（一、五〇）——ルンゼ登攀——ジャンダルム西方のコル（三、〇〇）——往路の尾根を戻り奥穂着（四、一〇）——小舍、四、三五——五、〇〇）——横尾岩小舍（七、一〇）

今日も亦凄い天氣だ。餘り眺望が好いので奥穂の上で四十分も伸びて了つた。ジャンダルム迄の雪稜は相當に悪い。殊にロバの耳の北側を捲く邊は愼重を要した。飛騨尾根も一面にシュカブラと新雪をかぶつて非常に悪かつたが、ビレイイングピンが豊富なので一々アブザイレンで安全に降れた。捨縄を使はぬので後でザイルをはづすのがえらい苦勞だつた。第三テラス下邊りから這松地帶になり初めつまらなくなるので西のルンゼから歸る。このルンゼ、大體雪はしまつて居たが所々ぶかりと腹の邊迄もぐる所があつたり、二米位の氷だらけの瀧が出て居たりして餘り樂ぢやなかつた。瀧をバランスも糞もなく、もがき攀ぢる顏へ氷片やシュカブラが絶えずカラ〳〵とぶつかつて落ちて行く。

一〇、二二　晴　横尾岩小舍（九、二〇）——徳澤（一〇、五〇）——上高地——西糸屋（一二、三〇）——歸京

朝、岩小舍から仰ぐ白銀の南岳は日本の山とは思はれぬ程偉大で美しかつた。足の踵を痛めてビッコひき〳〵上高地へ急ぎ辛ふじて汽車連絡バスに乘れた。

大菩薩峠附近

岩崎利一　原鐵三郎

一〇、二〇　快晴　鹽山（四、二〇）——番屋——大菩薩館（七、二〇）——大菩薩嶺（九、三〇）——大菩薩峠（一一、三〇）——姫ノ湯山ノ家——鹽山（二、五〇）

思ひがけない快晴に惠まれて、山腹のカヤトに晝寢する。初雪で目立つ富士から、南アルプス全山に亘つて、眺望をさへぎる何物もなし（原）。

雲取山より將監峠へ

大塚　武

一〇、二〇　晴　氷川——六ッ石——雲取山——武州雲取小屋

一〇、二一　晴　雲取小屋——大洞山——將監峠——三瀬——犬切峠——落合

一〇、二二　晴　落合——柳澤峠——鹽山

急に行きたくなつて米と味噌とを持つて出かけた簡單な旅である。よく晴れて南アルプス、富士等眺望絶佳であつた。

甲武信澤溯行

林俊介　柿原謙一

一〇、二〇　晴　上野驛（一一、五〇）

耐えても「山への思慕」は耐え得ぬものか、二人は卒然として想ひ出深き米原行きの汽車の人となつた。行先は紅葉の秩父――

一〇、二一　快晴　小諸驛（六、〇〇）――信濃川上驛（八、一五）――梓山（九、〇五――一〇、〇〇）――モウキ磧（一一、一〇）――最奥の伐採小舍（一、三〇――二、〇〇）――甲武信嶽直下の二股（三、一五）――三寶、甲武信間の尾根徑（四、四〇）――甲武信嶽（五、一〇）――甲武信小舍（五、三〇）

美しい八ケ岳の姿を自動車の中から眺めつゝ、梓山に着く事の出來る時勢となつた。だが八丁原に入ればもう誰も居ない、そして紅葉は美しい金屏風を飾つてゐる。これより甲武信澤（原全敎氏地圖によれば西澤とある。）をつめるに從つて、懷しい栂や落葉松の森。だが其處には既に人の手が、次ぎ〳〵に切倒して行く破壞の姿があつた。最後の伐採小舍を過ぎ、踏み跡をたどる頃になる、そして小舍趾と思はれる甲武信直下の二股に來る頃には、全く心快い山の氣につゝまれサラ〳〵と流れる千曲の源流を愛でる事も出來る。これより左股から直ちに山のヒラを登り、一時間餘の藪くゞりを經て、甲武信の三角點に立つ。想ひ出の小舍に又着いては、山男の定められた仕事が始まる。夜は星月夜、明日も晴。

一〇、二二　快晴　小舍（六、一〇）――西破不三角點（八、〇〇――八、三〇）――雁坂峠（九、四〇――一〇、〇〇）――黑岩尾根――豆燒澤との出合（一二、三〇）――栃本（二、四〇――三、一〇）――落合（四、五〇――五、一五）――三峰口驛（六、〇一）――秩父驛

黎明の富士の姿をまずおろがむ。木賊ガレより南北の眺め美しく、穗高に新雪の來てゐるのを知る。雁坂峠でスルメを燒き、富士を眺め乍ら食べる。瀧川の暗い大きな溪谷のあちこちに紅葉が飾られ、唐松尾和名倉の姿がよく見える。此の日頑張り通し、遂に柿原宅に泊る。

一〇、二三　晴　秩父驛（五、三五）――上野（八、一六）

さゝやかな旅も終つた。「里人はさとも思はじおみなへし」。あの徑に、あの尾根に得た印象をなつかしみつゝ。（柿原）

大樺小舍生活（北岳バットレス第四、五尾根）

村尾金二（先輩）　小谷部全助　望月達夫　小林重吉　和田榮達
佐々木誠　西野博　岩崎利一　森田三雄　奥原守（人夫）

一〇、二六　少雨　新宿發（一一、五五）夜行

一〇、二七　雨後晴　韮崎（五、〇六――七、三〇）――祖母石（八、〇〇）――鳥居峠（一〇、〇〇）――青木鑛泉（一一、〇〇）

島々の奥原が行き度がつて居たので此の日韮崎で落合つて行く。雨に濡れながら鳥居峠附近の美しい紅葉を眺めつゝ歩いた。

一〇、二八　快晴　青木鑛泉（七、一五）――南精進瀧（八、四〇）――五色瀧（一一、〇〇）――北御室（一一、四五――一二、五〇）――賽ノ河原（二、一〇）――赤ヌケ澤の頭（二、四〇）――高嶺（三、三〇）――白鳳峠（四、一五――五、〇〇）――廣河原小舍（九、〇〇）

ドンドコ澤の紅葉と瀧は美事。鳳凰からの眺望も良かつた。白鳳峠の下り口から夕闇に追ひ附かれ、ラテルネをたよりに下る。

一〇、二九　快晴　最低（―∞　廣河原小舍（九、三〇）――大樺小舍（一、〇〇）

大樺小舍には上條孫人を連れた青學の方達が先着して居た。

一〇、三〇　快晴　最低 C—7

(1)　バットレス第四尾根(村尾　望月　小林)

小舎(六、一〇)——長衛の岩小舎(六、四〇)——バットレス下(八、二〇——八、五〇)——岳樺のテラス(一一、〇〇——一一、三〇)——マッチ箱の稜線へ出る(二、二〇)——マッチ箱をアプザイレンで降下し終る(四、〇〇)——最後の惡場終り(五、〇〇)——北岳頂上(五、二〇——五、三〇)——小太郎尾根より下りし地點(八、三〇)——澤と路とクロスする處(一〇、三〇)——小舎(一一、一五)

取附きは去る六月小谷部等が第三尾根を登つた時より僅か左手を攀る。第四尾根はマッチ箱に出る迄は第三尾根側を登り、マッチ箱の處でリッヂに出た。それからはリッヂ通り登り最後のスムース・スラブはトップが裸足になつて處理した。マッチ箱を終へ右手へ這入つたルートをとつたので非常な惡場にぶつかり突破するのに骨を折る。(然し後日このルートよりも直かにリッヂ通り登つた方が樂な事が判つた。)それを終へればあとは簡單で三角點の少し南で稜線へ出た。既に日沒となり、大樺小屋への下り口を見失ひ、小太郎山の方に行き過ぎて下つた爲、結局小屋より下方で廣河原からの道に交叉し晩く歸へつた。

(2)　バットレス第六尾根(和田　佐々木)

小舎(六、一〇)——バットレス第五尾根下(八、一〇——八、四〇)——第五を登り途中より引返す——第六を登る(一〇、三〇)——頂上(一二、三〇——二、〇〇)

(3)　バットレス第七ルート(小谷部　岩崎　西野　森田　奥原)

小舎(六、一〇)——岩小舎(六、四〇)——頂上(一一、一〇——二、〇〇)——(2)(3)共に下る——小舎(三、一〇)

此の日青學の方達下山。奥原も用事ある爲、一足先に頂上を去りて山を下る。

第四尾根に行きし一行三名の歸舎おそき爲、萬一を顧慮して夕食後防寒具、食糧を持參し小谷部、和田の兩名夏路より頂上に至り、殘し置きし食物の費されしを知り一先づ安心したが更に北岳小舎に至る。深夜なりし爲兩名其處に一泊す。

小舎(後七、〇〇)——北岳(一〇、〇〇)——北岳小舎(一一、〇〇)

一〇、三一　快晴　最低 C—8.5

一同のびる。多分北岳小舎に居るのだらうとは思つたが、念の爲に望月、佐々木迎へに出んとせし頃、大樺澤の方より小谷部、和田歸へる。

北岳小舎(八、一〇)——釣尾根へまく——最低コル(九、二〇)——大樺澤——大樺小舎(一〇、五〇)

此の日早朝、村尾氏、小林下山。廣河原より五葉尾根に至らんとして道を失ひ、此の日は廣河原に一泊。一日に白鳳峠を經て、韮崎に至る。

一一、一　快晴　最低 C—7

バットレス第五尾根(小谷部　望月)

小舎(八、一〇)——岩小舎(八、四〇)——岩壁下(一〇、〇五——一〇、二〇)——中食(一二、四〇——一、〇〇)——北岳頂上(一、五〇——二、三〇)——小舎(三、五〇)

第五の尾根は第四等に比すれば非常に容易であるが、此の時分は

ガリーの底に僅か乍らも氷がつき一寸注意を要する。dガリーの兩側をなすフエース(主に第四より)は面白い岩登りが味はへる。

尙、佐々木は小谷部等と一緒に途中迄行き、別れて釣尾根で寫眞をとり正午時分頂上に至る。又、西野、岩崎は八、三〇に小舍發、夏路を經て一一、三〇に頂上着。西野獨り間ノ岳に向ひしも、ガスまき出した爲引返へし、五名一緒に下る。おそくも今日あたり後發隊が來る豫定なるも來らず。

此の日早朝、和田、森田兩名下山。五葉尾根道に迷ひ、此の日は廣河原に一泊。二日に大樺小舍にもどらんとして再び迷ひ廣河原に泊り、食糧缺乏せし爲、苦勞して三日白鳳を越へ青木に一泊して、四日に歸京す。

一一、二　晴　大樺小舍(一一、〇〇)——廣河原小舍(一、〇〇)——五葉尾根道へかゝる(三、四〇)——露營地(九、四五)

最後迄のこりし小谷部、望月、西野、佐々木、岩崎下山す。廣河原より五葉尾根への道は判りにくい。私達の辿つたまゝを記せば廣河原の小舍から少し下流を徒渉して對岸に渡り、暫く左岸を下つてゴーロ澤のオイを越して赤ヌケ澤へかゝる時右岸に渡り(丁度丸木のかけ橋あり、然らざる時も徒渉可能)約二、三丁河原のゴロ〳〵石の間を下つて、赤ヌケ澤より一つ下流に、これとほゞ平行せる澤の出合あたりで更に左岸に徒渉した。この附近は水流が二股に分れて居る。左岸を少し下ると、二ケ所位惡い所があるが間もなく、五葉尾根道と書いた白エナメルの札を見出すであらう。此處迄は出來るだけ水線に忠實に下れば間違ひはない。オイを高廻りすると迷ひやすい。

此の日は五葉尾根小舍の近く迄來て居るとは知りつゝも、時間おそき爲、程良い處で露營する。

一一、三　晴　露營地(七、〇〇)——五葉尾根小舍(七、四〇——一〇、〇〇)——杖立峠(一〇、五〇——一一、〇〇)——芦安村發電所(一、三〇——二、一五)——甲府

杖立峠から白峰三山に別れをつげ、紅葉たけなはの芦安村へ下る。發電所にてはじめて地藏佛に於ける森川のアクシデントを知り、驚ろいて急ぎ歸京する。

此度の行は大部前から計畫されて居たもので、林、柿原、森川達の後發隊が一緒になれば、もつと理想的にいつた事と思ふ。冬のルートの偵察も大體うまくゆき、冬山の食糧も豫定通りあげ得た。(望月)

鳳凰山地藏岳

林俊介　柿原謙一　森川眞三郎　高原龍雄　新羅二郎　大塚武
毛塚由太郎　齋藤明智　秦良平　日江井正巳　內田素彦　平賀彦太郎(人夫)

一〇、二九　新宿驛(一一、五五)

大樺小舍秋季合宿に向ふ。第一班に合流の豫定。

一〇、三〇　快晴　韮崎驛(五、一六)——祖母石——青木鑛泉——ドンドコ澤——北御室小舍(四、〇〇)

秋晴れの空の彼方に金峰の五丈岩まで判然と見え、美しい佳き秋の日であつた。ドンドコ澤の紅葉好し。

一〇、三一　快晴　小舍(八、〇〇)——賽ノ磧(九、〇〇——一〇、〇〇)——地藏岳オペリスク登攀に際し森川スリップす——賽ノ磧(一〇、三〇——二、三〇)——北御室小舍(四、〇〇)

オペリスクの岩登りは森川、柿原の二名にて行はれたのであつたが、既にもう一息と言ふ所で森川スリップして頭部及足部に負傷す。賽ノ磧に降し應急手當を施し、一同大樺小舍行きを中止し、再び北御室小舍に引返す。彦太郎を下山せしめ、森川下山の手配を託す。

一一、一　快晴　北御室小舍滯在

昨夜以來森川の熱高きも、本日元氣を恢復す。頭部と足部を冷す。午後一時頃村尾先輩、小林重吉の兩名廣河原小舍より下山するに遇ふ。夕方人夫雨宮文之助來りしも、森川背負下しの準備不完全なり。一同平賀彦太郎を難ず。森川食慾出で、林檎を食す。元氣なり。

一一、二　快晴　小舍(九、〇〇)——南精進ヶ瀧(一二、四〇——一、二〇)——青木鑛泉(五、五〇)

高原、新羅、一年生を歸京せしめ、林、柿原森川に付き無事青木鑛泉迄下山し得たり。是雨宮文之助の努力に負ふこと大なり。夜韮崎町醫師秋山氏、部員鷹野雄一青木鑛泉に來る。鷹野の報告により、杉浦德次郎先生、岩田事務官、森川實父及び學友數名案じて韮崎町清水屋旅館に在るを知り、森川の診察を待つて柿原下山、林、鷹野、秋山醫師文之助鑛泉に殘る。

一一、三　快晴

晝頃森川無事韮崎町に下山す。柿原實父來韮。杉浦先生、岩田事務官歸京せらる。一同清水屋旅館に殘り一泊。森川元氣にして、醫師の報告又比較的に樂觀的なるため、漸く安堵し得たり。

一一、四　曇後雨　韮崎驛(二、〇六)——新宿驛(五、五〇)

秋山醫師の言により、歸京し得るとのことにて、一同森川と共に歸京す。車中元氣なり。立川にて在京部員數名の出迎へをうけ、直ちに慶應病院に入院す。(柿原)

(附記)　卅一日謙兄と二人で地藏佛へ。始めに二つ程小さなクラックを越して登つた。これからは一寸見た處登れそうにもない。がとりついてみると豫想外にホールドがよい。直に三、四米登つた。それからがいけない。指先はこゞる。四肢は疲れる。一度下迄下り手を暖め一息ついて再びとりついた。ホールドの惡い處は膝と肘のフリクションが僅に助けになる。あと二米の處までずり上つたが、ホールドは愈々惡くなつた。指先が三本位しかかゝらない。指の感覺もなくなつた。併し何の危氣もない。ふとみると上衣のポケットから半分覗き出たパイプが落ちそうで氣になつた。之が今になつても妙に頭にこびり付いて居る。更に一米程ずり上つた。あと二三尺だ。日光を受けて白く光る頂の南面が手のとゞく樣な處に見える。ホールドは全くない。手の方は大分賴りなくなつた。何糞！　爪先に全身の力を込めた。一瞬左足がずるり滑つた。了つた。併し心は案外落着いて居る。下のテラス迄そのまゝずり落ち樣と本能的に身を岩にすり附け樣と努力した。途端に世界が一廻轉した。駄目だ!!　併し尙希望はすてない。次の瞬間には何となしに唯助かるなと思つた。遠くの方に逆樣になつて山が見えた樣な氣がする。一秒にも足りない間のことである。瞬間大きな衝擊が、がーんときた。世の中が急に眞暗になつた。

「オーイ」「オーイ」遠くの方で誰かゞ呼んでゐる。ふと眼が覺めた。深い〳〵眠りからさめたのだ。身を起さうとしたが之はどうした事だ。體が全然動かない。呀！　俺は地藏佛から墜落したんだ。途端に又叫んでゐるのが聞えた。鋭い聲が邊りに反響するのが快く耳に響く。「森川！　大丈夫か」謙ちやんだ。「うーん」自分では答へた積りだが聲が

出ないらしい。上で頻りに呼んでゐる。氣は不思議な程冷靜だ。血の滲んだ手を泌々と眺めた。俺はまだ生きてゐるんだ。右手がぶら〳〵で全然感じが無い。と下の方で人の氣配がする誰やら懐しい顔だ。急に思ひ出せない。あゝ林君だつたつけ。一瞬家の母の顔がさつと過ぎつた。さうだ、俺は大變な事をして了つた。私の心は急に忙しくなつた。昔の事、家の事、學校の事がごつちやになつて頭をかけ廻るその時私はもう獨りでは何うする事も出來ない慘めな遭難者だつた。

それからの皆さんの厚い〳〵友情は一生忘れる事が出來ない。いくら書いても書ききれない。私は其處に一つの新らしい世界をさへ見た樣な氣がします。單に生きて居ると云ふだけでなく、生きて居たいと思ふ世の中を感じました。それは又永い〳〵苦痛を通して初めて知り得たものです。報酬を求めない努力、それは何と美しいものであらう又何と尊いものであらう。

この遭難の節は外部の方々をはじめ、針葉樹會員の皆樣にも御心配をかけ申譯御座居ませぬ。尙其後の御厚情は全く感謝致して居ります。幸ひ約一ケ月の病院生活後漸時快方に向ひ半年後の昭和十一年四月から再び元氣で山に精進してをります。（森川記）

大菩薩峠　小金澤山

大塚　武

一一、二二　晴後雨　鹽山（四、〇〇）——雲峰寺——大菩薩嶺——石丸峠——小金澤山——嵯峨鹽鑛泉——初鹿野（五、〇〇）

黑岳を經て大峠の小屋へ泊り雁ヶ腹摺まで行くつもりであつたが、小金澤山で猛烈な雨に降られて嵯峨鹽へ下る。

白馬岳スキー行

吉澤一郎　村尾金二　松木謙三　近藤恒雄　增山清太郎（以上先輩）鷹野雄一　小谷部全助　原鐵三郎　岩崎利一　松浦靜雄

一一、二三　曇小雨　大町——ハイヤー——二俣發電所前——猿倉スキー小舍

先日相當降雪があつた相だが昨今の雨や暖氣で隨分減つて居る。スキー小舍で晝食後、馬尻附近へスキー練習に行く。猿倉の少し上から一面の積雪。ザラメで面白く、本シーズントップのスキーを堪能する錚々たる先輩群に現役連中すつかり押さる。夜は先輩持參の牛肉で盛大な牛鍋會を開く。

一一、二四　日本晴　スキー小舍（三、四五）——馬尻上（五、五〇）——六、〇〇）——村營小舍（一〇、五〇）——一二、四〇）——白馬頂上迄往復——猿倉（三、〇〇）——三、三〇）——二俣（四、四五）——ハイヤー——大町

二時起床。昨夜作つて置いた飯に熱い汁をかけて手早く用意出發。氣溫降下して雪面凍りスキーはトラーゲンしてアイゼンで登る。增山氏、日頃の氏にも似合はずアイゼンを猿倉小舍に忘れスキーで苦勞して居られる。滿天の星。やがて嬉しいモルゲンロート。先輩・現役足並そろえて愉快に登る。增山氏ネブカ平下の急斜でとう〳〵降參。お氣の毒だつた。遂に白皚々の村營小舍着。美味な晝食をほうばり乍ら四方の眺望に耽る。頂上からの劍立山、猫又方面全く良かつた。頂上小舍ド迄かつぎあげて置いたスキーをはいて滑降。此の邊は新雪なので實に快適である。村營小舍で記念撮影をして一同降る。雪は一向ゆるまず、折角かつぎ上げたスキーを又かつぎ下ろす。御苦勞樣だ。ネ

ブカ平下からは凍雪の上を横滑り交りのクリスチャニヤ、ボーゲンでシャーカラ〳〵と滑降。昨日練習した所もすつかり凍つてスキーは駄目。二俣へ五時頃來いと命じて置いたハイヤー三臺に豫定の如く便乘。夜の街道をぶつ飛ばして大町着。對山館に一先づ落付き、湯にほてつた體へ先輩御馳走の冷いビールを心地よく流し込み、陶然となつて夕飯。二十五日朝新宿着解散。今回の行に於いて現役一同非常に先輩方のお世話になつた事こゝに繰返し御禮申上げる次第なり。(小谷部)

大嶽山　海澤下り

小谷部全助　小林重吉　高原龍雄

一二、一　曇　瀧本驛(一〇、〇〇)——ケーブルカー——御嶽山(一〇、二〇)——大岳神社々務所(一一、四五——一二、五〇)——大岳頂上(一、〇〇)——海澤下降三ツ釜瀧(二、四五——三、〇〇)——鳩ノ巣(四、一〇)——バス——御嶽驛

近頃すつかり開けた奥多摩にいさゝか失望す。殊に私の少年時代かちの山の思出を數多く藏す懐しい山々だけに一層淋しく思つた。海澤は然し乍ら非常にプリミチブな感じを持つ面白い谷。此の谷位はこの儘そつと殘して置き度いものだ。(小谷部)

八方尾根スキー行

森脇芳之　塚本　駿

一二、七　快晴　四谷——細野(二、一〇)——黑菱小舍(五、四五)

積雪充分ならずスキーを肩にボク〳〵雪に足を取られながら歩いて行く。

一二、八　雨　黑菱小舍(九、〇五)——八方山(一一、三〇)——黑菱小舍(三、二〇)

唐松小舍を目ざしたが何處迄行つても雨なので八方山附近でスキー練習し濡鼠になつて歸る。

一二、九　雨後小雪　黑菱小舍(三、〇〇)——細野——歸京

午前中小舍の上方でスキーを練習し、午後下山す。(森)

北岳バットレス(第三、第五尾根)

小谷部全助　鷹野雄一　小林重吉

一二、七　晴　甲府——(ハイヤー)——大曾利、青木方(六、五〇——八、一〇)——カリヤス(一一、四五——一二、〇〇)——杖立峠(一、一五——一　四五)——五葉尾根小舍(二、二〇)

この秋に米、味噌等を大樺小舍へ上げて置いたにも拘らず、防寒具等で吾々のキスリングは超滿載。入り切れぬ荷物が不格好に結付けられる。精力をロスせぬ樣五葉尾根の小舍迄一名ポーターを雇ふ。今日のコースに雪は殆んど無いがカリヤスへ出る途中の日蔭等には三、四寸積つて冬らしい趣きを出して居た。杖立からの白峰三山は立派だ。森林帶の中段邊からくつきりと雪線をなして上部は眞白な嚴冬の粧をこらして居る。

一二、八　小雨後晴　五葉尾根小舍(八、二〇)——タティシ澤(二、〇〇)——シレイ澤岩小舍(四、五〇)

岩小舍には名取治太郎と久平が獵で泊つて居た。素朴な名案内人の話を聞き乍ら焚火に暖をとる氣分はなか〳〵宜しい。夜は名月が皎々と野呂川の河原を照す。

一二・九　快晴　シレイ澤岩小舍（八、二〇）——廣河原小舍（九、五〇——一〇、三〇）——大樺小舍（二、一〇）

大樺澤から夏路を池へ向ふ。路が横卷になる邊から積雪が急に深く、二尺位あつた。立木につけたナタ目の爲迷ふ事もなく雪を被つた懐しい御池の小舍に入る事が出來た。風もない穏かな日で屋根から落ちる雪ドケの滴りが徒らに邊りの靜謐を破るに過ぎない。こゝから仰ぐ北岳バットレスの偉容は言ひ表はし様もない程立派だ。小舍附近は大體二——三尺位の積雪で水も御池から得られた。秋荷揚げの時刈り取つて置いた枯草の布團は優秀である。

一二、一〇　曇輕い吹雪　min—11°C　大樺小舍（五、一〇）——長衞岩小舍（六、一〇——六、二〇）——バットレス直下（八、五〇——九、三〇）——第四、第五尾根間dガリーの氷壁登攀——氷壁上の雪溪（一、三〇）——引返す——岩壁下（二、一〇——二、三〇）——大樺小舍（四、〇〇）

今日はラッセルと偵察の日。大樺澤へ出る卷道も秋につけて置いた赤い布片等の爲深い積雪にも拘らず切り開きを少しも間違はなかつた。初めて冬の北岳バットレスに立向ふ吾々の心は自信と恐怖と好奇心を混合した様な興奮を感ずる。三人かはる〳〵ラッセルを頑張り漸く直下に出た時の驚き、氷雪に飾られたバットレスはまるで登攀の對象とは考へられぬ程いかつい。秋の偵察の通りdガリーから第四尾根をトラヴアースして第三尾根に取付く積りなのでガリーの氷壁にぶつかつて行つた。氷壁は實に立派で日本にもこんな所があるのかと嬉しくなる。ピッケルは山の内の新品なので小氣味よく切れる。これからの登攀の爲ステップも大きく立派にしたので案外手間がかゝつて了つた。アイスハーケンの頼もしい確保に依つて青いなめらかな氷壁を刻む氣持を味はへる所など日本にはさうあるまい。前からチラついて居た雪も本格的になりかけたので今日はこれ迄とし雪溪の間の露岩に辛くもピトンを打ち込みアブザイレンして氷壁中段のアンカレッヂ迄下り、其處の堅雪にピッケルを一本たゝき込んで殘餘三十米餘りの氷壁をする〳〵とアブザイレン。ザイルはそのまゝ次の登攀の爲殘す。

一二、一一　霧雪風強し　min—14°C　大樺小舍（四、四五）——長衞岩小舍（五、〇五——五、二五）——岩壁直下（七、〇五——七、三五）——氷壁登攀——上の雪溪（八、二〇——八、三五）——ガリー上部突當りより第五リッヂのテラスへ出る（一、三〇）——第五尾根登攀——北岳頂上（五、一五——五、二〇——池山釣尾根落込コル（六、〇〇）——大樺澤——長衞岩小舍（六　五七——七、一五）——大樺小舍（七、四五）

鷹野は調子が惡いと言ふので小林と二人で出發。氷壁は昨日のステップを樂に登る。其處で第四尾根をトラヴアースするのだが、秋に見ておいたバンドは雪がついて了ふと全然見當がつかず、大體感でバンドらしい且つ、最も可能性のある雪の急斜面にカッティングを初めた。幸ひ雪が堅かつたので薄いステップも崩れる様な事はなくやがてこのバンド的な雪の急斜の終點へ來た。即はち大きな逆層の岩に突當つてどうにもならない所なのである。然しこの一寸下部、この逆層の下から又バンド的な雪が續いて居るから其處迄下ればよい譯である。それにはこの岩層にピトンが打ち込めればよいので早速試みたが思ふ様にさゝつて吳れず長い間、苦心の結果やつと一本うまく成功して之に補助綱を垂らして置いて戻つた。調子がよかつたら第三を登らうと思つて

居たが準備工作に手間取り過ぎたので第五リッヂに變更。 dガリーの突當りの岩壁で之を突破すべく努力したが擊退され第五リッヂへトラヴアースして、 後は大した惡場もなく唯腰を埋める深いラッセルに息をはずませて上へ上へと頑張つた。 頂上へ出ると物凄い烈風で油斷すると吹飛ばされ相になる。 まるで巨人に突きとばされる樣な感じだつた。

一二、一二　晴烈風　min—16°C　滯在休養

寒い小舍の中、 焚火を圍んで三人のんびり話合つて暮したが第三尾根登攀に對する不安の爲流石に夏場の樣な陽氣さはなかつた。

一二、一三　晴　min—18°C　大樺小舍發(四、〇〇)——岩壁直下(六、二五——六、三五)——氷壁上(七、四〇——八、一〇)——第四リッヂのトラヴアース——第三リッヂ下のCガリーへ出る(九、三〇——九、五〇)——第三リッヂへ取付く(一〇、一〇)——第三リッヂ終點(一二、三〇)——惡場を一つ越して北岳頂上(二、二〇——二、四〇)——釣尾根落込コル(三、〇〇)——大樺小舍(四、四〇)

昨日トラヴアースの爲打つたピトンは良く利いて補助綱で安全にアプザイレンして下のバンドに這る事が出來た。 そしてカッティングを續けてCガリーに續く岳樺の小群生に達し、 其處で完全な確保をして小林、鷹野と順々にやつて來たが、 途中鷹野のピッケルバンド切れて彼のピッケルはアッと言ふ間に滑り落ちて了つた。 見て居るとピッケルは自分で見事にペッグを突立てゝブレーキをかけ皮肉にも氷壁上の雪の急斜面で止つて了つた。 こんな凄い所でよく止つたものだ。 だが殘された鷹野も不自由極りない。 否、 若し二人位のメンバーであつたならば遭難ものであらう。 第三リッヂは概して思つたよりも容易で惡場としてはリッヂ末端の岩場と最上部のテラスから頂上へ續く尾根へ出る所の岩場の二ヶ所位であつた。 共にピトンは利かず規模は小さいが可成り緊張した。 時間も早いし天氣は無風快晴と來て居るので非常に餘裕のある愉快な登攀だつた。

一二、一四　曇後雪　min—16°C　大樺小舍(一一、四〇)——氷壁登攀

鷹野のピッケルを拾ふ——小舍歸着(四、〇〇)

昨日落したピッケルを拾ひに鷹野と二人で氷壁登攀の練習だなどと負け惜みを言つて出發した。 小林は痔が惡く小舍に殘る。 三尺許りの杭を用意して行つて氷壁中段に打込み歸途のアプザイレンに用立てた。

一二、一五　晴後吹雪　min—15°C　大樺小舍發(七、三〇)——廣河原小舍(九、〇〇——九、三〇)——白鳳峠(一、〇〇——一、三〇)——高嶺(三、〇〇)——地藏岳養の河原(四、〇〇)——北御室小舍(四、五〇)

白鳳峠の殆んど上まで苦になる程の積雪はなかつたが尾根へ出ると俄然深くなり、這松のひねくれた根や枝を被ふ深雪のラッセルは辛い。 高嶺邊から相當の吹雪となり霧さへ卷き初めて來た。 吹雪の幕の切目から地藏のオベリスクを望み過ぎし日のアクシデントを想ひつゝ吾々は爲すべき事を完全に終へ、 寒い々々山から逃げる樣な氣持で下へ急いだ。 甲州側は一段と積雪が多くなつたが降り途なので苦勞はせず返つて急な樹間を下るに手頃のブレーキでもあつた。 この邊の途はよく切り開いてあるので積雪が多くても注意すればよく判る。

一二、一六　快晴　min—16°C　北御室(九、三〇)——南精進瀧(一一、〇〇)——青木湯(一二、二〇——二、三〇)——祖母石(五、〇〇)

——韮崎——歸京

火がよく起らなかつたのと昨日のラッセルで體がぬれて居たので今迄で一番寒く感じた。五色の瀧邊から雪は急に少くなつて了ふ。然し五色瀧白糸瀧等の氷結した景觀は實に見事なものであつた。本紀行は山岳雜誌「ケルン」三三號に掲載せり。(小谷部)

岩原スキー行

柿原謙一　岩崎利一

一二、一四　上野(一一、三〇)

一二、一五　晴後雪　越後中里(五、〇〇——五、二〇)——岩原スキーハウス——(六、四〇)——練習——スキーハウス(二、三〇)——越後中里驛(三、四〇——四、三六)

苗場・上越國境の山々がモルゲンロートに美しい。ゲレンデは積雪一尺五寸位、そして八時頃より降雪、午後には三尺位にもなつた。あのことと以來一月半で山を見た。嬉しいのか、寂しいのか。汽車も一時間遲れて着いた。(謙)

冬季乘鞍岳スキー合宿

(參加者)　小谷部全助　望月達夫　森脇芳之　鷹野雄一　和田榮達　塚本駿　佐々木誠　榎本直司　新羅二郎　松浦靜雄　岩崎利一　大塚武　齋藤明智　(以下部員外)遠藤竹雄　杉山恒雄

(前記)　以下は合宿の日誌によつて記したもので幾分冗漫のきらひはあるが、思ひ出ともなる事故餘り修正せずそのまゝをのせた。

一二、二〇　晴

第一隊、森脇　塚本　和田　松浦　遠藤の五名新宿發(一〇、四五)見送り小谷、部佐々木。

一二、二一　曇、雪

飯田屋で朝食を攝り七、三〇發、ハイヤーで前川渡迄行く。これより奥は數日前の降雪の爲に自動車不通。雪の固くなつた道をスキーと荷物(主に密柑)に苦しみながら、テクテク番所迄行く。菊屋旅館にて晝食(一一、三〇——〇、三〇)。番所から少し行つた所からスキーを付け鈴蘭迄樂に行く。雪は去年より多い。鈴蘭の小屋はガランとして居た。風は強くはないが灰色の空からチラチラ雪が舞下つて來る。森林地帶へ入ると雪質は斷然良い。久し振りの雪景色に感嘆しながら冷泉小屋へ着く(四、四五)。冷泉小屋からスキー小屋迄の道は雪が多い爲めか又は立木を刈つた爲めか何だか去年に比べるといやにベットリ雪がついて居る。此の兩小屋間の道では皆少々アゴを出して居た樣だつた。小屋には神戸高商(四名)及び大阪の住人が一人と云ふ長閑りした狀態。澤へ滑りに行く積りで居たが暗くなつたので止めた。(森脇)

(附記)　飯田屋で自動車を交渉した時、大野川の先迄 ¥ 6.00 で行くと云ひ乍ら他の車が入らぬの、私は聞かぬのと吐かして運轉手野郎奴前川渡で下車させやがつた。尤も雪も深かかつたが。そしてチャンと六圓とるのだから野郎生意氣だ。が運轉手相手では喧嘩にならぬ。昨年の南アルプスの時と同樣に。番所のスキー小屋主の家で晝食を喰つて居たら重い荷物ではとてもスキー小屋迄行けぬと云はれ、一貫目單位で安く明日上げてあげますと聞かされ、實は密柑箱の重さに閉口して居たので賴む事にした。お蔭で森林帶中は寫眞を撮つたり等してのんびり登つた。冷泉の小屋の前を通つて居たら女

と思はれる人影が型も鮮やかにシェーレンクリスチャニヤをやつたとかやらぬとか云つて居た奴が居る。（森脇）

此の夜　第二隊（小谷部、望月、鷹野、新羅の四名）は先輩村尾、近藤兩氏の厚き御見送りをうけ一〇、四五新宿發。

一二、二二　雪

起床五時の豫定が一時間遲れて六時。遠藤は何だか體の具合が惡いと云ふので午前中小屋に居殘る事にした。小屋出發八、三〇。時間がおそいのにシュプール一つ無い處女雪をラッセルして登る。位ケ原の所で天氣が惡く風が強いので引返す。雪が深くて何んな急な斜面でもボソボソッとしか滑らない。澤の所も歩いて下る樣にして滑る。小屋歸着は一〇時過ぎて居た。十一時迄暖まつて再び位ケ原迄行つてみた。前の跡が全部消えてラッセルのやりなほしをする。下りは登つて來た通りに下つて行く。小屋で晝食をとり亦登つて行く。風は次第に強くなり雪も朝より深い。朝からのラッセルに腐つて位ケ原迄行かないで途中から引返へす。澤の中は朝から幾度も滑つたので雪が幾分固くなつて面白く滑れた。廿一日出發の者が來る時間なので小屋を通り過ぎて冷泉迄下る。冷泉の處で少し止つて居たら下から見知らぬ樣な人間が二人上つて來る。良く見れば後のは新羅だつた。小谷部と鷹野は先へ行つたと云ふ。スキー小屋か何處かで行過ごしたのだらう。下から望月が登つて來ると云ふので迎へに更に下つて行く。ものゝ三町も下つた所で眼鏡を取つて居る人相の變つた望月に出會つた。（森脇）

第二隊、松本着六、二一　飯田屋で朝食、奥原守と落合ひ共に行く飯田屋發七、四〇直ちにハイヤーで前川渡より少し奥迄入る。矢張り 6.00 番所の菊屋で中食（一一、〇〇——一二、〇〇）——鈴蘭（一、〇〇）——スキー小屋（四、〇〇）

夜分はトタンに九名となり菓子、果物等豊富に、さながらコンパの如し。（望月）

一二、二三　雪

午前中は九名にて位ケ原の下方にて練習す。雪質非常に良好なり。和田終日休養。

午後は七名にて下のゲレンデ及び冷泉小屋附近にて練習す。望月午後休養。東京より持參の小豆は美味し。夜は持參のカレーにて鱈腹食し、大いに鋭氣を養ふ。（望）

一二、二四　雪

午前中七名にて位ケ原をかなり登り吹雪にて全く視界をたゝれよく判明せざりしが、肩ノ小屋直下に至り引返へす。歸路の滑降は雪質良好にして非常に愉快なりき。一瞬にして小屋へ歸へる。新羅、松浦終日休養。

午後からは位ケ原直下のゲレンデにて練習。望月スキーを折る。三時一度小屋に引上げ、守が作つてをいて呉れた小豆を食べて後六名にて冷泉のゲレンデにて練習。望月くさつて部屋に引上げる。

晩飯は小屋主齋藤又一氏のもてなしで兎汁に一本ついて、晩くまで一杯氣嫌にて歌などうたふ。時あだかもクリスマス・イーヴなり。奥原守他の約束ありし爲、此の日午前九時下山。（望）

第三隊（佐々木、榎本、岩崎、大塚、齋藤、杉山）は先輩中川、増山兩氏及び林、毛塚等の見送りをうけ一〇、四五新宿發にて出發。

一〇、二五　快晴　一同九名午前中頂上へ。

スキー小屋（八、四〇）——肩（九、四〇——九、五〇）——頂上（一〇、二

〇——一〇、四〇)——肩(一一、〇〇)——スキー小屋(一一、三〇)
久し振りの快晴に一同歡喜しつゝ、紺青の空と純白の雪のコントラスト鮮やかな雪景色の中を登る。位ケ原に至ると穂高が素晴らしい。頂上からは北、南、中央、上越等あらゆる山々が雪をつけて美しく見られた。雪質良好。よくしまつてゐる爲、ラッセルの要殆どなし。肩にスキー・デポー。肩からもアイゼンは殆ど必要を認めぬ。小谷部はジエラルミンのエッヂをきかせて頂上迄スキーにて登る。滑降は俄然よかつた。

午後より九名鶴ケ澤を登り鶴ケ池に至る。
スキー小屋(一、〇〇)——鶴ケ池(二、〇〇——二、五〇)——小屋(三、一〇)鶴ケ池は全然雪におほはれて平原の如し。この附近の尾根はウインドクラスト相當烈し。風蔭側にて暫時スキー練習。この尾根からは岳川谷が午後の陽を浴びて美しく望まれた。鶴ケ澤の滑降は午前中にも増して優秀。ボーゲンをかくと文字通りシーソーになる。夜は新らしく迎へた六名の友を加へて賑かなり。(望)

第三隊來る。松本(六、二一——七、〇〇)——大野川(八、四五)——番所(九、三〇——一〇、〇〇)——鈴蘭(一一、〇〇——一二、三〇)——スキー小屋(三、三〇)

一二、二六　快晴

冬山には珍らしい二日續きの快晴。新らしく迎へた五名(齋藤を除く)及び九名の合計十四名の多人數にて肩迄行く。小舍(九、〇〇)——肩(一〇、一〇)岩崎、佐々木、大塚の三名は頂上往復す。今日歸京する者共(森脇、塚本、和田、新羅、松浦、遠藤)及び小谷部は早く小屋へ歸へる。歸京する連中は晝頃下山。小谷部途中迄おくる。其の他は頂上へ行つた連中を待ちつゝ位ケ原の下方にて練習、歸屋二時。晩き中食後再び下のゲレンデにて五時迄練習。夜は賑かにすごせり。
快晴二日續きの爲、位ケ原附近及び道はシュプールがつき過ぎて少し滑りにくゝなつたが、雪はまだ中々いゝ。今日も眺望絶佳。穂高は何時もよい。今夜よりまた九名となる。榎本持參の八ミリ撮影す。(望)

一二、二七　薄晴

昨日の猛練習の爲か、久し振りにゆつくり起床。九時頃より練習に行く。位ケ原直下のゲレンデなり。十二時半迄練習し中食に歸舍。
午後二時半より再び同ゲレンデに行きて練習。齋藤足を捻挫す。大した事なし。八ミリを撮影す。午後五時歸舍、小豆は優秀なり。夕食は持參のカレーにて一同大いに食す。夜は明日下山する者ある爲、晩く迄座談にくらす。非常に愉快であつた。豫科の連中が益々しつかりして行く事は意を強うす可き事なり。
本日曇つては居たが位ケ原より頂上見ゆ。唯し東方は薄曇りなり。午前中一寸雪舞ふ。午後には雪上にほのかな物影が落ちる位の陽がさす。雪は幾分クラスト氣味。風なく氣温比較的暖かなり。(望)

一二、二八　雪

昨晩からの積雪約一尺。尙ほ終日降り續く。今日小谷部、望月、鷹野の三名中ノ湯より穂高方面に向ふ。齋藤終日休養。
午前中位ケ原下のゲレンデにて練習。雪質は乘鞍としては餘り良好でない。岩崎肩ノ小屋往復。相當な吹雪、盲目スキーで降つて來た。
午後からは又出なほして鶴ケ池迄登る。殆んどクラストして居ないので非常に快適、殊にシーソー的な滑降が出來るのでやめられない。(岩崎)

一二、二九　雨後雪

朝晴れると見えたのが小屋を出る頃より雨となる。午前中位ケ原下ゲレンデに行つたが、雨の爲直ちに小屋まで滑る。小屋へ着いたのは十一時、比較的早く晝飯を食べて鶴ケ池への鞍部の少し下まで行き練習。再び雨模様となりし爲小屋の側の澤まで下り、此處で暗くなるまで練習。その頃より雪に變る。今シーズン始めたばかりの佐々木、大塚はボーゲンをほゞ完成。進歩非常に早し。齋藤終日休養。足は大部良好。明日は歩いてかへると云ふ。一同六名別に變つた事なし。

時々風が強くなりその上雨が降つたので雪面は薄いクラスト、少々滑りにくし、眺望全くきかず、八ミリを撮さんと張り切つたが、天氣惡き爲少ししかとらず。今晩が最後として皆暗くなるまで滑りぬいて非常に愉快であつた。（榎本）

一二、三〇　快晴

起床大體六時半頃、朝食前岩崎のみ練習、位ケ原の下の所まで行きしも風ひどく雪煙の爲引きかへす。杉山、佐々木、榎本の三名下のゲレンデにて妙技(?)を撮影、十時小屋に歸る。大塚、齋藤二名十時頃一足先に出發（齋藤の足は快方に向ふ。）岩崎、杉山、榎本小屋の側の澤にて練習。八ミリ撮影。後全部下山の途につく。

スキー小屋（一一、〇〇）——鈴蘭（一、〇〇）——番所（一、四〇）——大野川（三、一〇）——前川渡（三、四五）——奈川渡（五、〇〇）

雪崩の爲自動車は奈川渡迄しか入らぬので止むを得ず歩く。松本の飯田屋にて饂腹食ふ。松本發午後九、卅一の汽車にて歸京す。（榎本）

〔合宿責任者　望月〕

西穗高岳

小谷部全助　鷹野雄一　望月達夫

一二、二八　雪　乘鞍岳スキー小屋（一一、〇〇）——番所（一二、四〇——一、四〇）——前川渡（二、三〇——二、四〇）——澤渡、金多屋（四、〇〇）

乘鞍の合宿を雪のチラ〳〵する午頃去る。中ノ湯迄行く豫定であつたが澤渡で泊る。

一二、二九　薄日微雨　澤渡（九、二〇）——坂卷（一二、二〇——一、四〇）——中ノ湯（二、四〇）——上高地、五千尺旅館（五、四〇）

氣温上昇の結果、澤渡より奥の街道筋には處々に小さな雪崩が出て居た。雪がベタツイてスキーが動かぬ事夥だしい。德澤行を今日も變更。けれども明日は晴天らしいので、西穗をやらうと云ふ目的もあつた爲に。

一二、三〇　晴　五千尺（六、三〇）——岳川の河原（七、三〇）——天狗澤より一ッ南の澤を登る——主稜より約三〇米下にてスキー・デポす（一一、〇〇——一一、二〇）——西穗高第二峰（一二、三〇——一、三〇）——デポ（二、〇〇——二、四〇）——岳川（三、三〇）——五千尺（五、二〇）

二時に起きてみると雪がちらついてゐる、かつかりして再び床に入ると、五時頃晴天になつたと起こされた。時間が非常におそいとは思つたが、兎も角好い天氣なので出發。過日同志社の方達が行つた古いシュプールがあり、それより降雪なき爲、全然ラッセルの要なく岳川の河原へ一時間で出る。既に西穗一帶はまつ先にモルゲン・ロートに輝き、出發のおそすぎた事を知らせる。が昨一日は薄日微雨であつた事

からして積雪はかなり落着いてゐる事が考へられた。岳川をかなり登り、始めは西穂高澤を登るつもりで居たが、時間の關係上一刻も早く主稜に立ち度い爲に、その向つて右隣りの澤(西穂高澤右俣とも云ふらしい)を登路に選んだ。スキーにて登る中に積雪狀態が豫想通り完全にしまつて少しの苦痛も心配もないのでそのまゝ大膽にジクザクを切つてぐん〳〵登つた。かなり上方に於てこの澤は二分するが勿論傾斜のゆるい右方をとつた。主稜迄スキーは用ひられる狀態にあつたが、萬一を顧慮して約卅米下の側稜上にデポして、アイゼンにてぐん〳〵登る。そして天狗岩西方のザツテルへ出た。これより西穂第二峰迄は一寸緊張したクライムの味へる處である。時間が不足の爲此處でノビてジャンダルム飛驒尾根の驚異的な形相をカメラに收めたりして往路をもどる。此れより西穂三角點迄は見た處眼立つた岩場はなく相當急峻ではあるが平凡なる雪稜にすぎず一時間もあれば達せられると思はれた。雪崩に注意しつゝ下つたが西穂高側は言ふに及ばず岳川谷の各支谷あらゆる處から少しも雪崩れた痕跡はなかつた爲、樂な氣持で飛ばして來た。岳川の森林帶に入つたらガリ〳〵の雪の爲、登りよりも時間を要したのには苦笑した。

一二、三一　快晴

小谷部、鷹野は次の登攀の爲德澤に向ひ望月獨り下山。五千尺(二、三〇)——中ノ湯(四、三〇)

用事の爲とは云ひ乍ら快晴續きに穂高をあとにするのは心殘りだ。雪におほはれた上高地。その靜謐なる午後。一人ゆくスキーの音のみ耳に入る。ホテルの前から見上ぐる霞澤岳や燒岳がなんと美しい事だ。

一、一　晴後曇　中ノ湯(九、二〇)——奈川渡(一、五〇——三、五〇)——松本

山に殘つた友を思ひつゝ、一人で湯槽につかり、元旦のとろゝ(此の邊は元旦には餅は食はぬ)をたべる。晴天續きの爲カチ〳〵になつた梓川邊りの道をスキーをはいたりぬいだりして下つて行つた。(望)

奥又白谷より前穂高北尾根

小谷部全助　鷹野雄一

一二、三一　快晴　上高地五千尺旅館(二、三〇)——德澤小舍(四、三〇)

冬と言ふのに何と天氣が續くのだらう。岳川の眞白い圈谷の中に昨日吾々の登つたシュプールが宿の二階からよく見える。都へ歸る望月と河童橋畔で別れ鷹野と二人梓川沿ひにスキーを進める。明神岳の雪をつけた姿が堪らなく印象的だつた。德澤で聞くと奥又白の御池には大阪藥專に、奥原守と平林を連れた小池先生の天幕があると言ふのでこれ幸ひと吾々もその嘸よく固まつたであらう所のラッセル路を拜借する事に決めた。北岳の緊張の後なので無理せぬ積りで來たのだから。

一、一　快晴　德澤(三、三〇)——奥又白谷夏路ルンゼ下シーデポ(五、三〇)——御池(七、〇〇——七、二〇)——北尾根四、五コル(八、五〇——九、一〇)——四峰上(一一、一五)——三峰上(一、一五)——前穂高頂上(二、〇〇——二、三〇)——明神寄りのルンゼより下る——御池(三、〇〇)——シーデポ(三、三〇——四、〇〇)——德澤(四、四〇)

案の定立派なラッセル路がついて居たので至極のんびりして了ひ煙

草などくゆらし乍ら登れた。普通のルートである左側のルンゼは可成急でラッセルの苦勞も思ひやられ先人に敬意を表する。池へ出る頃元旦の御來光を拜む事が出來た。誠に惠まれた日で、その内、奥原など天幕から出て來て『お目出度う』をかはす。こゝから始めて自分達でラッセルして北尾根へ向ふ。四、五のコルへ續くルンゼは非常に急で大きな板狀雪崩の落ちた跡があり、不氣味なヒビが途中に開いて居たが今ではすつかり落付いて何の不安もない。アイゼンだけで輕く登る。第四峰は簡單。四峰の頭へ出た頃、小池氏や奥原は普通のルートで前穗頂上に達して居り、空氣が澄んで居たのでよく通話が出來た。雪と氷に武裝いかめしい三峰は此處から眺めると如何にも凄いが取付いて見ると大した事もない。だが夏登つた事がなかつたので樂な卷路(?)を知らず殆んどダイレクトに登つたので取付の少し上、十米位はえらく緊張して了つた。夏でもこの邊のリッヂはホールドが少く惡いのに雪や氷に被はれて居る今は手古ずるのは無理もない。だがそれも暫くで後はよく堅つた雪にアイゼンを利かせてカッティングすら大して要しない樂な登りである。だが油斷は禁物でジッヘルだけは、何時も乍ら愼重を重ねなければならぬ。ホールドの好いから言ふ岩場は冬でもピトンは少しも要らず、氣樂な面白い登攀を味ふ事が出來た。頂上には大阪藥專の小天幕がベラ〳〵と岳川から吹上げる風にはためいて居る。明神へ續く尾根の三本槍と稱するピークの一つ下のコルから左へ急なルンゼを下り支稜を一つ越して中又白へ落ちるルンゼへ這ると直ぐ下が池のあるキャムプ・サイトで、このルートなら雪崩の考慮以外極めて容易である。シーデポー迄は雪のコンディションが良いのでトボガン的に寢ころがつて滑落し、瞬く間に來て了つた。

一、二　雪　德澤(一一、三〇)——上高地ヨシキ屋前(一二、一五——一二、三〇)——德本峠頂上(二、四〇——三、一五)——鮎止(四、〇〇)——島々谷出合(五、二五)——島々西糸屋(六、五〇)

峠のラッセルは降雪が烈しいので相當だつたが下りは快適に滑つた。途中所々に雪崩のデブリあり梓川沿ひ程ではないが降雪中の通行には一應注意せねばならぬ。傾斜が緩くなつた頃からツル〳〵のソリ道になりスキーには絶好でとう〳〵島々の部落まではき通し。島々では正月の三ケ日は大人と言ふ大人は大低一杯機嫌で皆陽氣である。西糸屋で吾々も丁度梓川を降つて一緒になつた小池氏と共に大いに正月氣分を味ふ。夜遲く松本驛へハイヤーを飛すと驛で鹿島槍歸りの先輩、吉澤一郎、吉澤松次郎氏等に出逢ひ直ぐ樣淺間温泉へ方向轉換した。

尙、この西穗高、北尾根の紀行は雜誌ケルン、第四四號に掲載してある事を念の爲お斷りして置く。(小谷部)

北海道スキー行

鷲崎雄四郎　他一名

一二、二九　曇　定山溪——無意根小舍

一二、三〇　曇　小舍——定山溪　二日間猛練習

一、一——一、四　昆布温泉滯在、スキー練習

二日、ニセコハンヌプリに登りかけ、吹雪かれて路を失し、その夜はビヴアークしてひどい目にあつた。

志賀高原　鹿澤　岩原

森脇芳之　塚本駿　松浦靜雄

一、二　晴　上野（一一、五〇）

一、三　晴後雪　草津（九、五〇）——芳ヶ平（一一、四〇）——横手山ヒュッテ（一、三〇）——熊の湯（三、一五）——上林（五、三〇）——湯田中（六、三〇）

横手山を降る頃より吹雪となり雪質は良かった。

一、四　晴　湯田中（七、二二）——長野（八、二八）——眞田（一一、一五）——菅平口（一一、五五）——鳥居峠（二、三〇）——新鹿澤（四、四〇）

一、五　晴　新鹿澤（七、三〇）——舊鹿澤（八、四〇）——湯の丸山——舊鹿澤（一、〇〇）——地藏峠（四、一〇）——横堰（五、二〇）——滋野（六、一〇）——高崎

地藏峠の降りは面白い。塚本歸京。

一、六　吹雪　高崎（六、一〇）——越後中里（八、四〇）——岩原スキーハウス（九、〇〇）——中里驛（三、四〇）——上野（八、三〇）

清水トンネル以北は吹雪はげしく積雪略二米半、岩原は積雪多過ぎスキーハウスの前にて滑つたのみ。（松浦）

野澤スキー行

柿原謙一　小林重吉　他四名

一、二　上野驛（九、四五）

一、三　晴後曇　豊野驛（五、三三）——上境驛（七、〇〇）——野澤温泉（八、三〇）

第一ゲレンデにて練習、夜降雪あり。

一、四　晴時々雪　午前中第一ゲレンデにて練習、午後上ノ平カンバの小舍を經て毛無山近くへ雪線漫歩。黑姫の美しい姿が好く見えた。後發の小林に會ふ。

一、五　晴後雪　午前中第一ゲレンデにて練習。午後小林と共に上ノ平カンバの小舍迄。丁度歸りは吹雪にて、心快き滑走を味ひ得た。

一、六　降雪　昨夜よりの吹雪にて、ゲレンデに於てもスキーをつけてラッセルは胸近き程の積雪。豫定した毛無行きは斷念した。

一、七　降雪　ゲレンデにて練習。小林歸京。

一、八　快晴　午前中第一ゲレンデにて練習。午後輪カンの跡を辿り燈籠木峠迄漫歩。誰も居ない峠の上で、一人で山を眺めて歸る。

一、九　降雪　午前中第一ゲレンデにて練習。

野澤温泉（五、〇〇）——上境驛（六、三〇）——七、一一）——豊野

歸途道暗く、大いに參った。（柿原）

木曾御嶽

小谷部全助

一、九　小雪時々晴　木曾福島驛發（三、三〇）——バス——黑澤三岳（四、〇〇）——屋敷野浦澤方（六、〇〇）

木曾福島へは午前九時廿分に着いたので木曾福島スキー場へ足馴らしの練習に行く。積雪五〇糎。質は好いがゲレンデは面白くない。こゝから雪の多い年だと木曾駒ケ岳へスキー登山するに好いと言ふ事だ。

一、一〇　晴雲霧多し　屋敷野浦澤方（午前四、三〇）——六合目、中ノ小舍着（午前七、〇〇）

張切り過ぎて少し早過ぎた。霧の中を八合目迄遊びに行く。歸途の滑降は雪質よく素晴しかつた。八合目迄登り一時間半、降り卅分。小

舍番の浦澤氏、早大出身のインテリ。

一、一一　無風快晴　中ノ小舍（八、一〇）——八合目（九、四〇——一〇、〇〇）——八合半シーデポ（一〇、三〇——一〇、五〇）——頂上（一二、一〇——一、二五）——デポ（一、五〇）——中ノ小舍（二、三〇——三、〇〇）——屋敷野浦澤方（四、〇〇）

實に惠まれた日本晴。南北中央アルプス、白山等々頂上のパノラマは低廻去り難きものがあつた。覺明上人の等身の像にシュカブラがグロテスクに附いて居るなど冬の御嶽情緒も惡くない。昨日に較べると大分ウインド・クラストして恐しい位スピードが出た。時間があつたので浦澤氏と共に屋敷野迄下る。八海山附近の原つぱの滑降は實にすさまじく寒詣りの三々五々を驚かして風の樣にスピードを出して樂しんだ。原が終り途がジグザグにならうとする邊にある鳥居の所から岩等露はれて危いのでスキーはかついだ。

一、一二　曇　屋敷野發（九、一五）——黑澤（一〇、二〇）

バス停留所の數丁手前迄スキーが使えたので早かつた。一一時一〇分のバスで木曾福島へ向ふ。（小谷部）

岩原スキー練習

佐々木誠　岩崎利一

一、一二　快晴　岩原下（五、四〇）——岩原（六、三〇）。

夕方迄スキー練習を行ふ。

赤城山スキー行

佐々木誠　岩崎利一

一、一八　晴　東武淺草驛發（九、三〇）夜行

一、一九　晴　新伊勢崎（一二、三〇——五、三〇）——自動車——箕輪（七、〇〇）——大沼（九、〇〇）——スキー練習——箕輪（六、〇〇）

富士山スキー行

小谷部全助　新羅二郎　松浦靜雄　關根修

一、二五　雪　富士吉田（午後一一、〇〇——一一、三〇）——出發

東京から既にえらい降雪で吉田驛からスキーをつけ、深い雪をラッセルにへばり乍ら裾野の夜間行進を續ける。

一、二六　快晴　大石茶屋（午前三、〇〇——七、五〇）——馬返（八、四〇——九、〇〇）——五合目（一一、三〇——一二、一〇）——中道途上にてスキー練習——五合目發（二、〇〇）——馬返（二、三〇——四、〇〇）——吉田着（五、〇〇）——歸京

睡眠不足とラッセルでとう〳〵參り、大石茶屋へ半泊す。明くれば日本晴、登頂は既に斷念し荷物は置いて樂に登る。五合から六合上にかけて、殊に天地境上の砂原は降りたてのパウダーで實に面白く滑る事が出來た。こんな時に來れば北アルプスも及ばぬ程素的な滑降が味へる。廣い登山道の歸路も滑り手のある所だ。（小谷部）

高尾山スキー行

森脇芳之　和田榮達　他一名

一、二六　快晴　高尾山——城山——影信山——高尾山

影信山の上で休んで居たらとぼけた兎の子が一匹、居合せた者一同

で追ひ廻す。（森）

高尾山スキー練習

森脇芳之　望月達夫　岩崎利一

二、五　晴　淺川（一一、〇〇）——高尾山にてスキー練習（一二、二〇——四、三〇）——淺川

四日に東京が大雪だったので高尾山まで行けば何んとか滑れるだらうと思つて出掛けたら、豫想に違はず快適で試驗前のウサを晴らす。見晴臺から小佛への斜面ともう少し先の斜面が先づいゝ。登山道が滑れて歸へりにも思はぬ得をした。（T・M）

關燕　前山スキー行

增山清太郎（先輩）　岩崎利一

二、七　晴　上野（一一、五〇　夜行）

二、八　曇　關山（一〇、〇〇）——關温泉（一二、三〇——一、〇〇）——神奈山中腹迄往復——關温泉（四、〇〇）——燕温泉（五、〇〇）

今日は相當な寒さで、雪も好かった。神奈山の尾根は眞白になつて、愉快に滑れた。燕温泉の感じは良い。

二、九　小雪後晴　燕温泉（八、〇〇）——前山（一一、三〇——一二、一五）——赤倉（二、〇〇——三、五〇）——妙高温泉（五、〇〇——七、二五）——田口（七、五七）

愉快なスキーが出來て全く嬉しかつた。雪質は上々だ。

霧ケ峰スキー練習

松浦靜雄

二、九　晴　上諏訪（五、四六）——霧ケ峰ヒュッテ（一一、〇〇）

二、一〇　晴　ヒュッテ（八、〇〇）——車山（九、三〇）練習後ヒュッテ泊

二、一一　晴　ヒュッテ（八、〇〇）——カボッチョ小舍（九、〇〇）——上諏訪（四、三一）——新宿

高尾山スキー行

大塚　武

二、一一　晴　淺川（九、〇〇）——高尾山（一〇、二〇）——小佛への尾根にて滑る——高尾山（四、〇〇）——淺川（四、四〇）

高尾山でも結構すべれると云ふので行つてみたが雪が極度に惡くて快適でなし。新雪直後でなければ駄目であらう。

高尾山スキー行

岩崎利一

二、二三　吹雪　淺川（一〇、五〇）——高尾山（一二、三〇）——小佛峠往復——高尾山下（四、四〇）

凄い吹雪に試驗で濁つた頭を濯ひに行つた。痛快なスキー行。

野呂川溯行　仙丈岳

小谷部全助

三、四　薄曇　甲府——（バス）——有野（七、三〇）——大曾利（九、四〇）——夜叉神峠（三、〇〇——三、三〇）——アヤサシ（六、〇〇）

大曾利下よりスキー使用。今年は非常に積雪多く夜叉神峠等は好いスキー場をなして居た。野呂川への降りは危険で滑降も出來ず、又輪樏だとえらくもぐつて動きがとれず、結局シールを逆にはりつけてよちよちとスキーで歩く。雪雲にぼかされた白峰三山は馬鹿に偉大に見えた。雪に圍まれたアユサシの堀立小舎に今宵の宿をとる。

三、五　晴　min—11°C　アユサシ（八、〇〇）——蝮平小舎（一〇、〇〇）——五葉尾根道分岐點から五丁程下流に野營（四、三〇）

野呂川通しも四尺前後の積雪でスキーは絶對必要だつた。蝮平から上流は再三再四辛い徒渉を餘儀なくされる。先づスキーを取つてかつぎ靴下も一枚だけはいて靴の儘ヂャブ〳〵渡る。對岸に着くと高い積雪面へスキーと荷を下し、靴をぬいで中の水を排除し靴下を絞つてはき直し次にスキーを着けそして重荷をかつぎ上げて進むのである。行く先が設備の好いヒュッテなどであつたら、いくらぬれても構はぬが、こんな南アルプスの奥地では實際困る。深い野呂川の溪谷には日蔭の訪れも早い。日がかげると忽ち零下十數度に降下しぬれた足は痛さを通り越して青紫に變色し感覺がなくなつて了ふ。一度徒渉の際深みにはまつてとう〳〵腰迄流れにつかり、時間も遲いし凍傷の危險もあるので直ぐ樣岩蔭に荷を下し焚火をしてビバークを決め込む。どうせ貧しい火では完全に乾かせるものではないからぬれ物は廣河原小舎で處理する事とし假に着換えてシュラフにもぐる。靴は凍つてもはける樣に口を大きくひろげた儘にしておいた。

三、六　晴　min—10°C　野營地（八、三〇）——シレイ澤岩小舎（一〇、三〇）——廣河原小舎（一、三〇）

白粉をふいてカン〳〵に凍つた靴へ足を突込むのに一骨折つて了ふ。シレイ澤近邊も右岸左岸と渡らねばならぬが積雪多くスノーブリッヂが利用出來た。右岸に一ヶ所惡い所があつた。巨岩の重り合つた所を登らねばならぬ所でスキーと荷物と別々に、倒木を頼りに二度に分けて運んだ。シレイの岩小舎は完全に使用出來る。もう此處から廣河原まで曾遊の經驗もあり大した事はないので安心する。夏途のオイ（崖）もスノーブリッヂで對岸へ渡り樂に進めた。廣河原近くで一ヶ所スノーブリッヂが壞れて重荷をかつぎスキーもはいた儘小さな瀧狀の流れに落ち込み危く下の青々とした深い淵へはまる所だつた。スキーをはいて居るので凄い力で引込まれるが夢中になつて瀧の傍の岩角にしがみつき、ほう〳〵の體で這ひ上つた時は實に胸をなで下した。雪橋もうつかり信用出來ぬ。廣河原小舎も半ば積雪に埋り、三月の陽光の下に附近の景觀は素晴しい。小舎には窓から這り昨日來のぬれ物乾燥に大童となる。

三、七　薄曇　min—17°C　大樺小舎往復

冬の北岳バットレス登攀の際、大樺小舎へ殘した食糧をあてにして來た譯なのでそれを取りに行く爲である。一八〇〇米位迄は澤は割れて居る。然し兩岸の森林帶は大して滑降の妨げにはならぬ。それから上は素的な雪溪となつて樂にはかどる。上流は一面に積雪で白一色にぬりつぶされ十二月の樣にうるさい岩や小尾根は出て居らない。大樺小舎へは長衛の岩小舎迄大樺澤を溯行し其處から等高に山腹を卷いて達したがスキーで登る限り一番好いルートであらう。小舎直下の斜面は急過ぎて返つて精力を損する結果になると思ふ。長衛の岩小舎は上部を僅かに露出して居るに過ぎなかつた。懐しい大樺小舎は九分通り雪中に埋り屋根には六尺位の厚い雪を被つて居た。吹き込みは殆んど

なく内部は十二月の時の儘だつた。食糧も豊富に殘つて居るから今一度、あのペットレスの岩と氷にぶつかつて見度かつたが野澤の合宿での約束があり殘念乍ら滞在は出來ない。盡きぬ名殘を惜んで戻る。廣い大樺澤にクル〳〵とボーゲンを畫き心ゆく許り粉雪の感觸を樂しんで廣河原へ滑降した。

三、八　曇後雪　min—15°C　廣河原(九、〇〇)——野呂川溯行——北澤長衛小舍(四、四〇)

冷徹な朝の空氣の中、廣い河原の粉雪に唯一人スキーを進める氣持は何とも言へない。積雪も一段と多く殆んど流れは雪の下にかくれてもう嫌な徒渉はしなくて好い。やがて又狹い兩岸の押し迫つた峽谷となるがスノーブリッジも厚く隨處にあり溯行は氣樂である。唯二ケ所程左岸に於て高廻りせねばならぬ所ありいさゝか手古ずつた。共に瀧の下の大きな淵で行き詰つて了ふもので最初の高廻りはこの淵の百米程上の急な雪面をカモシカの足跡に從つてトラヴアースしたがスリップの危險大なる所である。次の高廻りは危險はないが積雪深く骨を折る。この高廻を終へた頃から雪が降り初め、間もなく相當な降りになつてどん〳〵積り、北澤へ這つてからはラッセルですつかりアゴを出して了つた。かゝる時單獨行の悲哀を如實に感ずる。北澤小舍は番人は居なかつたが南アルプス唯一のスキー小舍で設備よく今迄のコースから考へると部落へ出た樣な心安さを感ずる。

三、九　曇後雪　min—16°C　滞在

仙水峠へスキーツーアする。雪質は素晴しかつたがスキー滑降は期待した程ではなかつた。夏のガラ石の池の兩側には練習向きの好い斜面があつた。

三、一〇　晴霧多し　min—17°C　北澤小舍(八、〇〇)——ヤブ澤出合(八、二〇——八、三〇)——小仙丈岳下スキーデポ(一二、〇〇——一二、三〇)——仙丈岳頂上(一、三〇——一、四〇)——スキーデポ(二、一五——二、三〇)——北澤との出合(三、一五——三、二〇)——北澤小舍(三、四〇)

小舍から眞正面に見えるヤブ澤はスキールートとしては雪崩の危險も少く好い。白峰、駒等の眺めが非常に印象的だつた。伊那から這れば非常に容易に來られるこの山はスキー黨には向かないが南アルプスの森林に憧れ、悠々たる白峰の山容を眺めるには至極手頃である。

三、一一　快晴　min—18°C　北澤小舍(八、三〇)——北澤峠(八、五〇)——八丁坂下の河原(九、五〇)——戸臺(一二、〇〇——一二、二〇)——バス乘場(二、四〇)——高遠——伊那入舟町

北澤峠から八丁坂まではスキー快適。たゞし森林帶で迷ひ易いから吹雪や霧の時は注意肝要。八丁坂は暫くスキーをかつぐ、下の河原からはバスの通ふ街道までスキーはき通し。大曾利以來、久し振りに人間の顏を見て嬉しかつた。

妙高　袴ケ岳越え

森脇芳之　和田榮達

三、一三　雨　妙高へ來る。スキー練習。

三、一四　雨後曇　スキー練習、池の平迄往復。

三、一五　晴　妙高(九、〇〇)——柏ケ峠——袴ケ岳(一一、〇〇)——萬坂峠——分道小舍(二、〇〇)——飯山(三、四〇)——野澤溫泉スキー合宿へ

飯山への峠越えは案外つまらない。袴ケ岳迄の往復なら快適だらう。萬坂峠から分道小舎迄はむせる様な強い光線の中を平地滑行す。分道からの降りは愉快であつた。（森）

春季野澤溫泉スキー合宿

（參加者）柿原謙一　小谷部全助　森脇芳之　鷹野雄一　和田榮達　鷲崎雄四郎　佐々木誠　新羅二郎　松浦靜雄　岩崎利一　原鐵三郎　大塚武　日江井正巳　齋藤明智　毛塚由太郎　關根修（部員外）　六名

（前記）此の記錄は合宿日誌によつて記したものである。

三、九　快晴

本日到着の者六名。岩崎、日江井、大塚、齋藤（以下部員外）尾田高橋。

快晴に惠まれ暑い位。登りに自稱人夫に計られ六十錢を失ふ。以後注意のこと。晝食後ゲレンデにて練習。少し休んで上へ登り尾根通しにシャンツエの上に出て降る。相當快的な滑り具合だつた。（岩崎）

三、一〇　雪

本日到着の者五名。佐々木、原、毛塚（以下部員外）石井照夫、妹尾新。

朝七時頃豊野着。飯山へ行く電車（實はガソリンカー）がうまく連絡せず十時頃野澤溫泉驛着。吹雪の中を酒屋へ。昨夜森川氏が見送りの時くれた密柑をかじる。酒屋へ十一時頃着。岩崎と同じく自稱人夫にしてやられた。午後日影ゲレンデにて練習。夜は大コンパ。（原）

今日は毛無へ行かうと期待してゐたが、吹雪の爲殘念ながら中止した。皆で練習をはげむ。（岩崎）

三、一一　快晴

佐々木、原、岩崎、大塚、尾田の五名で毛無山へ。出發（九、〇〇）——上ノ平小舎（一一、〇〇）——一、三〇）——頂上（一、〇〇——一、三〇）——日影ゲレンデ（二、三〇）歸へりは相當快的だつた。頂上からは苗場山が實に立派に見えた。（岩崎）

今日は午後から練習する事にして有志の者が毛無へ行く。上ノ平小舎（樺ノ小舎）までは尾根のラッセル大した事なし。一息ついてコーヒーを沸かす。それからは粉雪に近い。頂上邊の樹々には雪が白い。午後三時頃から練習する事にして斜滑降、全制動、半制動等をやる。人があまり多くないのでどん〳〵はかどる。今日もコンパを行ふ。丁度よく汁粉を作つてくれるとの事。（原）

本日到着者一名、鷲崎。

三、一二　晴

本日到着者一名。小谷部（南アルプスより）。原、岩崎、一本松附近まで登る。シュナイダースロープをボーゲンで下る。石井、妹尾の兩名歸京。今日から猛練習をやる。

三、一三　曇時々雨

本日到着者五名。新羅二郎、關根修、鷹野雄一（一列車おくれる）其の他部員外二名。

天氣が急に惡くなり雨、淋しき極みなり。ゲレンデにて終日練習。雪が惡くて實に滑らない。初心者の上達著し。（新羅）

この日正午頃、鐵索尾根の右斜面に大きな底雪崩があつた。注意すべし。（小谷部）

三、一四　雨

本日到着者二名、柿原、松浦。

本日歸京者、原、岩崎、大塚、齋藤、日江井、毛塚、他部員外二名。

今日は終日雨が降り實に嫌な日だつた。午前中は宿でのびる。午後雨の中をゲレンデに出て三時間程練習する。昨日よりは良く滑る。歸京者八名。段々合宿も淋しくなつて來る。（新羅）

林君の御土産は美味かつた。（鷹）

田口驛よりツーアして來るべき森脇、和田未だ到着せず、氣をもむ地圖を見たが別に遭難とも思へぬ。都合で延着の場合は何を措いても合宿に知らせる可き也。殊に俺との立山行の約束ある場合勝手に變更するなんていかんと思ふ。（小谷部）

三、一五　晴

二日振りの快晴に惠まれ、柿原、鷹野、新羅、松浦、關根他二名勇躍して毛無へ登る。樺小舍は營業して居たので、其處で晝食。上の方はさすがに雪質がいゝ。頂上は相當に寒かつた。シュナイダースローブを降りる。夕方のゲレンデはパリパリなり。

小谷部、佐々木の兩名は御岳へ。鷲崎は歸京。

森脇芳之、和田榮達の兩名やつと到着す。一抹の不安なくなる（新）

三、一六　晴

今日も天氣がいゝ。皆相當にだれてゐて朝遲れ、ゲレンデに出たのは十一時。新羅、關根はシュナイダーを昇る。午後皆でシュナイダーの下で練習。三尺位のシャンツエを作り小ジャンプの練習をやる。松浦スキー破損。部員外二人減り目下正味七人。豫科は一人も居なく淋しい合宿になつた。（新）

三、一七　曇

昨日あたりから全くだれきつて、何をして居るのだか自分で自分がわからなくなる。今日も午前中ゴロゴロ室の中で伸び切つて居る。大して練習もして居らぬのに體の諸々方々がやけに痛む。歸途の溫泉はいゝが、始めから溫泉等へ來ると何處へ行くのも厭になつてしまふ。（松浦）

十一時頃からゲレンデに出て練習。毎日餘り練習もしないので上手にもならない。溫泉の合宿もいゝが、から云ふ處はアルバイトの激しい登高の後に來る方がいゝだらう。夕方、森脇、松浦、關根の三君は小谷部氏等のあとを追つて木曾御岳へ。後に殘りし者、柿原、鷹野、和田、小生の四人。（新）

三、一八

愈々今日が合宿最後の日だ。一寸早くゲレンデに出る。四人許りになると如何にも取殘された感じがして上に登る元氣も出ない。今年卒業する鷹野氏はもう當分野澤へも來られないので今日が想出の最後と、張切つてもよく轉ぶこと。皆の顏にも疲れが見える。四時半頃切上げて歸り、後仕末をして六時出發。一路歸京の途につく。（新）

〔合宿責任者　佐々木、原、岩崎、新羅〕

木曾御嶽

小谷部全助　佐々木誠

三、一六　晴　木曾福島（バス）——黑澤——六合目中小舍

三、一七　曇後雪　中小舍——黑澤——木曾福島

小谷部體調子惡く小舍で休み、佐々木のみ上へ登る。四時頃、佐々

木九合目邊にてスリップし眼瞼裂け齒は折れて血まみれで戻る。まるで眼がつぶれた樣になつて居るので直ちに彼を連れて下山、足も痛めた模樣なので屋敷野の浦澤宅からソリを仕立てゝ貰ひ、折柄雪が多かつたので黒澤まで工合よく運び、ハイヤーで木曾福島へ出、早速町醫者で假手當を施しその晩の列車で佐々木を歸京せしめた。

三、一八　薄曇　木曾福島——黒澤——中小舍
森脇、松浦、關根のパーティと一緒になる。昨日無理したので體は極度に消耗して了つた。

三、一九　薄晴　下山歸阪。（小谷部）

木曾御嶽

森脇芳之　松浦靜雄　關根修

三、一八　晴　木曾福島（三、二九、——（自動車）——田中（一〇、〇〇）——屋敷野（一、〇〇）——中小舍（六、〇〇）
驛前旅館にて小谷部に出會ふ。

昭和十一年度（一九三六・四——一九三七・三）

苗場神樂峰スキー行

中川孫一　松木謙三　鷹野雄一（以上先輩）　金山淳二氏（慶應O・B）望月達夫

四、五　晴　越後湯澤（五、一三）——芝原峠（六、三〇）——八木澤あり
まや（六、四五——八、〇〇）——外ノ川小屋（一〇、〇〇——一〇）
——慈惠ヒュッテ（一一、〇〇——一二、〇〇）——神樂峰上ノ芝（一、三〇——二、一〇）——慈惠（二、三五——三、一〇）——八木澤——芝原峠（五、一〇）——湯澤（五、五〇）

今年の大雪へ更に四日の吹雪の爲新雪四寸。朝の芝原峠の下り良し。八木澤より對岸の尾根へは大嶋の部落の背後より直ちに取付く。慈惠ヒュッテより上方は四月上旬としては雪質良好。粉雪に近い。上ノ芝より慈惠まで全く快的そのものゝ滑降を享樂す。仙之倉を始め上越の期待して居た歸途の滑降はベタ雪の爲スピード出ずはかなきものであつた。（松浦）

三、一九　晴　中小舍（一〇、〇〇）——頂上（一、三〇）——中小舍（四、〇〇）
八合目附近の粉雪は素晴しいものであつたが樹木多くスキーに自信を失ふ。體の調子惡く小谷部一人山を降る。

三、二〇　曇　中小舍（一二、〇〇）——屋敷野（一、〇〇）——田中（三、三〇）——木曾福島（五、〇〇）

高篠山

柿原謙一

三、二九　晴後曇　秩父町（九、〇〇）——横瀨——高篠山（一二、〇〇——四〇）——牧場小舍——赤谷（二、〇〇）——秩父町（四、〇〇）
郷里秩父の町端れにある名もなき高篠山へ登る。のどかなる一日。
——昭和十年度記錄了——

山々の眺望は素晴しい。快晴に惠れよき一日のスキー行であった。

苗場山　神樂ケ峰

林俊介　柿原謙一　岩崎利一

四、七　上野驛（一一、三〇）

林は昨年十一月以來初めての山行。車中語り明かす。

四、八　曇後小雨　越後湯澤驛（五、一五）——芝原峠（七、一〇）——八木澤——外ノ川小舍（一〇、三〇）——慈大ヒュッテ（一二、三〇）

雪質惡く、皆腐る。午後小雨にて二度腐る。

四、九　晴後小雨　ヒュッテ（九、〇〇）——神樂ケ峰（一〇、三〇）——一二、〇〇）——ヒュッテ（一二、三〇）

神樂ケ峰も雪質惡し。苗場、上越の山々好く見ゆ。午後ヒュッテにて八と言ふ大きな犬を愛す。

四、一〇　雪　ヒュッテ（九、〇〇）——神樂ケ峰——ヒュッテ（一一、〇〇——一、〇〇）——八木澤——芝原峠——湯澤（四、〇〇——六、〇一）

降雪に意氣づき又神樂ケ峯へ。初めて愉快なるスキー滑降を味ふ。歸途湯澤までの滑降も面白し。（柿原）

八ケ岳

森川眞三郎　大塚武

四、一九　雨後晴　茅野（四、四〇）——柳澤（五、一五——九、二〇）——製板小屋（一、五〇——二、四五）——赤岳鑛泉（四、四〇）

茅野で降りると雨がじゃあ〳〵降ってゐる。柳澤で雨止みをしておそく出發。ぬかるみの俎原で大分苦しむ。雪は製板所よりあった。

四、二〇　快晴强風　鑛泉（五、二〇）——行者小屋附近（八、三〇——四五）——中岳阿彌陀のコル（九、三〇——四五）——赤岳頂上（一一、二〇——四〇）——赤岳キレット最低部（一、五〇）——權現岳頂上（四、〇〇）——編笠權現鞍部（六、〇〇）——鞍部より西に出る澤の途中にてビヴアーク（九、〇〇）

鑛泉より直ぐ輪樏をはく。美濃戸乘越はラッセル困難にして思ひの外時間を喰ふ。赤岳の登りは雪と岩の面白いコンビネーション。赤岳の下りは少し惡かつた。然し權現の登りは案外容易。見事なナイフ・リッヂを經て編笠との鞍部に至る。此處から西へ出る澤が下れると柳澤の高橋丑藏に聞いたので之を下る。七時をすぎて既に眞暗になった頃から小さな瀧の連續に會ひ、遂に雪につゝまれた河床にビヴアーク。

四、二一　快晴　ビヴアーク地點（七、三〇）——信濃境（二、〇〇）

（大塚）

小金澤黑岳　雁ケ腹摺山

望月達夫　岩崎利一　松浦靜雄

四、二五　雨　初鹿野（後五、二〇——四〇）——田野鑛泉（六、四〇）

四、二六　快晴　鑛泉（七、〇〇）——燒山——湯ノ澤峠（九、四五——一〇、〇〇）——小金澤黑岳（一一、一五——四〇）——大峠（一二、五〇）——中食——雁ケ腹摺山（二、〇〇）——姥子山手前の鞍部（二、四〇）——奈良子川支澤を下る——本流出合（四、〇〇）——菅澤峠（四、二〇）——淺利（金山）鑛泉——大月（七、〇〇）

新入部員歡迎旅行のつもりが廿五日の豪雨の爲、定刻立川に來たもの三名。足の向くまゝ豫定を變更して歩いて來た。廿六日は快晴に惠まれ眺望を擅にし、然も前日の雨の爲かハイキング黨居らず全く氣持よい旅であつた。

黑岳東面には未だ二、三尺の殘雪を見る。大峠には製材工場立ち幻滅。雁腹摺より姥子へはよい道あり。鞍部より南方奈良子澤には路と云ふ程のものはないが、穩やかな澤なので樂に下れる。本流の出合より立派な道あり、それを少し溯り吹切(△一四九八米)よりの東方尾根を菅澤峠にて越し淺利川の上流に下る。この邊としては相當の靜寂境であらう。(望)

富士山

小谷部全助　森川眞三郎　日江井正巳　大塚武

五、二　曇　富士吉田(四、〇〇)——大石茶屋(七、三〇)——八、四五)——五合目小屋(一一、〇〇)

五、三　雪霧後晴　小屋(五、二〇)——頂上(一〇、四〇)——一一、四〇)——五合目小屋(二、一五)——三五)——吉田(四、四〇)

出發すると間もなくきれいに結晶した雪が降り始め約一時間の後止む。この爲頂上は一面に氷の上に一、二寸の新雪を被つてゐた。小谷部は頂上までゾンメルシーで行く。歸りは大澤をねころんで下る。(大塚)

臼杵山より陣場山

(新入部員歡迎登山)

望月達夫　小林重吉　鷲崎雄四郎　榎本直司　原鐵三郎　岩崎利一　毛塚由太郎　齋藤明智　他一名(以下新入生　諸橋洋一　宮城恭一　水田洋

五、三　晴　五日市(九、〇〇)——盆堀——デンナ澤を溯る——臼杵山南方(一二、〇〇)——一、一五、此の間豫一、二年生のみ臼杵山往復、中食)——市道山(一、五〇)——醍醐丸をまく——和田峠——陣場山(三、四五——四、〇〇)——萩ノ丸——與瀬(五、三〇)

今年の歡迎登山は去る四月廿五、六日に大菩薩附近で行ふ豫定であつたが雨の爲中止となり、今日に延期された。今迄歡迎登山は主として谷川岳あたりで行はれてゐたが、登山靴等も揃はぬ豫科一年生を連れてゆくには少し不適當でもあり、又時間に餘裕もないので、今年からは懇親を主としてもつとのんびり出來る處を選ぶ方針をたてた。が今回のは延期された事も原因して理想とはかなり懸絶して了ひ、又全部員參加の主旨も徹底しなかつたのは殘念であつた。(望月)

立山　劔岳

小谷部全助　和田榮達　岩崎利一

五、九　快晴　千垣——(ガソリンカー)——藤橋(九、四〇——一〇、〇〇)——材木坂上(一二、三〇)——ブナ坂小舍(二、五〇——三、三〇)——桑谷(五、二〇)——弘法小舍(七、二〇)

材木坂上から一面の雪原になりスキー着用。一切の食料、燃料の入つたリュックは輕からず桑谷を下つて登る頃は相當にへばつた。遂に日も暮れ電燈で辛ふじてシュプールらしきものを見當にして漸く二階を僅かに雪上に出して居る弘法小舍へ着き、一先づ落付くとトタンに夕立が襲ひ雷が鳴り出した。

五、一〇　曇後晴　弘法小舍(一〇、二五)——追分茶屋(一一、三五)

——天狗平小舍(二、一五)

雄大な彌陀ケ原の雪原を眞一文字にスキーを進める吾々の氣持は五月の陽光の如く歡喜で一杯である。 大日岳の美しい光は濃い青空の下に何とも言はれぬ。 天狗平の小舍は感じのよい小舍だ。時間が早いので三人で南側の斜面へスキー練習に出る。 日が大日岳の肩に傾く頃、ザラメ雪はフイルムクラストを形成して滑降は實に素晴しくなる。 立山溫泉を見下したり藥師の方を眺めたり暫く尾根上に休んだ後、揃つて小舍を目懸けて滑降したあの快適さは忘れられぬものがあつた。

五、一一 快晴 天狗平小舍(七、五〇)——室堂(八、五〇——九、三〇)

——雷鳥澤——劔御前小舍(一一、四〇)

室堂もまるで沈沒船の樣に雪原上にちよつぴりと屋根を出して居る。立山連峰に圍まれたこの附近の景色は實に好い。 御前小舍は全然夏と同じ樣に出て居る。 寒風が吹きつけて立つても居られぬ。 午後から劔澤のザラメ雪にスキーを樂しむ。

五、一二 快晴 御前小舍(七、一五)——長次郎谷出合(七、四五——八、〇〇)——長次郎岩小舍(八、四〇)——八峰 五、六峰コル(九、五〇——一〇、〇〇)——引返す——源治郎尾根二峯下(一二、三〇)——同尾根經由——劔岳頂上(一、三〇——一、四〇)——平藏谷を下る——劔澤出合(二、三〇——二、四〇)——小舍歸着(四、二〇)

岩崎、和田は尾根通し劔へ向ふ。 小谷部一人八峰へ。 劔澤のスキー滑降は快適。 長次郎谷は新雪で一寸したラッセルをしなければならなかつた。八峰を登る積りだつたが、日射强くアイゼンに雪が附着して工合惡く、自重して中止。八峰登山をするならもつと早く出發せねばならぬ。 薮雪期の八峰は殆んど雪のステップカッティングで面倒臭いだけで岩登りは味はへない。 源治郎は上部から取付いたので至極簡單だつた。 五月の陽光を浴び乍ら頂上の雪に寢ころんで悠々紫煙をくゆらす氣分は嚴冬の峻嚴さと異つた味のあるもの。 何時までも飽く事を知らず春の山を無心な子供に歸つて眺める。 (小谷部)

劔　岳　(和田　岩崎)

劔御前小舍(八、一〇)——劔澤——スキーデポ(九、三〇)——劔岳頂上(一一、一〇——一二、〇〇)——スキーデポ(二、〇〇)——劔御前小舍(三、三〇)

此の日は全く素晴しい天氣で、 殆ど日本中の山が見える樣な氣がした。雪は柔くなつてゐて、アイゼンも不要な位であつた。 此の日後發隊來る。

五、一三 曇 劔御前小舍(後四、三〇)——雷鳥澤——室堂(五、三〇)

——天狗平小舍(六、〇〇)

午前中スキーにて遊び午後下る。 後發隊は劔へ行つた。

五、一四 半晴

休養を兼ねてのんきなスキー練習に終日をおくる。 本日後發隊劔御前小舍より來りて合流し、以後全く同じ行動をなす。よつて十五日以後の記錄は後發隊の方を參照せられたし。(岩崎)

立山劔岳

森脇芳之　松浦靜雄　關根修

五、一〇 曇 富山(六、四五)——藤橋(一〇、一〇——一一、三〇)——熊王清水(一、〇〇——一、三〇)——山毛欅坂小舍(五、〇〇)

重い荷を背負つた上、三人共輕い風邪氣味の爲自重して山毛欅坂で一泊。途中關根がスキーのスピッツェを折る。

五、一一　晴　小舍(九、三〇)——弘法小舍(三、〇〇——四、三〇)——追分小舍(五、三〇)——天狗平小舍(九、〇〇)

天氣は快晴、體の調子も回復して小舍毎にお茶を沸かし、のんびり歩く。弘法小舍での甲羅干の味は又格別。空腹と暗夜の爲天狗平小舍を見付けるのに一苦勞する。

五、一二　快晴　小舍(九、三〇)——室堂(一〇、三〇——二、三〇)——別山乘越小舍(五、〇〇)

乘越小舍では先發の三人に合し賑やかな一夜を過す。

五、一三　曇後雨　小舍(九、三〇)——劔岳頂上(一、〇〇)——乘越小舍(五、〇〇)

往路は夏路を辿り平藏谷を滑り降りる。小舍に歸ると先發隊は既に室堂に降つた後、天候惡化の爲小舍に再泊。

五、一四　曇後晴　小舍(一二、三〇)——室堂(二、三〇——四、三〇)——天狗平小舍(五、二〇)

ベタ雪の爲スキーは快適ならず、天狗平で先發隊と再び一緒になり下山する迄一緒に行動す。雪が腐つてゐる爲に、夕暮のクラストを待つてスキーを樂しむ。

五、一五　晴後曇　小舍(一一、〇〇)——一越(一二、一五)——雄山(二、〇〇——一五)——小舍(三、二〇)

快晴に惠まれて全員六名裸登山をなし壯觀を呈す。歸路猛烈なガスに惱まさる。

五、一六　曇　小舍(八、〇〇)——藤橋(一二、〇〇)——富山(五、〇〇)

歸京。(松浦)

扇山　權現山

大塚武　他一名

五、一〇　晴　鳥澤(七、二五)——扇山(九、二五——三五)——淺川峠(一〇、三〇——三五)——權現山(一一、二〇——一二、〇〇)——和見(一、二〇)——上野原(三、四〇)

青葉のトンネルをくゞつてぶら〳〵歩く。頂上はお祭りで土地の男女で賑かであつた。

甲斐駒ケ岳

小林重吉　鷲崎雄四郎　大塚武

五、一六　曇濃霧　日野春——柳澤(七、四〇)——駒ケ岳神社(八、四〇——九、一五)——臺ケ原道と合ふ地點(一一、四五——〇、〇五)——刀利天狗(二、〇〇)——屏風小舍(三、〇〇)

五、一七　曇霧雨夕方一寸晴れる　小舍(六、四〇)——七丈小舍(七、四〇——八、〇〇)——頂上(一〇、二〇——三五)——七丈小舍(一一、四〇——四五)——屏風小舍(〇、三五——一、三〇)——駒ケ岳神社(三、五〇——四、二〇)——柳澤——韮崎

二日間濃霧に閉ぢこめられて頂上を踏んだのみ。雪は黑戸山からあつたがアイゼンは頂上までかつぎあげたゞけで足に附けず。(大塚)

鹿島槍荒澤奥壁

小谷部金助　森川眞三郎

五、二七　雨　やなば驛（九、五〇）——黑澤峠（一〇、三〇）——鹿島造林小舍（二、〇〇）

鹿島川の徒渉を敬遠して黑澤から左岸の山腹を卷いて造林小舍に達する山途を辿つたが面倒臭い嫌な路だつた。石南花や五月花が眞盛りで綺麗である。

五、二八　曇　滯在

天幕を張るにはどうしても快晴を待つて土地を乾燥させぬといけないからと言ふ理由で。

五、二九　快晴　造林小舍（七、三五）——大川林道——荒澤出合（八、三〇）——荒澤の大瀧下（一〇、二〇）——瀧上キャムプ・サイト（一一、二〇）

大川澤の徒渉は水量多く且冷いので參つた。大瀧邊は大體雪溪だが瀧は割れて居て左岸六十米邊の高みを卷く。之を越して一丁程上流の左岸に素晴しい天幕場あり、早速二人用輕天幕を張る。すぐ傍に小川が流れ、周圍は感じのよい草原で、吾々は裸になり一日寢ころんで奥壁の眺望など樂しんだ。

五、三〇　晴後小雨　天幕發（四、一五）——アラ澤二俣（五、〇〇）——北稜直下（六、一五——六、四〇）——第一岩峰下（八、〇〇——八、一〇）——第二岩峰下（一〇、〇〇）——第二岩峰上（一一、四〇——一二、〇〇）——向て左上へトラヴアース——雪溪（一、一〇——一、五〇）——東尾根ジャンクション（三、一〇——三、二〇）——北槍頂上（三、五〇——四、一〇）——笹喰——冷澤スキー小舍（五、四五）

奥壁のルートとして正面の瀧の兩側に北稜、南稜と大體二つある（關西學聯報告七號參照）が以前からの吾々の偵察は主として北稜に注がれて居たので今日は之を登る事にした。第一岩峯はその基部に於て向つて左へ卷き壁狀の岩場をブッシュ等に助けられ相當の惡場だつた。リッジは概して純然たる岩場少く急峻な草付や腐岩で、殊に誰も通らぬ爲か浮岩が多い。第二岩峰は下から仰ぐとニードル狀で吾々はその感じから之にM峰なる愛稱を付して居た所、偶然「關西學聯報告七號」により、吾々よりも前に登られた小林勘次郎氏等（浪高）も同樣の名前をつけて居られたのを見て苦笑、だが懷しく思つた。M峰は矢張り基部に於て左へ卷くのだが、この邊は殊に岩脆く微妙なバランスを要した。もう之を越せば大した惡場はない。リッジを被ふ殘雪をキックステップして登り瀧上の雪溪へ樂に這入れた。北稜は傾斜が一體に急で好いビレイイング・ピン無く確保にはピトンが可成り有効だつた。第一、及びM岩峯を突破するには先づ絶對必要と言つて差支えない。ジャンクション邊は一尺餘の新雪が厚い舊雪を蔽ふてまるで冬の樣だつた。ラッセルの感觸に過ぎし冬を回想しつゝ北槍に着いた。二年前内藤君遭難の悲しい思出にしばし默禱を捧げる。釣尾根から左へ一氣に雪溪をグリセードで滑降。冷澤小舍の手帳によりこの冬遭難した冷池小舍主人、荒井重永父子の死骸は未だ發見されざる由。

五、三一　雨　夕刻止む　滯在。

六、一　晴　冷澤スキー小舍（七、三〇）——鹿島造林小舍（八、二〇——九、〇〇）——大川澤——荒澤出合（九、四五——九、五五）——荒澤天幕（一〇、五五）

又、悠々と日光浴しつゝ寢そべつて氣分を味ふ。

六、二　微雨後晴　天幕撤收（六、〇〇）——大川澤（七、一〇）——造林

小舍（七、五〇——八、〇〇）——左岸の林道——黑澤（九、五〇——一〇、二〇）——やなば驛（一一、〇〇）——歸京　（小谷部）

谷川岳マチガ澤

小林重吉　岩崎利一

六、五　晴　上野（後一一、三〇夜行）

六、六　曇後小雨　湯檜曾（四、三三）——土合（五、三〇——六、四〇）——マチガ澤出合（七、二〇）——マチガ澤を登る——マチガ澤二股（九、三〇）——谷川岳（一、三〇）——西黑澤を下る——土合（四、二五——五、〇〇）——湯檜曾（五、三〇——六、四九）

此の日終日小雨、しかしマチガ澤は面白いルートである。春の日に數日を送つて見たい樣な所である。此の澤の國境尾根直下は相當急であつて、一寸緊張した。ザラメ雪に目を射られる樣な日にまた登つて見たい。（岩崎）

將監峠より雲取山

柿原謙一

六、六　晴　新宿（一一、五五）

六、七　晴　鹽山驛（四、一〇）——番屋（四、四〇）——柳澤峠（六、二〇——六、五〇）——三ノ瀨（一〇、三〇）——將監峠（一二、三〇——一、〇〇）——飛龍權現（三、〇〇）——甲州雲取小舍——雲取山（六、一〇——六、三〇）——武州雲取小舍（六、五〇）

將監峠は何時訪れても氣持のいゝ、全くすつきりとした峠だ。豫定より早く着いたので、雲取迄頑張る。武州の方の小舍には本月初めから番人が入つてゐる。例の四角な風呂に入り、下界の事を湯氣の中で考えた。

六、八　晴後曇　小舍（七、〇〇）——白岩小舍（九、〇〇——九、三〇）——地藏峠（一一、三〇——一二、〇〇）——三峰神社（一、〇〇——一、三〇）——大輪（三、三〇）——三峰口驛——歸京

白岩小舍には、先年滿洲で息子を失つた爺さんが番人をしてゐた。注いで呉れた澁茶に、お爺さんの哀愁を感じ乍ら、私は懷しいこの徑を下つたのであつた。

八ケ岳

新羅二郎　松浦靜雄

六、九　雨　小淵澤（七、三〇）——棒道（八、三〇）——小泉（一一、四〇）——松原湖（二、三〇）

雨をおして出かけては見たが途中豪雨となり、小泉に降つて小海線で松原湖に行く。

六、一〇　曇　松原湖（八、〇〇）——稻子小舍（九、三〇——一〇、〇〇）——本澤溫泉（一、三〇）

六、一一　曇　本澤溫泉（七、一五）——夏澤峠（八、〇〇）——硫黃岳（九、〇〇）——横岳（一〇、〇〇）——赤岳石室（一一、〇〇——一二、三〇）——赤岳（一、一〇）——權現岳（四、二〇）——暫く下りてビバーク

赤岳あたりから濃霧にまかれ權現岳より道を失ひ遂に澤を降つて雨中の岩陰に一夜を明かす。

六、一二　晴　野營地出發（六、二〇）——棒道（九、〇五）——小淵澤（一

〇、一〇）

南アルプスの眺望は實に素晴しいものであつた。（松）

丹澤連峰

大塚武　日江井正巳

六、一三　快晴　與瀬（九、五五）——鳥屋（一〇、五五）——燒山（二、四〇）——姫次山（四、三〇）——蛭ケ岳（六、〇〇）山頂にてビヴアーク

地藏澤の小舍見付からず蛭ケ岳頂上でビヴアーク。夏密柑とパンで二食をごまかす。夕霧の中に富士がかいま見え、檜洞丸が近く聳つ。暮れんとする蛭ケ岳の頂は一寸印象的であつた。

六、一四　霧後晴　蛭ケ岳（四、五〇）——丹澤山（六、〇五——三〇）——塔ケ岳（七、一五——四五）——札掛（一〇、三〇——一一、二五）——諸戸（〇、一五）——大山（一、五〇）——大山町（三、三〇）——伊勢原（四、〇五）（大塚）

入川谷より川乘山

岩崎利一

六、一四　晴　御嶽（八、一五）——古里附（八、四〇）——入川谷を登る——峰部落の下（一〇、三〇）——大瀧（一二、三〇——五〇）——川乘山（三、二〇——三〇）——獅子口（四、〇〇——四、一五）——御嶽（七、〇五——七、三五）

入川谷は靜かな谷だ。人ッ子一人居ない。瀧は大きなのが五つ位あつて、その中通稱大瀧といはれるのは五六丈はある。暇な一日にはこんな谷歩きも非常な興味を覺えさせられる。

三ツ峠岩登練習

原鐵三郎　岩崎利一

七、四　曇り時々晴　新宿（八、〇〇）——小沼（一〇、二八）——岩場下（一、〇五——一、五〇）——岩場——山頂（四、〇〇——四、一〇）岩場下（四、二〇——四、三五）——小沼（六、一〇——六、一八）——新宿（八、四六）

三ツ峠に行く人は夜行や、朝の一番を利用する樣であるが、八時の準急で行くと最も効果的ではないかと思ふ。そして、歸りの汽車も、大月發七時の準急に乘れば、時間的に甚だ經濟だ。今度は下から二段目の棚から左へ登つて行つたが、最後の登りが一寸惡かつた。（岩崎）

穂高涸澤合宿

林俊介　柿原謙一　小谷部全助　小林重吉　森脇芳之　望月達夫　和田榮達　森川眞三郎　鷲崎雄四郎　榎本直司　岩崎利一　原鐵三郎　新羅二郎　松浦靜雄　大塚武　日江井正巳　齋藤明智　關根修　水田洋　宮城恭一　高橋廣三郎　里見治男

七、八　半晴　荷物運搬の爲夜行にて小谷部單身出發。

七、九　雨　小谷部は島々西糸屋に至り既に到着せる荷物の大部分（四五貫三〇〇匁）を人夫五名を使用して上高地吉城屋迄運搬自動車不通の爲德本峠を越ゆ。西糸屋泊。島々（八、〇〇）——德本峠（四、四〇——五、〇〇）——上高地（七、〇〇）

先發隊（望月　小林　和田　森川　鷲崎　榎本）夜行にて出發。

七、一〇　雨後晴　過日の豪雨にて落ちた横尾橋の偵察に人夫一名派遣。夕刻小梨平へ假に大天幕を張る。先發隊は島々に殘した荷物全部をもち人夫一名を連れ上高地へ入る。島々（九、三〇）——德本峠（四、三〇）——五、二〇）——上高地（七、四〇）七名天幕泊り

七、一一　晴　横尾から涸澤へ入る事が出來ない爲、前穂を越して良き天幕地を得る目的で小谷部、森川の兩名出發。上高地發（七、三〇）——前穂奥穂コル（二、三〇）——涸澤池の平（四、〇〇）池の平では通稱シマの最適地へ六人用の天幕を張る事が出來た。例年なら八月にならねば開かぬと云ふ直ぐ前の池も、今年は既にあいて水の近い事が何より幸ひである。

島々へ下る人夫に後發隊への手紙を依頼す。

後發隊（柿原　森脇　岩崎　原　新羅　松浦　大塚　日江井　齋藤　關根　水田　里見　宮城　高橋）出發。

七、一二　晴夕刻より曇後雨　涸澤の二人は天幕をそのまゝにし、北尾根を經て上高地へ。池の平發（八、三〇）——北尾根——前穂高（一、〇〇——四五）——上高地（六、二〇）

後發隊行動　島々西糸屋にて先發隊よりの手紙をうけとり出發（九、三〇）——德本峠（七、〇〇）泊り。

七、一三　朝雨後晴　先發隊は涸澤へ入る豫定なりしも朝雨の爲斷念し、吉城屋の荷物を出來るだけ德澤へ運搬する事とす。小梨平（一〇、三〇）——吉城屋（一一、三〇——四〇）——德澤（一、〇〇——三、〇〇）——小梨平（五、〇〇）米　副食物　野菜　石油重なる食器類其他一切の個人用品を運搬す。

後發隊——德本峠（一〇、五〇）——白澤渡（一一、四〇——一、三〇）先發隊に逢ふ——一年生に上高地を見せに往復して吉城屋（四、〇〇）——德澤小舍（五、〇〇）泊り。

七、一四　晴　涸澤へ入る。小梨平（五、五〇）——德澤（八、〇〇——四〇）——涸澤池の平（三、二〇）德澤にて先發、後發兩隊合流し全部の荷物を廿一名にて適宜分擔す。平均七貫餘の荷なり。天幕其他の爲人夫二名傭ふ。ゆつくり涸澤に入り過日六人用を張り置きし地に大天幕、其の側に六人用、二人用の二天幕を夫々設立し後者を倉庫とす。

七、一五　薄日後少雨風　本日より合宿生活。

奥穂高岳　A班（柿原　森川　高橋　里見　宮城　水田）
B班（森脇　松浦　大塚　日江井　齋藤　關根）
C班（鷲崎　榎本　岩崎　原）

發（一〇、四〇）——穂高小舍（一、〇〇——二、〇〇）——奥穂高（二、二五——三〇）——グリセードを練習しつゝ歸幕（五、〇〇）天候惡き爲頂上へは八名のみ行く。

天幕に殘りし五名張綱の確保をなし食糧等の整理をなす。

七、一六　雨時々止む　午後テント番の柿原　森川を殘し一同北尾根下方の雪渓にてグリセードの練習をなす。初心者勇敢にして上達早し。ゾンメルシーを樂む者もあり。小一時間にして雨來り天幕に逃込む。

七、一七　半晴霧深し夕立　全員行動す。

涸澤岳　奥穂高（望月　齋藤　水田　高橋　宮城　里見）發（八、一〇）——北穂涸澤岳間の雪渓をつめ北穂寄りのコル（一〇、五〇）——涸澤岳——小舍——奥穂高——歸幕（四、〇五）

涸澤槍側稜（小谷部　新羅　松浦　關根）
發（八、一〇）——右側稜登攀——涸澤槍（〇、三〇）——小舍——歸幕（二、一〇）

前穗北尾根　A班（小林　岩崎　原）
B班（柿原　森脇　和田）
發（七、三五）——北尾根——前穗高（〇、〇五——四五）——小舍——歸幕（四、〇五）

ヂャンダルム（鷲崎　榎本）
發（八、二〇）——小舍——ヂャンダルム往復——歸幕（四、三〇）

ヂャンダルム飛驒尾根（森川　大塚　日江井）
發（七、一五）——ヂャンダルム——飛驒尾根下降——第三テラス（二、〇〇）——登攀——ヂャンダルム（三、一〇——三〇）——歸幕（五、二〇）

七、一八　晴時々ガスかゝる　全員行動す。

北穗高涸澤岳（鷲崎　榎本　水田　里見　高橋　宮城）
發（八、二〇）——北穗高（涸澤岩小舍後方より取着く）——涸澤岳——小舍——歸幕（五、二〇）

涸澤槍側稜（森川　和田　岩崎　原）
發（八、一〇）——左側稜登攀——涸澤槍（一二、〇〇）——涸澤コル——歸幕（一、二五）

前穗高北尾根（小谷部　大塚　日江井　齋藤）
發（八、一〇）——七、八峰のコル（九、一〇）——北尾根——前穗高（二、四五——四、〇五）——歸幕（五、〇〇）　四峰よりはザイル捌き練習の爲リッヂ通り登る。

ヂャンダルム（柿原　新羅　松浦　關根）
發（八、二五）——小舍——奥穗——ヂャンダルム（〇、一〇——一、一五）——歸幕（五、二〇）

ヂャンダルム飛驒尾根（望月　森脇　小林）
發（八、〇〇）——ヂャンダルム——飛驒尾根第三テラス（一、三〇）——登攀——ヂャンダルム（四、〇〇）——歸幕（六、一〇）

十六日夜東京發　十七日德澤泊りで林俊介本日午後二時半頃來幕。林檎、菓子、罐詰等澤山の土産物を持參せり。

七、一九　薄晴霧　全員行動す。

本谷より北穗高（岩崎　原　齋藤　里見　水田　高橋　宮城）
發（七、三〇）——本谷出合（八、二五——三五）——本谷をつめて北穗最寄のザッテル（一一、二五——一二、〇〇）——北穗高（一、二〇——二、二〇）　以下次のパーティと同じ。

北穗高側稜（小林　柿原　望月）
發（一〇、〇〇）——北穗高澤をつめて右の稜を登る——北穗高（一、四五——二、二〇）　以下次のパーティに同じ。

北穗高涸澤岳（林　森脇　和田　大塚　日江井）
發（一〇、二〇）——岩小舍——北穗高（一、四五——二、二〇）——涸澤コル（三、三〇）大塚　日江井　齋藤　は涸澤岳へ——小舍——歸幕（五、四〇）　其他はコルより下る——歸幕（四、〇〇）

前穗高北尾根（鷲崎　榎本　新羅　松浦　關根）
發（八、三〇）——北尾根——前穗高（〇、五五——一、三五）——奥穗高——歸幕（四、三〇）

瀧谷第五尾根（小谷部　森川）

發(四、一〇)——小舍(五、四五——六、〇〇)——涸澤コル(六、五〇——七、〇〇)——瀧谷Dルンゼを下る——第五尾根へ取付く(八、一〇)——登攀——涸澤コル(九、五〇——一〇、〇〇)——岩小舍でゆつくりのびて歸幕(四、〇〇)第四尾根かクラツク尾根かを登る積りで早く出たが天氣が面白くないので簡單に第五を登る事とする。餘り規模が小さいので果して之が第五かどうか疑問に思つた程だが、廿二日に第四を登つた結果第五なる事がはつきりした。Dルンゼの少し上からリッヂに這入つたので取付きが惡かつたゞけだ。(小谷部)

今日を以て合宿を終了し明日より自由行動とす。

七、二〇　快晴　本日下山せし者次の如し。里見　高橋　宮城(槍燕縱走)。林　岩崎　原(上高地〈〉)。關根(歸京)。新羅(常念〈〉)天幕に殘つた者は休養したり登つたりする。

前穗高北尾根　(柿原　森川)

發(一一、二〇)——三、四のコル(〇、二五——一、〇〇)——前穗高(二、二五——四〇)——奥穗高——歸幕(六、三〇)

朝からいゝ天氣、今日は休養日だつたがあんまり天氣がいゝしKが寫眞を撮りに行こうと云ふので空身でのんびりと出掛けた。(森川)

涸澤岳奥穗高　(大塚)

發(八、三〇)——小舍——涸澤岳(一〇、五〇——一一、〇〇)——涸澤岳西尾根——小舍——奥穗(一、〇〇——二、三〇)——岩小舍(三、三〇——四、三〇)——歸幕(五、〇〇)

久し振りの快晴に寫眞をとりに登る。

森脇　和田　榎本は展望と煙草補給の目的で小舍へ。

前二者涸澤岳迄至る。望月　鷲崎　日江井　水田は涸澤の岩小舍へトカゲに行く。小谷部　小林　松浦　齋藤は天幕の周圍にて晝寢。尙昨日午後來幕した奥原　守は上高地へ下る。六人用天幕其他器具若干持參せしむ。

七、二一　快晴　本日下山者次の如し。横尾本谷より大切戸を經て槍へ向ひし者(柿原　森脇　小林　和田　榎本　松浦)。上高地へ(鷲崎　大塚　日江井　齋藤)。上高地へ下りし者に二人用天幕等持たせる。殘りの四名は引續き涸澤生活を繼續す。

(合宿責任者　小谷部、記錄掛　望月)

(附記)從來の方法は始めに各方面の縱走等を行つて然る後一ヶ所に集ると云ふやり方であつたが、それでは統制がとれず氣分も幾分だれ氣味になるので、今年は夏季合宿となし何はとまれ先づ全部員が一ヶ所に同時に集り一定期間皆で統制ある行動をなし、解散後は全然自由行動と云ふ事にしたが果して結果は非常に良好であつた。殊に團體意識の覺醒とその實踐に對してはかゝる合宿ならでは得られぬ良き修練を行ひ得たと思ふ。個人の素質を向上せしむる傍ら、かゝる機會を利用して所謂チームワークの訓練を爲す事は今後の合宿で大いに心掛くべき事であらう。而してゆくゆくは卒業間近き者及び初心者を除く中堅所は、特別班としてより高峻遠隔の地に、より一層進歩した形式で合宿を行ふ樣にしたいものである。(小谷部)

尙涸澤合宿にかんしては本文中柿原謙一執筆の文章を併讀せられたし。

涸澤生活

小谷部全助　望月達夫　森川眞三郎　水田洋

七、二一　快晴　合宿より引續き涸澤生活をなす。

北尾根第三峰フェース　オーダー（小谷部　森川　望月）

天幕發（〇、二〇）——三峰フェース下（一、三〇——四〇）——登攀——二、三峰のコル（三、〇〇）——前穂高（三、〇七——三〇）——歸幕（四、一〇）

三峰のフェースは北尾根縱走者の多い時は落石の危險があるから、朝早くか午後がいゝと思ふ。思つた程惡場はないし規模も小さい。けれ共下方三分の二位は岩も堅いし涸澤附近では面白い處の一つである。天氣がいゝので愉快な岩登りであつた。（望月）

奥穂高（水田）

發（〇、二〇）——小舍——頂上（二、三〇——三、一〇）——歸幕（四、三〇）快晴だつたのでゆつくり遠近の山々を見物。

今夜から大天幕に四人でのび〳〵とねる。

七、二二　晴夕立

瀧谷第四尾根　オーダー（森川　望月　小谷部）

發（五、五〇）——涸澤コル（七、二〇——三〇）——Dルンゼを下る——D、Cルンゼ出合（八、五〇——九、〇五）——Cルンゼの瀧（九、二〇——四〇）——第四尾根に取付きアンザイレン（一一、三〇）——ツルム（二、〇〇）——縱走路（二、五五）——北穂高（三、一五——四五）——雨宿りし乍ら北穂高澤より歸幕（五、三〇）

Cルンゼの瀧の少し上から右上に見える岩峰を登るべく草付きをリツヂに出たが手がつかないので敬遠して普通のルートを取り、Cルンゼを第二コル迄登る。途中巨大な落石あり、膽をつぶす。思つたより規模は小さかつたが面白く岩を樂しめた。途中下手な打ち方をしたピトンが隨處にあつたので登攀者の危險を憂へて一々拔いてきた。縱走路から望月は涸澤コルへ（夕立をやましつゝ歸幕四、三〇）あとの二人は北穂頂上へと向ふ。頂上で夕立に遇ひコンケーブした岩蔭に避難す。（小谷部）

奥穂高前穂高（水田）

發（六、一〇）——奥穂高（八、一〇——三五）——前穂高（一〇、四五——一一、二〇）——歸幕（〇、三〇）

明日はもう下るのでグリセードの練習等存分になす。

七、二三　薄日後雨　小谷部、森川瀧谷へ向つたが天候惡化の徵ありし爲もどる。望月　水田下山。發（九、〇〇）——德澤（〇、三〇——一、〇〇）——上高地（二、三〇）

大天幕其他は明日おろす豫定であつたが、人夫の都合つきたる爲全部涸澤をひき上げることにした。

發（〇、二〇）——德澤（三、二〇——四、〇〇）——上高地（六、〇〇）

明神澤より前穂高岳

岩崎利一　原鐵三郎

七、二一　快晴　上高地天幕（七、三〇）——岳川林道——明神澤出合（九、四五——一〇、〇〇）——明神澤を登る——前穂高（二、三〇——三、〇〇）——上高地（六、三〇）

凄い位の快晴、明神澤の雪溪が目に痛い。仰げば前穂高へ續くハウ

プトグラートが黝く聳え、流雲が時々それを掠めて行く。今度の山行のフイナーレとしては、實に相應しい一日であつた。（岩崎）

天狗岩

大塚武　日江井正巳　齋藤明智

七、二二　快晴　上高地天幕（六、〇五）——西穂高澤右俣下端（八、一五——三三）——西穂の尾根（一一、〇〇）——天狗岩の頭（一一、二〇——〇、三〇）——天狗澤下端（二、〇〇）——上高地（三、四〇）

西穂高へ行くつもりで出る。西穂への稜線へ出ると西穂のピークは案外遠く目の前の岩が非常に惡く見えたので遂に軟化してしまつた。稜線は岩がもろくひどい逆層があつたりしてよくない。尙岳川側で自然落石による凄い岩雪崩を見た。（大塚）

上高地天幕日誌

（前記）本年の上高地天幕は涸澤合宿の爲、長期間は張らなかつた。合宿前の二、三日については涸澤合宿の處で記してをいたから、此處では合宿解散後の日誌のみをかゝげる。

七、二〇　快晴　林俊介　岩崎利一　原鐵三郎の三名涸澤より下り上高地小梨平に六人用天幕設立。

七、二一　快晴　岩崎　原の兩名は明神澤より前穂高へ。
鷲崎雄四郎　日江井正巳　齋藤明智　大塚武の四名は二人用天幕を持ち涸澤より下る。涸澤（九、一〇）——横尾（一一、一〇——〇、五〇）——德澤（二、〇〇——三〇）——上高地天幕（三、四五）

七、二二　快晴　大塚　日江井　齋藤の三名は天狗岩へ。
此の日午後林　岩崎　原歸京の途につく。

七、二三　薄日後雨　望月達夫　水田洋の二名涸澤より下る。午後二時半天幕に入ると鷲崎　大塚　齋藤　日江井が惡天氣のことゝてのびて居た。その中大塚　齋藤　日江井の三名歸京の途につく。夕刻涸澤の天幕を一切引上げて小谷部全助　森川眞三郎上高地へ下る。槍平の方へ行きし小林重吉　森脇芳之　和田榮達　中尾峠を越へて來る。當然の事ながら八名の顏を揃へて西糸屋で大コンパを開く。三名のびて西糸屋に泊り、五人は雨の中を天幕へ。

七、二四　曇後晴　午前中大阪の先輩中島孚　齋藤正治の兩氏來たれど丁度歸京の前とて一緒に登る事も出來ず、對談一時間許りにして名殘おしく別る。小谷部　望月　小林　森川　鷲崎の五名午前中歸路につく。森脇　和田は午後歸路につく。先輩二氏は德澤へ。水田一人殘る。尙六人用天幕は取はらひ二人用のみ殘す。

七、二五　曇後晴　水田燒岳へ登る。
天幕（八、〇〇）——燒岳——天幕（一、三〇）
はじめ曇つて雨かと思つたが段々晴れて來て眺望は惡くはなかつた。中尾峠を越えてみたくなつた。

七、二六　晴　最後迄一人で殘つた水田、天幕を取はらひ上高地をあとにして大瀧山へ向ふ。

大瀧山　蝶ケ岳　常念岳

新羅二郎　他一名

七、二〇　晴　涸澤天幕（八、三〇）——横尾出合（一〇、〇〇——一五）——德澤（一一、四五）——大瀧小舍（五、三〇）

數日間住み慣れた涸澤のテントに別れを告げ關根と二人で一氣に下る。眞夏の太陽はいゝ加減暑く感じる。横尾で部員外の山の好きな男と合し、德澤で上高地へ下る關根と別れてエッチラオッチラ大瀧まで行く。何も急いだ旅路には非ざれば出來るだけゆつくり登る。途中で營林署の人に遇ひ高山植物採集に關する規則を大分聞かされた。山許り歩いてる人は實に俗氣が無くていゝ。大瀧の頂上から見た穗高の夕暮は一寸凄味さへ帶びて何とも云へないものである。小舍では久し振りに風呂に入れると思つたが沸いてゐなくて殘念だつた。

七、二一　晴　小舍（七、四五）——蝶ケ岳（一一、二〇）——一二、三〇）一—常念岳（五、三〇）——常念小舍（六、二〇）

今日も亦珍らしい上天氣に惠まれて穗高を始め多くの雄大なる山々を眺める事が出來た。大體が寫眞を撮る事を一つの目的として來たので隨分暇をとつた。手札のカメラに三脚をつけてピントグラスなんかのぞいてゐると一枚撮るのに廿分位かゝる。このコースは道はよく、眺めはこよなく良いのに恐ろしく人氣のないのはどうした譯だらう。餘り心行く許り天下の絶景を愛で過ぎた爲に、豫定の時刻よりひどく後れて、常念の頂上に立つた時はもう日沒も近く線の柔いこの山の姿が長く里の方へ向けて伸びてゐた。

七、二二　晴　小舍（一〇、三〇）——須砂渡（五、〇〇）——松本（九、〇〇）

今日は下る日なので、朝の中東天井位迄行つて來やうと思つてゐたのに寢過ぎた爲、横通までしか行けなかつた。頂上であきぬ眺めを存分に味つて一氣に下る。「此處は德本」ならぬ常念だけれど、實際穗高が見えなくなる時は淋しくなつた。下り道は日影が少くヂリ〳〵照りつけられる上に風が無いときてゐる爲、隨分暑かつた。途中で長蛇の如き列を作つて登つて來る女學生に三度も逢ふ。仲々元氣な事である。午後から段々空模樣が變り、風が出てきて險惡な雲行きとなつてきた。須砂渡では、一分の違ひで最終のバスに乘り後れ二拾錢で濟む所が二圓になつたのはいかにも口惜しかつたが、此の惠まれた三日を考へれば何んでもないだらう。

槍燕縱走

里見治男　高橋廣三郎　宮城恭一

七、二〇　晴　涸澤天幕（九、〇〇）——一俣（一一、一五）——槍澤小舍（二、〇〇）——大槍小舍（四、四〇）——殺生小舍（五、四五）

豫科一年のみのパーティで涸澤の合宿をあとにする。

七、二一　快晴　殺生（五、〇〇）——槍ケ岳頂上——殺生（八、一五）—西岳小舍（一一、三〇）——燕山莊（五、四〇）——燕頂上（六、三〇）——燕山莊（七、〇五）——中房溫泉（九、一五）

快晴に惠まれて大槍からの眺望は實に素晴らしかつた。殺生から西岳小舍迄時間のかゝりすぎたのは私の時計の止つてゐたのを知らなかつた爲である。燕山莊より中房への下りは懷中電燈をたよりに降つた。

七、二二　晴　中房溫泉（一二、一五）——一ノ瀨（二、五〇）——有明—松本（宮城）

槍燕縱走

榎本直司　松浦靜雄

七、二一　晴　涸澤天幕——本谷——殺生小舍

柿原　小林　森脇　和田の諸氏と行をともにする。大切戸のカールは穂高縦走路から眺めるのと亦別の感じがした。

七、二二　晴　殺生小舎(七、三五)——西岳(九、〇五)——燕山荘(二、一〇)——中房(三、三五)

本日も天氣よし。他のパーティに別れ燕へ向ふ。西岳よりの尾根通しとなれば北アルプスの景觀は一望の下に收められ、その上天氣には惠まれ道はよいし幸運な縦走だつた。大天井を過ぎる頃から水が無くなつて、さりとて亦雪渓も見當らず喉がカラ〳〵になつたのには弱つた。燕山荘より一擧に中房までかけ下る。

七、二三　晴　中房——有明——松本(榎本)

槍から烏帽子へ

柿原　謙一

七、二一　晴　涸澤の天幕より、横尾本谷、大キレット、南岳を經て殺生小舎に至る。同行は小林　森脇　和田　榎本　松浦の諸兄。

七、二二　晴後夕立　殺生小舎(七、二〇)——肩小舎(七、四〇)——八、二〇)——双六池(一一、二〇——一一、四〇)——三俣蓮華小舎(一、三〇——二、〇〇)——鷲羽岳——水晶小舎(四、四〇)

五人の山友と別れ一人西鎌尾根を降り、双六池に憩ふ。槍と穂高が晴天の太陽の直射の下に、グインと強くそゝり立つのを眺め乍ら、双六岳の腹から三俣蓮華に續くゆるい山路を歩む。殊に三俣蓮華の山肌は、傾斜のない綠の草地で、雪渓が白く光り、之から溶けて出る水は一條の流れをなして、音を立てつゝ流れ去り、正にスイスの牧場を偲ばしめる。鷲羽の登りには汗だくで參る。水晶小舎は佳い所に建てゝある。こゝの番人の話によると、蓮華の小舎から鷲羽の山腹を通つて水晶小舎に至る好い路があり(所要時間一時間半)、之を利用すると好いと云ふ。

七、二三　半晴後霧雨　小舎(七、〇〇)——野口五郎岳(八、五〇——九、二五)——烏帽子小舎(一一、三〇——一二、〇〇)——濁小舎(二、三〇)——馬トロ——葛ノ溫泉(四、三〇)

天候が變りそうなので急いで降る。烏帽子小舎は氣持の佳い所にある。霧深く烏帽子岳に登るのを止めて、濁川出合へ降る。濁小舎前で丁度馬トロが出る處なので、乘せてもらふ。葛の溫泉では、半月振りに汗と垢を洗ひ落して、十二疊の部屋でノビル。

七、二四　半晴　葛溫泉(一一、二〇)——十二丁歩きバス(一一、四五)——大町驛——松本驛(飯田屋にて小谷部　望月　小林　森川　榎本　鷲崎に會ふ)

槍ケ岳(東南面登攀)より蒲田川へ

小林重吉　森脇芳之　和田榮達

七、二一　晴　涸澤天幕——横尾本谷——南岳——殺生

此の日は他の隊と共に賑やかに行く。

七、二二　晴後夕立　殺生小舎(七、二〇)——肩(八、〇〇——二〇)——槍東南面登攀——頂上(一〇、四〇——一一、四〇)——肩ノ小舎——槍平(一、四〇——二、二〇)——槍見溫泉(六、〇〇)

今日は天氣が良ければ槍の東南面に昨年と違つたルートを採らうと思つてゐたので快晴に張切つて岩にとりついた。これは丁度殺生小舎から見ると光つてリツヂ樣に頂上に續いてゐる小尾根で、去年はこれより更に右側を登つたのだつた。この小リツヂの兩側はガラ〳〵してゐ

て面白くないので忠實にリッヂ通りをたどつた。可なりサウンドなそして處々ではちよつとスリ、ングな面白い岩場であつた。私達の經驗だと前穗の北尾根などよりはずつと岩らしい感觸を持つてゐる。殊に冬季に於ては可なり興味深いクライミングが出來ると思ふ。

七、二三　風雨　槍見溫泉(一一、一五)——中尾——中尾峠(三、〇〇—五、〇〇)——神河内(六、〇〇)

一泊した槍見溫泉は神河内とはうつてかはり、非常に原始的な素朴感の漲つてゐる處で、何とも云へぬ好い感じを登山者に與へる。

神河内では既に涸澤をひきはらつて下つてゐた仲間の連中と一緒になつた。(小林)

大瀧山　蝶ケ岳

水田　洋

七、二六　晴　上高地小梨平(九、二〇)——德澤(一〇、四五——一〇、五五)——大瀧小舍(五、〇〇)

大瀧小舍は米五合わたしたら待遇は全然變らず、辨當附きで五〇錢だつた。小舍は新築中で新しいのは西に窓を澤山あけたと云つてゐた。ルツクの上に四貫のテントを積んでゐたのでかなりへばつた。

七、二七　晴　朝、蝶ケ岳へ往復。お花畑にねころんだり雪を食つたりし乍ら雲海の上の槍、穗高、八ッ、淺間をながめる。

大瀧小舍(一〇、三〇)——小倉への分岐點(一二、〇〇)——發電所(二、五〇)——須砂土(三、二〇)——バス——松本

バスで桑畑の中を行くのは氣持がよかつた。空の果てに夏雲が白く、山々は綠に輝いてゐた。信濃の夏と云ふ言葉が何だか親しく思はれた。

蓼科山附近

水田洋　他六名

七、二八　晴　松本(前一、三〇)——茅野(五、五〇)——第一銀行山莊發(九、三〇)——蓼科山頂(三、三〇——四、二〇)——蓼科牧場(七、〇〇)

茅野より親湯までバス。第一銀行山莊で東京から來た六人と一緒になり蓼科山へ。頂上から淺間爆發の餘煙を見る。霧ケ峰の綠の波は素晴らしい。昨日別れてきた穗高に、沈む陽がきれいだつた。

七、二九　晴　牧場(八、〇〇)——番小舍(九、二〇——九、三〇)——山莊(一一、二〇——二、〇〇)——親湯(二、三〇)——明治湯(七、〇〇——七、三〇)——澁(八、三〇)

明治湯あたりで日は落ち月明りをたよりに歩く。澁は感じが惡かつた。

七、三〇　晴　澁(八、一五)——中山峠(九、三〇)——夏澤峠(三、三〇——四、〇〇)——本澤溫泉(四、四〇)

赤岳石室に向つて出發。天狗の頂上近い頃から西風猛烈となり、全然山が始めてな者も三名程居たので殘念ながら夏澤峠から下る。天狗と根石の間に駒草が澤山あつた。

七、三一　晴　本澤(九、三〇)——稻子牧場小舍(一一、二〇——一二、〇〇)——松原湖驛(一、三五——一、四三)——歸京

赤石岳　惡澤岳　大井川西俣

大塚　武

八、一　晴　靜岡(六、三五)——上助(七、三五)——上落合(一〇、一〇)——口阪本(一一、四五——〇、三〇)——水呑茶屋(二、〇〇——三〇)——大日峠(二、四五)——井川(三、五〇——四、二〇)——田代(六、〇〇)

八、二　曇後雨　田代(六、三〇)——高瀬島(九、三〇)——光岳への分岐點にて晝食——沼平(一二、〇〇——〇、五〇)——中ノ宿(三、〇〇——一〇)——赤石渡(四、三〇)——椹島(五、三〇)

大井川は中流が美しい。　瀞となり瀬となり鬱蒼たる森林の低みを深く〳〵縫つて人里へ流れ出づる。　殊に霧雨に煙る高瀬島の釣橋のあたりは一層美しい。

八、三　曇濃霧　椹島(八、〇〇)——赤石小舍(〇、三五——一、〇〇)——富士見平(一、三〇)——赤石、小赤石コル(三、〇〇)——赤石岳(三、一五)——コル(三、二〇)——小赤石(三、三三)——大聖寺平(四、〇〇)——荒川小舍(四、三〇)

赤石岳から大聖寺平にかけては物凄いばかりの險惡な天候、赤石小舍から赤石、小赤石の稜線を眺める事は數年來の期待であつたゞけに甚だ殘念であつた。

八、四　晴强風　荒川小舍(五、三五)——荒川岳(六、四〇——五〇)——惡澤岳(七、三五——五〇)——北山稜——新蛇拔澤の上(九、一〇)——櫻島小舍(九、五〇)——小西俣の出合まで遊びに行く。

空の一角には吊し雲が表れてゐるのに槍穗高が見えると云ふ變な天氣。惡澤北山稜の新道は愉快な尾根漫歩が樂しめる。　早く櫻島に着いたので蝙蝠鹽見へもと思つたが自重して止める。

八、五　曇後晴　小舍(六、三〇)——二軒小舍(七、五〇——八、一五)——轉付峠(九、三〇)——新倉(〇、一〇)——身延(四、三〇)

朝の險惡な空模樣に鹽見をあきらめて、西俣を下ると後から次第に天候回復。

八、六　快晴　身延(七、三〇)——安倍峠登り下端(一〇、二〇)——峠頂上(一一、五〇——〇、一〇)——梅ケ島溫泉(一、二〇)

高低のない廣々とした山峽、刈つた樣な熊笹の中に立つ木々、清水は苔のしとねをすべつて流れ、白雲の早く過ぎる、安倍峠は實に氣持がよい處だ。

八、七　快晴　溫泉(七、三〇)——新田(八、二〇)——大谷崩れを見に行く——新田(九、五〇)——瀨戸橋(〇、五〇)——渡本(一、三五——五〇)——靜岡

尾瀨より日光へ

鷲崎雄四郎

八、六　晴夕立　沼田——三平峠——長藏小舍

八、七　晴霧多し夕立　長藏小舍——燧岳——尾瀨ケ原溫泉——三條瀧往復

八、八　晴夕立　尾瀨ケ原溫泉——長藏小舍

午後は沼畔にて水遊びにくらす。

八、九　曇　長藏小舍——黑岩山——鬼怒沼——八丁ノ湯

八丁湯の露天風呂では、手拭ひ使ふ小手先に赤蜻蛉がきてとまる。

八、一〇　曇　八丁湯——西澤金山——金田峠——日光湯元

尾瀨も日光も均しく風光明媚なれど、その雰圍氣に著しき對照あり。尾瀨ケ原を歩くゝらゴム足袋がよい。　尙ブヨの多きことは、小平、國

立の比に非ず。

此の行時計持參せざれば、時間記錄は不詳なり。

蔦谷より藥師　双六　槍ケ岳

吉澤一郎　村尾金二（以上先輩）小谷部全助

八、一六　晴後雨　富山――藤橋（九、四五）――眞川、常願寺川落合のセメント小舍

天幕一式に豊富な食料品に一同の荷物重く強い日射に汗だく。眞川落合頃から突如として篠つく様な豪雨に見舞はれ、飯場より汚い物置小舍の一偶に慘めな第一夜を明す事とす。

八、一七　雨後曇　小舍（九、〇〇）――眞川水電取入口（一〇、三〇）

眞川を溯る道は地圖では右岸になつて居るが現在は左岸である。（たゞし取入口迄）

八、一八　晴後曇　取入口（六、〇〇）――箱瀧（九、〇五――三五）――岩井谷蔦谷出合（一二、〇〇――四五）――蔦谷第一の瀧（二、〇〇）――第二の瀧（三、一五――三五）――一七〇〇米幕營地（四、三〇）

取入口からヒバリの惡場を過す所あたり迄水電小舍の若者を道案内に雇ふ。實にのんきな奴で案内しに來たのか鮠を釣りに來たのかわからぬ。箱瀧は左岸に道あり。岩井谷の出合では、腰下迄の渡渉をせねばならぬ。蔦谷出合附近は磊岩の廣い河原を爲して居る。第二の瀧は滑かな岩に行手を阻まれ一寸苦勞す。第一、第二共に立派な瀧だ天幕地から雲霧を呑吐する藥師が登れさうもない程高く聳えて仰がれる。

八、一九　半晴　天幕發（七、〇〇）――二俣（七、三〇）右へ這入る――上の二俣（八、二〇）――奥の二俣（一〇、四〇）左へ這入る――山稜（一、二五）――藥師頂上（一、五五――二、三〇）――藥師澤乘越（四、二五――三五）――藥師澤を降る――二千米附近で幕營（六、〇〇）

一番最初の二俣附近は薄い雪溪を爲して居り一寸したショックで大きな雪塊が崩壞し危險極りなく自重して岸や端を歩く。右へ這ると澤は巨岩の積重つた急傾斜になり面白くなる。上の二俣邊も雪溪で右の方は兩岸の迫つた瀧狀を爲して凄い。勿論左へ行く。傾斜も一段と加はり右岸を高廻りしたり仲々惡場があるが、やがて一つの瀧を卷いて越すと忽ち高山草が毛氈の様になだらかな大地を被ふ源流地帶に飛込む。この邊は埋藏金の傳說豊富な場所で半眞面目に兩岸に目を光らせ乍らのんびりした澤を、更に磊々たる山腹を攀じて一汗かいた頃藥師頂上の冷風に身を投出す事が出來た。夏雲の間に遠山を賞しゆつくりと休む。藥師澤も好い澤だ。枝を垂れた格好の好い針葉樹の立木の下は美しい草原で傍には透明な清水がチロ〳〵と流れて藥師澤にそゝぎ澤の彼方に黑部五郎邊が立派に眺められると言ふ所に天幕を張る。クマさんやペンちやんは比較的少食で現役の馬鹿食ひ同志の積りで飯を作るとともんでもない事になる。

八、二〇　晴　天幕發（七、二〇）――黑部川出合（八、二〇）――アカギ澤出合（一〇、二〇）――五郎澤出合（〇、五〇）――日本平終り（二、〇五）――三俣蓮華小舍（五、二〇――三〇）――双六池小舍（八、二〇）

今日のコースは、一日なだらかな女性的な景觀の中を歩いた。穗高と劔の中間にあつて全く感じの異つた山容である。鷲羽岳附近の山々

は實に何とも言はれぬ曲線の美しさを示して居る。双六池には立派な小舎が出來て居たが夜だつたので氣付かず池畔の汚い舊小舎で眠る。

八、二一　半晴　小舎(六、〇〇)——槍肩(一一、〇〇)——槍澤小舎一、〇〇)——上高地西糸屋(七、〇〇)

殺生小舎で荷の一部を貨物運送に頼み輕身で下る。槍澤には殆んど雪渓消失して居た。眞川水電小舎などに較べると上高地の空氣は實に都會的で嫌らしい。尙此の行は「蔦谷より藥師へ」(吉澤一郎記　山岳第三十一年第二號)に詳述しあり。(小谷部)

大岳　馬頭刈山

水田　洋

八、一七　雨　御岳——海澤に入る——小舎

別に當もなく御岳驛に下車し、なんとなく海澤に行くことにきめてバスにのる。降りて橋を渡ると雨だ。面倒だと出鱒目に山道を登ると晝頃小舎の前に出たので一晩泊る。

八、一八　晴　海澤を下る——鋸山——大岳——馬頭刈山——高明山——五日市

一旦村へ下り鋸、大岳を越へて五日市へ出た。水がないのにはまいつた。

愛鷹山

大塚　武

八、二三　晴　靜岡——御殿場——須山

八、二四　晴後曇　須山(五、五〇)——愛鷹莊(六、四五——七、〇〇)——越前岳(八、二〇——三〇)——呼子岳(九、一〇)——屏風岩(九、三〇——四五)——逢來山——(一〇、〇〇)——鋸岳(一〇、一五)——位碑岳(一一、二〇——一二、〇〇)——愛鷹山(一、〇五——一、三〇)——原(四、一〇)——靜岡

愛鷹のよさは位碑までにとゞまる。鋸なんてあまり面白くもない。

大岳山　海澤

岩崎利一

八、二五　晴　立川(七、五八)——御嶽——海澤(一〇、〇〇)——三釜(一二、〇〇)——大岳山(二、五〇)——五日市(六、四九)

暫く歩かなかつたので、久振りの奥多摩が面白かつた。ひどく暑いので休む毎に體を拭ひながら行つた。初冬の頃歩いたら好いと思ふ。

栂峠　二子山

林俊介　岩崎利一

八、二八　晴　上野(一一、五〇)夜行

八、二九　晴　小諸(六、〇〇)——小海(七、三〇)——栂峠(五、〇〇)——水ノ戸(六、〇〇)——十石峠街道——白井——濱平(一〇、三〇)

日中は暑くて困つたが、栂峠からの夕景がよかつた。

八、三〇　晴　濱平(八、三〇)——坂下(一〇、〇〇)——(自動車)——新羽(一二、〇〇)——志賀坂峠(五、〇〇)——坂本(七、〇〇)

志賀坂峠に聞く盆踊の太鼓、兩神のシルエットは忘れられない。

八、三一　晴　坂本(七、三〇)——二子山鞍部(九、〇〇——一〇、三〇)——牛首峠(四、〇〇)——小鹿野(六、一五)——秩父(七、三〇)

坂本から二子山目ざして登る。まだ見ぬドロミテの山容はこんなのではあるまいかと思ふ樣な二子山、背後の兩神山は雲に頭をつゝまれてゐる。牛首峠から降つて、武甲山を見た時は全く遙か遠い所から來たものだと思つた。あの麓、秩父町には二人を待つ山友が居るのだ、と思ふと、重い足も次第に速くなつて行く。(岩崎)

鹽見　白峰縱走

小谷部全助

九、二　晴　伊那大島發(七、二〇)バス——峠着(八、〇〇)同發(八、三〇)——落合(一〇、三〇)——鹿鹽、山鹽館(一一、一〇)

伊那大島より峠までバス賃六〇錢。

九、三　晴夕立　鹿鹽(七、〇〇)——南澤と離る(一二、〇〇)——三伏峠小舍(二、二〇)

小舍に入つたとたんに物凄い夕立襲來。夕刻になつて釣師と關西のハイカー二人來り低山氣分をかもし出す。

九、四　快晴後夕立　三伏峠小舍(三、三〇)——鹽見岳頂上(六、三〇——七、一〇)——北荒川岳(八、五〇——九、一〇)——熊の平(一二、一〇——一二、三〇)——三峰(一、一五)——間の岳頂上(二、三〇)——北岳小舍降り口(三、四五)——北岳小舍(四、一〇)

一氣に大樺小舍迄行かうと月明を利して出發したが、熊の平あたりで夕立模樣となり白峰山道ではとう〳〵横なぐりの雨に逢つて了ふ。湯宿で貰つた粹なカラカサをさして歩いたが結局ぬれて北岳小舍に變更。名取治太郎が居て焚火の御馳走にあづかる。

九、五　晴　北岳小舍(六、三〇)——釣尾根ギャップ(七、三〇——九、〇〇)——大樺澤——長衞岩小舍(一〇、〇〇——一一、三〇)——大樺小舍(一二、〇〇)

北岳小舍から釣尾根ギャップへ直接山腹を卷いて達する。切開きやケルン等あり恐らく人夫等の近路になつて居るものであらう。長衞岩小舍で甲州から來た望月　森川　大塚　日江井に會ふ。山の中で落合ふのは嬉しいものだ。(小谷部)

大樺小屋生活(北岳バットレス第一、第四、第五尾根)

小谷部全助　望月達夫　森川眞三郎　大塚武　日江井正巳

九、二　晴夕立　新宿發(後一一、五五)望月　森川　大塚　日江井出發。

九、三　晴夕立　韮崎(五、〇六)——祖母石(五、二〇——三五)——發電所(六、〇五——三五)——鷹ノ田(七、四〇——八、二〇)——鳥居峠(九、〇〇——一五)——青木鑛泉(一〇、三〇——一一、三〇)——南精進瀧(一、五〇——二、一〇)——北御室小舍(四、四〇)

ドンドコ澤の急坂と重荷とになやまさるゝ事例の如し。五色瀧附近にて猛烈な夕立に見舞はれる。

九、四　晴時々曇　北御室(六、四五)——賽ノ磧(八、〇〇——四〇)——高嶺(九、五〇)——白鳳峠(一〇、三〇——一一、一〇)——野呂川邊(一、五〇——二、一五)——廣河原小舍(二、三〇——三、三〇)——大樺小舍(七、〇〇)

高嶺あたりからの眺望何時もの如く良し。廣河原泊りの軟化說も出たが猛烈なるノミに辟易し遂に目的地迄ガンばる。

九、五　晴　小舍(九、一〇)——長衞岩小舍(一〇、一〇——三〇)——釣尾根最低鞍部(大澤樺乘越)(〇、〇五——三〇)——北岳(一、二〇

——五〇)——小舎(三、〇〇)

四人で出掛ける。 三伏峠から北へ縱走して大樺小舎生活に參加豫定の小谷部と長衞岩小舎にて會ふ。 森川は小谷部と小舎にもどり、他の三名にて出發。 釣尾根からバットレスの寫眞をとる爲と、 トレーニングの爲に。伊那の方の眺望良し。

九、六 晴ガス 第五尾根登攀 (望月 日江井 大塚)

小舎(七、三〇)——雪渓下 (八、一五——三五)——バットレス下(九、五〇——一〇、二〇)——尾根に取つき後右のdガリーに入る——中食(一一、〇五——二〇)——dガリーを登り再び左の尾根へ出る——北岳頂上(二、〇〇——三、二〇)——小舎(五、〇〇)

バットレスの岩壁下で第四尾根へ行くパーティと別れ、第五尾根を登る。 途中第四を登攀中の二人が手にとる樣に見えるのでヤッホーを交はしたり、 寫眞をとつたりする。 頂上で合流して共に歸舎。

第四尾根登攀 (小谷部 森川)

岩壁下發(一〇、〇〇)——bガリー右岸の稜を攀ず——cガリー(一一、一五——三〇)——第四尾根テラスa(一一、五〇——一二、〇五)——マッチ箱第二コル(一、一〇——二〇)——巨岩上のテラスb (二、〇五)——北岳頂上 (二、二〇——三、二〇)——小舎(五、〇〇) (本文三二頁圖參照)

第二コル上部、スラブの壁には一寸手古ずつたがフリクションを極度に利かせて辛くも突破。 昨秋村尾先輩が肩を借りて這上られた所だ。第三コルからの登りで、昨秋は右のガリー側に少しトラヴアースした後チムニー狀の所を登つて再び主稜に出 可成困難をなめた相だがコルから直接主稜の岩場を攀じた方がずつと簡單である。 頂上では第五尾根パーティと一緒になり悠々記念撮影などして山頂の懶惰を樂しむ。

九、七 晴 滯在。

望月 大塚 日江井の三名白峰三山縱走の爲北岳小舎へ向ふ。

九、八 晴 第一尾根登攀

小舎(八、一〇)——bガリー下 (一〇、二〇——三五)——aガリー經由第一尾根のリッス登攀A點上のアンカレッヂ (一二、一〇——二〇)——主稜へトラヴアース・テラスB點(一二、五〇)——惡場終り第二尾根上部との接合點(一、二〇)——北岳頂上(一、四〇——三、〇〇)——小舎(四、三五) (本文二八頁圖參照)

B點から下の主稜は登攀不可能の斷崖。 上部も素晴しく立派な岩稜で面白い登攀が出來る。 一ケ所オーヴアーハング (C點) あり再三擊退された後やつと乘越す。 今日は何だか氣嫌が惡く二人共むつゝり晝飯も攝らずにむきになつて登つた爲、 思出はあつけないものだつた。アンザイレンはBテラスからした。 上部にケルンを積む。

九、九 晴 大樺小舎發(七、二〇)——廣河原(八、一五——三〇)——白鳳峠(一〇、五五——一一、二五)——高嶺(一二、一五)——地藏賽ノ河原(一二、五〇——一、三〇)——北御室(二、一五)——青木鑛泉(四、二〇)

この日小谷部、 地藏岩の單獨登攀に成功す。

地藏岩登攀——表面が風化した花崗岩のニードルでホールド皆無。裏側、 即ち東北面に一條のクラックあり、 こゝをフリクション一點張りで登攀す。 頂點から三米程下部でこのクラックは狹まつて登攀の用を爲さず左側の稜へ移らなければならぬが、こゝで最も愼重なバランスと度胸を要した。 かゝるニードルの登攀にはピトン利かず下が平地な

のでザイルパーティはあつても無くても同じでトップの災害を防止し得るのは自身の力以外にない。二段になつた頂上には誰が持上げたか小さな地蔵様が安置されて居た。下段に手頃のピンありアプザイレンで下降す。

九、一〇　晴　青木湯——鳥居峠——韮崎（小谷部）

白峰三山縱走

望月達夫　大塚武　日江井正巳

九、七　快晴　大樺小舍（一一、三〇）——長衞岩小舍（〇、一〇）——水場（〇、二五——四〇）——大樺澤乘越（二、四〇——三、一五）——北岳小舍への分岐點（三、三〇）——北岳小舍（四、四〇）

前日既に北岳へは登つてゐるので大樺澤乘越より捷路を採つて北岳小舍へ。この小舍の東面の窓からは夕陽に映えた富嶽が望まれ、周圍は全く高山と云ふ氣がしてくる。

九、八　快晴　北岳小舍（六、三〇）——尾根（七、一五）——間ノ岳（八、四〇——九、三〇）——農鳥小舍（一〇、一〇——三〇）——農鳥岳（一二、〇〇——四〇）——大門澤下り口（一、一〇——二〇）——水に會ふ（二、三〇——三、一五）——大門澤小舍（四、〇〇）

秋晴れに張切つて縱走する。間ノ岳よりの南望は豫想にたがはず素晴らしい。大井川の東俣も何んと魅力のある谷だらう。殘雪の全然ない山も亦美事なものである。大門澤は然しガラ〳〵で不愉快な澤である。殘雪でもなければ二度と行く氣はしない。（今年から古い農鳥小舍の他に荒川水源へ新らしい小舍が出來た由）。

九、九　晴　大門澤小舍（九、〇〇）——早川合流點手前にて中食（一一、三〇——〇、一五）——奈良田（一、一五）——西山溫泉（二、一五）

山頂では秋を思はせる連日の晴天も、下りてみると殘暑に他ならぬ。暑いのでフウ〳〵云ひ乍ら方々で休んでゆく。早川の沿岸も又すてがたい景色が展開する。

九、一〇　晴一時曇　溫泉（七、一〇）——足馴峠（一〇、五〇——一一、三〇）——出頂ノ茶屋（一二、四五——一、三〇）——鰍澤（三、四〇）——甲府（四、二〇——五、五七）

足馴峠の長い路を歩く。途中から紺青の空に間ノ岳と農鳥が見送つて呉れたが、頂上では丁度霧にまかれて何も見えぬ。出頂ノ茶屋からは足下の平野が夢の樣。今年は颱風の影響なく豐年で何處の村々も豐かそうだ。山の歸へりに豐年の田畑の間を縫つてくるのは、全く嬉しい事だ。行きづりの百姓の顏迄が輝いて見える。甲府で小谷部　森川と落合ひ共に歸京。（望月）

大藏澤より大藏高丸

岩崎利一

九、二三　晴　初鹿野（三、四五）——田野——大藏澤二股（六、一五）——ガレを登つて山頂（八、三五——九、五〇）——ハマイバ——大谷ケ丸——曲澤峠（一二、〇〇）——初鹿野（二、〇〇）

大藏澤は靜かな良い澤だ。忙しい際に一日の閑暇を得た時などには格好の所である。大谷ケ丸の下邊の高原はとても地圖の概念では想倒し得ぬ廣茫さを持つてゐる。

大武川より伊那への旅

小林重吉　森脇芳之　和田榮達　小谷部全助　森川眞三郎

一〇、一六　薄曇　日野春――藪ノ湯の手前（七、五〇）――赤ナギ瀧（九、三〇）――ヒョングリ瀧（一〇、三〇）――四五）――赤石澤出合（一、二〇）――サデの岩小舍（二、一〇）

藪ノ湯の少し手前までハイヤー。赤ナギ瀧の少し上部迄立派な道がついて居る。岩小舍の感じは惡くない。

一〇、一七　雨　岩小舍（八、二〇）――仙水峠（一〇、二〇――四〇）――北澤長衛小舍（一一、五〇）

摩利支天南稜でも登る積りで來たが雨では仕方がない。雨の仙水峠では和田がもつて來た中村屋の支那饅頭を嚙り乍ら五人圓座になつてコースの議論に花を咲かせたが、結局最軟化説勝を占む。

一〇、一八　曇後雨　小舍（六、五〇）――北澤峠（七、一〇）――八丁坂下の河原（九、〇〇）――戸臺（一〇、三〇）――黑河内（一二、〇〇）――高遠――入舟驛――歸京

伊那の秋は豊富な山の幸に惠まれた平和境と言つた感が深い。何處へ行つてもしめじと栗の素晴しい御馳走をお茶うけに出して呉れるのだつた。（小谷部）

秩父行

中川孫一　吉澤一郎　近藤恒雄（以上先輩）柿原謙一　望月達夫
岩崎利一

一〇、一六　曇　新宿發夜行

一〇、一七　雨夜分晴　鹽山（三、五〇――四、一〇）――窪平（四、三〇）――杣口（六、〇〇――三〇）――馬軌道に便乘――終點（九、四五――一〇、〇〇）――小舍（一一、二〇――一、三〇）――奥千丈西南方の一支尾根上（五、二〇）露營

窪平から杣口迄はまだ暗い中で少し道を間違へ時間を損する。馬軌道に乘せて呉れる事を聞き杣口より便乘。此の軌道は現在では奥千丈の方へは行かずに、水晶峠方面へ行つてゐる。吾々は國師大弛の西方の一峠（川端下峠）へ登るつもりで劔ノ峰の西南方で下車。馬軌道は樂は樂だが此處まで一人一圓廿錢は安くない。此處から僅かで石英採屈所がありそれから細徑である。最初の荒川へ行く道はよくわからなかつた。暫くして指導標があり左金峰山、右山道、五丁にして登山休憩小舍ありと記してあつた。雨の爲見透しきかず右をとる。左をとるべきである事は後でわかつた。暫くすると果して「公德」と云ふ額のある小舍につく。雨をやます爲休む。此の小舍の位置は獨立標高點二〇一三の微西南の草地なり。これより地圖の最も東方の尻切れ道をたどつたらしく奥千丈二四〇九、四米三角點のすぐ西南二三六〇米の頭より西微北に走る枝尾根約二二〇〇米位に登りつき、折から雨も上り紅葉が夕日に映えてるのに氣をよくし星を頂いて寢る。（實を云ふと此の日は自分達の居る位置がよくわからなかつた）

一〇、一八　曇後雨　露營地（八、三〇）――奥千丈の尾根――三角點二四〇九、四米（一〇、一五）――國境尾根（國師三角點微西）（一一、五〇）――大弛小舍（〇、一五）

昨夜の星空は亦曇天と代る。朝食前岩崎と共に前記二三六〇米の峰迄往復、前途をうかゞひ位置を明かにして歸へり出發す。右の峰迄は全く踏跡なく藪こぎに苦しむ。右の峰迄くると踏跡表はれ漸時明瞭となる。三角點の手前で一時不明となりよくさがしたら「國師金峰」と

書いて矢印をつけた枯木を見出し難なく進む。三角點附近より雨降る踏跡は至極明瞭なり。奥千丈岳の東方をまき三薙平を經て國境尾根に出る。既に雨烈しき爲國師絶頂を割愛し大弛小舍へ西下す。午後先輩三氏柿原小舍の直ぐ北側を下り川端下を經て梓山へ。最終バスに間に合つた由。岩崎と共に小舍へ泊り明日の快晴を期待す。終日雨。

一〇、一九　雨　大弛小舍(一〇、四〇)——川端下峠(一一、一五)——川端下(二、〇〇)——居倉(三、〇〇——二〇)——信濃川上(四、〇〇——四、二九)

相變らず雨の爲下山に決し、川端下峠より信州へ大薙林道を下る。良い道だ。薙尻小舍はない。一七一四米附近に立派な指導標あり、それから下は製材、製板事業の爲の小舍が點在する。西股より金峯への道もいゝらしい。雨にぬれながら長閑りと美しい紅葉を賞美してゆく。梓川邊りの街道はすつかり開け大型のバスが入つてゐる。居倉から驛迄卅五錢は安かつた。(望月)

秩父行

大塚武　日江井正巳

一〇、一八　曇後雨　鹽山(四、一〇)——雲峰寺山門(五、一〇)——柳澤峠(七、二五——四〇)——高橋川奥の杣小舍(一一、二〇)泊

一〇、一九　雨　杣小舍(一〇、一〇)——落合(一一、三〇)泊

一〇、二〇　雨夕方晴れる　滞在

一〇、二一　快晴　落合(七、三〇)——大東橋(八、〇〇)——三條橋(九、〇〇)——餘慶橋(一〇、〇〇)——鴨澤(〇、四五——一、〇〇)——小河内(二、〇〇——一五)——氷川(四、三〇)

落合から入つて甲武信　金峰まで行くつもりであつたのが雨にたゝられて多摩川下りになつてしまつたのはまことに殘念であつた。(大)

甲斐駒ケ岳

里見治男　宮城恭一　高橋廣三郎　水田洋

一〇、一八　曇後雨　日野春(五、四〇)——前宮(七、〇五)——笹平(一〇、二五——四〇)——黑戸山(一二、四五)——屏風小舍(一、三〇)

一〇、一九　雨屏風小舍(九、三〇)——七丈小舍(一〇、二〇)——八合稍上(一一、〇五)戻る——屏風小舍(一二、四〇——一、五〇)——黑戸山(二、三〇)——前宮(四、三〇)——日野春

最初の日、はじめから天候險惡で笹平をすぎる頃から雨となり小舍に着いた時はかなり烈しかつた。小舍番が明日は晴れると云ふので喜んだが夜が明けてもまだ雨は去らない。とにかく頂上迄行かうと出掛けたが八合目から霰となり風もかなり強くなつたので遂に退却。尾白下りも斷念して來た路を戻る。

此の行は始終上級生に連れてつてもらつてはと、豫科一年のみで出掛けたのであつたが天候に惠まれず甚だ殘念であつた。(水田)

甲斐駒ケ岳　鋸岳　仙丈岳

大塚武　日江井正巳

一〇、二九　晴後曇　日野春——牧原——駒ケ岳神社(七、一五——八、一〇)——笹平(一一、〇〇——二〇)——屏風小舍(二、四〇)泊

一〇、三〇　小雨後晴　小舍(九、一〇)——七丈小舍(一〇、三〇——一一、三〇)——駒頂上(二、二〇——四五)——六合目小舍(四、〇〇)

泊

雲の動きの非常に早い日であつた。七丈小舎で一時間雨止みしてから後よくなる。駒の頂上に立つてアルペングルートに輝く北岳　仙丈を見た時は今までの重い氣分が一掃された。

一〇、三一　快晴溫暖　小舎（七、〇〇）——三ッ頭（七、三〇——三五）——鋸岳第二高點（八、四〇——九、〇〇）——鹿の窓（九、五〇）——小ギャップ（一〇、〇五）——第一高點（一〇、二〇——一一、五〇）——第二高點（〇、四〇）——小舎（二、〇〇）

重荷から解放されてほつとする。第二高點からの下りで少し道をちがへたので時間をとる。雪は全然無いが氷柱が至る處の岩についてゐた。普通の路に從つたので道具の必要を感ぜず。

一一、一　曇後雪　小舎（八、〇〇）——戸臺川との合流點（一〇、一〇——三〇）——八丁坂上の小舎（一一、一〇——五〇）——北澤峠（〇、五〇）——北澤長衛小舎（一、〇〇）

朝起きると風猛烈に強く雪片を交へ仙丈はまたゝく間に頭をかくす。駒——六方石——仙水峠を經て行くつもりであつたが下を廻る事にする。

一一、二　快晴　小舎（七、〇〇）——北澤峠（七、二〇）——小仙丈（一〇、〇〇）——仙丈岳（一一、〇五——四五）——小舎（一、五五）

昨日の雪は北澤で五、六寸仙丈で一尺——二尺を降らし頂上附近はシュネーパイフエンが上り小さな雪庇や雪稜が出來てゐる。輪樏は用ひなかつた。頂上零下九度

一一、三　快晴　小舎（六、五〇）——仙水峠（七、五〇——八、一五）——（一、四〇——二、三〇）——黑河内（四、二〇）——伊那入船町（五、〇〇）

戸臺川の紅葉美し。今度の旅は相當な重荷であつたが無理がなく晩秋から初冬への移り變りがはつきりと見られ非常に愉快であつた。（大）

神津牧場附近

原　鐵三郎

一〇、三〇　晴　輕井澤（五、一〇——八、三〇）——和美峠（一〇、三〇——高立（一、三〇）——神津牧場（三、〇〇）——民家（四、一〇）

和美峠あたりは紅葉が秋晴の蒼空に映えてくつきりと鮮かであつた。牧場では牛が放牧されてゐた。

一〇、三一　晴　民家（八、〇〇）——牧場（一〇、〇〇）——物見岩（一一、〇〇）——牧場（二、〇〇）——市ノ萱（三、〇〇）

物見岩邊りのカヤトは美しい。荒船山がそのおぼらかな姿を見せてゐた。

八ケ岳

新羅二郎　他一名

一、〇三一　晴　茅野（六、四八）——泉野（八、〇〇）——夏澤溫泉の上（五、〇〇）

二人で日本晴の裾野をテク〳〵歩く。途中遠く穗高の新雪など眺め乍ら左へ〳〵と行つたが晝頃になり道が變なのに氣が附いた。引返へすのも癪なので向ひに見える硫黄岳を眼當てにどん〳〵進んだのが敗因で、遂に全然見失つて了つた。六月にも八ケ岳で路を失した事があ

つたので大して心配はしなかつたが、でも出來るだけ探した。が遂に眞暗になつて了つたのであきらめ、果物や菓子等食べてありつたけのものを着て明けるのを待つた。相當寒かつたが靜かな宿だつた。

一一、一　曇雪　露營地（六、〇〇）——夏澤溫泉——夏澤峠——本澤溫泉（一二、〇〇）

少し下つて本道に合した時は一寸癪に障はつた。人の居ない夏澤溫泉でゆつくり休んでサラ〳〵降つて來た雪の中を峠を越えて本澤溫泉に着く。

一一、二　晴風　本澤（八、三〇）——硫黃岳（一〇、〇〇——三〇）——本澤（一一、二〇——二、三〇）——松原湖驛（七、〇〇）

昨夜はよく眠つたので元氣を回復した。天氣は良かつたが時々凄い霧がかゝつて風がひどかつた爲硫黃迄登つて引返へす。新雪が一尺程積つてゐて、兎の足跡等がついてゐるのを見ると、冬山のシーズンが間近な事を感ぜしめられる。

富士山（屏風尾根登攀）

小谷部全助　森川眞三郎

一一、一　曇後風雪　吉田池谷佐重方發（六、四〇）——中ノ茶屋（七、四〇——五〇）——大石茶屋（八、三〇）——馬返（九、〇〇——一〇、二〇）——五合小舍（一二、〇〇）

三峠へ行く積りだつたが白雪の美事さに誘惑され急に變更したのである。

一一、二　快晴　五合發（六、一〇）——屏風尾根取付き（八、二〇——三〇）——精進八合小舍（一〇、二〇）——白山ケ岳（一一、〇〇）——吉田口頂上（一一、一〇——一二、〇〇）——再び屏風尾根經由——五合小舍（二、一五）

七合目から積雪を見る。相當堅くアイゼン無しのキックステップは强引にやらぬと利かない。屏風ではたつた一ケ所練習にピトンを使つて岩場を登る。吹きつける雪煙に冬山のはしりを味つた。そして久し振りの寒風に犬の如くふるえる。

一一、三　晴　五合小舍（一一、五五）——馬返（一二、四〇——二、一〇）——富士吉田（三、四〇）

午前中小御嶽神社へ參詣する。白雪に輝く南北アルプスの眺望絶佳附近の樹木もなかなか立派である。（小）

富士山

岩崎利一

一一、一三　晴　新宿（一一、五五）夜行

一一、一四　快晴　富士吉田（三、三五）——中ノ茶屋——馬返（七、〇〇）——五合目（九、〇〇——九、一五）——七合目（一一、三〇）——七合五勺の下で引返す（一二、二〇——一二、三〇）——馬返（三、〇〇）——吉田驛（五、一〇——六、〇一）

日歸りで始めての富士山に登り あはよくばスキーを樂しまうといふ慾張つた計畫であつたが、雪は七合目あたりからであつて、スキーには向かなかつた。しかし絶好の快晴に失しく歸らねばならないのは殘念であつた。

富士山

望月達夫　岩崎利一　大塚武　日江井正己

一一、二〇　晴　望月　岩崎　大塚出發。

一一、二一　無風快晴　吉田(三、四〇)——馬返(四、三〇——八、〇〇)——五合小舍(一〇、四〇——一二、〇〇)——六合目にて天幕を張り終る(二、〇〇)

思つたよりも雪が少く雪上露營の練習には七合五勺以上でなければ駄目である。天幕も冬期用のが製作間に合はず夏のを持つてきたので六合目で我慢し寒氣になれる練習をし樣としたが、この方も溫度暖くそれ程の事はなかつた。六合にて雪は岩蔭に點在する程度。氣溫午後三時 −1°C 同六時 −2°C

一一、二二　吹雪後曇夜烈風　テント(八、三〇)——八合目(一〇、五〇——一一、一〇)——吉田口頂上鳥居(一二、〇〇——四〇)——テント着(二、三〇)

四時頃起きて仕度をしたが天氣思はしくなく亦シュラフにもぐる。八時頃幾分良くなつたので出發。七合から上は一時相當な吹雪で、頂上では烈風であつた。此の日雲が空の大半を覆つてゐるにもかゝはらず、北アルプスより伊豆大島に至る迄歷然と眺めらるゝ無氣味な天候であつた。

一度は都合で來られぬと云つた日江井來る。意氣ほむべし。吉田(三、四〇)——馬返(七、一五——八、三〇)——五合小舍(九、五五——一〇、二〇)——テント(一一、〇〇)

氣溫午前五時 2°C　午後三時 0°C

一一、二三　晴　テント(七、一五)——屏風尾根漏斗狀下端(九、〇〇)——同尾根を登り七合四勺と同高(九、五〇——一〇、〇五)——テント着(一一、〇〇)テントをたゝみ下山の途につく(〇、五〇)——馬返(一、五〇——二、三〇)——中ノ茶屋(三、二〇——四〇)——富士吉田驛(五、一〇——六、〇一)

屏風尾根にては雪の狀態に種々變化があり、よい練習場であつた。時間なき爲程良い處で切り上げる。荷は相當あつたが豫定通り吉田迄ぶら〳〵歩く。此の日氣溫　最低 −5°C 午前五時 −4°C

此の行は北岳のトレイニングの目的にて十二月上旬行ふべく豫定されたが、豫科生の學期末試驗等の都合により少し早く行はねばならなくなつた。不幸にも冬期天幕の製作間に合はず雪上露營の練習が全然出來なかつたのは遺憾であつた。(望)

奥又白谷より前穂高岳

小谷部全助　森川眞三郎

一一、二六　曇　新宿發(一〇、四五)夜行

一一、二七　曇　松本(六、三〇)——島々(七、三〇)——中の湯(八、五〇——一一、〇〇)——上高地(一、〇〇——二、三〇)——德澤(五、〇〇)

上高地迄同行の奥原守を待合せ中の湯で伸びる。バスが此處迄來たので大助りである。

一一、二八　晴　德澤(七、〇〇)——奥又白瀧の下(九、三〇)——同處に幕營(一〇、〇〇)

八貫を超える相當の重荷を背負ひ子につけて、カンカン照りつける河原を登つて行くのは相當參つた。雪のある時にシーデポとする場所から左の細い急なルンゼを登つて上の池に達するつもりであつたが、此の

ルンゼの取付きの瀧には氷がめら〳〵附いて相當惡い。 右手を卷いて行けばよかつたが何うも重荷で籔こぎはたまらないと、骨惜みしたのが運の盡き、二つ目の瀧を登り切らうとする間際に小谷部の乘つて居た氷がパリッとはげ落ちた。 そして五、六米程下のテラスへ例の重い背負ひ子毎いやと云ふ程ぶつけられた。 大した事はない樣であつたが右足がどうも具合が惡いと云ふので一應其處に止る事として、先刻のルンゼ出合まで降つて幕營した。

一五、二九　晴　天幕（八、三〇）——德澤（九、四〇——一一、〇〇）——天幕（一、〇〇）

天氣は馬鹿にいゝが自重した方がいゝと云ふ譯で小谷部を殘して德澤に置いてきた荷を取りに下つた。 牧場からの景色は素適にいゝ。閑寂な冬枯の此の邊り、 透明な日光がまぶしい程に溢れてゐる。 前穗から明神へかけてのスカイラインが見上る程の處に高い。 親切な牧場の親爺が打身の藥とか云ふあやしげなものをくれた。

一一、三〇　快晴　天幕（六、三〇）——奥又白池（八、五〇——九、三〇）——前穗高（一一、五〇——一二、〇〇）——池（二、三〇——三、一〇——天幕（五、〇〇）

今日も氣味の惡い程よい天氣、小谷部の足はまだはかゞしくないので獨りで出かける。 例の瀧の所は右側の小尾根を卷いて行く。 登る程に世界が廣くなる。 池の邊りで雪は急に增えて約一米、よく落着いてゐるので雪崩の心配は全くない。 前穗明神の稜線へ出るとさすがに風は冷い。 見える〳〵槍が北穗が奥穗が。 涸澤は眞白だ。 寒いので直ぐ頂上から引返した。 元のルンゼに入ると春風駘蕩とでも云ふ氣持、グリセードが駄目になると今度は尻滑り。 あんまりいゝ氣持になつて池で小一時間伸びる。 前穗高東南面の壁はもう深い陰影に閉ざされて居た。 ルンゼは登路をそのまゝ下る。テントには既にポッツリと灯が燈つてゐた。

一二、一　快晴　天幕に滯在す

休養を兼ねてもう一日足の樣子を見て登るか降るかをきめようと思つたのだがどうもはか〳〵しくない。 天氣がかう續くと後の荒れが少々恐ろしくなつてきた。 午後中畠が登つてきて上の池まで例の籔尾根に切開きを造るのだと云つて出かけて行つた。 何のこつた、 もう二三日早く來てくれゝばいゝのに。 蝶の頭の雪がめつきり減つて行くのが眼立つ。

一二、二　雪　天幕（一、〇〇）——德澤（三、二〇）

案の定天氣はくづれてきた。 見る〳〵雪が積つて行く。 食糧も大分乏しくなつたし中畠が又今日も登つてきたので、荷を半分賴む事にして德澤へ下つて了つた。 目的を殆く果さずに終つた事の珍しい吾々としては如何にも殘念だつた。 見返へれば前穗は暗々たる雪雲の中、池の邊りさへも何處か判らない。 小谷部は片足を無理せぬ樣に歩くので相當時間がかゝつた。

一二、三　雪　德澤（八、三〇）——上高地（一一、三〇——一二、〇〇）——中の湯（三、〇〇——四、三〇）——前川渡

吹雪のふきまくる上高地は人っ子一人居なかつた。 梓川の水もめつきりつ減てどこか別の所へ來た樣な氣がした。 中の湯からバスは有難い。 歸京する小谷部と前川渡で別れ、 獨りで乘鞍へ向ふ。（森川）

（附記）　來るべき北岳バットレスのトレイニングをも兼ねて張切つて來たのに全く殘念だつた。 あまり張切り過ぎて重荷にも拘らず薄氷

にアイゼンを利かせたのが惡かつたのだ。而もそのアイゼンたるや丸々と磨滅した儘のものであつたに於ては最早言ふべき言葉はない。右の足首が紫黑色になり激痛を感じて歩けなかつた。徳澤で中畠に作つて貰つた松葉杖を突き乍ら、霏々と降りしきる雪の梓川沿ひを中ノ湯へ戻る氣分は寂しき極み、端目にも嘸惨めだつたに違ひない。アクシデント以來親身も及ばぬ介抱に努め、働いて呉れた森川には深く感謝する。

歸京後レントゲンにて檢査した結果、蹶が眞二つに裂け、上部の骨に迄蹶が這つて居たのであつた。(小谷部)

乘鞍岳スキー行

森川眞三郎

一二、三　雪　前川渡(後五、〇〇)——大野川福島屋(五、三〇——八、三〇)——鈴蘭小舍(一〇、三〇)

前川渡で上高地より同行の小谷部と別れ、夜路を大野川へ向ふ。此處へ泊る豫定だつたが福島屋の息子が鈴蘭へ歸ると云ふので又雪の中を同行する。新雪四寸。

一二、四　雪　小舍(九、〇〇)——冷泉小舍(一一、三〇)

鈴蘭から直ぐスキーをつける。雪が降つて凉しいので直ぐ冷泉小舍へ着いた。此の邊り積雪四、五尺。雪質はよかつたが新雪が深かすぎる。午後位ケ原下迄遊びに行つた。

一二、五　雪　新雪二尺、スキー練習に一日過す。午前午後二回位ケ原上まで出かけたが吹雪激しく肩へ迄も行けなかつた。

一二、六　小雪後晴　午前スキー練習。午後下山。小舍發(一、三〇)——鈴蘭(二、三〇)——前川渡(四、三〇——五、〇〇)——島々

新雪の御蔭でどうやら大野川の手前迄スキーを脱がずにすんだ。雪に明け暮れしたスキー行であつたが此の頃の乘鞍は靜かでいゝ。雪の心配は先づないと云つてよからう。土曜日曜を利用して來られる松高の連中が今更の如くうらやましく思はれた。

苗場神樂峰スキー行

岩崎利一

一二、一二　雨　湯澤(五、一三)——外ノ川小舍(一一、五〇)——慈惠ヒュッテ(一、一〇)

終日雨ですつかり腐つた。小舍の親爺が八木澤に來てゐたので一緒に登つた。夜は宿泊客が僕一人でゆつくり寢る事が出來た。

一二、一三　快晴後曇雨　小舍(八、〇〇)——神樂峯を往復して小舍へもどる(一、四五)——湯澤(六、〇〇)

雨にうたれたが雪質はさして惡くなく、快適な初滑りであつた。

槍ケ岳

森脇芳之　小林重吉　和田榮達

一二、一九　霧雨　松本——島々(九、一五——一〇、〇〇)——バス——坂卷の手前にて下車——中湯(一、〇〇)

雪は非常に少く坂卷近く迄バスが行つて助かる。

一二、二〇　曇少雪　中湯(七、四〇)——上高地(一〇、三〇——一一、〇〇)——徳澤小舍(一二、三〇——二、〇〇)——一俣小舍(六、三〇)

雪は少くスキーは全然かつぎ通し。一度つけてみたがスキーに雪が

附着すると地肌が出て了ふので直ぐとつた。一俣にはこのシーズンになつてまだ誰も來てゐない。

一二、二一　吹雪　滯在

骨休みをかね、小舍附近でスキー練習をなす。

一二、二二　雪後晴

午前中體の調子を整へる爲、練習がてら上流へ出かける。一時間程にて戻る。歸路積雪の爲か一俣の橋上よりあやまつて小林墜落し、腰骨をしたゝか打つ。午後森脇一人槍澤小舍迄ラッセルに行く。槍澤にはデブリのあと全くなし。和田下痢はげしく體の調子惡し。この夜法政の方達來る。

一二、二三　快晴

快晴に張切つて法政の方達は出かけたが、小林腰の調子依然惡く小舍に殘り、森脇　和田　槍澤小舍迄遊びに行く。

一二、二四　曇後吹雪　小林依然回復せず、和田の下痢も相當烈しき爲殘念乍ら下山に決す。

一俣（七、〇〇）——德澤（一一、〇〇）——一二、三〇）——上高地（二、〇〇——三〇）——中湯（六、〇〇）

雪量は多くなつてスキーをつけて下る。が未だ河原づたいに通る事が出來ない爲、横尾出合附近の例のズルズルな箇所は無理して通る。釜のトンネル迄スキーがはけたし、かなり愉快にすべれた。

一二、二五　快晴　中湯（八、三〇）——澤渡（一一、三〇）

澤渡よりハイヤーにて小林、和田歸京の途につき、森脇は前川渡に下車して乘鞍スキー小舍の合宿に參加す。（森脇）

北岳バットレス及び北岳間ノ岳

小谷部全助　森川眞三郎　望月達夫　大塚武　日江井正己

一二、二三　晴　先發隊（望月　大塚　日江井）新宿發午後十一時五五分にて出發。森川見送りに來る。

一二、二四　晴　甲府（四、三五——五、一〇）——大曾利青木方（六、三〇）此の日人夫四名の冬山準備不完全なる爲用意を青木氏に賴み人夫同道夜叉神峠迄荷上げをなす。青木方（九、〇〇）——峠下の炭燒小舍に荷を置く。——夜叉神峠（〇、五〇——一、〇〇）——炭燒小舍（一、一五——三、〇〇）——青木方（三、五五）

雇ひし人夫は清水義雄　同福長　同英長　名取治一の四名なり。

一二、二五　快晴　青木方（六、三〇）——炭燒小舍（九、〇〇——一〇、〇〇——夜叉神峠（一〇、三〇——五〇）——鮎差（〇、一五——一、二〇）人夫を待つ——橋（二、五〇——三、〇五）——蝮平小舍（四、一〇）

峠から白峰三山鮮かに眺めらる。ラッセルは下りのせいもあつて樂なり。鮎差から暫く進みて氷の箇所ありたる爲それより小舍迄アイゼンを着用す。小舍附近積雪約二尺。望月　治一を伴ひ釣尾根の道を見に行くも夕闇せまりたる爲一時間にして歸る。min. −8°。

一二、二六　曇後晴　小舍（七、四五）——池山釣尾根を登り、急坂の上（一一、五〇——一、〇〇）——人夫を歸へし荷物の組變へをなす（一、四〇——二、四〇）——池（三、四五）第一天幕を張る。

小舍より直ちにアイゼンを着け急坂の上より輪櫻にかゝる。人夫を歸へした地點に荷を置き明日往復することにした。天氣よく農鳥　間ノ岳の眺望素晴らし。min. −20°。

此の日、本隊（小谷部、森川）新宿發　後一一、五五。

一二、二七　晴　午後昨日殘した荷物を三人で二度往復し全部第一天幕に搬び了る。後大塚、日江井は上方のラッセルを一時間四十分ばかりなし五時半天幕にもどる。min—15°

本隊　甲府——大曾利青木方（六、三〇）——八、三〇）沼太郎を雇ふ——夜叉神峠（〇、一五——四五）——鮎差（二、一五）——蝮平岩小舍（四、〇〇）

一二、二八　快晴無風　第一天幕（四、三〇）——ラッセルの終點（六、一五——三〇）——亡魂澤頭（砂拂）（一〇、〇五）——二九五〇米突の頭（一〇、五五——一一、一〇）——北岳頂上（〇、五〇——一、〇五）——二九五〇米突の頭（二、三〇）——亡魂澤頭（三、〇五——一〇）——第一天幕（五、三〇）

穩やかな快晴に勇躍して登頂。出發前石油コンロの調子惡く苦心した。森林帶のラッセルはかなり苦しかった。亡魂澤頭より見た北岳バットレスの形相は誠に印象的である。min—13°

本隊　蝮平（八、〇〇）——第一天幕（一一、一〇）

治太郎を少し早く出發せしめて此の日の中に大曾利へかへす。天幕の支柱をふやし焚火等作って天幕生活をカンファタブルならしむる樣に努む。

一二、二九　快晴　小谷部、森川の二名第二天幕用の荷物運搬の爲出發、第一天幕（九、三〇）——亡魂澤頭下に荷を置く（三、二〇——四〇）——第一天幕（六、〇〇）

荷重く第二天幕地迄行く事あたはず。

望月、日江井休養を兼ねて焚火をなし浸物等を乾かす。大塚下山の途につく。第一天幕（二、〇〇）——蝮平岩小舍（三、四〇）翌三十日夜叉神峠を越して歸京す。min—14°

一二、三〇　快晴　第一天幕（七、三〇）——亡魂澤頭（一、四〇）——第二天幕地（二九五〇米突の頭）（三、一〇）

今日は四人共第二天幕に移る豫定で張切つて出發。風の吹く中を約一時間で第二天幕を豫定の場所に設立し終る。後望月、森川、日江井は荷物運搬に往復し小谷部は天幕内の整理を爲す。

第二天幕（四、五〇）——亡魂澤頭下に至り歸幕（六、五〇）

何ケ月も前から計畫して居た場所に最高キャンプを張り得たので今夜は皆喜びにあふれ、やつと肩の重荷が半分とれた思ひがした。min—11°

一二、三一　終日吹雪　滯在

テントの張綱を丈夫にしたりする。min.—8°

昭和十二年

一、一　曇強風時々雪　夕刻より快方に向ふ　滯在

テントの周圍の防風雪壁を擴大強化し、W・Cを作る。min.—14°

一、二　曇（A）バットレス第一尾根（小谷部　森川）

第二天幕（六、〇〇）——落込コル（六、一五——六、二五）——岩壁下（八、〇〇）——bガリー——第一尾根直下（一〇、〇五——二〇）——リッス登攀——リッス上端（一二、一〇——三〇）——トラヴアース——主稜アンカレッジB（三、三〇）——惡場終り、D點（六、〇〇）——北岳頂上（八、〇〇）——第二天幕（一〇、〇〇）

積雪の爲、B點迄のトラヴアースが實に厄介だった。C點のオーヴアーハングはピトン一點張りで辛くも突破。結果から見てこのリッジ

は第四尾根以上に困難を極めた。（本文二八頁附圖參照）

（B）間の岳（望月　日江井）

第二天幕（六、〇〇）——北岳間岳の鞍部より幾分北岳寄りに出る（七、一五）——中白根下（七、五〇——八、〇〇）——間岳（八、五五——九、二〇）戻る——中白根（一〇、一〇）——途中でゆつくり休む——第二天幕（〇、三〇）

落込みのコルにてバットレスへ向ふ二人と別れ間岳へ向ふ。途中から左に尾根をまいて主稜へ出る。伊那側からの風は強く鞍部附近は殆どところぶ樣にして歩む。時間に餘裕あるも望月體の調子良くなく農鳥は割愛す。此の日一天どんより曇つてはいたが西方の空は晴れ、木曾駒は勿論北アルプスも望まれる樣な天氣であつた。又間岳より南方も赤石迄はつきりと望まれた。

一、三　曇後晴　滯在休養

望月、日江井下山に向ふ。第二天幕發（九、〇〇）——第一天幕（一一、三〇——一二、〇〇）——蝮平岩小舍（二、一五）。翌四日來た道通り鮎差から夜叉神峠を越し遙か彼方の第二天幕を懷しみつゝ芦安へ下山。甲府では先輩丸茂平造氏を訪れ大いに御馳走に預る。

一方雲上のCIIに殘つた小谷部、森川の二人なす事もなく折から好轉した天候に天幕附近の雪上を漫歩す。愈々次は第四尾根攻擊だ。體のコンデイション益々良し。尙寒暖計故障の爲以後氣溫不明なり。

一、四　晴烈風　第四偵察

第二天幕（九、〇〇）——bガリー——第二尾根下引返し點（一、四〇）——第二天幕（五、三〇）

bガリーより左にトラヴアースして第四尾根へ取付き得る見透しつく。烈風吹荒み雪煙物凄し。第二天幕半壞せしも修理せり。

一、五　晴烈風　第四尾根登攀（本文三二頁圖參照）

第二天幕（五、三〇）——落込コル（五、四〇）——bガリー下（七、〇〇）——昨日の引返點（七、三〇）——第四主稜テラスa點（八、二〇——五〇）——マッチ箱下端（一〇、二〇）——マッチ箱第一コル（一一、三〇）——第二コル（一二、〇〇——二〇）——マッチ箱上部突端（一、〇〇——二五）——第三コルへアプザイレン——テラスb點——惡場終了（二、三〇——四〇）——國境尾根（三、五〇）——北岳頂上（四、〇〇）——第二天幕（五、〇〇）

登攀中は無風快晴で緊張しつゝも素晴しい氣分を味ふ。雪庇を越して國境尾根に出ると別世界の樣に西北の烈風がうなり、天地は騷然とわき返つて居る。釣尾根へかゝると風は一段と強く歩く事も容易ではない。漸く第二天幕へ戻つて見ると憐れ天幕は完全につぶされて雪上に平伏して居る。もう目的も完全に果した以上、後は退却あるのみでつぶれた天幕に靴の儘もぐり込みゴロリと寢こんで了ふ。

一、六　吹雪　第二天幕撤收、同發（一二、〇〇）——第一天幕（五、〇〇）

烈風と吹雪に抗しつゝ一切の荷を整理し脊負子につける。天幕の支柱は全部折れて居た。二ガロン程餘つた石油は二九五〇ピークの突端に殘し、扨下山の途についた所、如何にも荷が重く森川の如き一度轉倒した儘立つ事も出來ぬので荷の一部を同ピーク下の平に殘し置く事とす。降雪と風で前のラッセルは殆ど消えて居た爲、薄暮の森林帶で一寸踏迷つたりして漸く雪に化粧された靜かな第一天幕へ歸着す。

一、七　晴　滯在休養

一、八　晴（A）第一天幕（七、〇〇）——第二天幕地下（一一、〇〇

――二〇)――第一天幕(二、五〇)(小谷部)
(B) 第一天幕(八、三〇)――蝮平(一〇、三〇)――五〇)――第一天幕(一、二〇)(森川)
A、B合流第一天幕撤收同發(四、〇〇)――ビバークす(六、〇〇)
寒氣猛烈なり。二手に分れて荷物運搬を爲す。兩人再び第一天幕で落合ひ同天幕を撤收一切の荷を脊負つて下山に向ひたるも夜に追付かれ且電燈を紛失して途中にてビバークせり。
一、九 曇後雪 ビバーク地發(六、五〇)――蝮平(九、三〇)――夜叉神峠(三、三〇)――大曾利(六、三〇)
蝮平へ約十三貫の荷を殘し置く。後刻大曾利の人夫に搬出せしむる豫定。青木方へ泊る。
一、一〇 大曾利發(二、〇〇)――有野(三、四〇)――甲府
(附記) 右の記錄は本誌の外、「ケルン」四五號に發表せり。たゞし之はサポート隊の立場から記した北岳間ノ岳行である。
(小谷部、望月記)

冬季乘鞍岳スキー合宿

(參加者) 柿原謙一 森脇芳之 佐々木誠 鷲崎雄四郎 岩崎利一 原鐵三郎 齋藤明智 水田洋 宮城恭一 里見治男 高橋廣三郎 (以下部員外)吉田貞一 杉山恒雄 藤森信太郎 三井一郎 岩波薫

一二、二五 晴 松本(六、五〇)――七、五〇)――前川渡(九、一五)――番所(一一、二〇)――〇、二〇)――鈴蘭小舍(一、二〇)――三〇)

――乘鞍岳スキー小舍(五、三五)
島々から梓川沿ひの道は氷りついてゐて甚だ物騷だ。現に僕等の乘つた車は危なく落ちて了ふところであつた。雪は例年並みなのか兎に角去年より非常に少い。鈴蘭小舍あたりでは殆どスキーが出來ぬ位である。しかし仰ぎ見る乘鞍の峯々は既に眞白く粧はれてゐて實に印象的だ。新人が多いので何やかやと手間どりスキー小舍へ着いたのは五時半を廻つてゐた。尙ほ途中で森脇が一ノ俣から歸りに登つて來るのと出會つた。聞く所によると槍ケ岳へは全然登れなかつたとのこと。殘念至極である。夜は小コンパを開き自己紹介をする。明日の樂しさを想ひつゝ寢に就いたのは恰度九時であつた。(岩)
一二、二六 曇時々小雪
起床六時、朝食七時、出發八時、比較的うまく出發出來た。頂上へ登るつもりでピッケル、アイゼン等をもつて出たが天氣惡く穗高も雲に隱れてしまつたので位ケ原で練習。全員揃つて相當熱心に技術を練習した。位ケ原からは遠く甲斐駒から北岳(その釣尾根には吾々のグループが雪中幕營を營んでゐる處の)の一連らなりがくつきりと見えてゐたが飛騨側からの雪雲に忽ち掻き消されてあとは雪の外は何にも見えなくなつてしまつた。十一時半パンで晝食をすませすぐ又練習だ。午後は全制動をビギナーに敎へる。午後三時頃菓子を食ひながらも練習を續けた。四時半降り始め岩崎は先頭、原はラストを受持つたが後の方は大部おくれて眞暗になつてしまつた。明日からは二部に分けてビギナーだけ早く降りた方がいゝだらうと思ふ。ビギナーの技術について話し合ふ。尙ほ小舍代は交渉の結果一泊一圓卅錢とした。去年の通りである。(岩)

一二、二七　雪

起床六時半　朝食七時半　出發八時半。昨夜少し遲かつたので卅分許り出發がのびた。朝は遠くの方もよく見えたが出發後間もなく雪が降り出して終日續いた。一年生の練習は位ケ原下のゲレンデでやる。始め一年生と齋藤以外は皆肩の小舍へ行き頂上へ行くつもりであつた肩の小舍へ着く頃から雪は風を加へて來たので直ちに引返へし暫練習の後皆で晝食をした。(十二時)。それから再び肩に向ふ。柿原岩崎、藤森の三人だけ肩の直下で引返へし位ケ原下で練習。なほ佐々木スキーを折り修繕の爲小舍へ下る。一年の練習は全制動が稍々出來る程度までなつた。午後からは雪が益々甚しくなつた。雪質は完全な粉雪である。三時半頃降り始め全部小舍へ入つたのは四時半であつた。(岩)

乘鞍のスキーに參つたのは初めてだつた。雪は好いし休息所もシルコ屋もなく山岳部合宿の地としては誠に相應しいと思つた。但し時々轉ぶ。情ない次第と感じた次第。(柿原)

一二、二八　快晴强風午後四時頃より雪

起床六時　朝食七時　出發八時。凄い快晴なので皆張切つて登る。一年生も登行法が相當上手になつた。位ケ原からは先づ槍穗高を始め遠く南アルプス、八ケ岳、木曾駒連峰まで凡そ親しい山々は皆指呼の中にあつた。肩の小舍十時、二人だけアイゼンを着け登りにかゝつたがクラスト激しく全員アイゼンをつける必要があるので引返へし(アイゼンは二つ持參したのみであつた爲)柿原、鷲崎の二人だけ頂上に向ひ殘りの者は位ケ原の下のゲレンデに下る(十二時)。暫く練習して澤の出合に下りそこで晝食。シールをつけて鶴ケ池に向はうとした時、柿原、鷲崎頂上から降り來る(一時廿分)。岩崎鶴ケ池の尾根迄出て直ちに降り他はクラストのため途中で引返へす。その頃雪が降り出し皆相當へばつたので基本練習を打切り小舍に歸つた。明日は是非とも全制動廻轉迄ビギナーの技術を仕上げたいと思ふ。(岩)

鷲崎と二人で乘鞍頂上に登る。(肩から卅五分)。頂上迄殆どクラストしてゐた。槍穗高燒がよく見え、遙かに南アを眺めた。(柿原)

一二、二九　强風後雪

起床六時　朝食七時　出發八時十分。森脇、吉田、藤森の三名下山里見は調子惡く休養。天候が餘り良くないので終日位ケ原下にて練習す。一年は全制動廻轉の練習。晝飯を食べた時は相當な寒さであつた午後次第に雪が加はりゲレンデの雪質は常に良好であつた。四時頃雪が晴れて遠く南アルプスの夕映えが實に美しかつた。乘鞍岳の頂上も雪煙をあげて紅に輝いてゐた。

四日間の練習もあつけ無く終つた。ビギナーの練習期間が僅か四日であつたことは非常に不都合であつたけれども練習には相當張切つたからこの効果は必ず現はれることゝ信ずる。(岩)

一年の練習振りは最初餘りにも消極的であつた。然し文句を云つた り强制したりして練習させた結果、顏面制動を平氣でやる樣になり、直滑降も大部上達した。全制動廻轉には未だしの感あるも四日間の限られた期間では致し方ない。涸澤でおどかしたグリセードとは異つてスキーは全く安全なものである事を云ひ含めて練習させた。(柿原)

一二、三〇　快晴

起床六時　朝食七時　下山の途につく七時半。スキー合宿最後の日風は一晩中吹き續いてゐたが朝は次第に弱くなつた。路は新雪がない

爲にカリカリになつてゐるので大部分の者はスキーを擔いで降りる。僕も相當無理して見たが齋藤たちの歩く方が早かつた。鈴蘭小舍あたりから振返ると頂上が銀色に輝いてゐる。名殘りをおしみつゝ降つて行き大野川へ着いたのは十一時であつた。自動車が大野川迄來てゐるのですぐ前川渡に行きバスに乘つた。超滿員のバスを自由自在に飛ばす運轉手の腕に感心しながらも時々スリップする毎に思はず谷の方を恐る恐る眺めざるを得なかつた。飯田屋で晝食後、柿原は野澤へ向ひ他は三時十四分の準急に乘る。途中鷲崎、杉山、水田の三名は霧ケ峰へ行く爲上諏訪で下車した。

今度の合宿は時間的に惠まれないので種々滿足出來ぬ點もあつたがやれるだけのことは努めたつもりである。今合宿日誌の筆を措くに當り參加者諸兄の甚大なる御助力を深謝する次第である。（岩）

（合宿責任者　岩崎、會計係　原）

野澤スキー行

新羅　二郎

一二、二七　曇後雪

午前七時頃酒屋に着く。雪の無いのには全く驚いた。黑い土の上をスキーを擔いで歩く樣は餘りいゝものぢやない。ゲレンデは全然滑れないので上の平迄行く。毛無まで行からと思つたがひどく雪が降つて來たので樺の小舍の邊りで少し許り滑る。實に面白くない。歸路例の狹いヂグザグの道に大勢人が居る處を無理して飛ばしてきたが、つまらない時はつまらない事が重るもので、曲り角で前に轉んでゐた人を避けやうとした瞬間ペシと音がして左のベンドが折れて了つた。

こんな事なら何も無理をして野澤なんかに來るんじやなかつたと思ふにつけ、まだ買つて間も無いヒツコリーがうらめしくなつた。

一二、二八　晴

天氣は良かつたがブリキのついたスキーでは餘り晴々しくもなかつた。毛無迄行く。雪が少い爲ブツシュが多くてひどく弱る。昨日の雪で今日はゲレンデでも大分滑つてゐた。

一二、二九　雪

朝から相當降つて居たのでゲレンデで練習する。日增に人が多くなつてくる。がどうも部員が居ないと張切らない。此の春の合宿の愉快だつた事を獨りで想ひ出してゐた。

一二、三〇　雪曇

天氣が良くないので毛無は止める。夕方迄滑つて野澤を引上げる。

霧ケ峰スキー行

鷲崎雄四郎　水田洋　他一名

一二、三一　曇　上諏訪――霧ケ峰池のクルミにてスキー練習――歸京

乘鞍合宿の歸途、霧ケ峯に立ちより昭和十一年の最終日を滑りまはる。

野澤スキー行

吉澤一郎　堀岡清　岡田謙三　中島孚　覺張泰三　鷹野雄一（以上先輩）林俊介　柿原謙一

一二、三一　半晴　松本驛――豊野――野澤温泉さか屋

乘鞍スキー合宿を終え、柿原一人松本より野澤に入る。大晦日の事とて汽車は混雜の極み、然も一時間遲延してゐた。姥捨驛から見下す信濃の國の年暮れる日は何となしに慌しい。懷しのさか屋に入る。岡田、中島兩先輩既に大阪より來りて在り、久々の面談なれば部の近況等語る。クマさん、荒さんの來るのが待遠し。

一、一　曇雪　中島、岡田上ノ平へ、柿原ゲレンデ。

雪は昨年に比し遙に少し。夕方よりチラ〳〵來る。夜皆な食事終つた後、堀岡先輩ノツソリと來る。乾燥室の側の小狹い室に四人して集り、久々乍ら相變らずの駄辯に夜更しす。覺張泰三氏に電報を打つ。後四人で溫泉に飛び込む。待望のクマさん未だ來らず。

一、二　雪　練習

外に雪降るを眺め乍ら四人で朝飯。おばさんが心掛けがいゝんで納豆が出た。バク付いてる四人に不圖見覺えのある姿が目に付いた。クマさん來る。スキーを捧げて會社の一統と共に姿を現さる。かくてゲレンデに出て皆なして練習。ビリケンの親爺の面も懷しい。夕景宿に歸ると覺張泰三氏長岡より來られてゐた（義弟同伴）。こうなると狹い室が益々狹くなる。

一、三　晴　毛無山へ

心快き晴天。ゲレンデにて岡田氏（午前歸阪）と別れクマ・荒さん・ホー助・神主は毛無山へ、覺張氏は上ノ平。毛無の上は大混雜なので四人は人氣の無い方にスキーを立て紀念寫眞を撮る。苗場が見え越後の山々が白い。遠く浮世繪の如くに曾遊の槍穗高が浮いてゐる。後立山の連峯も見える。美味いパンを喰ふ。歸途燒山を降る。夜はクマさんを先達に城南山岳會の幹部を訪問。

一、四　曇小雪　小毛無へ

本朝覺張氏長岡へ歸らる。林俊介一族耶黨と共に來る。クマ・荒・ホー助・神主は小毛無迄行く。林は上ノ平へ一族を引上げる。ホー助は夕刻歸阪する爲一足先に下山、殘つた三人は又燒山を下る。ゲレンデに至つて鷹野に會ふ。全く偶然の顏合せだつた。聞けば松本聯隊入營を前のお別れスキーなる由。夜はクマさんの室にてコンパ。お雜煮とおしるこ二杯を食べてウムーンと言つたのはクマさんである。

一、五　薄晴　毛無山へ

クマさん朝六時に歸京。荒さん・エチオピヤ・神主の三人で再び毛無山へ行く。夜は明朝歸る荒さん・入營兵殿と別れを惜む。

一、六　曇　ゲレンデにて練習

荒次郎大人・鷹野雄一歸京さる。ゲレンデも淋しくなつたが、仲間が歸ると心淋しい。ビリケンの親爺の面まで薄曇りに見えた。都心起る。

一、七　曇　林、柿原歸京。

これで別れ別れになつてた仲間が幾歲振りの顏合せのスキー行も終つた。

（附記）このスキー行は皆なバラ〳〵に集り合せたもので、計畫的のものではなかつた。便宜上一纏めに記して置く。（柿原記）

鳥海山

村尾金二（先輩）　岩崎利一

一、二　曇　上野發（一〇、三五　夜行）

一、三　晴　吹浦（一一、四〇）——陣屋（三、〇〇）——駒

止(四、三〇)——大平小舍(七、一〇)

雪は非常に少なくて困つたが、駒止からは俄然多くなり、大平では優に一米半はあつた。荷物の爲に夜になつてしまひ、大平の小舍へ着く頃は酒田の灯が夜光虫の樣に光つて見えた。

大平小舍は營林署の建設にかゝり、寢具以外の必要品は一切具備せる快適なものである。但し宿泊人員は五名を限度とし、尙便所は今の處ないが今年中に造る由である。

一、四　曇强風

小舍附近、三角點一三九五米附近等にてスキー練習をなす。實に良いゲレンデであると思つた。佐渡が夢幻的に浮んでゐた。

一、五　晴强風後曇　小舍(六、三〇)——笙ケ岳との鞍部(八、三〇——九、〇〇)——行者岳にて天候惡化の爲引返へす(一一、三〇)——御濱神社——鞍部(一、三〇)——小舍(四、三〇)

南風(ダシ)で晴れたから良くないとは思つたが、とも角行ける處迄と張切つて出掛けたら見事に擊退されて了つた。乍然御濱神社附近から間近く仰ぐ新山の偉容は自分の見た最も崇高な景觀であつた。恐らくは生涯忘れ得ぬ印象であらう。降りには西風を眞向ひに受けてスキーが滑らず、相當に手間取つてしまつた。下界は大雨らしい。小舍の附近も目に見えて雪が減つた。

一、六　小雪

一日雪の音を聞いたり一寸滑つたり、下の畠中氏の小舍へ遊びに行つたりしてのんびり暮す。

一、七　雪　村尾氏歸京す。

一、八　雪　大平小舍(一一、三〇)——吹浦(一、三〇)　藏王へ。

藏王山スキー行

岩崎　利一

一、九　曇　山形(七、四〇)——高湯(九、〇〇)

コーボルトまで行つて來た。雪が良く目が廻る程飛ばせて痛快であつた。

一、一〇　晴後曇　高湯(七、四〇)——地藏岳(一一、三〇)——練習——高湯(三、一〇)

一、一一　小雪　今日は道の屈曲を飛ばして練習を試みた。

一、一二　雪　高湯(三、〇〇)——山形(五、〇〇)歸京

菅平スキー行

森脇芳之　和田榮達

一、四　快晴　菅平——根子岳——菅平——別所溫泉

一、五　快晴　別所——下諏訪

積雪少なく根子の頂上迄灌木が出てゐた。

八方尾根

大塚　武

一、七　曇　大町(七、三五——八、二三)——四谷(九、三〇——四〇)——細野(一〇、二〇——三〇)——細野スキー場(一一、〇〇——五〇)——黑菱ヒュッテ(一、四〇)

一、八　曇强風　ヒュッテ(九、五〇)——八方山(一一、五〇——一二、〇〇)——ヒュッテ(〇、四〇)

後ヒュッテ前のゲレンデにて練習。

一、九　晴後曇　ヒュッテ（九、〇〇）——八方山（一〇、一五）——上の樺（一〇、五〇）——一一、〇五）——暫らく登りて引返す——ヒュッテ（一、三〇）

この日始めて五龍、鹿島槍を見るも後天候崩れ途中にてかへる。

一、一〇　雪　ヒュッテ（八、三〇）——細野ゲレンデ（九、三五）——細野（一〇、〇〇）——四谷（一〇、二〇）

野澤スキー練習

小林重吉

一、一〇——一、一二

苗場山神樂峰スキー行

森川眞三郎

一、二三　曇後吹雪　湯澤（五、一五——六、〇〇）——八木澤（九、〇〇——一〇、〇〇）——外ノ川（一一、二、〇〇——一、〇〇）——慈惠ヒュッテ（三、一〇——四、〇〇）——上ノ芝（五、〇〇）——ヒュッテ（五、二〇）

一、二四　晴　ヒュッテ（九、〇〇）——上ノ芝（一一、〇〇）——ヒュッテ（一一、三〇——一、五〇）——八木澤（三、三〇——四、〇〇）——湯澤（五、〇〇）

激しい山行の息抜きと云ふ程でもないが、ふつとこんな旅もしてみたい樣な氣になつてフラ〳〵と出かけたが、思ひもかけず此の靜かな越後の山狹の一夜は限りない喜びの思ひ出を殘してくれた。こんな山でもと云ふ人もあるだらう。山は淺いし標高も低い、ゲレンデスキーヤーで賑ふ事もあるだらう。併し自分の乏しい山行の中ではあるが今迄にこんなに自然にとけ切つたこんなに山を身近に感じた事は幾度あるだらう。或は自分の本當に身についた山行が此の程度にしか達して居ないとも思はれる。バットレスの壁にへばり着いてゐる自分との開きが餘りに大きい。此の二つの山登りが本質的に相異つてゐるかどうか判らない。唯今の自分のいつはらぬ氣持として其兩方共肯定出來る樣である。

靜に安らかに山懷に抱れて遠い夢を追ふ自分、高い山險しい山、未知の山へ惡場を攀ぢ吹雪を冒して無我夢中で挑みかゝる自分、相異つた二つの方向は明かに矛盾してゐるのではあるまいか。二つの矛盾も一つに肯定する事が出來るだらうか。自分には判らない。

鳥海山

岩崎利一　原鐵三郎

三、九　晴　上野發（一〇、三五）夜行　原のみ出發。

三、一〇　晴　吹浦（一一、三七——一二、四〇）——畠中善彌氏小舍（五、〇〇）

吹浦からの道は廣いがひどいぬかるみで歩行困難であつた。小舍は約六〇〇米の地點にあり、小さくとも完備してゐる。

三、一一　吹雪　スキー練習　雪質不良

三、一二　吹雪　畠中小舍（八、〇〇）——大平小舍（一一、〇〇）

大平小舍へ移る。飲料水は雪を溶かして使用す。

三、一三　吹雪後晴　小舍（後二、〇〇）——御濱神社附近（五、〇〇）——大平小舍（六、〇〇）

連日の荒天にくさつて居たが午後から北風に變り蒼空を見る。早速シールを着けて登る。雪は良い。時間不足の爲新山を目前にひかへて引返へす。歸路は猛烈に早く滑る。夜になつて岩崎來る。

三、一四　吹雪　滯在

三、一五　曇　小舍（八、〇〇）——笙ケ岳鞍部附近（一一、〇〇——〇、三五）——大平小舍（一、三〇）

岩崎と共に登る。ガスが濃いので約二〇米の間隔を置いて赤旗をたてつゝ登る。笙ケ岳鞍部でスキー・デポーし尙前進すれど天候惡化の爲引返へす。

三、一六　曇　大平小舍（九、〇〇）——吹浦（一、三〇）

天候恢復の見込なく下山に決し、秋田に一泊して一七日歸京す。

鳥海山は三月下旬から五月へかけてが最も樂な登山期であらう。嚴冬は先づ晴れない。雪質は海に近いせいで濕潤になりやすいが寒ければ上乘である。新山は非常に魅力ある山の一つと信ずる。（原）

遠見尾根より鹿島槍荒澤奥壁及び五龍岳

（一次サポート隊）　小林重吉　鷲崎雄四郎　宮城恭一

（二次サポート隊）　森脇芳之　大塚武

（登攀隊）　小谷部全助　森川眞三郎

三、一四　晴　新宿發（後一〇、四五）　望月、榎本送りに來る。

三、一五　薄曇　神城發（一一、三〇）——遠見小舍（四、〇〇）——小舍の少し上へ天幕CIを設く。

先日チツキで下川方へ送つた荷物卅六貫五百は既に小舍迄上つたとの事。一名の人夫に石油その他約十貫を脊負はせて出發。鐵道線路を越して間もなくスキーをはく。溫暖で雪くさり登りに大汗かいたが尾根上は寒風吹き雪もクラストして居た。八方尾根、五龍等のよく見える眺望よき所の雪面をならして第一天幕として六人用一ケを張る。大塚、宮城は都合で今晩だけ小舍へ泊る事とす。

三、一六　薄曇ガス深し、CI滯在

ガスの爲荷上中止、一同スキー練習に興ず。ザラメ雪にて快適なり更に三人用天幕を增設。夕刻森脇神城より登り來る。今日から全部員幕營。夜强風となれどガッチリしたウイムバー天幕はびくともせぬ。コムバ的に遲く迄愉快に騷ぐ。

三、一七　吹雪風强し　CI滯在

終日荒れ模樣。森脇、森川、大塚はこの天氣にも拘らずスキー享樂に餘念ない。夕刻吹雪は一段と猛烈になり小舍から天幕へ行くだけでも遭難しさう。氣溫も可成降つて手が金屬にねばり附く。明るい石油ランプに暖いラディウス。天幕の中は別世界の樣にカンファタブルで樂しい。

三、一八　雪　CI滯在

朝の內一寸穩やかだつたので一部荷上に登つたが途中から再び吹雪き出し小遠見下に荷を置いて戻る。雪まみれになつたついでに天幕の附近でスキー練習を行ふ。素的な粉雪でよく滑つたがガス深く屢々一寸先すら見えなくなる。毎日吹雪で思ふ樣に荷上出來ず內心焦燥を感じ始めて來た。一同はスキーに夢中になつて疲勞氣味である。天幕內は相變らず馬鹿話し馬鹿騷ぎで吹雪中の幕營とは思へない。

三、一九　小雪後晴　CI滯在

昨日のスキー練習や夜のコンバで皆暢氣に寢坊し折角の天氣だが又

遊ぶ事のやむなきに至る。 負け惜みではないがこんな好晴の一日を眺望にスキー練習に悠々と暮すのも悪くない。 明日一擧にCⅡ前進を期し萬般の用意をなす。

三、二〇　晴後小雪　CⅠ（七、五〇）——大遠見より一つ上のピーク（一一、四〇）同所へCⅡを設置

大きな荷物を脊負つた吾々七人がスキーをつけてゾロ〳〵と廣い遠見尾根を登つて行く。 幕營地は如何にも風當りがよささうな頭だが見晴しは至極好い。 一次サポート隊の小林、鷲崎、宮城の三名は任務を終へて吹雪始めた中をCⅠへ戻り、他の四名は其儘CⅡへ殘る。

三、二一　快晴後ガス濃し　CⅡ——小遠見下——CⅡ

第二天幕の四人は昨日殘した荷をとりに小遠見下迄スキーで往復。一次サポート隊はCⅠより下山の途につく。 Cnでは防風壁の擴大强化を爲し早目に天幕に這入つて整理を爲す。 寒氣加はり明日の好晴を思はせる。

三、二二　無風快晴　CⅡ發（七、二〇）——尾根を降りシラタケ澤へ出る——二俣（八、四〇）——九、〇〇）——カクネ里——天狗尾根二三五〇の頭（一二、二〇）同所にCⅡ設置

素晴しい上天氣で春の雪山は明朗そのもの。 雪のカクネ里には陽炎さへゆらめき時々南斜面を落ちる小雪崩がものうい響をたてる。 天狗へ最初に這るルンゼを登る。 ルンゼは上部で右に曲つて居り天幕を張るべき頭に直接上つて居る。 二次サポートの任を果した森脇、大塚はCⅢへ戻り登攀隊の二名CⅢへ殘る。 夕刻關學山岳部の方一名登り來り、 浪高生二名北槍より天狗を下降中カクネ里へスリップ重傷を負ひし旨を語り天狗尾根下部にある浪高ベースキャムプ迄の傳令を依賴せるにより、 小谷部直ちにアイゼンをつけてシュプールを追ふて六百米餘も下の浪高キャムプに至り傳令。 直ちに同部員二名と共に登りCⅢ七時歸着。 アクシデントの程度如何により何時にても應援すべき旨を傳えカクネへ下る浪高生二名と別れる。

他方CⅡへ戻る森脇、 大塚も關西學院生の傳令より遭難を知り直ちに引返して遭難現場に赴き深更迄遭難者搬出に努力せり。

三、二三　晴　CⅢ滯在

浪高生への應援に備えて絶好の好晴なれど一日滯在と決す。

三、二四　吹雪後快晴　CⅢ滯在

午前三時起床、奥壁アタックせんと仕度せしも吹雪となりて中止。可成はげしく降りたるも午後カラリと晴れ上り且不氣味に暖かく、 防風壁の補强を爲したり雪人形を作つたり等して遊ぶ。 四周の景色素晴し。 夜は又皎々たる明月で風さへ無くCⅡと燈火信號をかはす。

三、二五　吹雪烈し　CⅢ滯在

北アルプスの吹雪は何日迄續くか不氣味なので食糧を減らして寢て暮す。サラ〳〵と終日吹雪は荒れ天幕埋る。

三、二六　吹雪　CⅢ滯在

食糧益々儉約。一日シュラフで暮す。 小便の爲一大決心をして天幕外へ出ると忽ち凍えさうになる。

三、二七　晴烈風　CⅢ滯在

天幕を埋めた周圍の雪を排除しさつぱりとする。 外は雪煙蒙々、鹿島槍は雪煙で芒と霞み、 天狗尾根は高々とナイフリッヂに吹溜つてまるで見違えた樣になつて居る。 零下十度で三月としては寒い。明日は晴天らしいので晩飯をたつぷり攝り靴の手入等登攀準備をとゝのへる。

三、二八　無風快晴　荒澤奥壁（北稜）完登

CⅢ發（五、〇〇）――北稜取付（六、三〇）――第一岩峰下（七、三〇――五〇）――M岩峰下（後四、三〇）――M岩峰上（七、〇〇――一一、三〇）――上部へ登攀開始

午前二時起床。氷りつく樣な月明に北槍のパイフェン神秘的なり。北稜は饅頭形に溢れる樣に積つた雪で意想外に困難を極めた。オーダーは小谷部、森川の順。第一岩峯は殆んど裸出してアクロバチックな登行を强いられる、全行程至る所オーヴアーハングや垂直の積雪層を切崩して人間の登り得る角度にステップを作らねばならず勞力、時間、バランスを要する事非常なものであつた。M峰下の岩場やそれに續く雪稜も困難を極め同じ箇所に一時間も二時間もへばり付いて居らねばならずトップは勿論の事だが後で確保する森川も無忍耐力を要するだらうと思つた。M峰の左側は氷の爲全然不可能で、右側の斷崖に附着した雪のブロック上を辛くも卷き垂直に近い樣な積雪面にステップを刻んで漸くM峰上に出る。こんな所は非積雪期は絶對通過不能の所なのだ。森川が登る頃は完全に日も暮れ同所にビバークと決す。誤つてツエルトザックを荒澤に取落し吾々は全然着のみ着の儘狹い雪稜をならして腰を下す。勿論アンザイレンし腰にはハーケン・ハンマーをつけた儘。大町の灯がまるで夢の都の樣に思へる。互に眠らぬ樣に勵し合つたが兎角疲勞の爲、寒氣に拘らずウト〳〵する。油斷すれば忽ちツエルト同樣谷底へ轉落して了ふのだ。やがて美しい月が出たが、十一時頃不圖氣付くと北槍の頂から無氣味な雲が凄いスピードで東北に流れ天候惡化が第六感に響いたので早速又登攀をつゞける。其處から上も急峻な雪斜面だが今迄の樣な事はなく生命の安住を求めて疲勞も切實に感ぜず頑張を續ける。この日CⅡの二人白岳より五龍岳往復す。

三、二九　吹雪　前日より登攀繼續――天狗尾根小舍岩（前四、四〇――七、一〇）――天狗尾根下降――CⅢ歸着（前一一、三〇）

途中から遂に吹雪始める。小舍岩の東面コンケーヴした所は格好の雪洞を形成して居たので穴をあけて這り込む。風は全然あたらず倒れる樣に深い睡眠にひきずり込まれて了ふ。二時間半近く寢り天狗尾根下降に向ふ。外はもう相當の吹雪で眼界は全くきかない。吹雪の幕間から垣間見る下の模樣で太い所を選つて降だる。右の荒澤側は絶壁だから左へ迷はぬ樣に注意すればよいのだ。一ケ所尾根を間違へて一寸戸惑ひしただけで無事半埋沒のCⅢへ戻れた時は涙が出る程嬉しかつた。天幕内には關西學院山岳部よりパン等の寄贈あり食糧欠乏の折柄非常に有難く思つた。直ちに再び貪る樣に眠り始む。

三、三〇　雪後半晴　CⅢ滯在

昨日午後三時より今朝午前九時迄實に十八時間眠り通す。疲勞の爲及びラッセルも深い故自重して一日休養す。

三、三一　半晴薄曇　CⅢ撤收同發（一〇、一〇）――カクネ里（一一、二〇）――二俣（一二、二〇）――一、二〇）――支尾根上、關學天幕地（三、三〇）――CⅡ歸着（四、三〇）

ラッセル重く深く意外に骨折る。關學天幕も撤收を始めたらしく支尾根にはラッセル道ありて大いに樂をする。小さなCⅢからCⅡへ來るとまるで立派なヒュッテへでも來た樣だ。豪勢な食料に石油ランプおまけに中では立つても頭がつかえない。森脇、大塚の作つておいて呉れた紅茶に喉をうるほし素晴しいハヤシライスに腹の蟲を慰めた。

明日は一擧に下山する事に決め、今夜は天幕最後の晩なので、あらゆるものを總動員して豪勢を極める。

第二次サポート隊(森脇、大塚)の行動は左の如し。

三、二二　晴　CⅢ(〇、四〇)——二、〇〇)——カクネ里(二、三五)——シラタケ出合(三、〇五——一〇)——浪高山岳部遭難者救援の爲に關學山岳部員諸氏と共に盡力す。

三、二三　薄晴　CⅡ歸着(前一、〇〇)　午前休養

午後シラタケ出合の遭難者の處迄往復す。

三、二四　吹雪後曇時々晴　滯在

三、二五　吹雪後疊風アリ　滯在

三、二六　吹雪　滯在

三、二七　朝强風後晴　滯在

三、二八　快晴　CⅡ(九、一〇)——白岳五龍間シーデポ(一一、〇〇——三〇)——五龍岳(〇、四〇——二、〇〇)——シーデポ(二、四〇——三、一〇)——CⅡ(三、五〇)

久振りの快晴に出發おくる。終日無風、快適な登山であつた。頂上より、天狗尾根を登る關學のパーティ見ゆ。

三、二九　吹雪

昨日關學の方達が天狗尾根へ行つたので登攀隊の樣子を聞きに關學のテント迄往復す。

三、三〇　風雪　滯在

三、三一　晴　滯在　登攀隊無事歸着す。

四、一　晴後雪　CⅡ撤收同出發(九、三〇)——CⅠ(一一、〇五——三、〇〇)CⅠ撤收同發——神城(四、四〇)

一擧に下降するので各自の荷物は凄く多い。CⅠ迄小谷部はスキー他は輪樏で降る。天幕一切及び登攀具等を小舍に殘し一同輕身になつてスキーで下山。殘した荷物は後程人夫に搬出せしめる事とす。神城へ着かんとする頃から雪霏々と降り出す。大町行のバスへ乘り込むと漸く無事目的の全部を果し終へた喜びが胸に迫り皆大いにはしやいで了ふ。外には雪が益々降りしきる。(小谷部記)

唐松岳　五龍岳

林　俊　介

三、一八　吹雪　細野——黑菱——細野　スキー練習

三、一九　快晴　細野——黑菱平上——黑菱小舍

三、二〇　晴後吹雪　黑菱小舍(六、三〇)——唐松小舍(一〇、三〇)

三、二一　晴强風　唐松小舍(八、一五)——五龍岳(一一、三〇——一一、四五)——唐松小舍(二、三〇——三、一五)——黑菱——細野(七〇〇)(泊)

見納めの山行。山は良く晴れて呉れた。

野澤溫泉スキー行

林　俊　介

三、二二　快晴　細野——四谷(一〇、四五)——大町(一二、〇〇)——長野(二、一〇——二、四七)——木島——野澤溫泉(五、〇〇)

三、二三　快晴　スキー練習

滑り納めのスキー行。一人旅では面白くない。それでもやつぱり尋ねて行きたくて大町からバスで搖られて行く。ゲレンデには人影無く

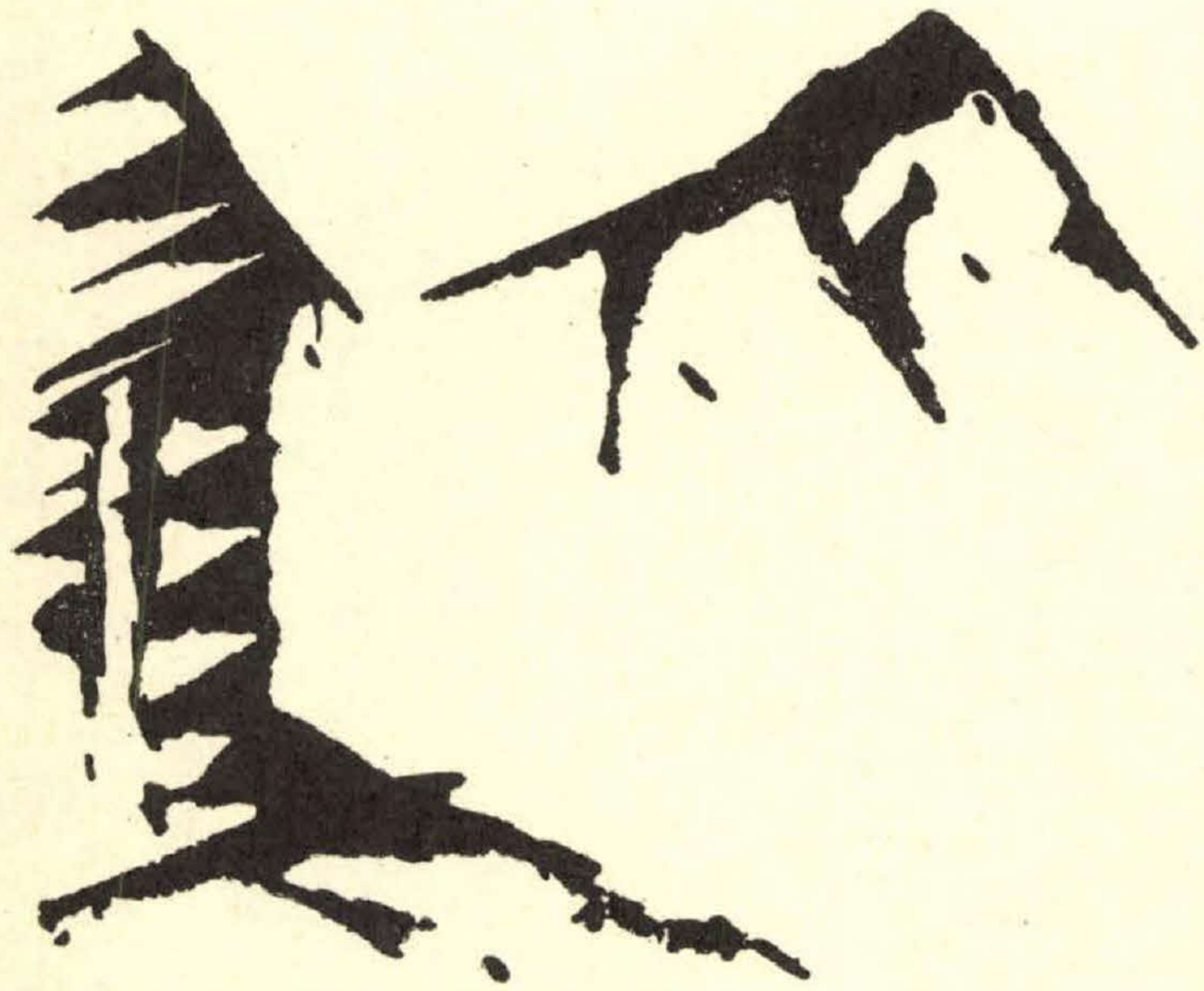
春光のみ燦々と降り注ぐ。

三、二四　歸京

——昭和十一年度記錄了——

あとがき　從來「記錄」は地方別にしてゐたのであるが、此度から月日順に羅列し索引を付した。その理由は、一年度中に於る部の動きを最も明瞭に傳へる事を主眼としたからである。又本號の編輯は從來とは相當趣をかへ「雜記」「山小舍」等の欄をはぶいたので「記錄」の中へは出來るだけ文章を入れる樣に、又執筆者も出來るだけ多くの部員に依賴したのである。今後もこの方針が良いと思ふ。「記錄」には「部誌」と共に本文以上に力を注いだのであつて、私達としては本文同樣熟讀せられんことを希望してゐる。

記錄委員　望月達夫



部誌

自昭和十年九月
至昭和十二年三月

昭和十年度

本年度委員

代表　林　俊介
庶務　柿原謙一　鷲崎四郎　鷹野雄一
記錄　望月達夫
會計　岩崎利一　小林重吉
圖書　森川眞三郎　小谷部全助
器具　森脇芳之

夏山報告會

九月十六日（月）午後三時　於國立志みづ

出席者（本科）林俊介　齋藤正治　小柳二郎　柿原謙一　小谷部全助　望月達夫　森脇芳之　小林重吉　和田榮達（豫科）鷲崎雄四郎　佐々木誠　森川眞三郎　榎本直司　岩崎利一　原鐵三郎　高原龍雄　秦良平　日江井正巳　内田素彦　大塚武　齋藤明智（專門部）鷹野雄一　新羅二郎

各リーダーの報告、隊員の感想あり。上高地天幕日誌を繙讀し思ひ出に耽る。會食して六時半散會。

國立懇親會

十月五日（土）夜――六日

吉例お月見會と云ふ奴であるが半月は夜半には姿を沒し、晴れた空のみ明るい。午後六時半頃から部室につどいて盃を交す。集る者針葉樹會員では中川孫一　松木謙三　村尾金二　近藤恒雄　增山清太郎の五氏並びに部員側は齋藤正治　林俊介　森脇芳之　小林重吉　小谷部全助　望月達夫　鷹野雄一　森川眞三郎の八名。夜半齋藤森脇　鷹野　森川は歸へり他は二階の御座敷にて夢を結ぶ。

六日（日）午前三時半起床。五時三分國立發にて高尾山に向ふ。ケーブルはまだ動かぬので歩いて登り見晴臺にて七時朝食。それからのんびりと小佛峠への道を歩き、日影澤より登つてきた森脇と一緒になつて峠で記念撮影後下山。村尾　增山　望月　林　小谷部　小林の六名にて正午再び部室へ戻る。折柄來室せし吉澤一郎氏、謙一君及び柿原と共に中食後學園内を逍遙して三時國立を去つた。

秋山相談會

十月十九日（土）三時　於國立部室

學内の事件、豫科專門部の學期試驗で暫らく集會が開けず、今日三浦新學長の就任式後久し振りで顔を揃へる。全部員の參加を期して行ふ處の北岳生活の具體的な相談をなす。

出席者（本科）齋藤　林　柿原　森脇　小林　望月（豫科）佐々木　西野　榎本　鷲崎　森川　原　岩崎　高原　大塚　毛塚　内田

定期部員總會

十一月十一日（月）午後三時半　於國立部室

一、秋山報告を一通りなし、地藏佛に於る森川のアクシデント及び其後の經過を林報告す。

二、昭和十一年度の委員を決定す。

三、冬山計畫、スキー合宿に關し小谷部より説明あり。

出席者（本科）齋藤　林　柿原　森脇　小林　小谷部　望月　和田（豫科）佐々木　岩崎　高原　日江井　大塚　毛塚　齋藤（明）秦　内田（專門部）鷹野　新羅　松浦　谷ケ崎

針葉樹會例會

十一月十一日　午後六時半　於如水會館

過日の南アルプス地藏佛に於る部員森川の遭難顚末を針葉樹會員諸氏に報告する目的にて今月の例會は開かれた。先づ遭難當時の同行者たりし林　柿原の兩名より概略報告をなし、それにつき質問あり。續いて會員中川氏より部員一同に對する訓示あり。又吉澤一郎　近藤　增山の三先輩諸氏よりも種々御言葉をうける。部員一同深く感じて今後の戒となす事を誓ふ。

出席者（會員）中川孫一　松木謙三　吉澤一郎　近藤恒雄　高橋要二　園山德三郎　芋川稔一　小川竹夫　吉澤松次郎　鈴木英雄　增山清太郎（部員）齋藤　小柳　林　柿原　小谷部　望月　小林　森脇　佐々木　和田　岩崎　新羅　松浦　齋藤（明）　日江井　内田

「針葉樹第八號」發刊さる

八月下旬より仕事に着手せる八號は、十一月廿五日を以て發刊せらるゝ事となつた。 此度は林君と私とで主として編輯をやり、常に指導的位置にある部員、殊に柿原　小谷部　鷹野　森脇　小林の諸君の意見を聞いてやつた、 勿論廣告は全部員諸君の努力によつて集められたものである。 吾々は何時も「針葉樹」發刊と不可分の關係にある廣告取りの仕事については考へさせられる。 廣告を入れる事が書物の體裁上面白くないのはまだよいとしても、その仕事が吾々の一義的な登山そのものにも影響を及ぼすからである。 勿論吾々は營利の目的で廣告を入れるのでは毛頭ない。 けれ共現在の當部の財政狀態では廣告による收入なくして「針葉樹」を刊行する事は不可能な狀態にある。 乍併私としては將來部の財政の基礎が確固たるものとなつた曉には若干のものをのぞき當然廢止さる可きものと思つてゐる。

編輯に就いては、今考へると缺點だらけで甚だ慚愧に堪えない次第である。 缺點と感じた所は九號に於て出來るだけ修正するつもりでゐる。

他校山岳部に於ても部報刊行、その形式につき種々論義せられてゐる如く、等しく吾々の部に於ても既に四、五年前から考究せられ、現在に於ても等閑にふせられぬ問題である。 乍併私はその社會的價値の存否に關はらず吾々の「針葉樹」は部の存在する限り發刊せらる可き意義を有するものと信じてゐる。（昭和一二・三　望月）

冬季スキー合宿準備會

十二月二日（月）　午後三時　於小平部室

出席者　（本科）林　柿原　小谷部　森脇　小林　望月　（豫科）塚本　佐々木　榎本　鷲崎　原　岩崎　高原　日江井　大塚　毛塚　齋藤

今冬乘鞍岳スキー小舍に於て行ふ合宿の準備會を開く。 新らしくスキーを始める豫科部員の爲に豫科部室に於て行ふ。乘鞍岳の地形、雪質等に關しては森脇説明をなし、冬山の注意につき小谷部所見を述べる。

針葉樹會例會

十二月四日（水）　午後六時半　於如水會館

今夏上高地穗高附近で部員榎本の撮影せる八ミリを映寫す。 相當な出來榮えであつた。 面白い光景が現はれる度に皆腹をかゝえて笑ひ、暫し夏山の追想にふけつた。

出席者　（會員）松木謙三　村尾金二　矢作太郎　吉澤一郎　近藤恒雄　高橋要二　久保田禮治　吉澤松次郎　增山清太郎　（部員）十五名。

豫科山岳部主催山岳寫眞展覽會

十二月五日――七日　於小平會議室

冬山、スキーのシーズンを前にして豫科にて寫眞展を開催す。印畫は今年下半期に部員のものした中から、約四十點を選び殊に豫科部員の作を中心とした。 佐々木　榎本　岩崎　原の諸兄の努力を多とする。

七日の午後は先輩近藤恒雄氏來場さる。 火燈し頃迄同先輩を圍み冬山の話に耽つた。 當日の出席部員　本科三名　豫科九名。

冬山懇談會

一月十三日（月）午後三時半　於國立部室

出席者（本科）林　柿原　森脇　小林　小谷部　望月（豫科）

佐々木　榎本　原　岩崎　大塚（專門部）鷹野　新羅　松浦

皆雪燒けのした顏を輝やかし乍ら、寫眞等持ちよつて集ふ。暖いストーブを圍んで座談的に冬山の思ひ出話に耽る。例の如くアミダをやる。

卒業部員送別會

一月十七日（金）午後六時　於新宿オリムピック

出席者（卒業部員）齋藤正治　小柳二郎　鷹野雄一

（殘留部員）林　柿原　小谷部　望月　小林　森脇　塚本　和田　森川　佐々木　岩崎　原　新羅　松浦　齋藤

何時も送別會毎に感ずる事乍ら、なんだか物淋しい氣がして變なものだ。つい先日の冬山では一緒に暮らして居た人達が、三月の山からは僕達から遠ざかつて行くことを思ふとなんとなく心淋しい。

送らるゝ人々は部の進む可き道を示され、送る者も又確固たる信念を述べたりして珍らしく緊張した送別會であつた。

春季スキー合宿準備會

一月卅一日（金）午後三時　於小平部室

出席者（本科）林　柿原　望月（豫科）森川　鷲崎　岩崎　原　大塚　齋藤

今春のスキー合宿は野澤溫泉にてやる事に決定、本日の會にて出發期日、合宿期間等を內定した。

部員湯田坂哲君永眠さる

長らく病臥靜養につとめられし豫科三年部員湯田坂哲君は、藥石の效も空しく三月廿二日本鄉順天堂醫院の一室に於て永眠さる。遺骸は東京にて荼毘に附し遺骨は、御岳乘鞍槍の高峯を眺むる鄉里信州諏訪郡八ケ岳山麓の草藪深き北山村の小丘に埋む。

定期部員集會に就いて

今日定期部員集會は、吾々の山岳部に於て缺く可からざる集會である。それは登山の相談、準備、報告、研究、懇談其他の諸集會に充てられてゐるからである。吾々は右の樣な諸集會を開く場合一々日取等を決定する必要はない。そして一定曜日に部室に行けば必ず殆ど全部員の顏が揃つてゐる現狀である。

が此の集會が開かれる樣になつたのもさして舊い事ではなく、私の豫科三年、即ち昭和九年の春からであつた。今「針葉樹第七號」を開いてみると同年五月廿四日の集會が最初の樣である。（同書九一頁）爰にその當時の事を一言記してをくのも、あながち無意義ではなからう。

當時代表委員をやつてをられた堀岡淸氏は、その時分の沈滯した部の空氣を一掃するに並々ならぬ努力をして居られた事を忘れる事は出來ない。そしてこの集會もその努力の一端として實現せられたものである。部員が國立と小平とに分れてゐる關係から本科專門部の

部員と豫科の部員とが顔を合す機會が少く又、その頃は本科部員で部室へ始終來てゐる人は少くて、國立の部室は常に空屋同然であつた。それで部室に本科豫科專門部の全部員が屢々集る目的から、この集會はもたれる樣になつた。そしてその集會の中から山へ行く氣持、山に對する氣持、部に對する氣持を釀出しやうと云ふのが堀岡氏の考へであつた樣に思ふ。

であるから、始めの一年間は何等の題目もなく唯懇親の目的で集り山行の相談や座談的な報告と云ふのが關の山で、雜談に終るのが常であつた。又最初は毎木曜日に集る處から木曜會と云つてゐた事もあるが、何時しか定期部員集會と云ふ幾分いかめしい名前に變つて一週一日、一定曜日開かれる樣になつた。曜日は勿論年度によつて、又學期によつて變り皆の一番都合よき日が選定された。それは殊に本科生にはゼミナール制があり、午後五時迄課業のある日が週一日あるからであつた。

始めはそれでも本當に山の好きな連中のみしか集らなかつたが、その中殆んど常に全部員が集る樣になり、所期の目的を達する事が出來た。堀岡氏の卒業後は、懇親の意味のみでは集會そのものが既に無意味になつてきて、吾々はこれに何か意味を持たしめ度いと思ふ樣になり準備會、報告會、研究會、懇親會を適宜按配して會そのものも次第に嚴格にやる樣にしてきた。此の集會の誕生から知つてゐる一人として私は此の傾向を嬉しく思つてゐる。今後も勿論單なる座談雜談に終ることなく準備會、報告會、研究會等を嚴格にやつてゆく事を希望してゐる。報告會等に於ては只に登山そのものゝ報告のみでなく、批判的な要素を加味し失敗は失敗として、後日の登山の捨石たらしむる樣常に登山の進歩發展を目指し、又今後益々統制的な登山計畫が實行に移さるゝと思ふから準備會に於ても、舊倍の周到な注意を要する事と考へる。研究會は兎角一二の有志の研究發表に終る傾向があるが、之も成可く顔振れを多くし度いと思ふ。

今一つ此の年度で忘れる事の出來ないのは、部室備付の部日誌が出來た事である。之は本年度代表の林君の發案にかゝり十月上旬頃から置かれ次いで小平の豫科部室へも同樣なものが備へられた。部員は登山の模樣、感想等誰はゞかる事なく思ふまゝに記す事になつてゐる。幾年かの後に古い部日誌を繙くのはきつと興味つきざる事に相異なからう。

本年度の定期部員集會中主なるものは既に記述したが、次に會合の種類、回數等を示せば次の如くなる。

本年度の定期部員集會の合計回數は一四、その中登山の相談準備會五、報告會一、研究會一、懇談會一、題材ナシ四、總會二である。又定期部員集會以外の會合として懇親、歡迎、送別等の會合は五、以上全合計一九である。

尙本年度の定期部員集會は三學期を通して月曜に開かれた。

針葉樹會例會に就いて

當山岳部の先輩諸氏に依つて作られてゐる、針葉樹會は毎月一回東京に於て例會が開かれてゐる。例會には勿論多數の現役も出席する。從つて現役と先輩との結合と云ふ點に於てこの例會は、又一つの役割を果してゐる。私はこの例會に於て常によい意味で先輩と現役の垣根の無くなつて了ふ事を感じ、又一橋山岳部の大きな生命を眼のあた

り見る。

今迄例會に就いては一々記載したが、本年度からは特別なるものゝみ掲げる事にした。その故は現在既に針葉樹會報も充實した定期刊行物（年十回）となり、その誌上に例會の模樣が記載せられてゐるからである。又同會報の紙面は現役にも開放せられ從つて部にとつても大切な對内的發表機關となつてゐる。

左に本年度の例會、臨時會合を表示する。

月日	會員	部員	計	場所	摘要
四月廿三日（火）	七	八	一五	如水館	
五月十二日（日）	九	七	一六	國立	懇親會
六月十四日（金）	九	一二	二一	如水館	
七月十日（水）	一〇	八	一八	同	
八月二十日（火）	八	一〇	一八	同	
九月十六日（月）	一一	一五	二六	同	夏山懇談
十月廿三日（水）	一一	五	一六	同	
十一月十一日（月）	一一	一六	二七	同	秋山報告（地藏佛アクシデントにつき）
十二月四日（水）	九	一五	二四	同	今夏撮影せし八ミリを映寫
一月廿三日（木）	八	八	一六	同	冬山懇談
二月七日（金）	一一	五	一六	同	太田又一氏を迎ふ
三月七日（土）	一三	八	二一	同	丸茂平造氏を迎ふ
六月廿九日（土）	一〇	一七	二七	元園軒	堀岡清氏歡迎會
十月五日（土）	六	九	一五	國立	懇親會
十二月廿四日（火）	一一	一	一二	元園軒	忘年會
三月廿六日（木）	一二	四	一六	同	新入會員歡迎會

昭和十一年度

本年度委員

代表　小谷部全助
庶務　佐々木誠
　　岩崎利一
　　新羅二郎
記錄　望月達夫
會計　森川眞三郎
　　原鐵三郎
圖書　森脇芳之
器具　小林重吉

委員會

四月十一日（土）正午　於國立部室

新入部員歡迎會及び歡迎登山の件につき相談す。

出席者　柿原謙一　小谷部全助　森脇芳之　小林重吉　望月達夫　鷲崎雄四郎　森川眞三郎　原鐵三郎　岩崎利一　新羅二郎

豫科新入部員歡迎會

四月十七日（金）午後三時　於小平部室

櫻花滿開の春、懷しい小平の部室にて新入部員の歡迎會を開く。司會

者原の開會の辭に次いで、代表小谷部立つて所感を述べ歡迎の辭となす。ひとしきり懇談をなしてから岩崎より歡迎登山に關し、説明あつて會を閉づ。

出席者（新入部員）里見治男　宮城恭一　高橋廣三郎　矢守勝一　諸橋洋一　中西鋭

（本科）林俊介　柿原謙一　小谷部全助　望月達夫　森脇芳之　小林重吉　和田榮達　榎本直司　鷲崎雄四郎　森川眞三郎（豫科）原鐵三郎　岩崎利一　日江井正巳　大塚武　毛塚由太郎　齋藤明智

專門部新入部員歡迎會

四月二十一日（火）午後三時半　於國立部室

出席者（新入部員）關根修　笠井誠

（本科）小谷部　森脇　小林　望月　佐々木（豫科）原　岩崎（專門部）新羅　松浦　谷ケ崎

研究、報告會

五月八日（金）午後三時　於國立部室

定期部員集會を有意義ならしめる爲、新入部員の顔振れもきまつた最初の集會日を研究、報告會とす。本日の話は主として新入部員の爲になされたもので、その報告者左の如し。

岩登に就いて　望月達夫

五月の富士山　森川眞三郎

出席者（本科）林　小谷部　望月　森脇　小林　和田　佐々木　鷲崎　森川（豫科）岩崎　原　日江井　大塚　齋藤　里見　高橋　水田洋（新入部員）（專門部）關根

針葉樹會例會

五月廿五日（月）午後六時半　於如水會館

日本山岳會の耆宿茨木猪之吉氏を圍み、約二時間に亘り山に關する珍談奇談をうかゞふ。ユーモアを含んだお話の中に私共若輩がうかゞつて大いに糧とすべき教訓の多分に含まれてゐる事を感じ、有益に思つた次第である。

出席者　茨木猪之吉氏（會員）中川　村尾　矢作　吉澤　近藤　磯野　手塚　久保田　高瀬　芋川　園山　吉澤（松）鈴木　增山　小柳（部員）林　柿原　小谷部　森脇　小林　望月　佐々木　森川　新羅　岩崎

夏山相談會

五月廿九日（金）午後三時半　於小平部室

出席者（本科）林　小林　望月（豫科）岩崎　原　日江井　大塚　高橋　水田

今夏の計畫は過日穗高涸澤合宿と決定せられた。本日の定期部員集會に於て豫科生に發表し、且一、二年生の爲に涸澤附近の詳細なる説明をなす。

（附記）定期部員集會は今迄國立で開かれてゐたが、豫科部員の便宜を考へて本學期は小平國立交互に開く事にした。乍併小平部室に於て行つても豫科生の出席率はさ程變りはなく、又部室の設備等の點を考慮して二學期からは國立のみでやる事となつて了つた。

今後豫科生にかゝる希望があるならば、豫科部員のレベルも向上したしするから本科、豫科別々に會合を開き月に二度位合同してやるのも一案であらう。けれ共私個人としては定期部員集會は今のまゝ存續せしめ豫科生に於て、任意豫科のみの會合を持たれん事を希望する

（昭和十二・三　望月）

夏山相談會

六月五日（金）　午後三時半　於國立部室

今夏涸澤合宿の計畫は種々な意味に於て、當山岳部にとつて劃期的なものである。それは部の進む可き方向を明示する一具現でもある。その故にかゝる合宿を擧行するに到つた動機及びその必要性、並びに合宿中に於ける諸注意等を小谷部より詳細に説明あり。

出席者（本科）柿原　小谷部　望月　小林　森脇　森川（專門部）新羅（豫科）岩崎　原　大塚　里見　高橋　宮城　水田

部員懇談會

六月十二日（金）　午後三時　於小平會議室

杉浦德次郎教授を圍む懇談會を開く。

出席者（本科）林　小谷部　小林　望月　和田　森川（豫科）岩崎　原　水田　高橋　宮城　里見

夏山準備會

六月十九日（金）　午後三時半　於國立部室

涸澤合宿の各隊の編成をなし、ルート等を定む。尙合宿解散後の計畫等も内定する。

出席者　本科七名　豫科五名　專門部二名

夏山を語る會

六月廿五日（木）　午後三時　於小平會議室

豫科の一般學生に夏山の知識を分つ爲豫科主催にて會合を開く。來會者約三十名會場には寫眞高山植物の標本等を飾つた。

出席者　豫科九名　本科五名

木村部長を圍む懇談會

六月廿六日（金）　午後三時半　於國立部室

久し振りで部長木村先生と膝を交へて懇談をなす。學校當局の山岳部に對する意見等をうかゞひ又山岳部の近況等を説明申し上げる。

出席者　木村惠吉郎教授（本科）林　小谷部　小林　望月　和田　森川　鷲崎　榎本（豫科）岩崎　大塚　齋藤　日江井　里見　高橋　宮城（專門部）新羅　松浦　關根

夏山最終準備會

七月七日（火）　午後三時　於國立部室

本日正午過發送すべき荷物全部發送し終る。三時より會合を開き萬端遺漏なき樣準備を完了す。

出席者　本科十名　豫科九名　專門部一名

夏山報告會

九月廿一日（月）　午後五時　於國立志みづ

夕食を共にし寫眞等を見せ合つて報告會を行ふ。

出席者　（本科）林　柿原　小谷部　森脇　小林　望月　和田　森　川　鷲崎　佐々木　（豫科）岩崎　原　大塚　齋藤　日江井　里見　高橋　宮城　水田　（專門部）新羅　松浦

國立懇親會

九月廿六日（土）　午後六時　於國立部室

雨の爲に陣場山の御月見會がお流れとなり部室へ集ふ。一時過迄山の話、部の話を中心に盃を交はして牛鍋をつゝつく。例の如く二階に就寢して廿七日豪雨の中を歸途についた。

出席者　（針葉樹會員）中川孫一　松木謙三　增山清太郎　小柳二郎　（部員）小谷部全助　望月達夫　小林重吉　森脇芳之

秋山相談會

九月廿八日（月）　午後三時半　於國立部室

秋山の各隊の相談打ち合せをなす。

出席者　本科八名　豫科六名

部員關根修君永眠さる

專門部二年部員關根修君は、十月廿一日午後房州館山の別莊にて永眠さる。遺骸は彼地にて荼毘にふせられ廿二日歸京告別式は廿四日午後麴町の自宅にて執行せられ部員多數會葬せり。

杉浦德次郎先生送別會

十月二十六日（月）　午後六時　於新宿オリムピック

此度歐洲へ留學を命ぜられたる杉浦先生の送別會を開く。先生には約一ケ年の御豫定にて主として巴里に滯在せらるゝ由。ドフイーネあたりへ御登行さるゝとの御抱負を承り、一同大いに羨望した次第である。先生の御健康と幸多き御登行とを祈る。

出席者　杉浦德次郎教授　（部員）林　小谷部　小林　望月　森川　佐々木　岩崎　原　大塚　日江井

秋山報告會

十一月九日（月）　午後三時半　於國立部室

惡天候に禍ひされて今秋の登山は目ぼしいものは少なかつたが、左の如く報告をなす。

大武川溯行　小谷部全助
國師岳附近　望月達夫
柳澤峠附近　日江井正巳
甲斐駒仙丈鋸岳　大塚武
甲斐駒ケ岳　宮城恭一
富士山（屏風尾根）　森川眞三郎

出席者　（本科）林　小谷部　森脇　小林　望月　森川　（豫科）岩崎　大塚　日江井　宮城　（專門部）新羅

冬山相談會

十一月十六日（月）　午後三時半　於國立部室

今冬の計畫につき具體的に發表あり。各隊のリーダー説明をなす。

乘鞍岳合宿　岩崎利一
富士山（練習）　望月達夫
奥又白谷　小谷部全助
槍穂高　小林重吉
北岳バットレス及三山　小谷部全助
鳥海山　岩崎利一

次に冬山の一般的注意あり

冬山の凍傷について　小谷部全助

出席者　本科十名　豫科七名

研究、報告會　於國立部室

十一月廿四日（火）午後三時半

乘鞍岳合宿の注意　小谷部全助
富士山練習行　大塚武
雪崩について　望月達夫

出席者　本科八名　豫科七名

研究會　於國立部室

十一月三十日（月）午後三時半

雪崩について　望月達夫

出席者　本科六名　豫科七名　專門部一名

研究、報告會

十二月七日（月）午後三時半　於國立部室

奥又白谷より前穂高岳　森川眞三郎
雪崩について　望月達夫

三回に亘る雪崩の報告終了す。之は主として始めて冬山へ行く人達の爲なされたものでプリントを配布し、雪崩研究の文献の説明、大島亮吉、今西錦司兩氏の雪崩研究の概説を行つた。

出席者　本科六名　豫科六名　專門部一名

針葉樹會忘年會

十二月八日（火）午後六時半　於銀座公樂

本年最後の針葉樹會を盛大に開く。

出席者（會員）中川孫一　渡邊九郎　村尾金二　矢作太郎　近藤恒雄　久保田禮治　手塚晴雄　吉澤松次郎　增山清太郎　清水達雄　鷹野雄一　小柳二郎（部員）林俊介　柿原謙一　小谷部全助　小林重吉　望月達夫　森川眞三郎　新羅二郎　岩崎利一

冬山第一回準備會

十二月十四日（月）午後三時半　於國立部室

北岳バットレス　槍穂高　乘鞍岳合宿　等　各隊各に周到なる準備をなす。

出席者　本科十名　豫科六名

冬山第二回準備會

十二月廿一日（月）午後三時半　於國立部室

本日を以て最終準備會となす。
出席者　本科五名　豫科七名

冬山報告會

一月十一日（月）午後三時半　於國立部室
左の如く今冬の登山報告をなす

乘鞍岳合宿　柿原謙一
槍ケ岳　森脇芳之
八方尾根　大塚武
北岳バットレス及間岳　小谷部全助
森川眞三郎
望月達夫

出席者　（本科）柿原　小谷部　森脇　望月　森川　鷲崎　佐々木
榎本　（豫科）大塚　日江井　齋藤　里見　高橋　宮城　（專門部）
新羅

卒業部員送別會

一月二十二日（金）午後五時　於吉祥寺ふみや
出席者　（卒業部員）林俊介　柿原謙一　新羅二郎　松浦靜雄
（留殘部員）小谷部　小林　森脇　望月　和田　鷲崎　佐々木　榎本
岩崎　原　大塚　齋藤　日江井　里見　高橋　宮城　水田
林、柿原の兩君よりは特に殘れる者の胸に刻みをくべき言辭を戴き一同感ずる處あり。
尙本日昭和十二年度の委員を決定發表す。次の如し。　代表望月達夫　庶務鷲崎雄四郎　大塚武　會計佐々木誠　齋藤明智　記錄岩崎利一　日江井正巳　器具森川眞三郎　圖書榎本直司

豫科山岳部主催山岳寫眞展覽會

一月廿五日（月）——廿六日　於小平集會室
昨年秋より本年一月へかけての部員の傑作約四十點を展覽す。今度も岩崎　原　大塚　日江井の諸君の努力を多とす。

春山相談會

二月一日（月）午後三時半　於國立部室
三月の計畫ほゞ內定さる。
出席者　本科五名　豫科二名

上條孫人君歡迎會

二月五日（金）午後六時　於新宿美芳
上京中の孫人を歡迎す。試驗直前なる爲ほんの極く親しい者のみで開いた。
出席者　上條孫人君　（部員）小谷部　望月　小林　和田　森川
佐々木

春山準備會

三月八日（月）午後三時　於國立部室
今春の計畫は遠見尾根に於ける雪上露營を根據として、荒澤奥壁へ登る事に決定さる。本日準備を完了す。

出席者（本科）小谷部　森脇　小林　和田　森川　鷲崎　佐々木
（豫科）岩崎　原　大塚　齋藤　日江井　宮城

本年度の集會に就いて

本年度の定期部員集會中その重要なるもの、及び其他の諸集會は既に記述したが、左に全集會の種類、回數等を示す。

本年度の合計回數二七、その中登山の相談準備一〇、報告三、研究四、懇談五、題材ナシ五、である。又、定期部員集會以外の會合で懇親、歡迎、送別の爲の會合は七、全合計三四と云ふ事になる。

尙本年度の部員集會は一學期は金曜日、二、三學期は月曜日に開かれた。

本年度の針葉樹會諸會合に就いて

左に表を以て本年度の例會、臨時會合を示す。

月日	會員	部員	計	場所	摘要
四月廿日(月)	一二	七	一九	如水館	乘鞍にて寫せる八ミリ映寫
五月廿五日(月)	一五	一〇	二五	同	茨木氏座談會
六月十五日(月)	九	一一	二〇	同	
七月七日(火)	一七	八	二五	同	河相薫氏を歡迎す
八月十二日(水)	八	八	一六	元園軒	奥野綱重氏を迎へ懇親會を開く
九月十八日(金)	一三	一〇	二三	如水館	夏山懇談
十月廿三日(金)	一四	一〇	二四	同	宇佐美敏夫氏を迎へ松木謙三氏を送る
十一月廿日(金)				銀座公樂	
十二月八日(火)	一二	八	二〇	同	忘年會
一月十五日(金)	一二			如水館	冬山懇談
二月十二日(金)	一二			同	
三月十二日(金)	八			同	
四月廿九日(水)	九	九	一二	武州御岳國立	家族懇親會（家族同伴）
九月廿六日(土)	四	四	八	懇親會	
二月一日(月)	九	五	一四	如水館	五十嵐數馬氏の上京を迎ふ

——昭和十一年度部誌了——

（記錄委員　望月達夫記）

寫眞說明

★雪山の根據地

昭和十二年三月二十一日朝。遠見尾根CⅡにて。素晴しい好晴に冴えたモルゲンロートが實に印象的だつた。まだ防壁も補强してない時である。

★北岳バットレスを目指して

昭和十一年十二月三十日午後一時四十分。砂拂にてCⅡへ前進の途次に寫したもの。嚴冬の高燥地に天幕を進めるあたりは憧れの登行を髣髴せしめる。こゝからバットレスを初めて見る者はとても登攀しやう等と云ふ氣は起らぬ程に物凄い。尙この寫眞は「ケルン」四六號に掲載した事をお斷りしてをく。

★Cガリーより第三尾根、中央稜を仰ぐ

昭和十年十二月十三日午前十時頃。非常な仰角で撮影した爲實際の感じは出て居らぬ。全體がもつとのしかゝる樣な感じで中央稜

などは全然登攀不可能に見える。

★Cガリーよりの雪崩

昭和十二年一月四日午前十時半頃。烈風に誘發された小乾燥雪崩左側第四尾根の逆層と共にこのガリー下部の岩壁は素晴しい。

★北岳バットレス中央部を望む

昭和十二年一月四日午前九時半。落込コルより少し降つた所より寫す。右から第一、第二、第四の各尾根が見える。第三尾根は引込んでゐて見えない。

★第一尾根

昭和十二年一月五日午前九時頃。第四尾根のa點附近からとつたもの。原板が非常に惡く無理して出したが、實際この尾根のプロフィルは素晴しく豪快である。

★マッチ箱第二コルより上部を仰ぐ

昭和十二年一月五日正午頃。すぐ手前の岩が無雪期に於てスラブの難場をなすもの。後ろに逆層の中央稜が日本ばなれのした岩場を見せてゐる。

★マッチ箱より第三コルへのアプザイレン

昭和十二年一月五日午後二時頃。兩側は切立つた樣な斷崖でこゝの下降は緊張を要した。遙か下方に大樺澤はもう日陰になつてゐる。

★マッチ箱の雪稜を攀ず

昭和十二年一月五日正午すぎ。愼重なバランスを保ち乍ら雪稜を登る感じは惡くない。第二コルの惡場を無事突破して一安心した所である。

★dガリーより第四尾根のトラバース

昭和十年十二月十一日。急なバンドの模樣がよく出てゐないが突當りの岩盤などよく判る。

★第三尾根へ取付かんとす

昭和十年十二月十三日午前十時頃。寫眞をとる爲臨時にオーダーを逆にした。第三尾根のクラックをもつ岩場が二つの耳を立てた樣に仰がれる。左側にマッチ箱の側壁が物凄く屏立してゐる。

★第三尾根上部にて

昭和十年十二月十三日午後一時頃。惡場も大體終へて深いラッセルも愉快なり。マッチ箱も目の下になつた。背後に見えるピークは二次登攀の際のCⅡサイトである。

★CⅡよりの間ノ岳

昭和十二年一月。この寫眞で、判る樣に天幕は二九五〇米の突端にある爲眺望は比類なきものであつた。防風壁は誠に貧弱だがまだ假工事だつたから致し方ない。悠々と天幕に寢そべつて間ノ岳などの雪稜に見入る晝下りの氣分はたまらぬ。

★釣尾根CⅡと北岳バットレス

昭和十二年一月三日。サポート隊の下山した後、のんびりと散歩がてら撮影したもの。前日登つた第一尾根など思出深く眺む。

★鹿島槍荒澤奥壁

昭和十二年三月二十三日。奥壁說明圖參照の事。雪が多いので一見何とか簡單に登れ相にも見えたが實際ぶつかつた時の傾斜の强さはこの寫眞にも劣らぬ感じだつた。

★遠見尾根CⅠ

天幕を示す爲特に掲げた。遠景は五龍岳。

★カクネ里よりCⅢへの前進

昭和十二年三月二十二日午前九時頃。駘蕩たる春陽に北壁もあまり威壓的に感じない。荷輕く雪しまり愉快な前進。

★天狗尾根CⅢ

昭和十二年三月三十一日午前十時。CⅢ撤收の日。本來は防壁に埋つて天幕は見えないが撤收の序に防壁の上部を崩して記念撮影したもの。

★荒澤奥壁北稜の登攀

昭和十二年三月廿八日。奥壁説明圖の「北稜」とある「稜」の字の附近。茸雪の一つを登り終へた時寫す。こゝに見える茸雪の下部は垂直乃至オーバーハングしてゐる。

★乘鞍岳位ケ原

昭和十年十二月廿五日午前九時頃。合宿全員が頂上へ向ふ途次うつしたもの。

★穗高涸澤の合宿

昭和十一年七月。涸澤池の平に打建てた大天幕のほとり、思ひ出多き合宿の一日。

——以上——

編輯後記

本號の具體的なプランを決めたのは、四月の末頃だつたか。それから何やかやで、最初の豫定よりも大部おそくなつて了つた。今度は從來とは大部編輯方針もかへたので、一應先輩數氏の御意見を求めたのであつた。大學山岳部の行き方も、昔とは相當ちがつてきた今日、私達の活動を出來るだけ正確に傳へる可き「針葉樹」の如きものも、又變つてくるのが當然であると考へる。

今度は比較的すぐれた寫眞が豐富にあつたので、下手な説明をくだくだ綴るより一目瞭然たる寫眞を澤山のせる事にした。又記錄の纒め方を從來とかへた理由は記錄欄のあとがきで述べた通りである。

「針葉樹」の形式等についても、私達の仲間で種々意見を持つてゐるが、現在理想的と思つてゐる形式も永久的なものとは云へず、その時その時の部員達の手によつて、適當に處理されて行く可きものである。たゞ私達の山岳部は現役のみの部ではなく、「針葉樹」の形式等をかへる時は、矢張り關係ある先輩諸氏の意見を求めるべきである。と同時に如何なる場合にも、出來るだけ眞摯なる態度をとつて編輯をせねばならないと思ふ。（望月達夫）

編輯委員
小谷部全助
望月達夫
森川眞三郎
佐々木誠

針葉樹第八號正誤表

頁	行	誤	正
一三八	上十八	記文	紀文
一三六	上十四	刻々	到々
一三二	下十二	所	竹
一三〇	上十三	考人	老人
一二四	下十八	澤雪にが	澤に雪が
一一七	上十四	Wuudt	Wundt
一一五	上十七	matterhorn	Matterhorn
一一四	下十四	ダダラス	ダグラス
一一一	上十一	ものて	もので
一一〇	下十一	倒外	例外
一〇〇	上十	ダグヲス	ダグラス
一〇八	下十	での	ので
八七	下十	庸つて	傭つて
六六	上十	未端端	未端
〃	〃	どんをに	どんなに
五七	下十	上地高	上高地
五九	下十	例の	側の
四二	上十	する	ある
三七	上十	北の	此の
一九	下十	平風	平凡
一六	上十	吹込まれ	吸込まれ
一一	上一	四一	四一
〃	上十三	あはれ	あれは
〃	上十八	居のるは	居るのは
〃	上一	昭和九月	昭和九年
一一	上一	冷地	冷池
〃	上二	四七	四七
〃	下十一	冷地	冷池
〃	下二	冷地	冷池
一一	上十九	南檜	南檜
一一	下一	四八	四八
一一	下七	友代	交代
一一	下一	四九	四九
一一	下一	五〇	五〇
一一	下七	堪	勘
一一	下四	還光	還元
一一	下十	五五	五五
一一	下十八	斜面を	斜面で
一一	下二〇	直に岳穂へ	直接に岳川へ
一一	下十四	權現地	權現池
一一	下十五	ゲリセード	グリセード
一一	下十五	どうして	どうしても
一一	下十五	ランプ	ランプ
一一	下十五	九三	九三
一一	下十五	鷲野	鷹野
一一	上二	導門部	專門部
一一	上八	纏めての	纏めてこの
一一	下三	もの、こそ	ものこそ、

本誌掲載廣告目錄

山岳雜誌ケルン……(1)
三共株式會社……(3)
明治チョコレート…(4)
明　治　屋……(5)
松　　屋……(6)
松坂屋……(7)
日本油脂……(8)
高瀬商店……(9)
乘鞍スキー小屋……(10)
劒澤小屋……(11)
御岳中ノ小屋……(12)
野澤溫泉酒屋旅館…(13)
遠見小屋……(14)
西糸屋……(15)
穗高小屋……(16)
飯田屋旅館……(16)
德澤園……(17)
中ノ湯溫泉……(17)
谷川館……(18)
五色宗川旅館……(18)
秩父鐵道……(19)
ツルマル・ワツクス(20)
プリマ……(21)
岩崎眼鏡店……(22)
日食ロールドオーツ(15)
文祥堂……(23)
好日山莊……(24)
片桐テント店…(表紙3)
芳賀スキー店…(表紙2)
同人社……(25)
津布久靴店……(26)
キマタ寫眞館……(21)
石田寫眞館……(14)
小川寫眞館……(23)
今井寫眞館……(28)
今野洋服店……(24)
福田洋服店……(27)
佐藤洋服店……(27)
コマドリ撞球……(27)
萬寶書房……(22)
玉澤運動具店……(2)

昭和十二年七月二十日印刷
昭和十二年七月二十五日發行

No. 277

頒價　壹圓六拾錢

東京市杉並區阿佐ヶ谷五ノ六三
編輯兼發行者　望月達夫
東京市京橋區築地一ノ六
印刷者　土井儀一郎
東京市京橋區築地一ノ六
印刷所　典文社印刷所

發行所
東京府北多摩郡谷保村國立
東京商科大學內
一橋山岳部

ケルン　月刊　山とスキーの雜誌

★ 編輯は一に向上と前進を望む、山とスキーの同好者を目標に、研究、隨筆、紀行、批評、紹介を旨として、常に經驗に富んだ登山家のルツクサツクのやうに精選された内容をもつて毎號を送つてゐる。

★ 一定部數より印刷致してをりませんからなるべくお揃へ下さいますやう。

★ 毎月配本をお早く受取りたい方は直接購讀（年三圓六十錢送料共）がお早いと存じます。

★ 現在第五〇號發行（十二年七月）

一部三〇錢（送料一錢）年三圓六〇錢

大阪市北區堂島上一丁目大阪貯蓄ビル三階

發行所　ケルン編輯室

振替口座大阪17075番

山へ 峠へ 溪谷へ

ハイキング登山用具

カドタ製 ピツケル アイゼン 入荷

アメリカンヒツコリー材 豊富入荷

お好みの型に應じ製作いたします

玉澤パワライズヒツコリースキー

弊店獨特の優秀なるスキーであります

東京 名古屋 大連 玉澤

牛込區山吹町矢來下電停前
電話 牛込(34) 1328, 4067

針葉樹 第八號

(昭和十年十一月刊)

主要內容

一、鹿島槍ケ岳東面
(東尾根、荒澤、天狗尾根、カクネ里)

二、檜山澤入り 四月の飯豐山

三、マツターホーン災禍後世の批判
(附マツターホーン關係主要年表)

雜記、追悼欄、山小屋欄

記錄(一九三四・七——一九三五・八)

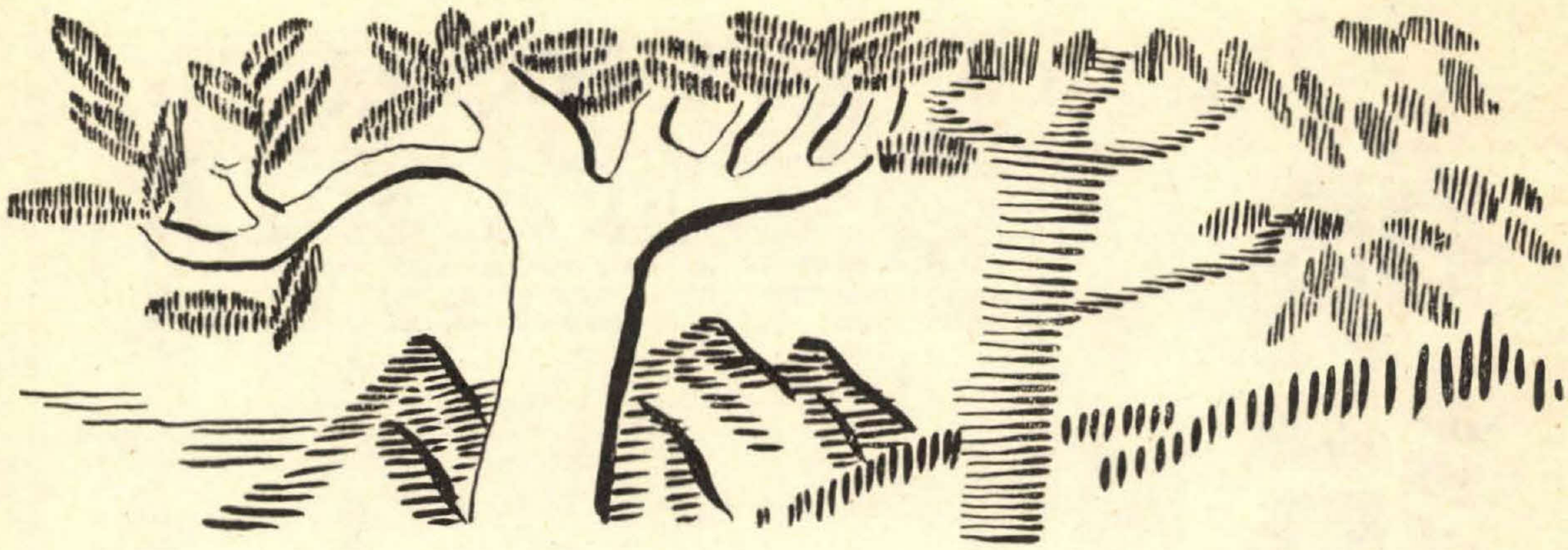
寫眞 十三葉 地圖 四面

菊版二百六十頁 頒價壹圓五拾錢(含送料)

右殘部僅少あり御希望の方は前金にて左記へ御申込下さい

東京市杉並區阿佐ケ谷五ノ六三

望月達夫



聽け!! 山靈の聲

渦巻く都塵を避けて聖なる山の頂きに清澄な空氣を胸一杯吸ふとき、誰しも充ちあふるゝ健康感に　しばし時を忘るでありませう。そこには空氣も、水も、木々の綠も　自然の儘姿を永劫に保つて、みな私共の健康の糧となつてゐます。

文化の惠みは難有いことながら、一面健康を害ふ色々の障害をんでゆきます。

空氣や水の汚染、絶間なき騷音の刺戟、また日常の食物の上に折角の養素を破壞するやうな加工や調理が施されてゆきます。例ば米の精白で貴重なビタミンBが根こそぎに奪ひとられます。

我國に脚氣其他榮養障碍の多いのは、之が重大な原因の一になつてゐます。

新鮮な野菜、果實其他で失はれゆくビタミンの補給を心掛けねなりません。然し幸にして我鈴木梅太郎博士は、米糠の中から**ビタミンB**を抽出することに成功されたのです。今學界で標準的ビタンB劑として賞用されてゐる**オリザニン**がそれです。

自然の恩澤は出來るだけ傷けずに我ものとしたいものです。登山の喜びのうちにも斯く山靈の呼びかける無言の訓へを學びたものであります。

三 SANKYO 共

責任 第一
三共のマーク

東京市日本橋區室町二丁目

三共株式會社

明治チョコレート

味覚の幻想曲！

賞懸い白面るれら得ぐ直が運幸！

賞 點 百

●いさ下覽御を面裏のルベーレは細詳●

明治製菓株式會社

特製
月桂冠
壜詰
絶對に防腐劑を含まず
一本毎に衛生試驗所證明封緘付
一杯は人ごとに
一壜は家ごとに
宮内省御用達
賣發屋治明會株式社
大倉吟醸

海へ山へ
御案内
清新な避暑地向百貨豊富に取揃へました。お出掛前に是非一度御來店を……
松屋
東京・銀座

登山用具は松坂屋
壯快な夏山の御用品は一切内外の優秀品を蒐めて陳列いたしました。猶ほシーズンの割引切符も上野店鐵道案内所にてお取扱ひ致します
上野◆銀座
松坂屋
大阪◆名古屋

營業課目

水産工業	魚粉	魚粕	魚油	滋養料
	飼料	餌料	肥料	調味料
油脂工業	石鹸	洗劑	蠟燭	硬化油
	グリセリン	食用油脂	藥品	化粧品
塗料工業	ペイント	エナメル	ワニス	チタン白
	ラツカー	船底塗料	舶船塗料	熔接塗料
大豆工業	大豆粉	撒大豆	大豆油	豆雪
	レシチン	カゼイン	飼料	餌料

日本油脂

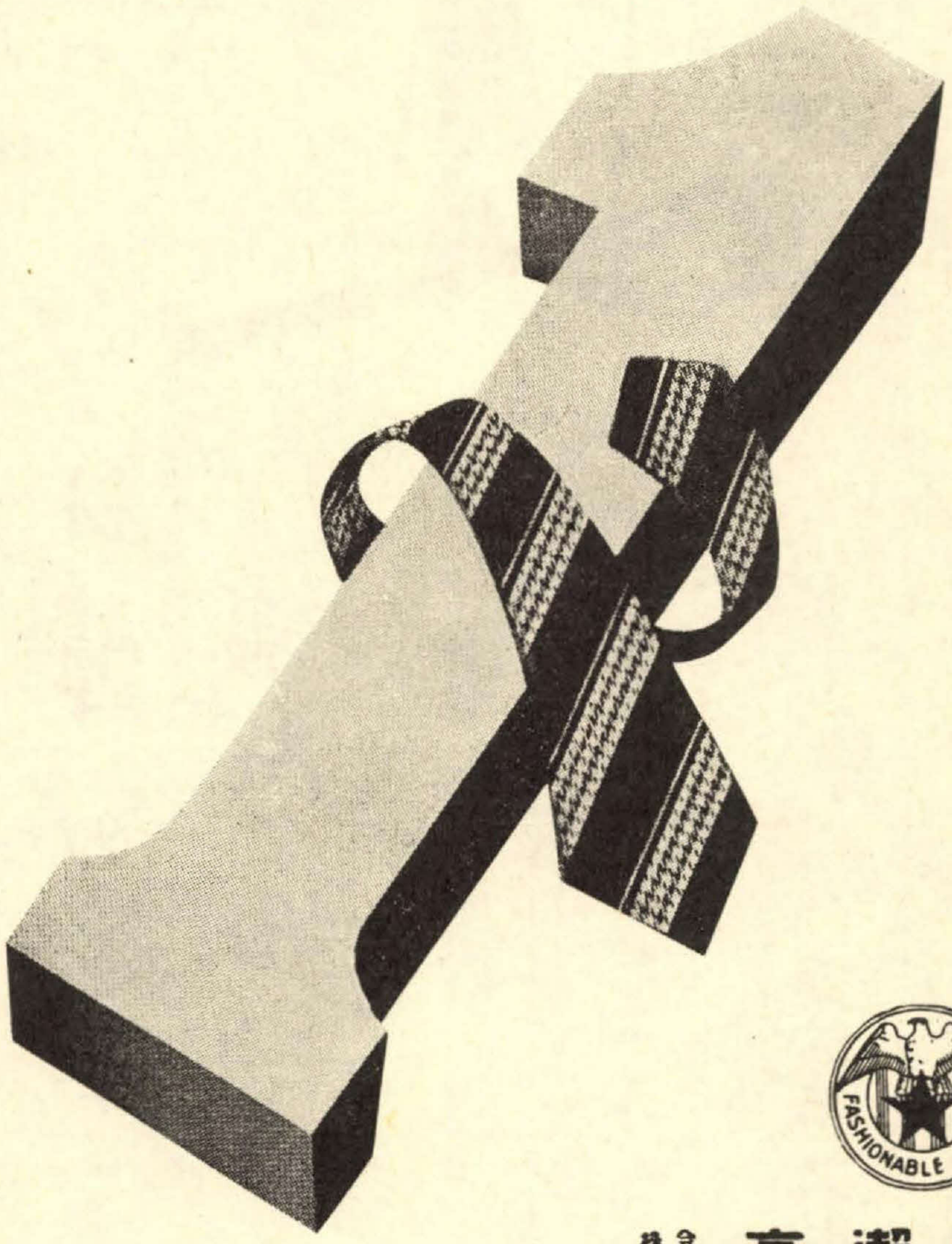
本社

東京市芝區田村町一丁目二番地

營業所	大阪	福岡	臺北	清津	京城	大泊	室蘭	函館	仙臺	東京
直營工場	油脂四	塗料二	魚糧一七							
投資會社	油脂五	塗料二	魚糧三三	大豆一						

流行の第一線を行く

星鷹印ネクタイ



株式会社 高瀬商店

東京 大阪

粉雪の乘鞍岳へ！

皆様の御いでをお待ちしてをります
學校山岳部、山岳團體の合宿等には
特別の御便宜をはかります

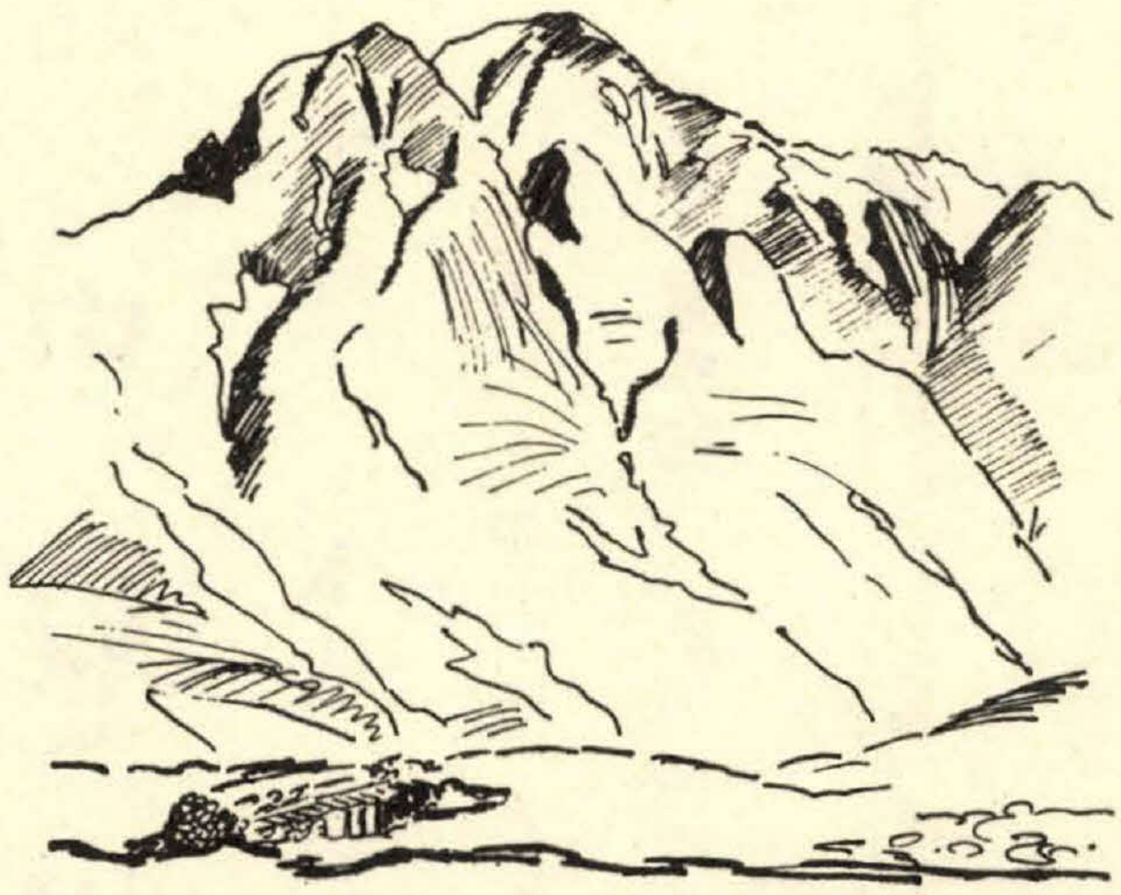
乘鞍岳スキー小屋

齋藤安一

長野縣南安曇郡安曇村
番所原　菊屋旅館

北アルプス北端の雄

劍岳



八峰、源次郎尾根

三窓附近

のクレッテライ

劍澤のゾムメルシレー

劍澤小屋

佐伯源次郎

富山縣中新川郡立山村芦峅寺

木曾御岳

最好のスキー根據地

黑澤口
六合目

中の小屋

昭和十二年增改築　木造二階建

（室數　八疊間四、六疊間三、十疊間二、十二疊間二、廣間等）

收客　夏季三五〇名　冬季八〇名

學校
各團體

團體宿泊　冬季合宿最適

長野縣西筑摩郡三岳村屋敷野

浦澤助重

泉温澤野の雪

煙湯ぐ搖雪粉る昇ひ舞

スキーヤーの理想郷

飯山鐵道上境驛より三十町

雪質良好・湯量豊富

館旅やかさ 内湯

電話十八番

毎度有難う
御座います
『フヰルム現像燒付引伸は
皆様の寫眞館
石田で』
商大豫科前驛前
石田寫眞館

スキーに　避暑に
新緑に　紅葉に
五龍岳、カクネ里、鹿島槍
登攀唯一の根據地
北アルプスの展望臺
遠見小屋
（大糸南線神城驛下車上り四時間下り一時間）
經營者　大糸南線神城驛前
下川又寛

上高地
山宿 西糸屋
奥原英男
電話上高地六番

位置 上高地の心臓部
設備 賣店、山のデパート、山岳土産樂燒窯、喫茶、山の料理、ラヂオ

特色 案内組合聯絡所　山の梁山泊
主人山を語る　家庭の延長　心の宿
登山キャンプ岩魚釣自動車等の斡旋サービス
宿泊料 2 圓位　團體は特に御相談に應ず

燒岳小屋　位置 燒岳峠　燒岳唯一のオアシス
特色 夕陽沒光天下の絶觀一泊も可哉

島々宿　總本店 德本峠越山へのスタート準備所

輕質で然も榮養100％の
日食ロールドオーツ
を召し上がれ

北海道札幌市外琴似驛前
日本食品製造合資會社

穂高連峯への
唯一の根據地

改築中の穂高小屋は
今冬のシーズン迄には完
成の豫定で御座居ます

北アルプス

穂高小屋

今田重太郎

日本アルプスへの
出發點

松本驛前

飯田屋旅館

アルプス食堂

電話 二七番 六一四番

憬の神秘上高地

自然に親み
自然に融合す

山のホテル

德澤園

德澤園は皆様の山の家であります
どうか德澤園を御愛用下さいませ

國立公園上高地

中ノ湯溫泉

アルプス登山の關門　登山準備所
溫泉湧出多様にて多量　効能絶大
入湯に　登山に　觀光に

松本・島々ヨリ自動車ノ便アリ

夏は避暑

冬はスキー

一度來た味は
忘れられません

奥利根谷川溫泉

鐵道省指定旅館
ジャパンツーリスト
ビューロークーポン取扱

谷川館

電話水上二十一番
案内所用　電話水上二十二番

上越線水上驛下車自動車十分

雪の五色溫泉

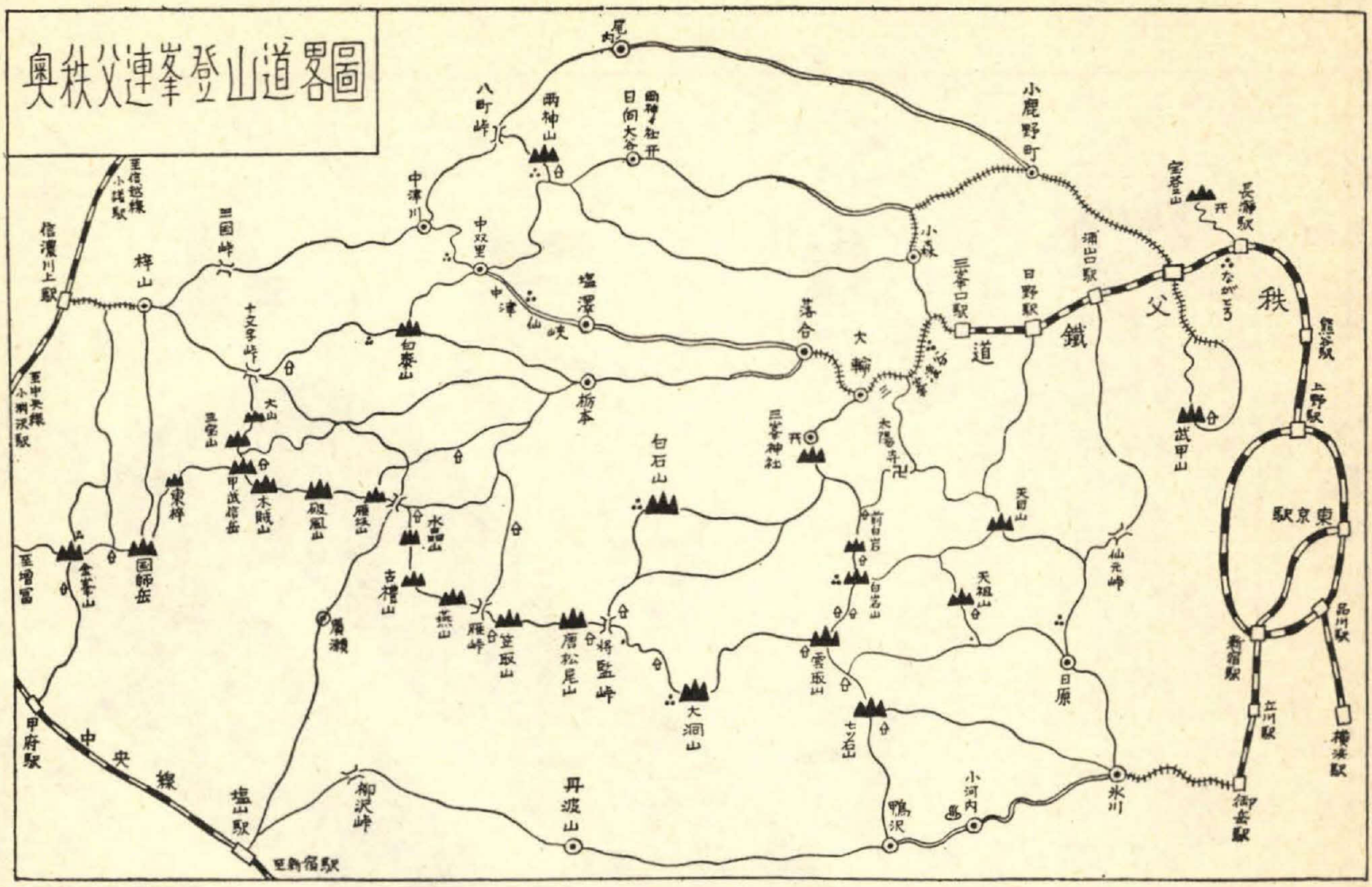
理想的なスキー！ゲレンデ

吾妻山塊スキーツーアの
出發地

山形縣板谷五色溫泉

宗川旅館

奥羽線板屋驛ヨリ卅丁



奥秩父登山割引（豫定）發賣

上野驛—三峯口驛往復　三・〇〇

奥秩父—奥多摩廻遊券　三・一〇

秩父線内各驛より三峯口驛往復三割引

七月十日より八月末日まで
九月廿一日より十一月廿日まで

埼玉縣熊谷市

秩父鐵道株式會社

電話熊谷一四二・七七二番

秩父鐵道東京事務所

丸ノ内日本工業倶樂部五階
電話丸ノ内一三六一番

ツルマル・スキーワックス
ツルマル・スキーワックス
CLIMB
GLIDE
スキーワックス
シューフエツト・ブーツオイル

天下一品ヲモツトートスル

ロシヤパント洋菓子

神戸商大山岳部臺灣山岳遠征の節
隊長田中薫先生によりて弊店製パンの
長期使用に堪ふる事を實證せらる

關西學生山岳聯盟
東京帝大スキー山岳部
早稻田大學山岳部
御用達

各種パン　スキーパン
堅パン　ビスケット
乾肉　チヨコレート

神戸市上筒井阪急終點元商業大學前
プリマ
電話葺合四九八四

寫眞はキマタ
キマタの寫眞

東京市杉並區西荻窪南側
キマタ寫眞館
電話荻窪2233番

商大教科書の御用は

萬寶書房へ!!

本店　東京府下吉祥寺2047
（電話　吉祥寺738番）
出張所　國立　驛前

Berg Heil!!

山岳用

高度計　晴雨計

望遠鏡　寒暖計

岩崎眼鏡店

東京銀座松坂屋前　電話(銀座)0319番

寫眞引伸專門

引伸なら當所へ

數多き時は御相談に應じます

小川寫眞研究所

東京市中野區朝日ケ丘三

高級文房具

諸印刷

株式會社 文祥堂

東京市京橋區銀座三丁目四番地

電話京橋(56)代表 一一六一〜一一六四 一一六二・一一六三 一一六五

銀座支店 銀座通新橋際 電話銀座(57)五〇八一

丸ノ内支店 丸ビル二階 電話丸ノ内(23)一九四一

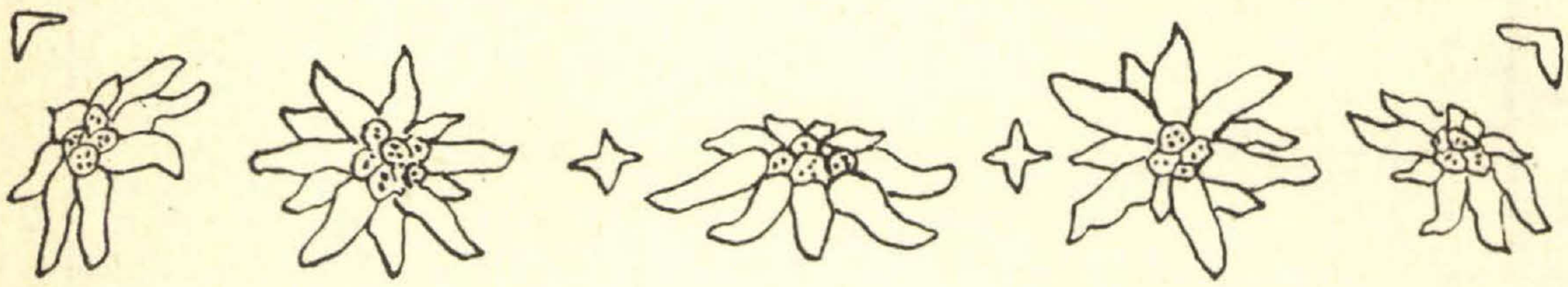
新京支店 新京大同大街康德會館電話長五六六五

今野の洋服には一つの特徴があります
それは一度おつくりになつた方が御存じです
そしてどんな遠方からでも又御注文になります

高級男子服專門

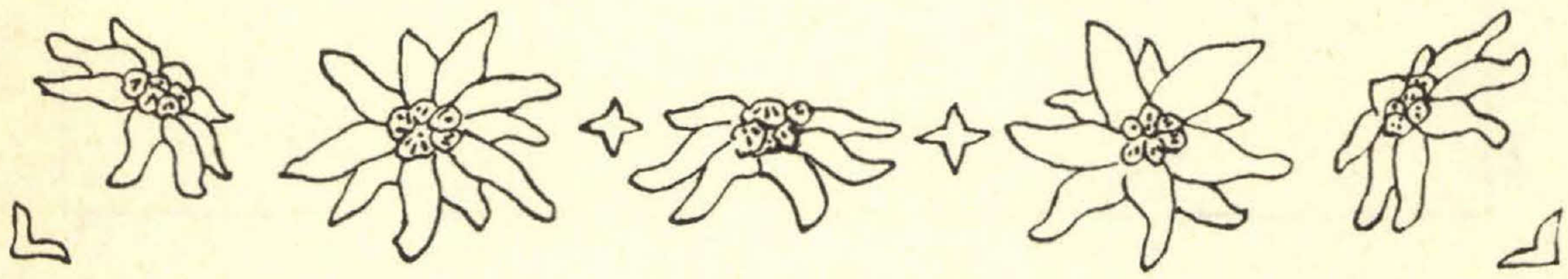
今野

東京・神田・神保町二ノ四
(市電・專修大學前) 角
電話・九段(33)三五二九番



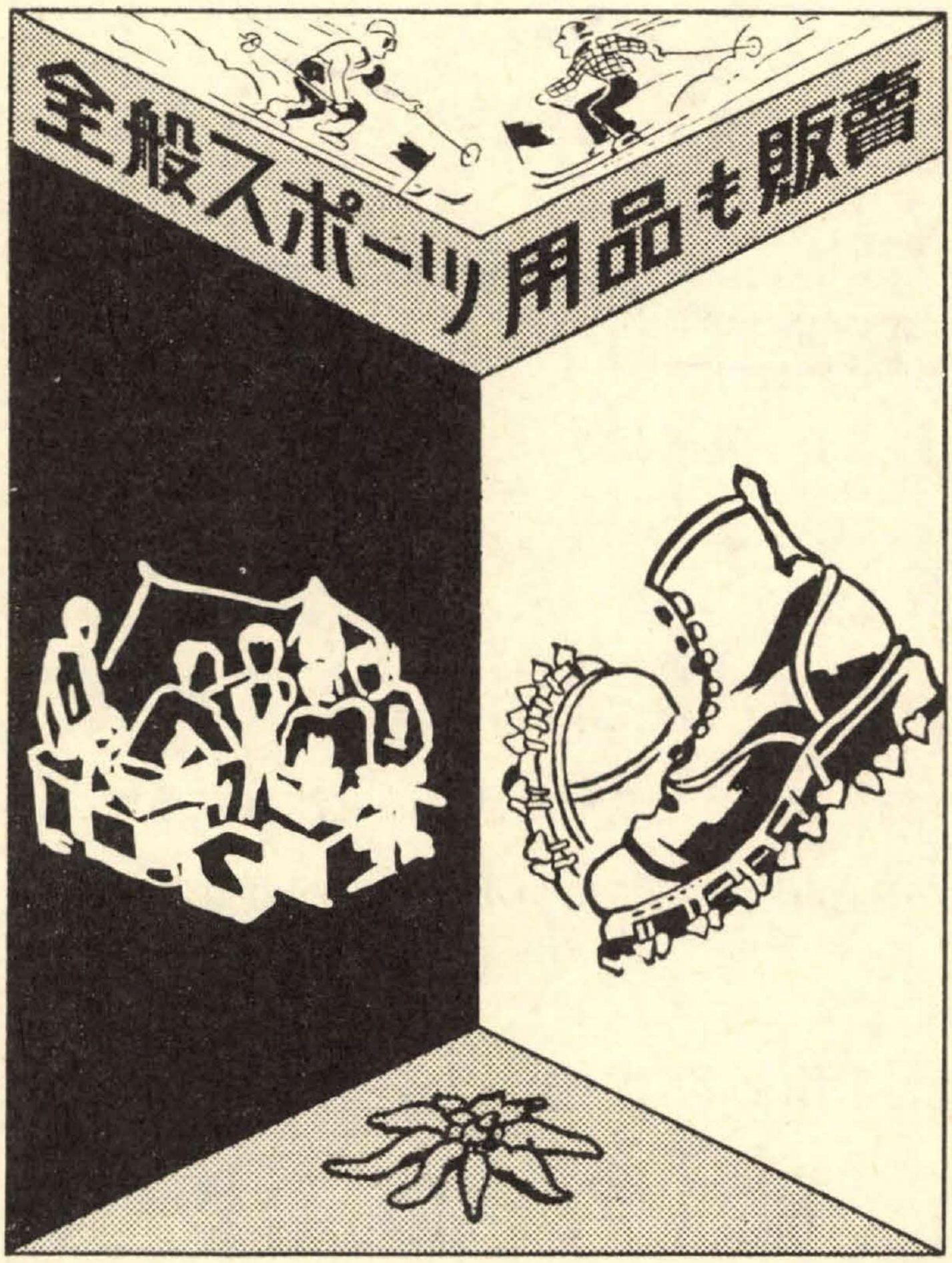
山とスキー專門具 仙台・山内 札幌・門田 ピツケル アイゼン

好日山荘 西岡一雄 大阪北區堂ビル前大阪貯蓄銀行3階
海野治良 東京神田小川町1の10



定評ある靴の店……

DONINSHA



山とスキーの用品

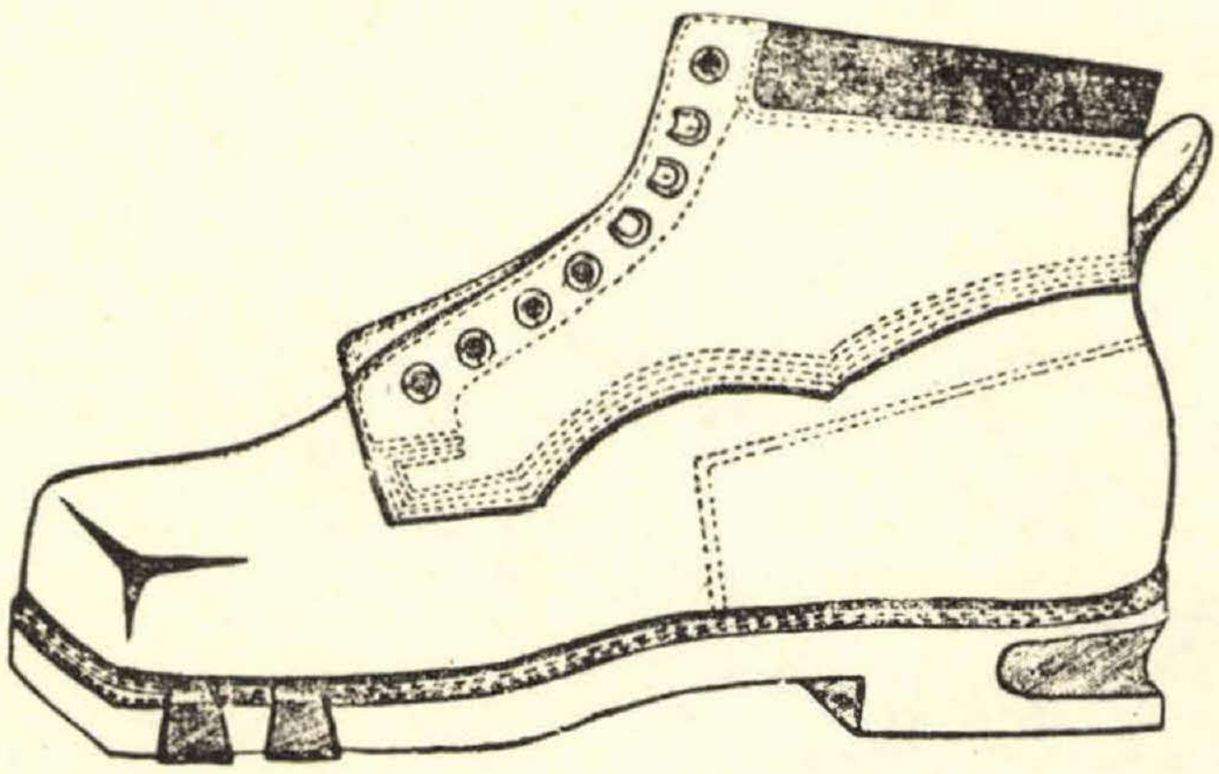
合名會社 **同人社**

神田區小川町（駿河台下）

電話 神田 (25) 3065

靴山登と靴一キス

——呈贈錄型第次込申御——



りよ圓五十…製革水防　　靴 一キス と 山登 ◇

りよ圓　十…製革水防

すまりあに富豊各 (錢三本一)ルーケンリク (錢三本一)ーニコリト 鋲◇

越申御を數文袋足及形足は節の文注御方地尙

すまげ上申附送御てに包小換引金代費實第次

用御部岳山學大各

店靴久布津

通車電地番拾六町肴區込牛市京東

番〇六四一 (34) 込牛話電

撞球場
コマドリ
國立

東京商大消費組合洋服部
佐藤洋服店
東京府下 國立

四十五年の經驗と滿足を賣る店
創業明治廿五年
福田洋服店
東京市神田區錦町三丁目廿二番地
電話神田(25)三五三一番
振替東京六九八〇番

お寫眞は

今井へ

東京市中野區氷川町二十四番地
省電　電　東中野西出口前
電話中野三九九二番

1．本書は，東京商科大学・一橋大学一橋山岳部々報『針葉樹』第1号～第13号の復刻版（限定100部発行）である。

2．本書の第1号～第6号は近藤恒雄氏所蔵本に，第7号～第13号は一橋山岳部所蔵本にそれぞれ原本を求めた。

3．復刻版発行の経緯は第13号の巻末に附したのでこれを参照されたい。

『針　葉　樹』第9号　復刻

昭和60年7月25日発行

復刻版発行者　針葉樹会

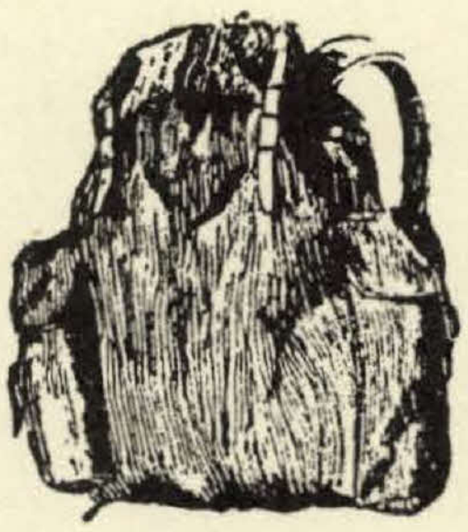
編纂担当責任者　佐藤久尚
世田谷区船橋5-30-10

印刷所　㈱平文社
豊島区南大塚2-35-7

自他共に許す

片桐のテントとリュックサック

更に一層の努力と研究とを以て皆様の御期待に副ひたいと願つて居ります。何卒御用命下さいませ。

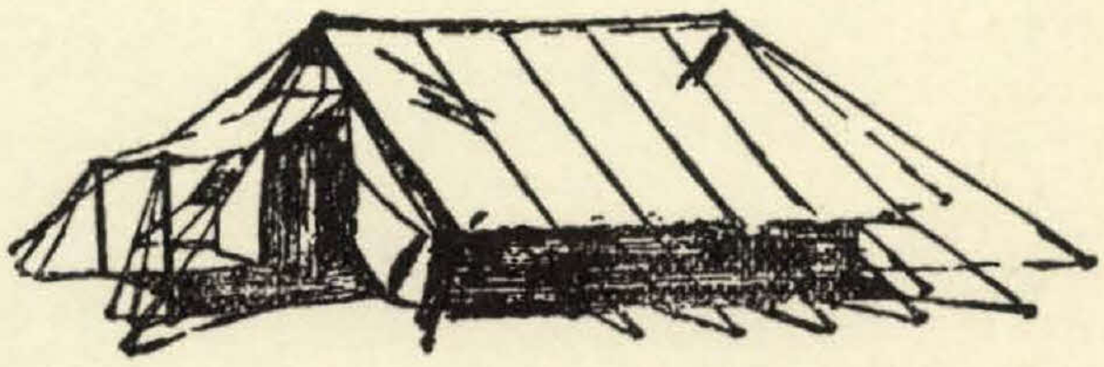


目品業營

テント、リュックサック、スリーピングバツク、スキー帽、アザラシ皮、ノールウエーバンド、アイゼンケース、ピツケル等

東京市神田區神保町三ノ一（專修大學電車停留所前）

片桐テント登山具店

電話九段(33)三二〇番

振替口座東京九一一八四番